東方おとぎ草子

ナナツボシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方おとぎ草子

【Ｎコード】
Ｎ４９６２Ｘ

【作者名】
ナナツボシ

【あらすじ】
幻想郷の人里にある屋台を通じた人間模様。無骨な店主と訪れる風変わりな客達。

やさぐれた巫女に半妖怪、亡霊に大妖怪、鬼や吸血鬼、果ては宇宙人までやってきては大騒ぎ。

だが店主は臆せず慌てずただ、酒を出す。

そんな、幻想郷の一コマを切り取った妖怪絵巻。

お暇だったら覗いてごらんなさいよ。

◇この話は、オリジナル主人公の話です。東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作ではありますが、原作の設定に必ずしも準拠しているとは限りません。キャラによっては著しく崩壊する場合もあります。以上を踏まえまして不快に感じる方は「戻る」を押す事をオススメします。

◇Ｉｆと冠した外伝は、基本的にはおふざけです。

◇本編は基本はほのぼのｏｒシリアス路線ですが、バトルや弾幕ごっこ、異変に関わる等はあまりありません。（ほぼ無い）

東方御伽草子～ＩＦ　その？（前書き）

■■ＩＦは本編のネタバレ含みます。初見の方はＩＦの付いてない所からお読みください■■

本編が飛び飛びになるのが嫌なので、外伝は本編プロローグの前に更新していくことに決めました。ややこしくてすいません。

東方御伽草子～ＩＦ　その？

「あなたが……次郎ね？」

ひすい色の艶やかな髪が自然なウェーブを描き、ショートサイズの毛先が風で巻きあがり、細い首筋があらわになる。

その女性らしい特徴を掻き消すかのように、彼女――風見幽香は獰猛な笑みを浮かべ、対峙している次郎を睨み付ける。闘争への興奮か、時折その薄く淡いさくら色の唇を舐める舌が堪らなくエロティックである。

「ああ、俺は次郎だが？何を今更……だいたいお前さん、何度も店来ては飲んだくれてるだろうが？」

「……クククッ。怖じ気ついたのかしら？次郎。男女が差向い、お互いに隠しきれない戦闘能力。なら、ヤル事は一つじゃないかしら？」

そういって幽香はサディスティックに嗤う。風見幽香と言う存在は、この幻想郷においてある意味一番アンタッチャブルな存在であると言える。

どの存在とも馴れ合わず、花を求めて幻想郷中をさ迷い歩く。花へ注ぐ愛情は母性愛のように彼女を柔らかくする。だが、他人へは話が変わる。

彼女を知る者は畏怖と恐怖を込めてこう称する。”美麗なる戦闘狂”と。ターゲットにされた者は逃げる事を許されない。本人の都合など考慮などされはしないのだ。要は、幽香が戦いたいかそうでないかの選択肢のみである。

なんというエゴイズムッッ

なんという雌度ッッッ

故に彼女は風見幽香なのである。

時は２１世紀

場所は幻想郷

華やかな花が咲き乱れるのどかな平原

――であるにもかかわらず、幽香の網膜を通した脳には、まるで別のものが描かれていた。

自分の前に立ちはだかるこの雄（オトコ）

自分よりも遥かに若いこの雄（オトコ）が――

かつて数千年前の大和の地で――――

己と雌雄を決した好敵手（ライバル）たちと同等の力を有している！！

「さぁ、闘いましょう？次郎。私はもう我慢が出来ないわ？さっきから私の蜜が止まらないの。貴方のせいよ？責任をとりなさいッッッ！！」

ぞわりと逆立った髪を振り乱し、風見幽香の肉体は、その末端にいたるまで血液を送りこんだ。

パンプアップ――

風見幽香は準備を終えた。ギリギリまで引き絞られた弓のように――

静寂の中に隠れる暴力の塊――

後は放つだけであった

次郎はふっ、とため息を漏らして首を軽くふった。いつものチャイナスーツに着流しを羽織った次郎が、現在(いま)顔を上げた。

風見幽香の身体に緊張が走る。いま目の前の雄(オトコ)が漸くヤル気を見せた。

あの雄(オトコ)の戦闘能力は未知数。

だが、風見幽香は油断しない。

強者であるからこそ慢心はしない。

だから――

「……茶番はもういいかな？ごちゃごちゃ言ってないでツケを払えよ。さっさとな？次は博麗神社に追い込みかけるから忙しいんだよ」

「ククククッ……怖じ気――

「それは良いから金払え」

「マスタースパー……」

「はいはい凄い凄い。マスパマスパ。い　い　か　ら　金　払　え」

「……ぃわよ」

「ああん？」

「無いわよお金！！」

「ぅわあ……逆キレですか。盗人猛々しいにも程があんだろ……」

「……で？何この傘」

「……日傘です」

「先っぽからなんか出てるよね？俺に向けて」

「違います。これはあなたへのあふれ出る愛です」

「いやいやいや、さっきマスパとか言ってたでしょう？完全に殺して誤魔化す気だったよね？」

「ちょ、次郎こーわーいー♪ゆうかりん泣いちゃうよ？」

「……気色わるっ」

「……」

「……まぁいいわ。身体で払ってもらうから」

「えっ！？ホントに！？むしろこっちとしては願ったり叶ったりと言うか……むしろ計　画　通　り　と言うか……勝負下着装備中だからバッチこい？」

この日から数日、人里の名物屋台喰いものやでは、大妖怪風見幽香と、博麗の巫女霊夢が扱き使われていたと言う。

正従業員であるチルノと妹紅は、久しぶりの連休を楽しんだという。

東方御伽草子～ＩＦ　その？（前書き）

初見の方はＩＦの付いてない所からお読みください。

東方御伽草子～ＩＦ　その？

？『人生相談』

「シャンハーイ！」

「ホラーイ！」

「ああ、そうだな。いつもすまんな」

「シャンハーイ？」

「いや、割りと積極的ではあるな。いや、決して迷惑では無いんだが……な？でも、な？一応あいつは教師って立場だろう？」

「ホラーイ？…ホラーイ（笑）」

「ば、馬鹿野郎……言えるわきゃねぇだろ！も、妹紅もいる訳だしな」

「シャンハーイ？シャンハーイ！（怒）」

「ホラーイ（怒）」

「わ、分かったよ。少し気をつけてみるよ。ありがとな？いつも」

「シャンハーイ！」

「ホラーイ！」

「ああ、じゃあまた来るな。ありがとな、二人とも。ではな？」

そうして次郎は魔法の森にある洋館を出る。その顔は憑きモノが取れたように実に清々しい。

「あ、アリスいたのか？漬物のお裾分けキッチンに置いたからな？ではな」

「え、ええ、ありがとう。じゃあね？」

洋館の家主、アリス・マーガトロイドを一瞥し、次郎は颯爽と森に消えるのだった。

「……人の家に来て初めての会話が「アリスいたのか？」って……」

「シャンハーイ？」

「ホラーイ？」

アリスは自分が造り上げた二体の人形を抱き上げた。

「貴方たち、どうして次郎と会話が成立しているのかしら？と言うか私とも話しなさいよ？」

「……」

「……」

「ええぇ……何この扱いの悪さは…」

そうしてアリスは、自分が与えたルーチン外の行動をする二体に首をかしげながら、妙に懐かれている次郎に嫉妬するアリスなのであった。

?『イナバの黒うさぎ』

「で?あんたはどうしたいのサ?」

先ほどから彼女は苛立っていた。彼女の名前は因幡てゐと言う。彼女自身いったいどれ程生きたか分からない位の長生きをした兎だ。

彼女は元々、野に生きる普通程度の兎でしか無かった。ただ、妙に健康思考が強く、人参からオオバコの葉に至るまで、とにかく上質なもの以外口にしなかった。気が付いたら彼女は人化した妖怪兎となっていた。

世を彷徨い、健康を突き詰めた彼女は、終のすみかに選んだのは迷いの竹林だった。なにせ喧しい天敵もいない。たまにタケノコを狩

る人間が迷い込むが、迷った挙げ句に勝手に野垂れ死ぬから彼女としては気楽なものだ。気が向けば気まぐれに助けたりもするが。

そもそも、因幡てゐには人間に幸運を与えると言う能力がある。彼女に触れさえすれば、人間限定ではあるが何らかの幸福に与れるのだ。

但し、基本的に竹林で過ごす因幡てゐに人間が出会うと言うシチュエーション自体、人間が遭難している訳であり、運良く彼女に出会った幸運な人間が受けられる恩恵は、「竹林から無事にでられる」に限定されてしまう。

故に因幡てゐは思う。人間とは救い様のない馬鹿だ、と。

そんな因幡てゐが棲みついた竹林であるが、近年新しい住人が増えた。

月からやってきた蓬莱人である。彼女達は不老不死の怠惰なお姫様である蓬莱山輝夜と、天才的な頭脳と美貌を兼ね備えた薬師、八意永琳とてゐに名乗った。

何でも罪を犯したとかで地上に逃げてきたらしいが、ひょんな事から迷いの竹林を知り、隠棲するには都合がいいと思ったらしい。

だが因幡てゐからしたら、邪魔以外のなにものでも無い。そんな罪人が住み着けば、必ず厄介事が起きるに決まっている。因幡てゐはそう考えた。まして竹林には今や数百を越える兎達が住み着いている。その盟主である因幡てゐは、蓬莱人が心底邪魔に感じた。

だが蓬莱人はてゐがいない隙に、永遠亭なる館を勝手に建ててしま

った。

頭にきた因幡てゐは、この竹林は私たち地上の兎の住みかであり、後から現れたお前達が自己主張するなど盗人猛々しい。偉そうにするなら出ていけと八意永琳に言い放った。

そこで八意永琳は因幡てゐに取り引きを持ち掛け、それは兎達にとっても魅力的であった為、互いに共存を始めたのであった。

もっとも、因幡てゐが承諾した一番の理由は、月の蓬莱人が地上を穢れてると忌み嫌ったと言う永琳の話を聞いて、草木も生えない月に住む蓬莱人とやらを気持ち悪いと感じたからだ。

何故なら地上には因幡てゐが愛する人参があるのだから。甘く芳しい人参が。月の痩せた土地を好むなど、てゐに言わせたら蓬莱人の頭の中こそが穢れてると思ったらしい。

因幡てゐは退屈が嫌いである。そこで退屈しのぎに思いついたのが悪戯である。

人を落とし穴に落としたり、八意永琳のレースのショーツに穴を開けたり、一日のほとんどを寝て暮らす蓬莱山輝夜の艶やかな黒髪を、八意永琳の服と同じ赤と青のツートンカラーに染めたり……等、多岐に渡って悪戯をした。

かつては馬鹿な鱶を騙し、背中の毛をむしられた彼女であるが、スカっとするから止められないのだ。

後に月から逃げてきたと言う月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバ等、てゐの恰好の獲物となった。

鈴仙は恐ろしく臆病であり、そして善くも悪くも純粋だった。鈴仙は永遠亭の住人となり、八意永琳の弟子として因幡てゐ達地上の兎との窓口となった。

そんな彼女を通し、永遠亭の住人達と因幡てゐはいつしか奇妙な親愛の情を抱くようになるが、調子に乗られたら癪なため、てゐはそれを言わない。

ただ鈴仙とてゐは、幻想郷の外の世界にある物語の登場人物、猫とネズミの不思議な友人関係に似た関係になっていった。

てゐが悪戯をしかけ、怒った鈴仙が追い掛け回す。だけど結局、気が付けば二人は一緒にいるのだ。

さて、そんな因幡てゐであるが、話は冒頭に戻る。

先ほどから人参畑に現れた鈴仙が、もう二刻はてゐに愚痴を吐いている。

やれ師匠は横暴だ、だの

やれ姫様は服をたたむことすら出来ない、だの

因幡てゐには迷惑この上ない。本当に面倒臭い女だとてゐは思う。

そして何より、これらは前振りでしかなく、本命の相談は「次郎と言う男と親密になりたい」だった。

そんなもの、木陰に引きずり込んで交尾でもしたらいいだろうに……と、てゐが言えば

やれ破廉恥だ、だの

やれ嫌われたくない、だの

やれ痛かったらどうしよう、だの

本当に面倒臭いと因幡てゐは逃げ出したくなった。自己主張は強いくせに、具体案を言えば萎縮する。ああ面倒臭い女だ、てゐはそう叫びたい衝動に駆られた。

だから――

「だったら、取り敢えず無難な贈り物をすればいいサ」

「お、贈り物？いきなり変じゃないかな？」

「馬鹿だねあんたは。いいかい？あんたはその屋台の常連サ。まし

て一番最初はご馳走になったのだろう？ならそのお返しサ。変じゃないだろうサ」

「な、なるほど！流石はてゐだ、ずる賢い！」

「はっ倒すよ？」

「ご、ごみん…で何を贈り物にしたらいいかな？人参がいいかな？わたしは異性に贈り物なんかしたことないもん……」

「本当に馬鹿だねあんた。いきなり生の人参渡されたら、その人間はぽかんとするよ……。まぁ待ってな。良いものがあるヨ」

そういってどこかに消えたてゐが、半刻ほどで戻ってきた。

「ただいまだよ」

「おかえり、てゐ。何持ってきたの？」

鈴仙はてゐが小脇に抱える、綺麗に包装された箱状の物を指差した。

「師匠から貰った滋養強壮剤の詰め合わせサ。その男は毎晩休みなく働くのだろう？なら、身体気を付けて下さいと言ってそれを渡すといいヨ」

そういって因幡てゐは素晴らしい笑顔を披露した。

「てゐ……ありがとう！じゃ早速行って来る！大好きてゐ！」
無邪気に笑いながら、鈴仙は人里方向に飛び立った。
「あ～恋する乙女は健気だねぇ。ま、いっか……」
ニヤリと黒い笑みに切り替えた因幡てゐがほくそ笑んだ。

「じ、じろうさん」
「ん？鈴仙じゃねえか。いらっしゃい。」
「あああの、こここれをどぞうっ！！つまつまつまらないものですぎゃ」
「取り敢えず落ち着こうや……な？」
「ははい…はふぅはふぅ…はい、だ大丈夫です」
「なんだこれ？プレゼントか？」
「ははい、お疲れのじろうさんに滋養強壮剤をと思いまして……」
「すまねぇな、気ぃつかわせちまったな。お前さんの師匠の薬なら間違いないな。開けてもいいか？」

「ど、どぞう！！」

「ありがとよ。じゃ開けるぜ？……えっ！？」

「えっ！？」

箱の中にあったのは――

『超絶倫！戦術級精力剤ヤゴコロＸＸＸ』

「……な、なかなか大胆だな？鈴仙……たが、こういう事は順序ってものが……な？」

「……て」

「あん？」

「ててて……」

「ててて？」

「てゐゐ

ゐゐゐゐゐゐゐゐ！！！！！！！！！殺すッ！！！と言うか……うわああああん恥ずかしすぎてお嫁にいけなーい……」

言うや否や、鈴仙は紅魔館より赤い顔で飛び去った。

「……で、いったいなんだったんだ？」

客のいない屋台で、次郎の呟きが響く。だが返事はない。

迷いの竹林では、竹に寄りかかって因幡てゐが独り言を盛らしていた。

「今ごろれーせんどんな顔をしてるだろ？わたしを差し置いて恋をするなんて……寂しいじゃない。ばかれーせん」

うさぎが寂しがりやと言う定説は正しい…のかもしれない。

東方御伽草子～ＩＦ　その？（前書き）

初見の方はＩＦの付いてない所からお読みください

東方御伽草子～ＩＦ　その？

『計画通り』

「あなたは食べてもいい人類？」

「ん？お前さんは確か、チルノの友達の……」

「ルーミアだよ」

「そうか、よろしくな？俺はチルノの友達の次郎だ。はじめまして、ルーミア」

「はじめまして次郎。それで次郎は食べてもいい人類？」

「難しい質問だな、それは」

「そーなのかー？」

「ああ、だが、実に興味深い」

「でも難しくないよ？美味しいか美味しくないかだもん」

「一理ある。だがルーミア、お前さんは”食べてもいい人類”と言

ったな？」

「うん、言ったよ」

「と言う事はだ、ここに大まかに二つの問題が提起された。それがわかるか？」

「難しい事は分からないよ」

「まぁ聞け。これはルーミアにとっては大事な話だ。お前さんの存在意義、有体に言えばアイデンティティの話に抵触するかもしれないぞ？」

「そーなのかー？」

「ああ、間違いない。まずお前が言った”食べてもいい人類”と言う言葉だ。”食べてもいい”と”人類”と言うキーワードが大事なんだ」

「そー…なの…か？」

「ああ、まず”食べてもいい”と言うキーワードに着目しよう。なぁルーミア？なぜお前さんは食べてもいいなんて言ったんだ？」

「……？？」

「理解出来ないようだな。つまりだ、食べてもいいと相手に了解を得ようとしたと言う事だ。それは相手に選択肢を与えたと言う意味に繋がる。この場合は”食べられるのを許す”と”食べられるのを許さない”と言う選択肢が相手に生まれたんだ」

「と、言うことは？」

「相手が”食べられるのを許さない”を選択した場合、お前さんは相手を食べる事は出来なくなるな」

「そ、そーなのか！？」

「ああ、お前さん自身が設けた選択肢だ。ならばその選択肢の結果を尊重しなかったら、残念ながらお前さんは宵闇の妖怪から、ただのウソツキ妖怪になってしまう」

「ガーーン！？」

「さらに二つ目だ。お前さんは言った。”食べてもいい人類”と」

「……それは今、話たんじゃ？」

「違う。”人類”このキーワードが問題なんだ。人類とは元々、猿から進化して現在のＨＵＭＡＮに辿り着いたと言う。ただ、視点を大きくすると、霊長類に人類が含まれる可能性が出てくるんだ。つまり、ゴリラやオランウータンだ」

「それが何か問題あるの？」

「在るといえば在る。例えば俺が「いや人類じゃない。どちらかといえばチンパンジーの仲間だ」と言い張ったらどうする？」

「え？次郎はチンパンジーだったの？」

「いや違う。れっきとした人間だよ」

「じゃあ食べてもいいんじゃないのかな？」

「ダメだ！俺はチンパンジーと言ったじゃいか」

「だって次郎は人間って……」

「だからさ。お前さんの質問には”人類なら食べる。そうじゃないなら食べない”と言う選択肢が暗に含まれてるんだ。ならば相手がチンパンジーと主張したらどうなる？」

「食べられ…ない？」

「グーッド。これもやはり、一つ目のキーワードと同じで、相手に選択肢を与えた訳だ。つまり、その選択肢を尊重しなければ……」

「ウソツキ妖怪になっちゃう……で、でも次郎は見た目は人間だから、嘘ついてるよ？」

「ああ、俺は嘘をついている。だが、例え嘘をついていたとしても、この場合は相手の嘘を立証する義務はルーミア、お前にある」

「そーなのか！？」

「何故なら、道行く見知らぬ人間を食べたいのはお前さんの個人的な都合でしかないからな。その上、選択肢まで与えたんだ。なら、

お前が食べたいならば、明らかに嘘をついている人間の嘘を、お前自身がそれは嘘だと証明しなければならない。人間は食べられたくないと必死のだからな」

「……そーなのか…」

「さて、まとめるぞ？　ルーミアが”食べられる人類”と質問した場合、”相手が人類である”と証明した上で、”相手に食べられてもいい”と言う合意を得なければ、ルーミア、お前さんは人間を食べる事は出来ない。万が一お前さんが課した選択肢を破ったら、お前さんはその日からウソツキ妖怪と言うレッテルを張られる。――とまあ、こういう事だ」

「あうあう……なら誰もうんと言ってくれないよ！どうしよう次郎？ご飯が……ご飯が……」

ぽむっ……

「はぅっ…／／／」

ナデコナデコ

「やぁぁ……／／／」

「心配するなルーミア、俺が何とかしてやる」

「じ、次郎…／／／／／」

「こんなこともあろうかと……この封筒を準備していたんだ。ほらよ？恥ずかしいから俺が帰ったら開けろよ？」

「う、うん……分かった。じ、次郎の言うことは…聞く」

……コナデコ…ぱっ

「あっ……あう」

「じゃまたな？ルーミア」

「うん、次郎。ありがとう／／／／」

「行っちゃった……次郎って言葉は難しいけど…優しいな……ちょっと格好いいし……また逢いたいな。あっ、封筒の中身は何かな？あ…まさか好きです的な……ドキドキ」

ガサガサ……

『妖怪歓迎！居酒屋喰いものやサービス券

このサービス券をご会計時に提示しますと、５％値引き致します。

尚、この券で１グループまでＯＫです。』

「タダじゃ……無いんだ……」

おしまい

東方御伽草子～ＩＦ　その？（前書き）

初見の方はＩＦの付いてない所からお読みください

東方御伽草子～ＩＦ　その？

『るなてぃっく御伽草子』

ある日の昼間のこと、次郎さんは散歩をしていました。なぜかと言うと、天気が良いので心がウキウキとしたからです。

みなさんもあるでしょう？なんとなく夜空を見上げた時、綺麗なプレアデス星団が真正面に見えた時や、雨上がりの空に虹を見つけ、それが二重になっていたら？きっとウキウキするでしょう。

次郎さんは晴れた空に、雲が一つも無いのを見れたのでウキウキしたようです。とにかく、そうして次郎さんはおむすびを二つ程握ると妖怪の山へ散歩に出掛けました。

「やあ、次郎さん、お出掛けですか？」

「やあ、けーね先生、おはようございます。あまりに天気がいいのでお散歩に行くのです」

「それは素敵です。ですがこの先は妖怪の山、気を付けるが良いでしょう」

「それはそれはありがとうございます。では気を付けて行って参ります。ではまた、けーね先生」

「さようなら、次郎さん」

「別れぎわにさよならなんて悲しいこと言うなよ」

「ごめんなさい、こんな時どんな顔をすればいいか分かりません」

「笑えばいいと思いますよ」

「ではそういう事で、ばっははーい！けーね先生」

「ばっははーい！次郎さん」

次郎さんは仲良しのけーね先生に見送られ、妖怪の山へと進んでいきました。

と、その前に魔法の森がありました。ふかいふかい森です。よい子は絶対に入ってはいけない森です。それはこわいこわい魔女が二人も住んでいるからです。

でも次郎さんは進みます。次郎さんは怖いもの知らずだからです。

ふと見れば、次郎さんは立ち止まっています。どうやら美味しそうなキノコを見つけたようです。

「やあ、これは美味しそうなキノコだなあ。ようし、食べてみよう」

「そこの次郎さん、すこし待つんだぜ」

「やあ、良くも悪くもない魔法使いの魔理沙さん、こんにちは」

「そこは普通の魔法使いと言って欲しいんだぜ」

「それはごめんなさい、普通の魔理沙さん」

「こんのバカ次郎さん！」

「それはさておき、このキノコは食べれないのですか？」

「それは体が大きくなるんだぜ」

「ならこれは？」

「手から火の玉が出るんだぜ」

「まともなキノコは無いのですか？」

「ならこの緑のキノコを食べるんだぜ」

「食べたらどうなりますか？」

「もう一回ぴちゅーんとなっても大丈夫なんだぜ」

「それは素晴らしいです。もぐもぐ。これで大丈夫ですか？」

「恋符『マスタースパーク』だぜ！！！」

／ピチュー／

「なるほど、ぴちゅんとなっても元気です。ですが、もう緑のキノコは生えていません……」

「大丈夫だぜ、階段で亀の甲羅を踏めばいくらでもピロリロリン♪だぜ」

「なるほど、後で試してみます。では、ばっははーい！普通の魔理沙さん」

「……ばっははーい！次郎さん」

キノコを食べそびれた次郎さんは、それでも先へ進む事にしました。

そのまま妖怪の山に行こうとした次郎さんでしたが……

「あや？あややややや？これはいけない。みにすかーとやらモフモフした耳の天狗さんたちが浮いているじゃないか。だけど残念、”やめてっ！彼女達の登場はまだ先よ！”と天から聞こえたから行き先変更だ～！」

突然聞えてきた”おとなのぢじょう”により、次郎さんは妖怪の山は麓をぐるりと歩くことにしました。えらいですね。

さて、次郎さんがてくてくと、やまの麓を歩いていた時の事です。せまかった獣道が突然ひろがって、景色が変わりました。川があり滝壺がある場所の近くに、とても変わった家があります。

「わあ、とても変な家がある！なにかぴかぴか光っているよ！！」

その不思議な家を見てこうふんした次郎さんは、凄いはやさで駆け寄ろうとします。

／

加速装置！！＼

だけど残念、次郎さんはさいぼーぐでは無いので、思ったより普通のスピードで家に近寄りました。しかしその時――――

「フハフハフハハハハハ！！！！！」

「だ、だれだ！名をなのれ！！」

「なんだかんだと聞かれたら、答えてあげるがカッパの情け、幻想郷のはか――――」

「言わせませんよ？カッパさん」

「う、うぐう」

「お前はカッパだな！」

「だからいま自分で言いま――」

「お前はカッパだな！！」

「……はい、カッパです」

「そうですか。はじめまして次郎です」

「私はにとりです。はじめまして、次郎さん」

「ニトリさんよろしく」

「いいえ、にとりです」

「はい、ニトリさん」

「にとりです……カタカナで書かれたら、意味が全く変わってしまうとです……

にとりです……お値段以上とか言われても、いちいちそのネタにツッコむのすら飽きたとです……

にとりです

にとりです

にとりです……」

心の底からうんざりした表情で、ぷるぷる涙目で訴えるカッパのにとりに、次郎さんはいたたまれない気持ちになってしまいました。

ついでにそのネタの芸人さんの今を思うと、切ない気持ちになるので、次郎さんは触れるのをやめました。だって次郎さんは大人ですから。

「はじめまして、にとりさん」

次郎さんは映像をつなぐ時に不自然にならないように、改めて挨拶をしました。その次郎さんのダンディな振る舞いに胸やナニかが”じゅん”としたにとりは、改めて挨拶を返しました。

「ハロー！ジロウ。グーテンモルゲン！！」

「はい！と言う事で、僕はカッパが住む不思議な家にやってきました。こちらはご主人のにとりさんです。にとりさんこんにちは」

「え！？え！？なんですか？」

「はい、隣の奥さんからのご紹介で来ました。奥さん！ちょっとこーりんの奥さん！」

「やだぁ、化粧してないんだからぁ！ってにとりの奥さん、晩ごはんですって！ね？今日ご主人いないんでしょ？見せてあげてよ～」

「え！？まさか、晩ごはんって……」

「はいそうです。ではタイトルコール！次郎の突撃！隣の晩ごはん

っ！！！じゃにとりさんちの冷蔵庫は～……」

「ちょやめて～スーパーのお惣菜しかないからぁ！！！ハズカシ～」

――等とそれはそれは心温まるやり取りを終え、次郎さんはにとりさんにお茶をご馳走になる事になりました。決して今までの流れを無かった事にしようとした訳ではありません。

「へー、次郎さんは外の世界からきたのですか！」

「はい、かくかくしかじかがあって、幻想郷に来ましたよ」

「素敵ですね、次郎さん」

「そんなことはありません。そとの世界は怖いですよ」

「そうなんですか？そういう時はロボの出番です」

「はい、わたしはロボを作ってますから。ただ――」

「ただ？」

「核融合炉を搭載したぷろとたいぷは完成しましたが、誘導兵器がうまくいきません」

「みの〇すきー粒子ですね」

「み〇ふすきー粒子です」

「にとりさんはそれを使ってどうするのですか？」

「そとの世界に隕石を落とします」

「なぜそんなものを外の世界に落すのですか？」

「外の世界にすむにんげんは、自分たちのことしかかんがえてません。だからマッサツします」

「カッパがにんげんに罰を与えるなんて！カッパはにんげんの盟友だろう？」

「わたし、河城にとりが粛清するのです次郎さん」

「それはエゴですにとりさん」

「それでは持たないのです。だから落とします。いや、落としませんけどね。言いたかっただけです」

「様式美ですね」

「様式美です」

「きゅうりは如何ですか？次郎さん」

「いただきます。しゃくしゃく…ほほう、これはこれは、結構なお点前で」

「恐れ入ります」

「では、そろそろ帰ります。ばっははーいにとりさん」

「ばっははーい次郎さん」

こうして素敵な1日を終えた次郎さんは、ニコニコしながら家へ向

かうのでした。

おしまい

あ／　いた　！！　＼

も／　こ　ー　！！　＼

ちるの　が　あらわれた

もこー　が　あらわれた

「ヒャッハー！ここは通さないよ！」

「汚物は消毒だぁ！」

突然出番が無かったチルノと妹紅が現れた。
チルノは手に氷の釘バットを、妹紅は炎を放射している。
だけど残念ながら、そのセリフは世間では死亡フラグと言います。

テレッテー！テテテテテテレテレッテ～！

「あたぁ！ほあたぁ！北〇百裂拳！〇斗岩山両斬波！北〇壊骨拳！北〇七死星点！北〇十字斬！北〇有情破顔拳！〇斗天破活殺！あた、あた、ぉあたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたた！！あたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたたた！！！ほぁたたたたたたたたたたたたたたぉあたたたたたたたたたたぁ…あたっ、あたっ、ぉわったー！！」

「ぐふっ…あたいは…あたいは地に膝などつかぬっ……！？…ぐはっ」

「ん？なんともない…ピキーン！……なっ、いたっ、ちょ、やめてとめてやめてとめて……とめった！！」

／チピ　ュ　ン　！！＼

／チピ　ュ　ン　！！＼

「チルノ、妹紅……俺の名前を言ってみろ…」

こうして幻想郷の平和は、一人の哀しい男によって守られた。

【true end】

東方御伽草子～ＩＦ　その？（前書き）

初見の方はＩＦの付いてない所からお読みください

東方御伽草子～ＩＦ　その？

『キャラを保つのも楽じゃない』

この薄暗い図書館の主、この私、パチュリー・ノーレッジは夢見がちな美少女と言えるわね。と言うのも私は、生まれつき病弱だから。まぁ、そもそも美少女の条件としては必須じゃないかしら？

慢性的な喘息を患っており、基本的に歩く以外の運動は出来ない。やらない。やりたくない。だって疲れるじゃない。

だから、仕方なく日光にあたる時間が極端に少ないの。そのせいか、肌は雪のように白く、薄幸の美少女と言えるかしら。

「なぁ？お前さん、もやしの作り方を知ってるか？丁度この図書館みたいにじめじめして薄暗いところで作るんだ。真っ白なもやし、栄養いっぱい。すぐポキッと折れるけどな？」

うるさい……。こほん、でね？私は生まれついての魔女なの。わかる？魔女よ。魔法つかうわよ～？どかんどかん言わせるわ？あの品の欠片も無い白黒みたいな胡散臭い魔法じゃないわよ？火とか出るわよ？

「あ、悪い。マッチ忘れた。煙管に火ぃつけてくれ」

あ、はい。メラ！……私をライターにするな。こほん、それでなんだったかしら？ああ、そうそう、魔女の話ね。私みたいに知識も豊富なインテリ魔女は、長い長い詠唱の所謂、大魔法なんか出来ちゃったりするわけ？凄い？畏れなさい畏れなさい。ふふん。

「まず肺活量を増やすんだな。まともに呪文を唱えきった試しがないってレミリア言ってたぞ？」

くっ…レミィの裏切り者……違うわよ？大魔法なんか唱えたら、一面焼け野原になるからやらないだけよ！私の慈愛の心がそれをさせ…ごほごほ……

「だから興奮すんな。ああ、お前さんは凄い凄い。……お茶飲むか？」

……飲む。甘いの。……ふう。とにかく凄い魔女ってことよ。でも運動不足とか思われてるみたいだけど、この図書館って広いじゃない？咲夜が広くしてるんだけど、最近は運動を兼ねてよく散歩してるわよ。天才も裏ではたゆまぬ努力を惜しまないのよ。どう？みなおした？

「パチュリー様、それはただ、遭難なさっているだけなのでは？」

こぁ…まさか貴方まで裏切るとはね……。いいわ、私は孤高の天才魔女よ。平凡で愚鈍な平民にいちいち目くじら立てたりはしない。ふふん、崇高なる私の精神は、こんな事じゃ揺るがないわ！

「こぁ、平凡で愚鈍なオジサンが焼いたカレーパン食べるか？」

「わぁ、食べますぅ。平凡で愚鈍な悪魔ですがカレーパン大好きです！」

……。ちょっと！一個よこしなさいよ！た、たまには庶民の味を知らなきゃね！まったく…この油臭い食べ物はなんなのかしら……かりかり……あつあつ……まったく…止まらないわ！なんて危険な食べ物なの！仕方ないわ……庶民を養うのも天才の役目……全部よこしなさい！私が処理してあげるわっ！

「……卵サラダパンもあるけど……食べるか？」

食べる。仕方ないから食べる。こぁ、紅茶。ったく、マヨネーズはけしからんわね？こんな高カロリー……レミィの為に頑張って食べなきゃ……。

「レミリアとフラン、そこでさっきから食ってるぞ？たこ焼き」

……たこ焼きって何？

「出汁の効いた小麦粉のタネを焼いて、外はかりかり、中はとろとろ、ぶつ切りのタコが歯応えを演出、ソースをかけて出来上がりって感じだな」

「じろー舌やけどしたよーけどおいしー！あと２０個は食べたい」

「フランお前、お腹パンパンに膨らんでるぞ？ほら、口にソースついてるし。こっちむけ」

「あぐっ…あぐっ…にひひ、ありがとうじろー！ね、焼いて？」

「はいはい、レミリアは食べるか？」

「私はお腹いっぱいよ。あっ、私もソースついてる…かなぁ…拭かなきゃ？」

「……お前、いま自分でつけたろ。まぁいいや、おいでレミリア」

……。たこ焼き……。

「ん？食うのか？」

食べる。はやくよこしなさいよ！なにレミィとフランに甘えられてデレデレしてるのよ！妬ましい！はやくたこ焼きよこしなさい！

「……はいはい、ほらよ」

さっさと渡せばいいのよ！このノロマ！どれどれ…匂いは……香ばしい……涎が……よし、いくわ…あー――――

「お、おい！いっぺんに口に入れたらヤバイから……あー……」

なにようるさいわね？あーーん……もぐ…もぐ…やんおい……！？…むきゃ！！？熱い！熱い熱い熱い！むきゃきゃ！こぁ！水！みーーず！！！

……死ぬかと思った。ただ私は天才魔女よ。火傷くらい目じゃないわ！ふぅ…さて寝ましょう。お腹いっぱいになったから…あふっ……

「こぁ、食ってすぐ寝たら太るんだ。知ってるか？」

「はい、最近パチュリー様のお腹がぷにぷにですから」

「って椅子で寝ちゃったな。仕方ないから運ぶか。こぁ、ベッドまで案内」

「あ、はい。こちらです」

……ふにゃ…運ばせて…あげるわ？次郎……感謝しなさい……

「こいつ、口悪くなきゃ可愛いのにな」

「パチュリー様は今の言葉で3日はご機嫌ですよ、次郎様」

「そんなもんかね。まぁ喋らなきゃ可愛いな」

結局こうやってガヤガヤした日も悪くないわね。この礼儀知らずの男が出入りしてから紅魔館も明るくなったし。ま、そこは感謝してやってもいいわ。まぁ、ちょっと顔もいいし…ね？きゃあきゃあ！何言ってるの私……。

「盛り上がってる時に悪いが……最初から全部口にでてるぞ？」

え？

むきゅー……

東方御伽草子～ＩＦ　その？（前書き）

初見の方はＩＦの付いてない所からお読みください

東方御伽草子～ＩＦ　その？

『恐るべし！空想科学』

「うーん、これはやはり……生体に癒着して初めて効果が…だけどなぁ、熱源が感じられない……」

何やらぶつぶつと呟きながら、河童いちの技術屋である河城にとりは、深い思考の海に漂っていた。その手には何やら幻想郷に場違いな代物を持って。

このにとりと言う河童は、数いる河童達の中で取り分け変り者である。とにかく日がな幻想郷中を歩き回り、外の世界から落ちてきたであろう代物を探しては彷徨う。

そして、収穫があればすぐさま分解し、解析作業を気が済むまで突き詰めるのだ。その間はある種のトランス状態と言え、まるで周りなど気にせずに、にとり脳は空想のディスプレイを形成し、スパコンが如く凄まじい演算を始めるのだ。

その結果、幻想郷どころか現代地球を遥かに越えるオーバーテクノロジーを実現する事もあるのだ。

因みに、彼女がいつも背負っているリュックサックには、彼女渾身の作品である光学迷彩が入っていたりする。

そんなマッドサイエンティスト風なにとりであるが、せっかく彼女

が開発したハイテク道具も、２つの理由で実用化には至らない。

１つは、オーバーテクノロジー過ぎて、彼女以外にその理論を理解できない為、全てワンオフ品となる。結果、高コストであり価格があり得ない程に高額で、さらに壊れても部品が手に入らなかったりする為、普及させるに至らない。

２つ目は、幻想郷の管理者にして八雲一家の組長、八雲紫が許可しないと言う点だ。過ぎたテクノロジーは人妖のバランスを壊し、悪影響を及ぼすと言う懸念があるのだ。

以上の理由から、にとり的には不本意ながら、完全に趣味や道楽の域をでない。まさに「才能の無駄遣い」と言う話だ。

ともあれ、存在自体が場違いとも言えるにとり嬢ではあるが、そんな彼女をしても今手にしているソレは理解の範疇を超えていた。

形状はまるで義手のようだが、中に空洞があって、アタッチメントのように腕に装着出来るようだ。ただ、何故か左腕専用らしい。そして、義手のようでそうでは無い箇所が、手首から先にあたる部分である。

――まさに銃。

そうとしか言えない形をしているのだ。ただ、銃であるならば必ずあるはずの溝、所謂ライフリングが無いのだ。そして、弾が装填されるような場所もない。

中に何やら加速器と増幅器らしき小型部品は見受けられるが、例えばレールガンであればそもそも電源にあたる部分が無いのがおかし

いのである。

見てくれは銃、しかし銃であるなら必ず必要である部分がない。流石のにとり嬢であるが、これはさじを投げたと不貞腐れたようにキュウリをかじって寝転んだ。

「やあ、にとりよ。いまいいかな？」

不貞寝を決め込んだにとりを突然呼ぶものが現れた。帽子を深くかぶり、少し寝に入っていたにとりは不機嫌そうに顔をあげた。

「ったく、誰さ……って次郎さんかい。どうしたのさこんなとこまで」

「いやぁ、にとりは凄腕技術者と評判だろう？そして水の扱いも上手いと聞いた。そんなにとりに仕事を頼みたいなと思ったんだが……機嫌悪そうだから出直そうか？」

「いやいやいやいや、ただ煮詰まって腐ってたんだ。気分転換に話を聞かせてよ？凄腕技術者とまで言われたら、手ぶらじゃ返せないからね！」

そういってカラカラと笑うどこかお侠（きゃん）なにとりに、相変わらず豪快な女だ、と次郎は笑うのだった。が――――

「……おいにとりよ」

突然真面目な口調になった次郎に、怪訝な表情で見返すにとり。

「そ、それはどうしたんだ？」

「ん？これかい？ほら彼岸のあたりによくガラクタ落ちてるだろ？そこで拾ってきたんだけど、なんなのかさっぱり分からないんだよね。って次郎さん、これが何か分かるのかい！？」

「ああ、分かる。いや、正確には識ってる…だな」

にとりからそれを奪い、爛々とした目でみる次郎。いつもどこか飄々とした印象な次郎だが、今の彼はキラキラした目でソレを舐めるように見ていた。

「それ、銃っぽいけど違うんだよね……私にはさっぱりだよ」

「……いや、これは銃だ。間違いなくな」

「だって弾入れる場所が無いんだよ？ライフリングも無いしさ？これの何処が銃なのさ？」

にとりの顔を見てニヤリと笑った次郎は、尊大な口調で言った。

「これはな、サイコガンだ。ある宇宙海賊が愛用していたんだ。それはたしかに銃（Ｇｕｎ）だ。ただしサイコ（Ｐｓｙｃｈｏ）の名が示すように、念力を弾に変えて撃つんだ。使用者の念力の強さと、イメージ力に威力が左右されるんだ。サイコガン……こうして手にとって見れる日が来るとは……」

そういって次郎は感極まって泣いてしまった。

「まさか念力が動力とはね……そりゃあ分からない訳だ。しかし、念力となれば私じゃ扱えないね」

「いや、そうとは言いきれないぞ？妖力で代用できるかもしれない。やってみろ！にとり！！」

びしーっと指を指す次郎

「え！？次郎さんあんなに喜んでたじゃないか？次郎さんやんなよ？」

「いやだ。怖いから。爆発したらやだからな」

そこはキッパリ言い切る次郎

「いやいやいやいや…私だって爆発とかやだし！だいたい私は女の子だよ！」

「チッチッチ、俺、人間、お前、妖怪。わかるな？」

「ドヤ顔がムカつくんですけど……まぁいいや。じゃ私がやるよ」

にとらは左腕にサイコガンを装着する。質感は金属のそれだが、不思議と重量を感じない。

左腕を突き出し、右手をそっと添える。にとりは目を閉じ、サイコガンに自身の妖力を注ぐイメージを固めた。やがて銃口からは粒子状のプラズマ発光体が発生した。

にとりは次郎にこくりと頷いた。次郎もまたうなずき返す。

「わあああああ！いっけぇ～っ！！！！！」

バッヒューン！！（銃口から巨大なフラッシュが広がり、辺りを白く染め）

ドカッグシャバキャ（にとりの自宅を跡形もなく更地に変え）

「ギャアアアアアァァァァ……」（作用反作用の法則により、にとりはドップラー効果と共に遥か彼方へと消えていった）

昔、空想科学読本なるものに書いてあった。宇宙戦艦ヤマトが波動砲を撃てば、飛び出した波動と同じ速度で、ヤマトは宇宙の果てへとトラベリングすると。

腕組みしながらウンウン頷いていた次郎が、去りぎわに残した言葉は――

「なるほど、やはりな」だったという。

因みににとり嬢は、博麗神社までぶっ飛び、あまつさえ賽銭箱にダイブ&破壊。キレた霊夢に「皆が賽銭入れたくなる機能付き賽銭箱を作れ！」と無茶フリされて泣いたという。

憐れにとり

負けるなにとり

明日はきっと笑えるさ！

東方御伽草子～Ｉｆ　その？（前書き）

初見の方は、ＩＦのついてない所からお読みください。

東方御伽草子～Ｉｆ　その？

『骨折り損の……』

これは以前、喰いものやのツケランキング一位と二位に君臨する二人に、次郎が追込みをかけた事がある。

その二人に次郎は、「三日間の労働奉仕をしたらツケは免除してもいい」と持ちかけた。

ぶっちゃけてしまえば、二人に支払いの意志を感じない。ならば、いつ払うかよりも、等価交換で払って貰ったほうが建設的ではないのか？――次郎はそう考えたのだ。

そして二人はそれを飲んだ。これはその時の汗と涙の記録である。

□■□■□■□■□■□■□

「では、いらっしゃい！！」

「……いらっしゃぃ」

「……よく来たわね」

次郎の屋台、「喰いものや」に威勢の良い？とは言いきれない声が響く。

「はいダメ。緑は声が小さい。紅白は偉そう。どこの魔王だよ。やりなおしっ！！！いらっしゃぃ！！」

「「いらっしゃぃ…」」

次郎の叱咤にハキハキとは言い難いが、先ほどよりはマシな声が響いた。

「まだ声が小さいが、まあいいだろう。次ッ！はい、喜んでッッ！」

「はぃ…よ、喜んで？」

緑と呼ばれた女性、風見幽香は、彼女を知る者が見たらその場でひっくり返って失禁するだろう。だが彼女は今、頬を染め、羞恥に身悶えしながらも健気に次郎の呼び掛けに答えている。

「ちっ……喜んでッ」

対して紅白と呼ばれた女性、もはや読者の方はご存知だろうが、そう博麗霊夢その人である。少なくとも次郎の要求に応えようと努力している緑さんとは対称的に、彼女は全身から「え～なんで私がこんな事しなきゃいけない訳？」と言う雰囲気を出している。

「緑ぃ…お前さん照れ過ぎだろ……いくら花しか友達いないにしても、もう少し頑張ろうな？だが紅白、テメーはダメだ。お前さん今舌打ちしたよね！？有り得ないから。うち頑固が売りで私語厳禁なラーメン屋じゃないから！ちゃんとしろよぉ紅白ぅ！！」

「ったく、うるさいわね。だいたい私のツケは紫が払ってるでしょうが！なら私が働かなくたっていいでしょうに！」

完全に開き直った彼女は、言うに事欠いて八雲紫の”好意”を自分の権利であると主張し始めた。昔、死闘を繰り広げた相手でもある博麗霊夢の凄まじさに、「この図太さは私には真似できないわね。これが博麗の巫女の力……勝てないはずだわ」と、隣の緑さんは見当違いの感心をした。

「おほほいおほほい博麗霊夢さんよ！お前さんなんか勘違いしとりゃせんか？あれは紫の心付けだ！あくまで金を払わないヤクザ巫女のせいで経営が厳しい俺に対する心付けだよ！勘違いするんじゃないやい！ほら見ろ？この伝票の数を！ってアッー！！」

バッ！モッシャモッシャ……

「ヘンヒョウ？ホホニアフホハシハ？（伝票？何処にあるのかしら？）…ゴクン」

「信じられん……こいつ……喰いやがった……しかも完食しやがった……」

博麗霊夢は最終手段にでた。なんと次郎の手にある紙束を、電光石火の早業で奪い、そして食べた。大人しくしていれば間違いなく

美少女として通る彼女が、一切の躊躇もなく大口を開けて食べたのだ。

そのいっそ清々しいまでの開き直りに、一瞬「ブラボー！！」と叫びたくなった次郎ではあるが、一応彼も商売人の端くれ、そこまで甘くは無いのだ。

「あー…してやったり的な顔をしてる所悪いが、帳簿にキッチリ附けてあるからな？残念だがお前さんの借金は健在だよ？分かったらしっかり励めよ。客商売舐めんなッッ！！！客はゆっくりしていいが、霊夢、お前にゆっくりする権利はないッ！」

やさぐれ巫女にとうとう次郎がキレた。

「だいたい緑を見てみろよ。こんなにプライドが高い大妖怪の彼女が、ここまで頑張ってんだ。少しは見習えお馬鹿巫女！よし、緑は頭撫でてやる」

「ちょ次郎、あぅっ…」

だがその時紅白は見た。次郎に撫でられながら緑は、紅白を意味ありげな目で見ていた。その目はこう言っていた。「ざまあみさらせ」と――

「ちょ次郎さん！騙されないで！緑はしおらしいフリをしてるだけよ！」

確かに紅白の指摘どおり、緑は打算があった。それは取り敢えず言いなりになってやり過ごせばツケがなくなる。まして憎からず思っている次郎と自然にお近付きになれる訳だ。まさに一石二鳥だ。

だから人に媚びる事を普段は絶対にやらない彼女が、こうして照れながらも頑張っていたのだ。だとしても、だ。開き直る博麗霊夢よりは数段マシに決まっている。

「黙れ博麗霊夢。どんな動機だろうが、要はキッチリ三日間お前さんらに働いてもらう事には変わり無いんだ。特にお前さんは拒否権すらない。まぁ嫌なら今後は喰いものやに出入り禁止にするぞ」

「う、うぐぅ…。わかったわよ！やればいいんでしょ、やれば！ただなんで名前じゃなく色で呼ぶのよ！失礼でしょうが！」

「悪いけどな、お前が舐めてかかる妖精のチルノですらお前さんの十倍は働くぞ？いらっしゃいも喜んでもちゃんと言うしな？最近は会計の計算すら出来る。だからな、この研修が終わる迄はお前さんは紅白としか呼ばん。悔しかったらとっととくだらんプライドは捨てるんだな。あっと緑よ」

「な、なんでしょう、て、店長！」

「グーッド、咄嗟の呼び掛けによく反応出来たな。よし、風見幽香、合格ッ！！！」

「やった……いえ、あ、ありがとうございます店長！」

どうやら風見幽香は合格を貰えたようだ。そんな風見幽香は紅白を見下した目で見ながら――

「あら、博麗――違ったわ、紅白さん？早く貴女も合格なさいな

？私は広〜〜い心の持ち主だか待ってあげるけどね？」

「むかぁ…何よ、大妖怪が媚び売っちゃって。やだやだ、ああ女の臭いがするわ？臭い臭い」

「あなた……死にたいようね……」

「一度か私に勝ってから言いなさいな。大妖怪さん？」

「なにさっ！」

「なによっ！」

「「表に出なさいッ！！」」

風見幽香は日傘を手に、対する博麗霊夢はお祓い棒を手に喰いものやの前に立った。二人は不敵な笑みを浮かべ、一触即発の臨戦態勢へと移行する。

数々の異変を解決し、名実共に最強と言われる博麗霊夢。そしてかつては博麗霊夢に苦杯を舐めたが、数いる名だたる妖怪達を、能力に頼らない地力だけで屠り去ってきた大妖怪、風見幽香。

そのリヴェンジマッチがはからずも今、ここに実現したッッッッ

「ま、良いけどさ？お前さんらも知ってるように、喰いものやは喧嘩御法度だ。始めたらお前さんら、出禁だからな？」

この光景を生暖かい視線で眺めていた次郎が、ちくりと刺した。

「な、何言ってるのかな？次郎さん。ただの戯れあいよ。ね、ね～ゆうかりん♪」

「そ、そうよ次郎。ただのＯＨＡＮＡＳＨＩぢゃない。ね～れーむ♪」

「気色悪い。さっさと戻れ。続きが待ってるんだ」

そういって次郎は屋台に戻っていった。

「（……後で絶対に叩きのめしてやる）」

「（その言葉、のし付けて返してやるわ？）」

「何か言ったか！！？」

「「な、何でも無いですぅ店長♪」」

その後何とか接客出来る段階までは成長した二人だったが……

「霊夢ぅ！！！盗み喰いするなぁ！！！」

「幽香ぁ！！客にメンチ切るなぁ！！阿求が泣いてるだろうが！！」

「霊夢、お前さん飲んだな？」

「飲んれましぇん。れーむはバリバリ働きましゅ」

「完全にキャラ変わってるだろ……」

「幽香ぁぁぁぁ！！それ椅子じゃない！霖之助だからっ！！霖之助もニヤニヤするなっ！！」

そうして何やかやあって閉店を迎え――――

「お前さんら、ツケはチャラにするからさ、もう明日から来ないでくれ、なっ？」

泣いて頼む次郎であった。

結論、現実は非常である。努力が必ずしもむくわれはしない。

東方御伽草子～ＩＦ　コラボ企画ｗｉｔｈマチュピチュ氏（前書き）

初見の方はＩＦの付いてない所からお読みください。

「気が付いたら東方の世界にいた」の作者、マチュピチュ氏とのコラボ企画であります。

向こうには次郎が登場しているらしいので、良かったら読んで頂きたいです。

東方御伽草子～ＩＦ　コラボ企画ｗｉｔｈマチュピチュ氏

「ねぇ次郎さん？」

「なんだ妹紅……」

陽光が射し込む次郎の寝室。そのまばゆい光の束の一本が妹紅の瞳に飛び込み、そして彼女は眩しいとそれから逃れるように次郎の胸に顔を埋めた。

「私、幸せよ？次郎さん」

「妹紅おま――――」

「でもね？やっぱりデートは2人っきりでしなきゃダメなの。そうでしょ？」

何かを言おうとした次郎を、彼の唇に人差し指をそっと添える事で阻止した妹紅は、柔らかな笑顔で会話を続けた。彼女の独言と言うスタイルで。

下から妹紅を見上げる形になっている次郎は、何故かごくりと唾を飲み込む。そして彼女のブラウスから覗く少し浮き出た鎖骨、尖った顎のライン、白すぎる肌で強調された赤い唇、通った鼻筋と鼻腔から香る蠱惑的な彼女の呼吸、そして――――

妹紅は微笑んではいるのだが、何故か額から目にかけて黒い斜がかかっている。

次郎は思う。なんだろうこの逆らったら即生命の危険が訪れるような嫌なプレッシャーは……と。

思えばいつから彼女はおかしくなったのだろうか？と次郎の回想は続く。

霊夢が飲み潰れ、神社まで抱いてつれ帰った。

年の離れた姪のように懐いてくる鈴仙の耳を弄ってからかった。

慧音の寺子屋を手伝った時、休憩で昼食を囲んだ際、「れ、礼だから勘違いするなよ！？」と赤面した慧音に、彼女が焼いたタコさんウインナーをあーんしてもらった。

スカーレット姉妹が遊びに来て、1日中2人が両腕にぶらさがっていた。

チルノと毎朝風呂に入り、頭を洗ってやった。

博麗神社の宴会で酔っぱらい、目の前にいた魔理沙に「お前はキノコが好きなんだろ？実は俺には凄いキノコが生えてるんだ。見るか？魔理沙」とセクハラし、激しく赤面する魔理沙をニヤニヤしながら見た。

それらの最中、どこかでギリッ……っと歯軋りの音が聞こえ、振り返ると必ずそこには笑顔の妹紅がいたような……。そう次郎は回想した———

ドンッ！！！

「グエッ！？」

「ねぇ？聞いてるの？ねぇ？ねぇ？ねぇってば？無視しちゃ嫌だよ次郎さん」

いつの間にか思考の海に落ちていた次郎が、暴力的な衝撃で覚醒した。

妹紅が彼の胃のあたりに飛び乗ったのだ。そして次郎の顔に自分の顔を寄せた。

咳ひとつの振動があれば、２人の唇は触れ合うのではないか？そん

な距離で2人は見つめあっている。
妹紅の半開きの唇の間から時折見える紅い舌が、この不可思議な状況であるのに次郎の性感を司る中枢神経を刺激する。

（とにかく、今は距離をおかなければ……）

そう考えた次郎は、悪手であると自覚しながらも、妹紅を抱き寄せた。

「あっ……次ろ…」

喜色ばんだ歓声と羞恥が混ざったような声を漏らし、妹紅は身体を次郎に預けた。

「妹紅、最近構ってやれなくてすまんな？来週にでも休みをとってどこかへ行こう。2人で、な？」

「うんっ！！！！！」

額に掛かっていた斜が実は存在していなかったかの様に、妹紅はあどけない笑顔を浮かべると立ち上がった。

「じゃ仕込みしてくるね！……約束破ったら…やだよ？」

妹紅は恥ずかしそうに走り去った。もっとも、最後のくだりでは何故かぞくりと悪寒がはしったのだが。とにかく無事にやり過ごせた安堵に、彼は布団の上に胡坐をかいたままキセルに火を点けるのだった。

次郎は思う。このままではいけない。妹紅の姿は何といったか…やん…ヤン…思い出せないが、何か危険な状況なのは間違いないと。

「たしかこういう事に詳しいのが守矢神社に居たはずだ。たしか神主と巫女だったか……行ってみるか……」

□■□■□■□■□■□■□

次郎は秋晴れな幻想郷の空を飛行している。行き先は妖怪の山にある守矢神社である。

今朝の妹紅とのやり取りの後、彼女に「キノコの補充に森に行って来る」と竹籠を担いで外に出た。

彼の屋台の人気メニューの1つに、エリンギ風キノコのフライがあ

るので、彼の言葉は不自然では無かった。だが、いってらっしゃいと言う妹紅の笑顔は目が笑って無かった。

早くなんとかしなければ……とにかく次郎はそう感じ、いまこうして守矢神社へと急ぐのであった。

「あや？あややや！これはこれは次郎さんじゃありませんか！毎度お馴染み、清く正しい新聞（ぶんや）記者。射命丸　文でございます！次郎さま、本日はどちらまで？」

ああ、煩いのに捕まった…そんな表情を隠しもせず、次郎はシッシッと蝿でも払うように手を振った。

「あややや！その物憂げな、所謂アンニュイな表情頂きます！富竹……いやいや……改めて、射命丸フラッシュッ！！！！」

カシャッ！カシャカシャカシャ！！！

フラッシュとモータードライブが奏でるシャッター音が次郎をおそう。

だが次郎はこのマイペースな烏天狗に何を言っても無駄なのを知っている。

だから――切った。彼女と空の関わりを。

「あーやややや……私は諦めませんからねぇぇ……」

捨て台詞を吐きながら、彼女は樹海に墜落したのだった。

「こうしちゃおれん……急がなければ……」

次郎は進む。恐怖から逃れるために。

□■□■□■□■□■□■□

「……来たね、糞妖精」

「よくそんな減らず口を。それはあたいに勝ってからいいな！カエルの」

守矢神社の境内では、２人の小さき闘士が対峙していた。

「諏訪子さまぁ～！ファイトですっ！今日は服、破らないでくださいね！」

エメラルドグリーンの髪の巫女は、箒片手に応援している。

「クククッ…幻想郷最強を目指して何が悪い。神として、妖怪として、妖精として生まれたからには、誰だって一度は最強を志すッ。地上最強など一瞬たりとも夢見た事はないッッそんな存在は１人としてこの幻想郷には存在しないッッそれが心理だッ！！！！！」

まさにカリスマッと言う覇気を纏った神、八坂神奈子が本殿から睨みを効かす。

「はいはいカリスマカリスマ。いいからさっさと芋の皮剥きをするっ」

この神社の神主見習いである大学生が、めんどくさそうに注連縄をぐいぐいと引いてゆく。

「やぁぁ……大学生ぇ…縄引っ張っちゃらめぇぇぇ……」

あっさりとカリスマブレイクした神奈子様が、引き摺られてフレームアウトしていった。こう見えて彼女は、神である。紛れもない日本神話の化身、そう、神である。とても大事なので二度繰り返した。

「さて、ショータイムの始まりさ。氷の！今日はアンタを引き裂いてやるよ。感謝しなぁ」

にやぁと笑った女、洩矢諏訪子が、ぎょろりとグロテスクな目玉の付いた帽子を脱いだ。金色の髪がぱさりと乱れ、狂気の宿った目が剥かれた。

「引き裂く？面白いね？カエルの。だったらあたいが今日はぐうの音が出ない程に打ちのめしてやるよ！」

そう言い放った”血みどろ血流濃”の二つ名を持つ妖精チルノが構えた。

2人の間は僅か数メートル。その間を風が吹き抜けていく。互いが発する濃密な闘気が膨れ上がり、そして間合い（エリア）が交差した。

「……っだらあッッ！！！！」

「だぁらっしゃあああぁぁッッッ！！」

一瞬で2人は間合いを越えて走り寄る。ドンッッ！！と言う凄まじい打撃音ともに砂塵が2人を隠す。

やがて砂塵は晴れ、2人の姿を露にした。

「ごぉぉおらあああッッッ！！！！」

「糞っだらあアアアッ！！！！」

2人は額をぶつけ合い、両手はそれぞれ組み合って、互いに一本も退かぬと意地で押し合う。

一歩でも退けば、それこそ恥辱。だからこそ2人は譲れない。負けられない。

「ごあああアアアァァァッッ！！！！」

諏訪子が歯を剥き出しに叫び

「ずぅりゃあああああッッ！！！！！」

チルノがこめかみの血管から血を噴き出しながらも一切退かない。

ボクァッッッ！！

ぶつかり合う2人の間に、逃げ場を失った闘気がクレーターを作る。

「セリャアッッ！！」

「ガハッッ！？」

ほんの一瞬の隙をついたチルノが諏訪子を上空に蹴りあげたッ

「まだまだぁッ！！」

そして直ぐ様チルノは飛び上がり、空中で無防備な諏訪子の腹に、
組んだ両手でダブルハンマーをたたき込んだッ

「ガハアッ！！！」

急転直下、諏訪子は自由落下の数十倍の速度で石畳に叩きつけられ、そして――――

「止めだヒキガエルッ！！おゥらッ！！！！！」

ドガッ！！バキバキバキバキッ！！

バウンドした諏訪子の腹に止めの横蹴りをたたき込んだ！そのまま吹っ飛んだ諏訪子は、社務所に日乾しと立て掛けられていたオンバシラに突っ込んで動かなくなった。

「……まったく…張り合いが無いね。やはりあたいったらサイキョ――なにいッ！？この気は……」

「くくっ……クハハッ……アーハッハッハッハッ！！！！」

血塗れでオンバシラの下敷きになっている諏訪子が、狂ったように笑っている。毛細血管が破裂した瞳は、白い部分が全て真っ赤に染まっていた。

「なにがそんなに可笑しい？カエルのぉぉ！」

渾身の攻撃に心が折れなかった諏訪子の様子に、自らが馬鹿にされたと、チルノの脳内にエンドルフィンが大量に分泌された。――ようはキレたのだ。

「……クックックッ。可笑しいさ。だってそうだろう？しこたま殴られなきゃアタシの身体は温まらないンだからさ？クハッ、カカカッ！いいヨ妖精！たまんないンだよ！カカカッ！いいよアンタ、最高だよ。だから、ブチ殺してやンよッッ！」

バキャッ！ドガッ！

諏訪子が吠えた瞬間、彼女を潰さんとしていたオンバシラが全て吹き飛んだ。

その中心で悪魔のように引き裂かれた笑みを浮かべた諏訪子は、ゆらりゆらりとチルノに向かって歩みを進める。

「はっ！？まさかあたいが圧倒されている！？まさかっ！！」

無意識にチルノは一歩、また一歩とあとずさっていた。

「覚悟しなぁ氷の。もう止められないよ？クハッ、死にたくなきゃぁ、気合い入れンだな！」

そして諏訪子は不思議な構えを見せ――

「二拝二拍一拝ッッ！！

お　い　で　ま　せ　ッ　ッ

ミシャグジさまぁッッッッッ！！！！！」

諏訪子が叫んだ瞬間、湖が割れた。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！』

湖を割って現われたのは、白き大蛇。ぬらりぬらりとのたくりながら、純白ながら禍々しきその蛇が複数諏訪子に向かって飛来した。

ドスッドスッドスッ！！

次々とミシャグジは諏訪子の身体に食らい付き、そして消えた。

『これがボクの最終形態だよ。なあに一瞬で屠ってあげるよ。ふっふっふっ……こう見えてもボクは優しいんだ』

チルノは息を飲んだ。一人称がアタシからボクに変わっているのもさることながら、何より見た目がおかしかった。

チルノは知らないが、もし現在厨房にいる大学生が今の諏訪子を見たならこういうだろう。

「フリー……けふけふ……ウナゲリ……けふけふ……エバー量産機だと！？それはちょっち洒落にならないぞ」と。

狂気を孕んだ微笑を湛えた諏訪子から、凄まじい気が膨れ上がり、右手を空にかざした先にはエネルギーの塊が収束していく。

「や、やめろカエルの！！それはまずいよ！幻想郷が持たないッ！！！！」

キレていたはずのチルノが血の気を失いながら諏訪子に叫ぶ――だがッ

「ふっふっふっ……最初に言っただろう？ボクはキミを切り裂くと。だいたいさっきのキミの攻撃さ？さすがにちょっとムっときたよ？だから――幻想郷ごと引き裂いてやるよッッッ食らえ！幻想郷斬りッッ！！！！」

光を放つ諏訪子のエネルギーが、まるで天まで届くような大剣になって振りかぶられた。このままではチルノごと大地が切り裂かれるだろう。

そして今まさにそれが振り下ろされようとした刹那――

カァンッッッ！！

甲高い音と共に、諏訪子の身体を赤い何かが貫いた。

チルノは虚ろな目で空を仰いだ。そこには――上半身裸の白髪の美少年がゆっくりと天から降りてくる姿であった。

「……諏訪子、君の暴走で計画が変わるのは許せないな？そこの君？」

「あ、あたいかい？」

「君はもう大丈夫さ。だけどね？碇シン……いや、大学生君にはこの事は内緒だよ？」

そういってアルカイックスマイルを浮かべた美少年――渚カヲルは、神殺しの槍ロンギヌスを回収してまた浮かび上がった。

「ま、待ってッ！！」

「なんだい？」

「こ、ここ殺したのかい？」

「いや、危ない力だけ消しただけさ。すぐに目を覚ますよ。君は……優しいね？さっきまで殺しあっていたと言うのに」

「違う！あたい達はライバルだ！だけど殺したりなんかしないッ！！馬鹿にするな！」

「ふふふ、どうやら僕は妖精を誤解していたようだ。その言葉、好意に値するよ？」

「……好意？」

「好きって事さ。じゃあね、優しい妖精さん？」

そう言うと渚カヲルはまた、上空に消えていった。

辺りを見渡したチルノは、諏訪子と早苗が気絶しているのを見て、

あわてて介抱するのだった。

□■□■□■□■□■□■□

「ふう、やっとついたな」

守矢神社の境内に次郎は降り立った。何やら荒れ果てた本殿前の広場に首をかしげた彼だったが、とにかく目的の人物を探すことにした。

目的の人物、彼は大学生と名乗った。

彼は前に次郎の店に一度食べにきたのだ。その時彼は次郎の店の人気メニューの1つである焼き鳥を嬉々として食べていた。

とは言っても、焼き鳥のタレは妹紅秘伝の逸品であるから不味い訳が無いのであるが。

その時次郎が大学生と他愛もない会話をしたのだが、どうやら彼は外の世界の人間らしかった。色々あったらしく人でありながら妖怪でもあるという不思議な存在でもあるが。

そんな彼は次郎が酌をする酒を呷りながら、いかに自分の境遇が悲惨であるかと愚痴を漏らした。

プラモ大好き八坂神奈子

幼稚なくせに傍若無人洩矢諏訪子

信仰の為なら親でも殺す　東風谷早苗

まさに幻想郷。なんでもアリである。ただ彼の話の節々に感じたのは、外の世界に精通しているらしいと言う事だ。特に大学生と巫女の早苗だ。

だから自分はここにいる。だから———

「すまんが誰かいるかい？」

人の気配は感じないが、とにかく次郎は呼び掛けてみた。

「……あんた誰だい？」

何やら巨大なしめ縄を背負った女が立っていた。何故か片手にジャガイモ、反対の手には小刀を持っていた。

「人里で屋台をやっている次郎と言う。大学生はいるのかい？」

その女はじっと次郎を見つめた。そして———

「あんた、好きなＭＳの名前、言ってごらん？」

何やら釈然とはしないが、本能はこの女に逆らったらいけないと感じた次郎は素直に答えた。

「……マラサイだな」

「あんた、わかってるじゃないか。リックディアスや百式にも劣らない汎用機なのに高スペック……気に入った。入りな？大学生は中だよ」

笑顔でサムズアップしたその女は、次郎を中へと誘うのだった。何度も言うが、彼女の名前は八坂神奈子、神である。雨や風を司ると言う、神である。とても大事なので再度、二回言っ（ｒｙ

そして次郎はガンダム世代だった。一番のお気に入りプラモは——ザクレロであった。ザクレロ自体がバン〇イの黒歴史だとしても、だ。

□■□■□■□■□■□■□

「……と言う訳なんだ。なぁ妹紅の状態はなんなんだ？俺は少し怖いんだ」

守矢神社の茶の間、そこで次郎は、目的の人物である大学生と早苗と車座になって話していた。

「次郎さん、それは…」

大学生が眉を顰める

「ええ、間違いありません。それは…」

東風谷早苗も神経な表情だ

「「ヤンデレです！」」

見事なユニゾンで二人は断言した。

「や、ヤンデレってなんだ？ヤバいのか？」

次郎は今どきの人間ではない。故にヤンデレの存在は知らないのだった。

「次郎さん、ヤンデレとは病む程に愛してしまい、そのこと以外に目が行かなくなり、全て貴方への愛に関わる行動は、彼女の頭の中では全て正当化されるのです。つまり――」

「はい、妹紅さんは間違いなく次郎さんの愛に病んでいますね。次郎さんモテモテじゃないですかぁ」

大学生が解説し、早苗が後を引き継いだ。次郎はなんとなく理解した。しかし早苗の言葉に若干イラッとしたのは押さえ込んだ。だって次郎は大人だから。

と、その時――

ドンドンッ！！ドンドンッッ！！

『じろーいるのー？』

喧しく乱暴に戸板が叩かれ、そして次郎を呼ぶ声がする。

「まさか！？何故妹紅がここに！？」

恐怖におののく次郎

「次郎さん、奥の離れにげといて！取り敢えず俺がなんとか誤魔化すから」

「ええ、私たちに任せて下さい」

「すまない……頼むッ」

ドンドンッ！！ドンドンッ！！

『ふふふ、じろー？やだぁここにもいない……』

「次郎さんはやくっ！！」

「わかったッ！！すまん君たち！！」

次郎は走った。何度も足が絡まり転ぶが、とにかく走った。後ろで大学生達の悲鳴とも怒声とも判別できない騒ぎが聞えるが、とにかく次郎は走った。

感じたことの無い恐怖は、彼の倫理も常識も消し去った。とにかく今は逃げよう。それだけであった。

□■□■□■□■□■□■□

◆次郎の独白、或いは懺悔

離れに飛び込んだ俺は雨戸をしめ、扉につっかい棒をして布団を被って丸まった。

外はまだ騒がしい。弾幕が飛び交う音がする。

どうしてこうなる？

俺が何をした？

ガチガチと奥歯を鳴らす音にすら怯えながら、俺は考える。

あの可愛らしかった妹紅

妹のような妹紅

だがいつの間にか変わっていた。

妹紅が変わったのか？

いや、俺が？まさか！俺は最初から変わっていない

だけど

ああ、そうだ

俺は識っていた。

気が付いていたんだ

お前がいつも寂しそうに

俺がお前以外の誰かと笑いあってるのを見ていたのを

識ってて俺は

何もしなかった……

お前が寂しそうに笑うのを、当たり前だと流していた……

お前、泣いてたのか？

いつも隠れて泣いてたのか？

ああ、扉が焼けていく

そして――――

「じろー見ぃ～つけたっ！！！！！」

俺は黙って見ていた

妹紅が握る、やたらと鈍く光る銀色が

俺の胸を貫くシーンを

最後に見たのは

涙を流しながら笑う、きれいな顔の妹紅だった

（ごめんなさい）

彼女の口はそう呟いていた

暗転

□■□■□■□■□■□■□

「……って言う夢を見たのさ？」

「ちょっ、次郎さん！？私はそんなに病んでないぞ！こーぎする！」

うんざりした顔でボヤく次郎に、妹紅が噛み付く。常連には見慣れた光景である。

「でもなぁ、万が一そうなったら困るから……妹紅、今夜一緒に寝るか？」

「ちょっばかっ！！何言ってるのさ！馬鹿次郎！……まぁたまに一緒に寝てもいいケド」

「ん？なんか言ったか妹紅？」

「ななな、何でもない！」

「そうか？まあ、だからって言ってだ？この柔らかい耳を弄るのは止めないけどな。なぁ鈴仙」

「あうあうあう……しょんなぁ〜〜」

これもまた、常連には見慣れた光景だったりする。

こうして騒がしく、人里の夜は更けていく。

ここは喰いものや。美味い酒と肴が食べれる場所さ。だが、来るなら覚悟をしたほうがいい。なんでかって？それはな、怖ぇ怖ぇ妖怪がわんさか飲みに来るからだ。

悪い事は言わない。行くのはやめときな？

それでも行くなら止めねぇよ？店主は全て受け容れるからな。

例えお前が死んでもな？

あっはっはっ……冗談だよ？

おしまい

東方御伽草子～ＩＦ　コラボ企画ｗｉｔｈマチュピチュ氏（後書き）

マチュピチュ様、ありがとうございました。

また良かったら絡みましょう。

と言うか自重を忘れて申し訳ない。

東方御伽草子～ＩＦ　？　ｏｒ　ＴＲＵＥ　？（前書き）

初見の方はＩＦの付いてない所からお読みください。

東方御伽草子～ＩＦ　？　ｏｒ　ＴＲＵＥ　？

理屈では無いのだ。そう言える事は世の中たくさんあるだろう。他人には苦痛でしかない発酵食品を喜んで食べたり、家族に隠れてあられもない姿の少女を模した人形をコレクションしてみたり。

様々な嗜好や性癖が星の数だけ存在し、それでも当事者は決まってこう言うのだ。

「だって、好きなんだもん。仕方ないじゃない」と。

理屈では無い。そういう事である。

ましてや男女のそれときたら……。

――東方おとぎ草子――

本日、射命丸　文は大忙しで幻想郷中を飛び回っていた。彼女は幻想郷最速を謳い文句に、自らが主宰する「文々。新聞」（ぶんぶんまるしんぶん）を発行そして、配達までを自分で行っている。当然

記者も兼任していると言うマルチな才能を発揮している。

そんな彼女が忙しい理由、それは、久しぶりの大スクープを掴んだ為であった。

彼女の部下のような立場である犬走　椛等は「へぇ、大スクープですかぁ（笑）」と、ニヤニヤしていた。全く信じてないのだ。さもあろう、基本的に射命丸　文のスクープとは、ゴシップの域を出ないのだから。

しかし、しかしである。今日の射命丸　文は気合いが違った。頭に乗っかる兜巾（ときん）すら輝いているようだ。とにかく彼女は燃えているのだ。

きっかけはそう、何時ものようにネタを探して彼女は飛んでいた。最近は永遠亭の方には行っていないなと、気まぐれに向かったのだ。昔は迷いの竹林に住む藤原妹紅等が、因縁の相手である蓬莱山輝夜と死闘を繰り広げていたため、頻繁に出向いたものだ。弾幕ごっこが主流の幻想郷で、不死者である蓬莱人２人の戦いは、緊張感が違うとマニア受けするのだ。

だが最近は藤原妹紅が人里に引越してしまい、輝夜とのバトルも中々行われない為、竹林周辺の話題自体が減ってしまった。

だがこの日、射命丸　文の妖怪アンテナがビンビンと反応し――えっ！？妖怪アンテナは？某妖怪少年とかぶるから不味い？はい、わかりました。失敬、では改めて――

だがこの日、射命丸　文の妖怪センサーがビンビンと反応し、竹林方面にネタの匂いがあると感じたのだ。後にこの時の事を犬走椛に聞かれた射命丸　文はこう答えた。

「そうしろと囁くのよ、私の魂（ゴースト）がね」とキリリとした表情で。

とにかくそうして、永遠亭に出歯亀に向かった射命丸　文は、そこでとんでもない物を目撃し、持ちうる最大射程の望遠レンズを使い、細心の注意を払って写真を撮りまくった。何故か盛大に鼻血を噴きながら。そうして出来た最新号の見出しは――――

『幻想郷の無口な伊達男がついに陥落か！？魔性の女、蓬莱山輝夜に迫る！』であった。

元々妖怪の山の天狗のコミュニティでは、様々な新聞が発刊されている。しかしそのほとんどが身内ネタか、誇大誇張された胡散臭い物ばかりだ。それでは新聞としては成立しておらず、普及には至らない。

そんな中、射命丸　文が主宰する「文々。新聞」の記事は、その取材エリアは幻想郷全域に及び、内容も裏が取れる物しか記事にしないと言うモットーな為、魔法の森の外れにある道具屋「香霖堂」の主人、森近霖之助等は、「誇大表現を差し引けば、情報としては比較的優秀。むしろ他の天狗の新聞は読むに耐えない」との見解を述べ、文々。新聞を定期購読している。

そんな天狗コミュニティ以外では割りと信頼されている文々。新聞主宰者である射命丸　文は、大スクープを手に、購読者や主要な勢

力の代表者へと新聞を届けようと、幻想郷の空路をひた走るのであった。清く正しい射命丸　文は今日もいく！

ただ、文々。新聞は頻繁に号外を発表するため、「ただ部数を増やしたいだけでは？」と疑うものも居るが、定かではない。さらには

「プライベートへの考慮が低いのではないか？」との指摘もかなりあったりする。この点だけははっきりさせるべきと作者は思う。

射命丸さん、発行部数水増し疑惑の審議についての見解は？

「あやや！そんな事は無いです！号外は無料ですから、それにより宣伝を兼ねている訳ですよ！それが定期購読に繋がれば……と、そういう訳です」

なるほど、理にかなってますね。まあいいでしょう。で、次はプライベートへの倫理観の欠如についての指摘は？

「あややっ…えっと、は、配慮してますよ！」

ほう、そうですか？おかしいな……作者たる私に挙がってきた報告によると、なになに、「何だかいつもローアングルから激写されてキツいｂｙ帽子がチャームポイントな神様」ふむ、「スクール水着を着ろと強要されたｂｙキュートな人間の盟友さん」ほうほう、「よく博麗神社で酔い潰れて寝るが、シャッター音で目が覚める。辺りに誰もいないのだが、何故か服がはだけているｂｙ二本の角の角度がセックスアピールさん」もうこれアウトですよね？射命丸さん。射命丸さん！？いない……逃げたな……。

□■□■□■□■□■□■□

「さてと、まずは命連寺から参りますかね。聖白蓮さんは居ますか～？」

命蓮寺の境内に直接降りた射命丸だったが――

「誰だお前は！って鴉天狗か、つまらん」

「つまりますよ！ってナズーリンさんは一体何をしてたのですか？」

「いやなに、また宝塔をなくし――はっ！？ひっかからんぞ。忙しいんだから帰れ帰れ」

「あやや？何やら事件の臭いがしますが、本日は後がつかえてるので用件だけ。聖白蓮にこの号外を渡して上げて下さいな。きっと面白い事になりますよ」

ぱさり

「なになに、ほう、これは。お前にしてはやるじゃないか鴉天狗。早速見せてこよう。じゃあね」

「ふふふ、大スクープを配り、それがさらなるスクープを呼ぶ。ブンヤ冥利に尽きますね。おっと次は…」

射命丸は次の目的地に向かい飛び立った。何やら後方から突然、禍々しい魔力が吹き荒れた気がした射命丸だったが、そこは敢えてスルーした。何故なら豚は太らせてから食べた方が美味いからだ。

□■□■□■□■□■□■□

「さて、次は紅魔館ですね。門番さんは……はい、寝てますね。これは様式美なのでそっとしておきましょう。何故なら――」

ザクッ

アイヤー

「――と、言うお約束が待っているからです。ね？咲夜さん」

「パーフェクトよ鴉天狗。で、今日は何の用かしら？妹様は寝てるわよ？貴女が渡したカメラのせいで迷惑してるんだけど……。まあいいわ。で、なに？」

「はい、実は号外をお持ちしましてね。これを姉妹に見せれば面白い事になりますよ」

ぱさり

「……褒めてあげるわ鴉天狗。これでおぜう様が私の元へ……めくるめく主と従者の倒錯した……」

「咲夜さん、鼻血鼻血。強い忠誠心は体に毒ですよ？って聞こえてませんね。じゃあ次行きますか」

□■□■□■□■□■□■□

「はぁ咲夜さんキャラ変わってましたねぇ。さて次はっと……」

「おや、射命丸さんいらっしゃい。それでは早速……」

すらり……

「ちょっちょっちょっと妖夢さん!?何いきなり刀を抜くですか!?」

「いえ、取り敢えず抜いておこうかなと。大は小を兼ねると言いますし、ね?」

「ね?じゃないですから!ほら、これ見てくださいよ!これを幽々子様に見せたら少しは外に行くかも知れませんよ!」

ぱさり

「みょん!?こ、これは…お兄さま……ギリッ…こうしてはおれません!幽々子様、ゆゆこさま〜!!」

「あややや、行ってしまいましたね。これでは門番の意味は無いの

では？まあ、いいでしょう。しかし、一瞬妖夢さんの半霊が黒く……気のせいですよね？さて、次行きますか」

□■□■□■□■□■□■□

「さてと、迷い家はいつきても殺風景ですね。っと居ました居ました。藍さーん！」

しゅたっ

「おや、鴉天狗ではないか、珍しい。ここにはネタ等無いぞ？いや……私の可愛い橙の成長記録なんてどうだ？いや、絶対に載せるべきだ。先日なんか私が朝、橙を起こしに行った時、「藍しゃま…うざいです…」と寝言で私を呼んだのだ！うざいがどういう意味か知らないが、なんと愛らしい事だ！どうだ鴉天狗！可愛いだろう？ん？ん？」

「ちょっ藍さん近いですって！その話は次に来たら聞きますから！（うざいの意味教えたら血の雨が降りそうですね……）」

「そ、そうか、残念だな。で、今日は何の用だ？」

「はい実はこれを紫さんにお見せしたいなと思いまして」

ぱさり

「紫様はまだ寝ていらっし……むむ、これは……あの子憎たらしい弟子にはいい薬になるか……よし、必ず私が紫様に見せよう。ではな？」

「はい、ありがとうございました！（既に親離れされた藍さん？）さて、次は……」

□■□■□■□■□■□■□

「ふふっ、寺子屋の子供達は無邪気でいいですねぇ」

「なんだ鴉天狗、来てたのか。珍しいな。で、私に何か用でもあるのか？」

「これはこれは話が早くて助かります。いえ、大したことでは無いのですが、慧音さんならばこちらに興味がおありかなと思いまして」

ぱさり

「こ、これは！？ふっふふふふ…次郎め…いや、これは妹紅にも声をかけなければ……うふっうふふふふ……許さん……輝夜め」

「え、そっちですか！？と言うか慧音さん、角出てます角！今日は満月じゃありませんよ！……ダメですねこれは……さて、博麗神社でお茶を頂いてから帰りますかっ」

□■□■□■□■□■□■□

博麗神社付近の上空

「あややや…団子屋に寄り道したら食べ過ぎました……すっかり遅くなってしまっ……あや？何やら大声が聞こえますね？どうやら神社の方からみたいです。何か不穏な空気を感じるので慎重に行きましょうか」

こそこそ

「私がこの宇宙人死ね死ね決起集会の隊長を務める博麗霊夢よ！そしてアンタ達の根性を叩き直す教官でもあるわ！文句のある妖怪には容赦無く陰陽玉をブチ込むから覚悟してッ！！さて、これから宇宙人をブチのめす訓練を始める訳だけど……勝手に口を開く事は許さないわ！口で××を垂れる前と後ろにサーを付けなさいッ分かったかしら？ウジ蟲達ッッ！！」

『サー！イエッ！サー！』

「ふざけてるの？お腹から声を出しなさいッ！この貧乳どもッ！！」

『サー！イエッ！サー！』

「そこのオチビさん、名前は？」

「レミリアスカーレットでありますッ！サー！」

「ふざけないで！アンタはエターナル幼児体型、そう呼ぶわ？」

「サー！イエッ！サー……」

「幼児体型って…あんたの胸で言うか（笑）」ポソッ

「誰よッ！どこの××かしら？月の手先のオフェ×豚はどこッ！月に代わってお仕置きされたいのッ！？答え無しかしら？普通の魔法使いとかばかなの？死ぬの？いいわ、なら頭の中のお花畑を焼き尽くす迄マスパしまくるわッ！貴女ねッ？マスパされたい×××は！！あんた名前は？」

「上白沢慧音でありますッサー！」

「アンタずいぶん胸を反るわね？自慢したいのかしら？」

「サー！イエッ！サー！（笑）」

「アンタ、重力に負けてるわよ？数年後には自慢の胸で電話コントと言う自虐ネタが披露できるわ？良かったわね？」

「サー…イエッ…サー……」

博麗神社上空

「あやややや！？これはどえらい事になってますね！？取り敢えず撮っておきますか――」

カシャカシャ

「まさか号外がこんな事態を引き起こすとは……たまりませんね……と言うかこのメンバーは……八雲紫に西行寺幽々子、魂魄妖夢、聖白蓮、ええっ！？風見幽香！？それにスカーレット姉妹に上白沢慧音と藤原妹紅……と言うか博麗霊夢はタダメシが食べれなくなったら困るからですよね？うわっ妖精達もわんさか来てますよ！？ミスティアさんはさりげなく屋台出してますね……あやややや、これは大事になりました。実に面白いです。もはやこれは異変と呼べるのでは！？よし、仕上げに新たな号外を作って次郎さん達に見せれば……さあ帰って記事を書かなければ！！！」

『ガン・ホー！ガン・ホー！ガン・ホー！』

□■□■□■□■□■□■□

「ねえ次郎、こんな幸せでいいのかな？」

「この程度で幸せとはお前さん、よっぽど悲惨な人生だったんだな？輝夜」

「そう、ねっ、あんっ……次郎きもちいいよぅ…」

「……阿呆が。そんなっ声出すなっ……俺も辛いんだぞっ……くっ」

「やぁよ……もっと堅いの…ちょうだい…ね？」

「くっ……堅いのは…輝夜のここだ…ろっ……」

「やん、次郎、まだいたぁい……身体がなれて…ぁん…無いんだから…」

「だからって凝り過ぎだろう？お前の背中…揉むほうの身になれよっ……と、はい終わり！」

「ありがと次郎！気持ち良かった～むふふふ」

「分かったから膝に乗るな。猫かお前は」

「嬉しいくせに」

「……全然」

「正直に言いなさい」

「……阿呆が」

「むふふふ……」

「……なんだよ？」

「次郎ってさ、普段渋く決めてるけど、阿呆がって言う時って、照れてるか誤魔化す時だよね？ね？」

「くっ……あ、阿呆が」

「顔真っ赤だー！」

「なるほどね？これがキャッキャウフフと言う状態ね？実に興味深いわ」

「冷静に分析するなよ永琳……助けてくれないか？」

「嫌よ。面白…いえ、私は輝夜至上主義だもの。だからダメ」

「と言うか鈴仙、柱から完全に身体はみ出てるぞ？」

「姫様ずるい……」

「なによイナバ。あんたもくっつきたいなら来なさいよ？背中なら貸したげるわよ？」

「おい、勝手に貸し借りするなっ……何故抱きつくんだれーせん」

「……次郎さんの背中、ぽかぽかする」

「お前、目赤いし若干メタ臭するからやめろ」

「うさっうさうさうさ！！」

「おい、てゐ！そのネタはやめろ。作者が嫌いなんだそれは」

「次郎の発言がメタだウサ。ウササササ」

『ごうが～いごうが～い』

ばさり

「なんだこれは……なになに……！！！！？何だとぉ！！！！！」

「どうしたの？次郎」

「か、かか輝夜っコレ見ろ！！ヤバイ！これはヤバイ！」

「……？。何慌ててるのよ次郎……なになに……何ですってぇ！！！ヤバイ！非常なヤバイわ！たた、たたた……助けてエーリン！！！」

「何やってるのよ貴方達は……どれどれ……ぷぷっ！ちょってゐ！うどんげ！これ見なさい！あははッ！！お腹いたいわ！あはははは！！」

「師匠、気が狂ったんですか？……なになに……こ、これは……」

「うどんげ、私にも見せな？どれどれ…えっ……ナニコレ！ウササササッ！！これは面白ろすぎる！ウササササッ！！」

「「こいつら鬼畜だ……」」

【博麗神社で決死隊結成か！？いざゆかん、敵は永遠亭にありッ！！】

本日、博麗神社において、”宇宙人死ね死ね団”が結成された。

これは最近妖怪化したと言われている、人里の名物屋台のオーナーのJさんを慕う女性達が、最近J郎さんをモノにしたと噂されるH莱山K夜さんを討ち取る為に結成されたと言う。

記者は「J郎さんを討ち取るの間違いでは？」と疑問をぶつけた所

―――

H麗霊M「私は見てられなかった。こう見えて仲間思いなの。え？屋台が開かないと困るじゃないの。なに、私を餓死させたいわけ？」

Y雲Y「……あの蓬莱人隙間送りにしてやろうかしら…J郎と寝た回数なら負けないわ…」

HHャク蓮「↑この伏せ字おかしくない？ねえ？まあいいわ。私、まだ未遂だから。せめて開通してから……何言わせるのかしら色即是空色即是空」

K見Y香「え？イニシャルが空気読めないって？殺すわよ？え？J郎？そうねぇ、まあ男としてはアリって感じね？え？参加の動機？……ツケが無くならないかなって……殺すわよ？」

？「……？？？。あたい？大ちゃんと遊んでたら来た。ジロ？わか

んない。あ、大ちゃん待って〜」

M紅&K音「……K夜コロス輝Y絶対コロス」

Y坂KN子「……私は、神だ」

M矢SW子「……私も、神だ」

KN子&SW子「暇を持て余した神々の――遊び！」

と、このように皆さん恨みの籠もった言葉を述べていました。さて、幻想郷で一番ホットなカップルの運命やいかに！？

／射命丸／

「……どうしよう次郎」

「……どうしよう輝夜」

「2人とも私に任せなさい！」

「流石エーリン！！！」

「流石月の頭脳！！！」

「ホッホッホ！ホッホッホ……」

「なあ、エーリン、何故俺を縛る」

「ねえ、エーリン、どうして私を縛るの？」

「簡単な話よ。ねえ輝夜、腹を空かせた獣がいるとするわ？自分が食べられないためにはどうすればいいと思う？」

「え？……別の餌を置く？」

「Ｅｘａｃｔｌｙ《その通りでございます、姫様》」

「エーリンどうして私を玄関の前に転がすの？」

「エーリンどうして俺はお前さんに担がれたままなんだ？」

「ホホホホホ……輝夜、餌は一匹でいいと言う事よ？」

「は、謀ったなぁ永琳！！」

「お嬢さんだからさ！じゃ輝夜？後は頼んだわよ！　さて、次郎？愛の逃避行に行くわよ！おーほっほっほっ！！」

その後、襲来した王蟲の群れに憐れな姫様は踏み潰されたという。

王蟲の目は三日三晩赤いままだったと言う。

そして、そのほとぼりが醒めた頃にやたらとつやつやした永琳と、栄養失調のようにガリガリの次郎が戻ってきたと言う。

「あややや、流石にこれは書けませんね。キジも鳴かずば撃たれまい。記事だけに。お後がよろしいようで……」

東方御伽草子～ＩＦ　？　ｏｒ　ＴＲＵＥ　？（後書き）

ちょっとしばらく濃い文章を書いてたので、今回は手抜きでＳＳ形式で書いてみました。

相変わらずの駄文で申し訳ない。

主人公設定・用語資料（前書き）

ネタバレ注意

時折更新します

主人公設定・用語資料

◇◇主人公◇◇

◆名前：次郎

◆種族：人間、本作の主人公

◆職業：人里の屋台

◆能力：「つけたり離したりを操る程度の能力

◆備考：八雲紫の隙間に巻き込まれ幻想入り。時間軸はぼかされているが、既に数年を幻想郷で過ごしているようだ。
妻子を亡くしており、それが原因で自暴自棄で自堕落な生活をしていた。だが幻想郷にて新たに生き甲斐を見つけ、生まれ変わった。
種族に分け隔てなく人柄のみで好き嫌いを判断するため、よく妖しに懐かれる。屋台ではチルノ、藤原妹紅を従業員として雇っている。
自分に好意を寄せている存在に対しては嬉しく思っているが、今は応える気持ちの余裕は無いと考えている。将来は未定。

◇◇用語資料◇◇

◆この小説では基本的に、妖怪を妖(あやかし)と表記する。が、会話の中では妖怪と発言するケースはある。あくまで地の文に適用される。

◆次郎自宅

人里の南端にある。因みにさらに南へ歩けば迷いの竹林がある。

外観は純和風な茅ぶき屋根の日本家屋。

かつて豪農が住んでいた家屋なので、割りと部屋数があったりする。

因みに、藤原妹紅は屋台の従業員になってからはここに住んでいる。

理由は仕込みが忙しく、帰るのが面倒だから。

台所は規模的にはもはや厨房。釜戸は二つあり、水回りもしっかりしている。白玉楼ほどではない。

広い茶の間が庭に面している。庭のある面を囲むように縁側がある。

次郎の畑は割りと広い。ちょっとした小学校のグラウンドくらいはある。

基本的に次郎が一人で季節の野菜をまめに栽培している。

流石にこの広さを次郎一人では世話仕切れない為、人手が必要な時は、大ちゃんやリグル他ちびっこが手伝ってくれる。報酬はお小遣いと甘いお菓子らしい。

因みに次郎はルーミアの餌付けに成功しており、腹が減ると次郎に飯をたかりにくる。なので最近彼女は人を食わない。

厨房の勝手口から出たすぐの庭には立派な石窯がある。パンやピザを焼いている。隣には燻製窯もある。

◆喰いものや

人里東端の関をでた辺りにある。そのまま真っ直ぐ東へ行けば、博麗神社がある。

屋台は所謂リヤカー型ではなく、次郎が能力を駆使して大人三人位が入れるキッチンを作り、それを囲むようにカウンターがあり、椅子は１０席置いてある。

客が飽和した時の為に、４人がけの折り畳み卓が２つしまってある。

喰いものやが出す料理は、基本的に畑と相談なので、毎日メニューが変わる。

固定メニューは

?.魔法の森原産のエリンギ風キノコのパン粉揚げ

?.鳥の唐揚げ

?.焼き鳥（妹紅担当）

?.次郎のパンによるサンドイッチ各種

これらは定番メニューであり、人気メニュー。

ただ、ミスティアが時折やってきて、鳥をやめなさい！と１人でシュプレヒコールをあげ、反対デモを打つ。スルーされるけど。

酒は実は色々ある。日本酒、焼酎、ウイスキー、ワイン、そしてビールまである。何故か？

ヒント：隙間の人に次郎は懐かれてます。

伊吹さんがご乱心して店が半壊した事があり、次の日から「鬼、お断り」となった。だが、彼女の親友である博麗の巫女が仲裁し、出禁は解除。ただ、店に来た際、彼女自慢のひょうたんが人質にされる。大人しく飲めば返してくれる。

口八丁手八丁で一切飲み代を出さない博麗霊夢に次郎が貸した試練、それは無償で定期的に屋台を結界で囲むことだったりする。なんという博麗の無駄遣い。

屋台では弾幕ごっこ禁止である。やったら出禁である。過去に霧雨魔理沙、風見幽香が出禁になった。出禁解除の為に二人がした試練は

キノコ狩り1ヶ月毎日→霧雨魔理沙

つまみ用ひまわりの種を1ヶ月分提供→風見幽香

開店時間は午後7時

閉店時間は丑三つ時

ある兎の話（第一話はココ）

ここは幻想郷と言う。

ここに住まう存在は、妖の類い、妖精、幻獣――つまりは我等人間が産まれ、人生を営み、そして朽ち果てる間に備わる常識から外れた存在である。

要は人間が娯楽として接する創作物――昔話、絵本、小説、映画などの所謂フィクションの世界に存在しうる者共が当たり前のように営みを形成しているのだ。
そして少なからず人間も含まれる。

この場所の管理者と言う存在は、やがて完全なるフィクションになる前に、全ての”現実に”存在している者達を箱庭に隔離したのだ。
故に箱庭の外に住まう人間にはフィクションの中の創作物だとて、現実に存在しているのだ。

それが幻想郷なのである。

――東方御伽草子――

ここは幻想郷の中にある人間達の集落である。それなりに人が住み、それなりに栄えており、そしてそれなりに物語が生まれる場所である。

夕暮れの通りには様々な商店が立ち並び、道行く者達に威勢の良い声が飛び交う。あちらでは惣菜を、こちらでは野菜売りがダミ声を飛ばす。

辻売りの八つ目鰻の屋台には既に出来上がった酔っ払いがクダをまき散らし、場違いな西洋風な使用人服の女が冷やかな視線で通り過ぎていく。

ここには確かに営みが存在していた。ただ、それは人間に限らずと言う注釈がつくのであるが。

ひとつ間違いないのは、ここには調和があるという事であった。

さて、この人里の入り口付近の薄暗い場所に、少し中にある屋台とは趣の違う店があった。

店構えは屋台なのだが、周りに何もない場所にぽつんと建っている。

この人里を纏める立場でもあり、人格者である寺子屋を営む女性に言わせると、こんな危ない場所に出店など正気の沙汰ではないらしいが、無愛想で有名な店主は一向に聞きはしないのである。

その屋台の名前は「喰いものや」と言うなんのひねりもない暖簾を掲げ、半年前あたりからひょっこり現れた。

気が付いたらそこに在り、気が付いたら当たり前に馴染み、少なからず常連が付いている。

これはそんな不思議な屋台にまつわるおはなしである。

「だからさぁ、あたしだって頑張ってんのよ！ねぇ聞いてんの？無視すんなオヤジのくせに！悪いと思ったら……ひっく、賽銭いれに来なさいよ！……あ、おかわりちょーらい、ひひっ……」

「黙れ不良巫女……ツケ払ってからいいやがれ。……おらっ熱燗だ」

「んふ～おやっさん好き～ひっく」

「ちっ……調子いい奴め……忌々しい……俺はまだ二十代だ馬鹿野郎」

どうやら今夜の客は店主曰く不良巫女だけらしい。赤いリボンが麗しい巫女がへべれけになっていた。

テーブルに突っ伏したまま酒を呷る巫女姿の少女を眺め、店主の男は渋面にキセルを咥えていかにも迷惑そうに唸っている。

ただ、文句を言いながらも酒を出す辺りは説得力にかけるのだが。

「おっちゃん、なんか喰わせてくれよ！お、霊夢は出来上がってんな！」

「ちっ……またすかんぴんがきやがった。おらっ、飲め。そしてツケ払え」

「そういっても喰わせてくれるおっちゃんカッコいいぜ！愛してる」

「阿呆が。喰ったらこの不良巫女連れて帰れよ。胡散臭い魔法使い」

巫女に続いてとんがり帽子の白黒な少女が飛び込んできた。店主と軽口を交わす辺り、この娘も常連らしい。

こうしてこの屋台の夜は更け、それなりに人が入れ替わっていくのである。

最後の客が機嫌よく立ち去り、店主は屋台をたたむ準備を始めた。店主は伸びを一つしながら釣り銭箱を覗き、そして深いため息をついた。どうやら今夜も赤字らしい。

「……あの腐れ巫女」

ぽつりと悪態をついた店主は、釣り銭箱の中から一枚の紙を摘みあげて忌々しそうに丸めて捨てた。紙にはこう書いてある。

博麗神社と――

それでも一日の労働に心地よい満足感があるのか、店主は少しだけ微笑して片付けに戻るのだった。

「ふぅ……こんなもんか。さて、労働のご褒美っと……」

一通り片付けが終わった店主は、にんまりとしながら豆腐の炒ったものと熱燗を自分の為に用意し、遅い夕食を摂るようだ。

「今夜も月は綺麗だね～っとくらぁ……ん？また来たのか兎」

店主が座るテーブルから見える木陰には、外の高校生のような制服を着た兎の耳の少女が立っている。

「あ、あの、ごめんなさい、えっと、通りかかっただけで、その――」

「おい兎、腹減ってないか？」

あわてて支離滅裂な兎の少女に店主は声をかける。

「えっと、その、はいっ、減ってるかと聞かれたら減っていると答えますが、その、はい、いえ、ごめんなさい――」

「……こっちこい兎。寒いだろうからなんか温かいの作ってやる」

「あの、いえっ、だから、その――」

「……来い」

「ひゃいっ！」

わたわたと挙動不審な兎の少女に、店主の優しい一喝が止めを刺し

たらしい。兎の少女はおどおどと、そして素晴らしい速さでテーブルについた。

席についたものの、兎は銅像のようにお行儀よく固まったまま、愛らしい耳を垂らして俯いていた。店主はそれを横目で見ながら鍋を振っている。

とんっ

やがて兎の前に、食欲をそそる湯気がたち登る丼が置かれた。

「食べな。暖まるぞ」

店主を上目にちらりと見た兎は、すぐに慌てて視線を逸らす。ただ、小さく可愛らしい鼻はひくひくと、湯気に混じる美味しそうな香りに反応している。

丼には何かの腸詰めと、武骨に乱切りされた人参や芋の類いが煮込まれた汁が入っている。

「ポトフってんだ。暖まるから遠慮なくやりな？」

「は、はひっ、あ、ありがとうございます」

「いいから慌てないで食え。俺も夕飯食うからな。慌てないで食え」

「……はい」

「ん」

相変わらず顔は伏せたままだが、兎はやがて確りと頷き、そして食べはじめた。

幻想郷は今は春先である。だが、夜半はまだまだ冷えるのだ。兎が食し、ほう、と吐く息は少し白い。

店主はすっかり冷えた銚子の酒を手酌で飲みながら、彼の唯一の嗜好品であるキセルをふかす。因みに酒は嗜好品では無く、水であると言うのが彼の持論だ。

「……ご馳走様でした。えっと、美味しかったです。はい」

いつの間にか食べ終わった兎が、やはりちらちらと店主を盗み見るように見上げていた。

「お粗末様だ。あとこれ持ってけ」

ぽんっと兎の前に大きめの折り詰めが置かれた。

「へっ？」

「ああ、余った料理だ。お前、ちょいちょいこの辺来るだろ？薬担いでうろうろしてるもんな？だからさ、きっと家族もいるんだろうさ。遅くなった言い訳に土産持ってきな」

にやりと笑った店主はぶっきらぼうに言った。

「わ、わ、ありがとうございます！あ、でもお代が足りないかも、

です…」

不安気な兎に店主は豪快に笑った。そして――

「今日は俺の奢りだよ兎。しょっちゅうウチの店に入りたそうに眺めてたお前さんが、漸く来てくれた記念だ。ありがとうな？来てくれて」

そういって不器用に片目をつむる店主に、兎は暫くぽかんと目を見開き、そして顔を真っ赤にして何度も頷いた。

兎は嬉しかった。

この見た目は冷淡にも見える少女は、その実ひどく臆病なのだ。

されど内気ながらも寂しがりやな性格から、他人と関わりたくとも自分から踏み出せない難儀な性質だ。

薬師を営む師匠の手伝いで時折人里にやってくる少女は、帰りしなに見かける屋台にいつも笑い声が絶えないのを知り、自分もあの輪に入れたらなと思っていたのだ。

だが、性格とは中々かわれない。

そして兎はいつも屋台を眺めては寂しそうに帰っていくのだ。

「あの……鈴仙です」

「んん？」

「えと、その、私の名前、鈴仙です。兎ですけど、鈴仙なんです」

少女は確りと、真っ赤な目を店主に向けた。

「そうかい、鈴仙。俺は次郎だ。宜しくな？どっかの腐れ巫女みたいにオヤジ呼ばわりは許さんぞ？」

そしてまた不器用に片目をつむる店主だった。

「……ふふっ、わかりましたジロさん。私も兎呼ばわりは許さん、です」

「あはは、お前さんも言うね？　ま、次からは金とるからまた来てくれ。さっ、遅いから帰んな？」

二人で少し笑いあい、そして鈴仙は帰っていった。土産を胸に抱えて。

こうしてある日の屋台の一日は終わるのだった。

「おい、鈴仙！」

「はいっ！？」

歩きだした背中に店主の声が飛び、びくりと身体を揺らす鈴仙。

「必ずまた来いよ？」

「……はいっ！！」

笑顔が弾けた。

つづく

登場人物

次郎と言う名の店主

人格者の寺子屋の女性

霊夢と言う名の腐れ巫女

胡散臭い魔法使い

鈴仙と言う名の兎

ある兎の話（第一話はココ）（後書き）

うどんげ可愛い。ウサミミにブレザーなんて卑怯だと思います。

心の隙間、埋めますか？

宵の口、人里の外れにある屋台では、無愛想な店主が黙々と仕込みをしていた。

ここは「喰いものや」――――妖し達が集う不思議な屋台である。

――東方御伽草子――

この喰いものやを営む店主である次郎は、人里の住人からは変り者と呼ばれている。というのもこの幻想郷と言う場所は、人間が圧倒的に弱者である。

次郎はそんな人間にとっては物騒で世知辛い土地で、好きこのんで妖し相手に店を開いているのだ。

寺子屋の女主人が次郎を「正気の沙汰ではない」と称したのも頷けると言うものだ。

次郎自身は一切の自己主張をしない上に、鳥や野菜類は自給自足し、僅かな足りない物を人里にて買う程度だ。必然的に人里とは疎遠になる。

次郎はただ、寡黙に仕込みをし、当たり前に店を開くのみであった。

淡々と。

すっかり日も落ち、人々が家路につく頃には、次郎の仕込みも佳境に辿り着いていた。その日使う肉の下拵え、作りおきの煮込み等、出来るだけこまめにそれは行われる。

何せ従業員はいないのだ。次郎が一人で全てを取り仕切らなければならない。故に仕込みで料理の手間を七割がた終わらせておくのである。

そして今日の仕込みも滞りなく終わらせ、次郎は一人満足気な溜息をついた。

「次郎様、もう開店してるのかしら？」

一段落して一服つけていた次郎に、闇の中から鈴の音のような声が響く。

「ふん、どうせタイミング見計らってたのだろうに。まぁ座んな、隙間の」

キセルをかん、と叩きつけ火種を飛ばすと、次郎は虚空を見た。

屋台の淡い灯りの向こう側にある暗闇に、更に深い漆黒が開き、無数の目玉が散らばった。その中から異国風の帽子をかぶった、少女

の様でそれでいて全てを達観したような人形然とした美貌の女性が現れた。

八雲紫、隙間の妖怪と言われる幻想郷の管理人たる大妖怪であった。

「ふふっ、客に言う台詞では無くってよ？次郎様。そこが貴男らしくていいのだけれども。ではお任せでお願いするわ」

口元を扇子で隠しながら、少女たる姿に妖艶さを撒き散らし、八雲は席につくのだった。

次郎は伝法な口調ではあるが、それでも手早く肴を身繕い八雲の前に並べた。彼女の好きな濁り酒を添えて。

八雲はその細い喉をこく、こく、と鳴らし、冷えた濁り酒を嚥下していく。そして、ふうと一息つくと次郎に微笑した。

「おいし。ねぇ、この肴はなあに？」

「もやしを炒めて卵を絡めただけだ。お前さん、いつも疲れた顔をしてるからな。女が必要な栄養はもやしに沢山入ってるんだとよ。黙って食え」

目だけで微かに笑いながら、次郎は八雲に講釈を垂れた。

「あは、この幻想郷で私を女扱いするのは貴男だけよ？だって、歳だけは誰より上だもの。口の悪い吸血鬼に言わせると婆ですってよ？」

芝居掛かった口調で八雲はおどけると、少し”しな”を作って次郎を見た。

「女の年の話は御法度ってな。あんたは充分に女だよ。下らねぇこと言ってないで飲んで食え」

「あら、うれし。口説いてくださるのかしら？」

「……阿呆が」

鼻で笑った次郎がまた一品八雲の前に置く。今度は鶏肉を湯がいて薄く切り、山葵醤油を添えた物だ。

「大体な、八雲がくる日は決まって他の客がきやがらねぇ。お前さんが怖いらしい。だが、まともに金を払ってくれる客もまたお前さんくらいなもんだ。つまりは憎たらしい上客様を俺は逃がす訳にはいかんのだよ。忌々しい事にな」

ぷっとキセルを吹き、新しく葉を詰める次郎だったが、僅かに笑っている。彼もこのやり取りが万更でも無いようだ。

そんな次郎の無骨な優しさに、八雲はやはり扇子で顔を隠しながら”芝居掛かっていない”笑みを浮かべるのだった。

夜露が暖簾を濡らす。

十六夜の月が真上に浮かんでいる。

「……次郎、聞いてるの？もう、みんな私の苦労をわかってくれな

いの。でもね？でも、私はこの幻想郷がだ～いすきなのぉ。だから頑張るのぉ。こら次郎！聞いてるのかぁ！」

「あいあい、聞いてるよ。紫は大変だね。偉いね。うんうん」

「次郎！やい次郎！！あなただけよ……ちゃんと構ってくれるのは……ぐすっ…ぐすっ…むにゃ……」

「……泣きながら寝るなよ面倒くせぇ。やれやれ、風邪ひくぞ」

ひとしきり愚痴を垂れた八雲は酔い潰れ、突っ伏して寝てしまった。そんな彼女に次郎は悪態をつきながらも、自分が羽織っていた藍色の絞りの着流しを彼女の肩にかける。

猫の毛のようにしなやかな金色の髪をちらばせ、僅かに紅がひかれた薄い唇を半開きに眠る八雲。今の彼女には妖艶さも強かさも消え失せている。ただの疲れた少女でしかない。

そんな彼女の姿を眺められるのも役得かもしれないと思案する次郎だった。

「……眠ってしまったようね」

ふと目を覚ました八雲が呟いた。

「……そうだな」

「これ、次郎様の着流し。ふふっ、いい匂い」

「……阿呆が」

目は覚めたが瞳は少し虚ろな八雲が次郎の着流しを抱き締める。

「……なんで？」

「ん？」

「なんで優しくするの？貴男少しおかしいわ？」

「今度は絡み酒か？」

片方の眉を器用に上げながら次郎が溜息をつく。

「……貴男、恨み言ひとつ言わないじゃない！責めなさいよ！私を責めたらいいじゃない！この人さらいって！」

急に激昂した八雲が次郎の胸ぐらを掴む。次郎に唾を飛ばしながらいきり立った彼女は自分を責めろと慟哭する。

「責めてよ……責めて欲しくて通ってるのに」

やがて力なくへたりこんだ八雲。涙で汚した次郎の襟をつかんだまま。

「……責めて、どうにかなるのか？」

「だって！！」

「……黙れ。あれは事故だ。事故は不幸だが誰も悪くは無いんだ。

ぐだぐだいつまでもガキみたいに自分を痛め付けるな」

「……だって」

妖しである八雲紫の力、『境界を操る程度の能力』はあらゆる境目を曖昧にし、自在に操ると言うものだ。

この幻想郷とは、博麗の巫女による大結界により外から隔絶されている。そして、八雲紫の境界を操る能力により中と外を行き来してバランスを保っているのである。

妖し、幻想の生き物、それらは全て人間がいてこそ存在しうるのだ。

人間が夢想し

人間が恐怖し

人間が営む。

光があるなら影が存在できる。人間が光ならば、その影が幻想なのだ。

だが人間は自然の理の序列では弱くとも、それを補って余りある知識と知恵がある。それは人間の生活を豊かにし、そして自然の理を歪にしてしまった。

最早人間に自然への潜在的な恐怖は皆無となり、ある意味互いに共存関係であった幻想の生き物は必要無くなった。

脆弱で一人で立つことも覚束ない生き物だった人間は、今や何一つ不自由無く立ち、空すら支配した。

全ての”くびき”から独立し、星の王者たる人間。ある意味それは妖しよりも化け物然としており、本来の化け物は役割を失った。

つまり幻想は真の意味で幻想となり、その産物たる妖しは役目を無くす。

後に待つのは滅びだ。

八雲はそれを是とせず、幻想郷を作った。

妖しを集め、古来からの自然を受け容れる人間を集め、小さな箱庭を作った。

それは一つの世界であり、森羅万象であった。

それは八雲紫の独り善がりたる産物かもしれない。

だが彼女は愛しているのだ。理解はされなくとも。

だから八雲紫は境界を操るのだ。忘れ去られようとしている外の存在を引き込むために。

ある日八雲紫は外の世界にいた。ある妖しを保護するために。そして、実際に引き込もうと隙間を開いたその刹那の話だ。

妖しが隙間に落ち、安堵した八雲紫が見たものは、驚愕に目を見開き隙間に消える人間の姿だった。

最早作業でしかない八雲紫の仕事は、それ故に油断していたかもしれない。

だが、嘆いても遅かった。予定の無かった人間の男は、間違いなく隙間に落ちたのだから。

慌てて追い掛けた八雲紫が見たものは、幻想郷の上空から落下して、ばらばらに飛び散るはずの惨状――ではなく、地面に叩きつけられる寸前に気絶したまま何らかの能力を発現させた男の姿だった。

男は気絶したまま地上約一メートルに”浮いて”いたのだ。

呆然とそれを見つめる八雲紫だったが、それはある事実を示していた。

それは、巻き込まれてここにいるこの不幸な男が、もう外の世界には帰れないと言う事柄である。

はからずも幻想郷の存在を知ってしまい、なおかつ、外の世界で幻想の産物でしかない超自然的な能力を発現してしまった男。

それ故に幻想郷の管理者たる八雲紫は、自らの責任と幻想郷の秩序の為に男を縛り付けた。男の意志がどうだろうと、だ。

だが、男は受け容れた。残酷で不条理な運命を。

搾りだすように苦々しく語る八雲紫を真っ直ぐ見つめ、一言も言葉

を発しなかった男は、彼女がひとしきり語り終えた後にこう言ったのだ。

「宜しくたのむ」と。

そして、色々ありながらも今に至り、男は何となく幻想郷に溶け込み、八雲紫は罪悪感に苛まれていると言う訳だ。

「……俺は、お前さんを恨んじゃいないよ。俺は向こうじゃクズだった。惰性で生きて、霞みたいなもんだったよ」

ぽつり、ぽつりと次郎が語る。八雲はそれを無言で見上げる。

「だから、何も無かったんだよ。俺と言う存在は。……そうだな、確かに不幸過ぎる出来事だったのかもしれない。だが、俺は今こうしてだ、何となく幸せだと感じてる。だから、いいじゃねえかそれで」

次郎の独白を夢遊病のように見上げる八雲。縋るような視線。打算かも知れない、だが八雲は待っている。ある言葉を。

くしゃっ

その時次郎の節くれた手が八雲の髪を撫でた。

「……だから、許すよ。俺は八雲を許す。そして、新しい人生をくれたお前さんに感謝する。ありがとうな、八雲」

八雲の目が大きく見開かれた。待っていた。欲しかった言葉を次郎は発した。

「許す」と。

「あっ、ああっ、次郎」

縋る八雲。

「……阿呆が。もう看板だ。帰れ帰れ」

しっしっと手を払う次郎に、八雲は失礼ねと形の良い眉を八の字にする。そして小さく呟いた。

「ありがとう」と。

そんな八雲を尻目に黙々と片付ける次郎。それをにんまりしながら彼女は残りの酒を呷る。

そしてすっかり片付いた屋台を眺め、満足そうに次郎は頷いた。

「……まだ居たのか。とっとと帰れよ」

「ええ、帰るわ？」

すっかり正気を取り戻した八雲は、扇子で口元を隠して笑っていた。”芝居掛かった”笑みで。

「……お前、ちょっ、何企んでやがっ！！？おわあああああ！！

！ちっくしょおおおぉぉ……」

次郎の足元に隙間が開き、彼は呪咀と悲鳴をあげながら消えていった。

「ふふっ、まだ飲み足りなくてよ次郎」

静寂

登場人物

次郎と言う名の店主

八雲紫と言う名の妖し

名も無き妖し

心の隙間、埋めますか？（後書き）

相変わらずの駄文ですいません。リハビリですからご勘弁を。

今回は八雲紫でした。この人すごく好きなんだけど、二次作品ではやたらと婆扱いか、お姉さんキャラで描かれる事が多い気がします。

そして、人さらいとか、フィクサー的なポジションが多いですよね。

でもたしか幻想郷に来る存在って、外で忘れ去られようとする存在なんですよね、たしか。

個人的には永夜抄までしかやってませんが、どうみても少女にしか見えないので、この作品の設定としては「精神年齢は見た目に起因する」と言う前提で書きました。

可愛いからいいんです、はい。

僕は某動画サイトで人気のあるアレンジ曲や、大手同人屋とかには興味は無くて、単純に東方のカオスな世界観が好きです。

東方のどうしようもないＢ級感がたまらないのです。チープなＳＴＧに不思議な世界観、まぁ、Ｎｏｒｍａｌをひぃひぃ言いながらクリアする程度の能力なヘタレですが。

まぁそんな感じで、あまり二次作品のステレオタイプに引っ張られないように書けたらなと思ってます。

中々難しいですが…。

※※裏設定※※

すっかりタイミングを失った、主人公紹介

名前◇次郎

容姿◇短髪黒髪高身長。痩せ形で三白眼のこわもて。ｘｘｘＨＯＬｉＣの百目鬼をイメージして下さい。（分からなきゃググレ）

過去◇無作為に惰性で生きてたらしいが詳しくは不明である。

性格◇基本的に無愛想。無口。ただ、たまに語る。たまに笑う。

仕事◇幻想郷の人里の外れにて、喰いものやと言う名の屋台を営む。料理や酒は美味いらしい。種類は多国籍でその日の仕入れと次郎の気分で変わる。

能力◇八雲紫しか知らないが、何らかの能力があるらしい。いずれ語られる…かも知れない。

※※※※※※※※※※※※※※※

さぁ、次は誰出そうかな…

最強の泣き虫

幻想郷の人里の外れ、妖し達が集う屋台がある。名前は「喰いものや」

そこは毎晩笑い声に溢れ、普段は反りが合わない妖し達が触れ合うと言う。

これは、そんな屋台を営む男が織り成す不思議な物語である。

――東方御伽草子――

幻想郷にある名物屋台の店主である次郎は、夜明けと共に畑の世話をしていた。

茅ぶき屋根のこじんまりとした一軒家が次郎の住みかである。その庭一面に次郎の畑があった。

綺麗に耕され丁寧に作られた畑は、次郎の几帳面な性格を表しているようだ。

「ふぅ、腰が痛いな」

野良仕事着の次郎は、長時間腰を曲げていた辛さから、天を仰いで腰を叩いている。但し顔に笑みを浮かべながら、だ。

ひとしきり作業が終わり、次郎は畑の端にある石窯に火を入れた。
この窯は次郎が山から運んできた石を積み上げて作った、彼自慢の自家製石窯である。
彼が幻想郷にくる前には怠惰な生活をしていたと言う。そんな彼が何故にこんな立派な窯が作れたか？　それは彼の能力の恩恵であった。
彼の能力、それは”くっつけたり離れたりする程度の能力”である。
この能力は次郎の視界にある物を、文字通りくっつけたり離れたりを任意にする事ができる。
くっつける――どんな物も溶接したかのように癒着、圧着、融合させる。
離れる――どんな物（自分の身体含む）も任意に切り離す。切断できる。自分自身を地面から離す、つまり浮く事も含まれる。
と言う訳で、かなり汎用性に溢れ、応用が効きやすいと言える。
対象が生物と考えたら、とても恐ろしい効果を発揮するだろう。ただ、次郎は今のところは生活の中でしか使ってはいない。
ある意味物騒な能力であるからこそ、八雲紫は次郎を縛ったのかもしれない。

閑話休題

窯に火を入れた次郎は、そのまま井戸で汗を流し、寝起きに仕込んでいたパン種の発酵を台所に確認しにいく。

「ん。頃合いだな」

発酵を確認した次郎は手早く成型し、焼き上がりを思ってニヤニヤしながら窯にむかうのだ。

しっかりと温度が上がった窯に次々と成型したパン種を並べ、鉄の蓋をする。

満足そうな次郎は、焼き上がりまでの時間を窯の前で過ごすらしい。とにかくこうして彼は毎朝パンを焼くのが日課なのだ。

次郎は丸太に腰掛け、やはり自作の煙草盆を引き寄せ、キセルに火を付ける。

この時間こそが次郎の至高の時なのである。

初夏の涼しげな風が次郎を吹き付け、鳥の声に耳を傾ける。自然と目を閉じ、ゆっくりとした時間の流れを噛み締める。

「――幸せだな、俺は。八雲に感謝だ」

誰とも無くそう呟いた次郎であったが――

「やぁ次郎、おはよう」

「次郎さん、ご相伴に与りに来たよ！」

そんな静寂を次郎は許されないらしい。

「おはよう、慧音、妹紅。このハイエナ共め」

「あっはっは、そう言うな。お前のパンが美味いのを恨め」

「そうだよ次郎さん、あなたが悪い！」

「けっ、惜きゃがれ。まぁ後少し待ちな。おい妹紅、締めた鳥は台所な？」

「ありがとな、次郎さん」

次郎の庭に入ってきたのは、人里の顔役で寺子屋の主人の上白沢慧音とその親友の藤原妹紅である。

慧音は次郎がこの家を借りる際に世話になり、妹紅は次郎の店の常連であり、たまに次郎が育ててる鶏を買っていく関係だった。妹紅の焼き鳥は絶品である。

「ううん……たまらないな、この香ばしい薫り」

「幸せになるね……」

恍惚と涎を垂らす二人の女性を生暖かく横目で見ながら、次郎は釜

を開けた。

中からは黄金色に焼けたパンが現れた。

「ほら、焼けたぞ。一人二個までだからな！」

お預けを食らった犬の如く、食い入るようにパンを見つめる二人に、次郎はやれやれと言う表情で言い放った。

大小様々のパンは、だいたい二十ほどあるだろうか？それを次郎は次々と籠に入れていった。

「ねぇ次郎さん？四角いやつは無いの？」

妹紅が言う四角いやつとは所謂食パンである。次郎は毎日違うパンを焼くのだ。

「今日は無いな。この細身のがバゲット、太目がバタールだ。ほれっ！」

次郎は説明しながら二人の口に焼きたてパンをちぎって放り込んだ。

「むぐむぐ……」

「あむあむっ……」

リスのように頬を膨らませて一心不乱に咀嚼する姿が愛らしい。

「「う、うまい！」」

「だろっ？バゲットはかりかりに焦げたのが最高なんだ。――さて、朝飯作るから食ってけ」

「「次郎～愛してる～」」

「……はいはい」

調子の良い欠食児童を放置して、次郎は台所に消えていくのだった。次郎の人里の住人との関わりは稀薄であれど、こうして彼を慕う人間は微々たるならがいるようだ。やはり妖しの類いであるのだけれども。

次郎は手早く身仕度し、焼き上げたパンでサンドイッチを作った。半分は三人の朝食として消え、また半分は彼の弁当に化けた。

彼は大きめの厚い布で出来た背負い鞄に荷物を詰めると、二人に別れを告げて魔法の森へと歩いていくのだった。

次郎は数日に一度、徒歩で行ける範囲にある野山に入る。それは畑では得られない山の恵みを手に入れるためである。

この季節は初夏であるから、山菜の類いは時期が悪い。そこで最近は店の常連である”胡散臭い魔法使い”の勧めもあり、魔法の森にてキノコを狩っている。

魔法の森は一年中キノコが生えている。但し、その大半は所謂毒キノコに分類され、中には爆発したり、身体に変化を及ぼしたり等とおよそキノコの範疇を越えた効果を発揮するものもある。

これらはまさに幻想郷たる由縁とも言えるが、幸い次郎はいい意味でかつての常識は捨て去っている為、特に慌てたりはしない。

胡散臭い魔法使い曰く、「色が薄めのキノコは食べれる」とのアドバイスを受けたが、残念ながら次郎はそれを信じたために一週間もの間、肌が緑色になるという快挙を成し遂げた。

以来、彼の新たな常識として、魔法使いのアドバイスは信じないと言うものが加えられた。まぁ、某人形使いや、某図書館の住人等はいい迷惑であろうが…。

何れにせよ次郎は自力での試行錯誤の末、外の世界で食べたような安全なキノコの選別は完了している。自身の犠牲を持ってであるが。

閑話休題

そんなわけで次郎は現在、新緑萌える森の木漏れ日を浴びながら歩いていた。

魔法の森は、まるで太古からそこにあったような厳かな佇まいでそこにあった。次郎が昔、図鑑で眺めたような景色がある。

その中を次郎は、気持ちよさそうに進んでいた。

今日、彼が求める獲物は、向こう側でいうエリンギに似たキノコで、歯応えのある美味なキノコだ。

それを縦に割いて細くしたものにパン粉で衣をつけて揚げたものが、現在次郎の屋台で一番人気の肴となっている。

残念な事にそのエリンギもどきは群生しておらず、次郎はあっちこっちと彷徨うようにそれを狩っていく。そんな手間も”おつ”であると感じるのが、彼の幻想郷での生活が満足のいくものであるのを示している。

そうしてキノコを狩りながら魔法の森を抜けて湖にたどり着く頃には、彼の背負い鞄はキノコでパンパンに膨らんでいた。

次郎はいつも森を抜けると、湖のほとりに腰掛け、対岸に見える場違いな紅色の館を眺めながら一服つけるのがお気に入りだった。

本日もご多分に漏れずそうしようと、やはりお気に入りの巨石の椅子を目指して歩いていたのだが、何故か今日は先客がいた。

次郎がふと立ち止まり眺めた先には、巨石の上で膝を抱える、水色の小さな妖精がいた。

「やぁ、こんにちは」

ひとまず次郎は挨拶してみる事にした。早く一服したいという本音もあるが、その妖精の佇まいに打ち拉がれた印象を受けたからである。

「……人間があたいの縄張りに何のようだ～…」

やはりなにやら覇気が感じられない。次郎の印象として、妖精とは悪戯好きで奔放な生物なはずだ。次郎は「ごめんよ」と一言断り、水色の妖精の横に腰掛けた。

「俺は次郎と言うんだ。君は名前はなんて言うんだい？」

「……あたいはチルノ。さいきょーの妖精さ…」

チルノと言う妖精は、膝を抱えて俯いたままそう言った。

次郎は「そうか」と呟き、弁当を開いてサンドイッチを頬張った。湖を吹き抜ける風が心地よい。

気が付くとチルノは、ちらちらと次郎を窺っていた。だが彼は敢えて気が付かないふりをして、自慢のサンドイッチを淡々と咀嚼していく。

「食べるか？」

「……いいの？」

「……いいさ」

次郎はチルノの顔ほどもあるサンドイッチを彼女に渡した。彼女は無言でそれを両手で抱え、小さな顎を一生懸命動かして食べた。

彼女は口いっぱいに頬張りながら、やがてポロポロと涙を流しはじめる。泣き声は必死で堪えながら。

「うまいか？」

「……まぁまぁね…っく…少しは…ひっ…おいしい……」

「そうか、嬉しいな。それは俺の手作りなんだ」

そしてまた、二人は無言でサンドイッチを頬張る作業に戻った。

「チルノは何故泣くんだ？」

「泣いてない…ぐしゅ…」

次郎はキセルに火を点け、紫煙をくゆらせた。立ち登る煙は、あっという間に湖に吸い込まれた。

「あたい、嫌われたんだ。大ちゃんも、リグルも、ミスティアも、ルーミアも、みんなあたいを嫌いになったんだ……」

ぐしぐしと鼻水を垂らしながらチルノは呟いた。

「そうか。どうしてそうなったか分かるのか？」

「……あたいが…あたいが我儘言ったから…ぐしゅ…だと…ぐえっ…思う」

次郎はキセルに葉をつめ直し、また火を点けた。

「お前は寂しいのか？」

こくこくとチルノは何度も頷き、ぼたぼたと涙が落ちた。

「なら簡単だ。魔法を使えばすぐ元通りだな」
「へっ？…まほー？」
「そうだ。さいきょーじゃなくても使える簡単な魔法だ」
次郎は初めてチルノに視線を向けた。
「知りたい！ジロー、あたい知りたい！」
「そっか、じゃあ特別に教えてやる」
チルノが次郎を見上げ、期待の籠もったような、縋るような目で見ている。
「それはな……」
「それは！？」
次郎はニヤリと笑った。
「ごめんなさい、だ」
「へ？」
「ごめんなさいと言えばいいんだ」
チルノは俯いて唇を噛んだ。

「……許してくれるかな？」
「怖いか？」
「……怖い」
「チルノはさいきょーなんだろ？」
「あたいはさいきょーさ…」
「なら、大丈夫だ」
「……頑張ってみる」

次郎は立ち上がり、帰り支度を始める。
「帰るのか？」
「ああ。またな、チルノ。頑張れよ、さいきょーの妖精」
次郎はふわりと浮き上がり、ゆっくりと進んで行く。そして森の上にさしかかる頃――
「ジロー！ありがとう！ジローはあたいの子分にしてあげる！またねジロー！バイバーイ！」
次郎はくすりと笑って森に消えた。チルノに笑顔が溢れた。

そんなある日の出来事だった。

登場人物

人里の顔役、慧音

焼鳥の名人、藤原妹紅

胡散臭い魔法使い

さいきょーの妖精チルノ

大ちゃんと言う名の妖精

リグルと言う名の蛍妖怪

ミスティアと言う名の夜雀

ルーミアと言う名の妖精

最強の泣き虫（後書き）

チルノっておませな姪っこみたいで可愛いです。

もこたんｉｎしたお

だけどまだモブだよ。

そのうちメイン昇格予定

礼儀の妙（前書き）

いったい何を書きたかったのかが謎

礼儀の妙

この幻想郷には、夜中でも笑い声が絶えない風変わりな名物屋台がある。

その名前は「喰いものや」

店主は無愛想だが、料理と酒は上等と評判だ。常連客はみんな綺麗所らしいぜ。

おっとそこなお兄さん？鼻の下伸ばすのは勝手だが慌てちゃいけねぇよ。

何しろその常連客ってえのは、どいつもこいつも怖ぇ怖ぇ妖しだってんだ。

料理食いに行って逆に喰われたら世話ぁないわな。

度胸があったら行ってみなぁ！

――東方御伽草子――

秋も深まり、薄着では歩くのが難儀な寒さの幻想郷。今年は豊穣の神様もご満悦なほど、人里は豊作の慶びに沸いていた。

人里の名物屋台の店主、次郎の畑も同様に豊作であった。根菜類が山のように収穫できた様で、普段あまり笑わない彼が畑の真ん中で微笑んでいた。

収穫されたものが料理になった姿でも思い浮かべているのかもしれない。

「ふぅ、こんなとこかね」

次郎は掘り終えた里芋とサツマイモの山を振り返り呟いた。さらに視線をずらし縁側を見れば、鶏肉の礼だと妹紅が獲ってきた丸々とした丹波栗が山盛りになっている。

そんな和な光景を眺めていた次郎は、ふと思索の海に落ちた。ある日の記憶が蘇る。

次郎が幻想郷に来る前、彼はいたって普通のサラリーマンであった。そして機械仕掛けのブリキの玩具のように、決まった動きを繰り返す毎日であった。

地方都市の普通の家庭に産まれた次郎は、一生をこんなつまらない田舎では暮らしたくないと、東京の大学へと進学した。

その大学生活の中で彼は彼女に出会った。

花のように笑う彼女に次郎は夢中になり、まるで自分が別人になったような錯覚を起こす程、世界が薔薇色に見えた。

彼と彼女は当たり前のように恋に落ち、当たり前のように口付けをかわし、そして当たり前のように体を契った。

熱病のような恋がいつしか愛にかわった。それは互いが互いを半身であると思える程に。

二人は将来を約束し、次郎が就職して数ヶ月たった頃、彼女は身籠った。

次郎は身体いっぱいに歓喜を表し、そんな次郎を見た彼女は「子供みたい」と揶揄したが、瞳から溢れる涙はやはり歓喜に彩られていた。

その日の夜、二人は裸で抱き合いながら、改めて幸せを噛み締めあった。そして、未来の予定を語り合う。結婚式はここであげよう、ハネムーンは海外がいい？引っ越しもしよう、あの店で見たソファを買おう。

しかし、それは何一つ叶わなかった。それは彼女の定期検診の時に見つかった、彼女かまだ見ぬ子供かの選択を迫られる病巣のせいだった。

二人で血を吐くほど悩み相談した。だが、最後は彼女に半ば押し切られる形で子供を選択した。

それ以降、次郎は毎晩彼女の頭上に命が燃え尽きる時間が見え、最後は０になり絶望する夢を見るようになった。

次郎にとって彼女は全てだった。情けないくらいに愛していた。

頼む神様、いるなら助けてくれ！俺の命をくれてやる！だからあいつと子供を助けてくれ！次郎は毎日そうやって見たこともない神に縋った。

そんな彼の祈りも虚しく、臨月も近いある日、残酷な神は彼女も子供も奪っていったのだ。

急変だった。

あまりに呆気なく、母子は天に還ってしまった。

次郎は以降、酒で身体を痛め付け、毎晩狂ったように自堕落に過ごした。

死ぬ勇気すら持てず、ただ自分を騙した。酒に溺れ、女に溺れ、夜毎彼女の幻影にすがりついた。

そんな生ける屍となった次郎は、気が付くと二十代が終わる間近になっていた。

空虚に支配された次郎が、彼女の月命日に郊外の集合墓地に向かう道すがら――

隙間に落ちたのだ。

「――でも、どうやら俺は幸せらしいよ。……子、俺、こんな訳の分からない土地だけど、ちゃんと生きてるよ。お前と子供の分ま

で長生きするからな」

次郎はそう呟いた。縁側から眺める、幻想郷の素晴らしい山並みを見ながら。

こんな気分になるのもきっと秋のせいだなと、次郎は自嘲しつつ煙管に火をつけるのだった。

「……誰だい？」

さりげなく目尻の涙を拭きながら次郎は不粋な客に呟いた。

「……次郎様、我が主の命にて、貴方をお迎えに参りました」

次郎が声がする方を見ると、そこにはこの田園風景に似つかわしくない使用人服姿――所謂メイド服の娘が立っていた。その口調は丁寧ではあるが、どことなく尊大な印象であった。

次郎は軽く首を振りながら溜息をついた。

「……まずお前は誰だ。そして主の名は？名乗りもしない得体の知れないやつについていく馬鹿はいない」

「失礼しました。私は十六夜咲夜と申します。以後、お見知りおきを。そして我が主の名はレミリア・スカーレット、紅魔館が主にして夜の盟主ですわ」

「……俺は次郎、しがない屋台の店主だ。以後、お見知りおかんでもいい」

次郎はぶっきらぼうに言うと、咲夜など居ないかのように煙管に葉を詰めた。

「……次郎様、返事は？」

「返事？いったい何の？……ああ、お前さんの主とやらが呼んでいるって話か？こう見えて忙しいんだ。また出直してくれ」

「そうですか、では仕方ありません……」

次郎の拒否に対し咲夜の周りの温度が下がった。否定など許さない――そういう事なのだろう。

彼が一瞬まばたきした間に、何をしたのか咲夜は消えていた。いや、正確には……

「……返事は？」

次郎の首筋に銀色の刃が当っていた。どういうからくりか、咲夜が次郎の後に回っていた。そして彼の耳に唇を寄せ、咲夜が囁いた。

「ははは、こちらの都合はどうでもいいと。なるほどな、紅魔館の主とやらはどうやらただの下衆らしいな？」

次郎は首筋のナイフなど気にも留めずに言う。彼は穏やかな口調ながら、その心中は怒っていた。穏やかに亡くなった妻との思い出に浸っていた時間を邪魔したのだ。

「……黙れ」

咲夜のどすの効いた呟きと共にナイフが次郎の首筋き赤い線を引いた。

「……次はかっ切る。返事は？」

「……後悔するなよ」

次郎が呟いた。

次の瞬間、咲夜のナイフが根元から折れた。彼女があり得ない光景に一瞬呆然とした。その間に咲夜は庭に転がっていた。次郎が咲夜の髪の毛を掴んで投げたのだ。彼の指にはごっそりと銀色の髪が掴まれたままだった。

咲夜は混乱していた。何が起きたのか？次郎は一切動いては居なかった。

地面に這いつくばったまま咲夜は考えた。だが、その後頭部を容赦なく次郎の足が踏み抜いた。彼女は意識を失った。

次郎が屋台を出店するまでに、実は二年の間準備していた。八雲紫の隙間にて幻想郷に入ってから、彼はしばらく何もしていなかったのだ。

慧音から空き家を世話してもらい、手荷物の中からいくつか道具屋で外の物を売り払い、決して安くは無い金を得た。

彼はそのまま自堕落な生活を続けていた。惰性で生きていた次郎は、幻想郷にきたとて無気力だった。心に開いてしまった穴は、容易に

は塞がらない。

次郎は酔い潰れて縁側に倒れながら、答えの出ない答えを探していた。そしてある時、彼は山に消えた。

人里では奇妙な噂が流れていた。近くの山で惨殺された妖しの死体が大量に見つかったと言う。その死体は、小間切れにされていたと言う。

あまりの凄惨な姿に、山に入った里の人間は嘔吐感に苛まれたと言う。サイコロ状に刻まれた肉塊を見て。人間の天敵である妖しが駆除された喜びより、この狂気じみた光景を里の人間は嫌悪した。

そう、次郎の仕業であった。張り合いの無い毎日、もう戻らない日々。幻想入りした事で尚更浮き彫りになった孤独。それを身に染みて改めて理解したのだ。

最初は妖しに喰われてしまえと山に入った。大木によしかかり、静かに捕食者が来るのを待った。

やがて現われたのは巨大な狼のような妖獣だった。それは舌を垂らし、牙を剥いた。食事にありつける歓喜に身を震わせ、それは野生を剥き出しにして次郎に飛び掛かった。

次郎は不思議な光景を見た。踊りかかるそれが、真っ赤な口腔内を露にして自分に近寄っている。それを彼は見ていた。

コマ送りで――

死を意識したせいだからか、所謂走馬灯と言う現象なのか、とにかくそれの鋭い牙が次郎の柔らかい首筋に食い込む瞬間――それを彼は感じていた。

肌に牙が触れ、沈み、今まさに次郎の生命を刈り取るその刹那……

何かが次郎の中で爆発した。

彼から獣のような咆哮が生まれ、そして何かが降ってきた。

それは血であり肉だった。細かく小間切れになったそれの肉塊だった。

赤黒く染まりながら彼は叫んでいた。死にたくない！と。この時に次郎と言う”存在”が幻想に産声を上げたと言える。

以来、彼は一年近く森で生きた。獣と言う獣を殺し、幻想郷で生きる術を手に入れたのだ。つまり、自分自身の能力を効率よく使う方法をだ。

幻想郷で生きるとは弱肉強食の理を受け入れると言う事だ。次郎は受け入れたのだ。そして、能力を全て理解した彼は山を降りた。

そして幻想郷に”生きる”一人の存在として、次郎はここにいた。

何人も自分の尊厳を犯すことは許さないと言う覚悟を胸に抱えて。

だらしなく横たわる咲夜を見下ろす彼の目は冷たかった。

ふと咲夜は目を覚ます。辺りは既に暗く、見えない。彼女は鈍く痛む頭痛を振り払い立った。

「お目覚めかい？メイドさん。早く帰ってくれないと仕事に行けないんだが」

咲夜が声のするほうを見ると、縁側には次郎が座っている。但し纏う空気は冷たいままだ。

「……あなた、一体何をしたの！？」

はだけた衣服を直しながら咲夜は言う。若干発する言葉の語尾が震えているのは虚勢だからなのだろう。事実、次郎の得体の知れない不気味さに、彼女の冷静さは消えていた。

「それをお前さんに言う必要性はないな。後はなんだったか……うーん、弾幕とか言うお遊びだったか？それに付き合う気もないな」

次郎は暗がりから咲夜を見据え、にやりと笑う。彼女は息を飲んだ。下手な事をすればこの男は自分を殺す。そう感じた。

「ずっと考えてたんだ。お前さんの力は何だってさ。隙をついてお前さんを投げ飛ばした時を考えたら――殴りあいは並以下だろうさ。ならお前さんの動きは――」

咲夜は唾を飲み込む。肌着を濡らす汗が忌々しい。この男は危険過ぎる。

「時間を止める…かな？まぁ、どうでもいい。無礼な人間にはやり方ってものがある」

咲夜は驚愕する。能力を言い当てられたからだ。種の割れた手品は滑稽だ。完璧で瀟洒と言われたメイドは、今や丸裸のただの女となった。

一歩、また一歩と次郎が咲夜に近づいてくる。咲夜はじりじり後退り、敷石につまづき尻餅をついた。

「やっ…やめっ……たすけっ……」

咲夜に翳される次郎の手、彼女は思わず目を閉じた。抗う気も失せるほどこの場は次郎が支配してた。

「なんてな？」

「へっ？」

にやりと笑った次郎が、咲夜の頭をポンと叩いた。咲夜は鳩が豆鉄砲を食らったような顔で惚けている。

「なんでお前さんの主が俺を呼んだかは知らない。ただな、無礼はいけない。少なくとも理由を聞けば俺だって考える。――と言う事でお仕置きは終了って訳だ。んっ？」

けらけらと愉快そうに笑う次郎に、拗ねたような顔で咲夜は不貞腐れた。

「貴方は「次郎」……次郎さんは酷いです。主より怖かったですわ」
「ま、そういうな。取り敢えずはすっきりしたからいい。んじゃ俺は屋台があるから出掛けるわ。咲夜…だっけな」
そういって腰を上げた次郎に追いすがる咲夜。
「あ、あのっ……」
「ん。どっちにしろ今日は無理だが、明日の晩でも出向くから迎えに来てくれ」
「はい、必ずお迎えにあがりますわ。それと……今日は大変ご迷惑をおかけしました」
咲夜は素晴らしい姿勢で頭を下げた。そこにいたのは完璧で瀟洒なメイドそのものだった。次郎は手をひらひらしながら庭を出ていこうとしていた――が。

「そうだ。お前さんの主に今日掘った里芋、持ってってくれ。今日行けなかった詫びだ」
咲夜は頭を下げたまま、「はい」と答えた。
今宵の月も鮮やかだった。幻想郷の秋は深まる。

登場人物

屋台の店主、次郎

栗を持ってきた妹紅

完璧で瀟洒なメイド、十六夜咲夜

咲夜の主

礼儀の妙（後書き）

咲夜さん登場。別に嫌いな訳じゃ無いです。むしろ好き。ただ、好きな子は虐めたくなるだけです。

つか東方で嫌いなのってムカつく二次設定な八雲紫くらいです。うちの紫は可愛く書きます（笑）

今後は各陣営とまったり絡ますつもりですが、今回紅魔館まで行けなかったのが残念です。

可愛いおぜうを書きたかったのに。

うー☆的なおぜうは書かないけどネ。やはりおぜうにはカリスマ（笑）は必要です。

では次もまったり頑張ります。

夜に生きる者（前書き）

おぜうさま

夜に生きる者

「なぁ次郎、お前は何考えているんだ？もう少し里の人間と交わったらどうだ？今のままじゃ皆がお前を気味悪がっている……」

手酌で日本酒をやりながら、里の顔役である上白沢慧音が諭すように言う。

「ふむ……慧音、お前さんは俺をどう思ってるんだい？」

相変わらず面倒臭そうに話す次郎。彼もまた手酌でやりながら、自慢のキセルでぷかりと煙を吐く。

「いやっ、私はその……好きだぞ？次郎が……」

何を血迷ったか慧音は頬を真っ赤に染めた。

「だってよ？妹紅」

「へっ？」

気が付くと慧音の後ろにはいつの間にか妹紅が立っていた。その表情はにやにやと意地の悪い笑みを浮かべていた。

「……慧音、私との事は遊びだったんだな。不毛な女より、やはり男のぬくもりが堪らないんだね？どうしよう次郎？遊ばれちゃったよ私……」

ぷるぷると肩を震わせ顔を伏せる妹紅。

「慧音、お前さん教育者のくせに両刀使いか……この外道がぁ……」
追い討ちをかける次郎。
「いや、そんな……ちがっ…私はそんなふしだらな真似はっ……妹紅！私は軽い気持ちでお前のそばに等……なんで二人とも笑ってる！？」
次郎と妹紅は声にならない笑い声で震えていた。いや、むしろ痙攣していた。
「いやぁ慧音よ。お前さんはからかい甲斐のあるヤツだな？くくくっ」
「慧音ぇお腹痛いっお腹いた～い…くふっ…」
涙すら流しながら笑い転げる二人だった。
「貴様ら……乙女の純情を弄びおって……許さん」
今の慧音はまさに阿修羅。背後に怒りのオーラを纏っている。
「ちょっ…慧音っ…冗談だって、ね？」
「そ、そうだぞ？ちょっとしたお茶目だ。ほら、そんな顔したらお前さんの可愛い顔が台無――」
「黙れお前らぁ！指導ぉ！指導ぉ！」

激しい炸裂音と共に、慧音の頭突きが二人を襲う。

「洒落に…なら…ん…」

「不死身でも……痛いものは…痛…い……」

無様に崩れ落ちる二人だった。慧音はどっかと座り込み、深酒を決め込んだ。幻想郷の夜はこれからだ。

――東方御伽草子――

騒がしい客で溢れる次郎の屋台は、今夜も繁盛していた。相変わらず妖し相手の商売であるが、この表情豊かな人外達が次郎は好きだった。

「鈴仙、今日は師匠のお使い帰りか？」

先日の一件から、永遠亭の住人である月の兎、鈴仙・優曇華院・イナバは「喰いものや」の常連になった。

「お使いって子供じゃないんですから！お仕事の帰りです！」

「そうかそうか。ほら、甘い卵焼きだぞ」

「わっ、甘〜い、美味しいです次郎さん！」

ぴーんと優曇華の耳が伸びる。余程気に入ったらしい。

「……子供じゃねぇか」

「むぅ……いいんです！卵焼きに罪は無いんです！」

兎の鈴仙は頬を膨らませながらも卵焼きを頬張る。毎度毎度次郎にからかわれながらもやってくるのは、存外このやり取りを気に入っているのだろう。

「すねるな。ほれ、お茶」

「……ありがとです。ふぅ、ふぅ、あちち…」

鈴仙は下戸だったようだ。

「ジロ！この樽でいいの？」

「お、ご苦労さん。それで大丈夫だ。裏に賄い用意してあるから喰いな」

「ありがとジロ！間違わず持ってこれるあたいったら最強ね！」

「おうおう最強だぁ。とっとと飯食ってこい」

「ふふ～ん」

そういって突然現れた青く小さな妖精は消えていった。

「あれっ、次郎さん今の小さいのは妖精ですか？」

きょとんとした鈴仙が驚いたように言う。

「……ああ、あれは一応従業員なんだ。チルノって言ってな、妙に懐かれちまったんだ。毎日のように自宅に突撃してくるから、上手いこと言い含めて従業員にしたってわけだ」

なんだか疲れたように次郎は語る。人に言えないようなエピソードがあるらしい。

「こういってはなんですが、計算とか任せたら…」

「……はぁ…言うな」

「が、頑張って下さい！次郎さん！」

憐れんだように鈴仙は次郎に声援を贈った。妖精があれなのは幻想郷の常識らしい。

「ありがと鈴仙、そういってくれるのはお前さんだけだ……よし、その耳で癒しておくれ…」

「へっ？、いやっ、じじじ次郎さん！？そんな破廉恥なっふわわわわわ…」

有無を言わさず鈴仙の耳をいじり倒す次郎に、真っ赤になりながらもどこか諦めの表情で鈴仙は触られている。一番奥の席に座っていた慧音と妹紅がそれを生暖かく見ている。慧音が若干悔しそうなのが謎であった。今宵も食いもんやは繁盛している。その時――

「次郎様、お迎えに参りました」

客からは陰になる柱の横に、完璧で瀟洒の二つ名に違わない紅魔館のメイド長、十六夜咲夜が完璧な礼で次郎を見ていた。彼は小さく頷くと、手早く土産替わりの惣菜を包み、前掛けを外した。そして、裏でもぐもぐと賄いをパクつく従業員を一瞥し、深いため息をついた。

「……慧音、妹紅、少し出てくるから店番頼めないか？今日の飲み代タダにしてやるから」

「「やるっ！」」

次郎の言葉が終わらないうちに二人は満面の笑みで答えた。現金な物である。

「チルノ、出かけてくるから飯食ったら今日は上がっていいからな」

頬をぱんぱんに膨らませているチルノは声を出す事は叶わず、必死にこくこく頷いている。

「じゃ行こうか咲夜」

そうして二人は、静かに闇に溶けていくのだった。

次郎は一度自宅に戻ると咲夜を表に待たせた。暫くして次郎が現れると、彼女は控え目に嘆息した。それは、次郎は黒いタキシードに花束を抱えていたからだ。そして次郎は土産をお重につめ直し、鮮やかな紅色の風呂敷に包んだ物を咲夜に持たせると、彼女に行くぞと促した。但し花束だけは大事そうに抱えたままだ。

「……次郎様、どうしてお召しかえを？」

咲夜の問いかけはある意味当然と言える。彼女が見た次郎と言う人物は、顔立ちは端正であるが、寡黙で融通の利かない御し辛いと言う印象だからだ。その上腕っぷしは咲夜を軽く捻る程である。彼女がいつもの如く、力技で言う事効かせようとした結果は、彼女自身が自信を消失する程の手並みであった。ならば、客人の礼を欠いた咲夜とその主であるレミリアに対して良い印象を持たないと思うのが自然だ。

「ん？お前さんもおかしな事言うね？せっかく招待されたんだ、汚い格好で行けないだろ？」

何を馬鹿な質問をと言いたげな表情で話す次郎だった。

「で、ですが、昨日私は次郎様にご無礼を働きましたし……」

「はぁ…お前さんも面倒な性格してるねぇ。確かにお前さんは無礼だった。けどまぁ、そいつはきちんと落とし前ついただろ？ならもう手打ちでいいだろうさ。少なくとも俺は、紅魔館とやらに行くのを楽しみにしてるんだぜ？」

そういうと次郎は片目をつぶってみせた。

「分かりました。でも、やはり昨日は申し訳ありませんでした。これ以上は申しませんが、今一度言わせて頂きました。それと、あなたにウィンクは似合いませんわ？」

次郎の言葉に一瞬笑顔を見せた咲夜だったが、すぐに表情を消すと皮肉で返してみせた。どうやらわだかまりは消えたようだ。二人は連れ立って闇夜の空に浮かんで消えていった。

夜空を並んで飛んでいく二人に、霧に噎ぶ湖の畔に立つ洋館――紅魔館が見えてきた。次郎はモノトーンの景色の中で唯一自己主張をしている紅き洋館に、思わずほう、と嘆息した。それを横目に咲夜は誇らしそうに胸を張った。控え目に、であるが。

次郎がここまでの道すがら、咲夜に説明された紅魔館とは、吸血鬼であるスカーレット姉妹と、姉で館の主であるレミリアの親友、パチュリー・ノーレッジ、門番の紅美鈴、そしてメイド長である十六夜咲夜が住人として住んでいると言う。

紅魔館には地上の居住部分と、とある理由で部外者は近寄れない地下部分があり、そしてパチュリー・ノーレッジが書斎のように住まう大図書館と言うエリアがあると言う。

これらの説明を咲夜が次郎にしたのは、客人である彼の安全の為だという。というのは紅魔館に住まう住人全て”少々”気難しい者達であり、客人と言えど普段のペースを変えない住人の気を損ねると無事に済まない懸念があるからだと言うのだ。

普通に考えればおかしな話なのであるが、それが通るのが幻想郷と言う事なのだろう。因みに咲夜が紅魔館のメイド長として、名実共に全てを取り仕切っていると言う件りでは、無表情な彼女には珍しく得意気な表情で語って見せた。

紅魔館の門前に降り立った次郎は、正面にある立派な時計塔を一瞥し、視線を下ろした。そこには館を取り囲む鉄柵によしかかり、腕組みしながら立っている美麗なる赤毛の女性が居た。

咲夜によると彼女が門番である紅美鈴であると言う。彼女は素晴らしいスタイルの持ち主で、顔立ちも秀麗である。鶯色のロングドレスのような出で立ち、腰まで切れ込むスリットは戦闘の際の機能性の為だろう。頭にぽんと乗せられた帽子が、彼女の中の可愛さを引き出しているようだ。

「……行きますよ」

微動だにしない美鈴をじっと眺めていた次郎に、咲夜の何故か不機嫌そうな声が飛ぶ。

「……ああ」

次郎は頷いて正面玄関へと歩を進める。ふと後方から「さ、咲夜さん、ねね寝てはおりませんひぎゃあ！！！？」等と言う悲鳴が聞こえた気がした次郎だったが、敢えて気にしない事にするのだった。理由はとばっちりは嫌だからだ。

そうして二人は館に入り、外観からは想像もつかないほどの長い廊下を進んでいく。やがてそれも終点となり、重厚な木目の扉の前に次郎は立った。咲夜は次郎を制し扉に声をかける。

「お嬢様、お客様をお連れ致しました」

「……お入りなさい」

咲夜の声に、凛とした館の主であろう女性の声が響いた。

「次郎様、中へどうぞ。主がお待ちです」

咲夜が扉を開き、腰を曲げる。次郎は広間を進み、正面の玉座に座る少女の前に立った。

アンティーク調の木製の玉座に座る紅魔館の主、レミリア・スカーレットは美しかった。ブルーサファイアの髪、血の色のような深紅の瞳、桃色の薄い唇から見え隠れする鋭利な犬歯。少女のような体格とは言え、その身からあふれ出る覇気は、流石に館を束ねる者の威厳に充ちている。そのアンバランスさが逆に彼女の妖艶さを引き立てている。

「よく来たわね、歓迎するわ？人間。私がこの館の主、レミリア・スカーレットよ」

レミリアは次郎の目をじっと覗き込みながら淡々と言う。次郎はそれを真正面から見返し、意味ありげに微笑すると軽く会釈した。

「ご招待頂きまことに感謝します。ご所望頂いた人間でございます。こちらは庭に咲いた名も無き花です。それではさようなら、吸血鬼

のお嬢さん」

次郎は張り付くような笑みを絶やさぬまま、花束をレミリアに渡し、さり気なく鼻で笑うと踵を返し出口を目指す。戸口に控えていた咲夜が青ざめた表情で次郎を見ている。

レミリアは非常に困惑していた。

彼女は人里で一際有名な人間、次郎に興味を抱いていた。それはこの幻想郷と言う異質な空間で、殊更異質な妖し相手に堂々と商売をする人間を見てみたいと願ったからだ。

彼女は孤独だ。パチュリーと言う親友はいるが、それ以外に彼女と対等に話せる友人などいない。

吸血鬼と言う種族は長命――いや、その身は既に生命活動を維持していない以上、魂と肉体が朽ち果てない限り不死である。だが、永遠を生きるとは孤独であると言う事と同義である。

見知った者は何れ死に別れる。それ故に孤独なのである。彼女は齢五百才を越えた辺りだが、既にいくつもの別れを経験している。

だからこそ、彼女から見て刹那の年月しか生きれない人間にある種の羨望を感じるのだ。短い人生ながら、濃密な生涯を必死に生きる。それは長命種には出来ない事なのだ。悠久を生きるために希薄になる生き方。それは仕方ない事なのだ。だからこそレミリアはそんな人間の話を聞きたいと願うのだ。

だがレミリアは誇り高き吸血鬼であり、この紅魔館の当主である。まして吸血鬼にとって人間とは食材である。持ち前のプライドの高

さと、捕食者が非捕食者の人生に興味を持つと言うジレンマ、それがレミリアの態度に露骨に出てしまったのである。

彼女は次郎の瞳を覗き込み、吸血鬼の特性である”魅了”の魔法を使い、彼を傀儡にしようとした。だが、彼には一切の効果も現れなかった。魅了の魔法はいかに対象の精神力が強くとも、魔法に耐性かなければ抗う事は出来ない。

しかし次郎には動揺する素振りすら見せなかった。故にレミリアは困惑する。

「ま、待ちなさい！無礼は許さないわ、人間！」

思わず飛び出したレミリアの罵声、それは本心と言うよりは狼狽からでたものかもしれない。しかし戸口で足を止め、振り返った次郎の顔を見たとき彼女は後悔した。何故なら彼の顔になんの表情も浮かんではいなかったからだ。

レミリアの心を支配したのは恐怖。見知らぬ者を見たときに浮かぶ潜在的な恐怖だった。吸血鬼を前に平然と我を通す人間を彼女は知らない。

「吸血鬼のお嬢さん、俺は見せ物じゃあ無いんだ。俺が招待に応じたのは、お嬢さんの面子を潰したと感じたからだ。だがそれは俺がここに来たことで義理は果たしたはずだ。お前さんは俺を人間と呼んだ。だから俺はお前さんを吸血鬼と呼ぶ。礼を尽くせない人間関係に発展は無い。だから俺は帰るだけだ。気に入らなければ殺せばいい。だが俺は死んでもお前さんには屈伏しない」

次郎はつかつかと玉座に歩み寄り、レミリアの耳の横に荒っぽく手

を突き、接吻せんばかりに顔を突き合わせたまま言い放った。

レミリアは人間ごときに圧倒された屈辱感と同時に、この物怖じせずに自分に道徳を叩きつけるこの偉そうな人間に好意を抱くという相反する感覚に混乱をしていた。目が泳ぐ。だが目は離せない。これは一体なんなのか？レミリアは恐慌に陥った。

咲夜ははらはらと経過を見ながらも、何故か次郎を止めなかった。いや、止めてはいけない気がしていた。自らの名付け親にして愛しい主、その人の為に敢えて静観するという選択をしたのだ。

「……さい……」

鼻先が触れ合う距離感の中、レミリアはじっと次郎を睨みながら何かを呟いた。

「……なんだって？」

首をかしげながら次郎がさらにレミリアを睨む。

「……るさい…」

レミリアの瞳は最大に開かれ、やがて何かが盛り上がり、そして零れる。

「……るさい！うるさい！うるさい！うるさい！何よ人間のくせに生意気よっ！何さ！と、と、友達になりたいだけなのに怖い顔してっ！何よ！何よ！」

ぼたぼたと涙を零しながらレミリアは絶叫する。次郎は一瞬たじろ

いだ表情をしたが、すぐに無表情になると彼女に話しはじめた。
「咲夜に持たせた芋は食ったか？」
「……？？…美味しかったわ？」
「じゃ感想を言ってくれなきゃ寂しいだろうが」
急に穏やかな口調になった次郎に困惑するレミリア
「今日は色々調理したのを持ってきたんだ。楽しみか？」
「う、うん、楽しみ…かもしれない」
二人の背後で咲夜は主の愛らしさに必死で笑いを堪えている。
「この花は喜んでもらえたかい？」
「え、ええ、素敵よ」
「俺の名前は次郎」
「私の名前はレミリア」
「素敵な名前だな。レミリアに似合っている」
「あ、ありがとう…」
咲夜は笑いを堪えているのが困難になり、自らの能力で刻を止めると、声を上げて笑い転げた。完全に手玉に取られおろおろする主。

あんなレミリアを見たのは初めてなのだ。咲夜は次郎に自由にさせて正解であったと思った。あの尊大で自尊心だけが高い、協調性の欠如した主の成長の為に。そして刻は動き出す。

「何か言うことあるか？レミリアお嬢様」

次郎が初めて自分の名を呼んだ！レミリアは許されたのかもしれないと安堵する。今や自尊心はどこかに消えていた。

「ご、ごめんなさい次郎……ただ友達になりたかったの……でもやり方がわからなくて、ごめんなさい次郎、ごめんなさい」

つい、と次郎の親指がレミリアの涙を拭いた。体温がほとんど無い彼女の涙は冷たい。

「じゃ、仲直りだな。俺も恐がらせてごめんなさい。レミリア、今度店に来てほしい。”友達”だからな、次は俺が招待するよ」

すっ、とレミリアから体を離し、次郎は彼女の前に胡坐をかいて座った。背の高い次郎が、彼女の目線に合わせたのだ。

「ありがとう次郎。招待は喜んで受けるわ。だって……友達だもの」

そういってレミリアは伏し目がちに笑った。心からの笑顔に次郎も笑った。

「じゃ、また遊びにくるな、レミリア」

軽く手を振り腰を上げる次郎。

「ええ、必ずまた来てね次郎。お店も必ず行くから」

そうして二人は晴れて友人となり、この不思議な夜会は幕を閉じたのだった。

玄関で咲夜が感謝を示し、そんな彼女に「お前も友人だろうが？」との次郎の返しに酷く狼狽したのはまた別の話である。

次郎は頭に何故かナイフが刺さった門番を一瞥し、闇の中に消えていった。

屋台に戻った次郎は絶句した。

「なぁ、これはどういう事だ……」

呟いた次郎に答えるものは誰もいない。何故なら店を任せた二人とチルノ、胡散臭い魔法使いにろくでなし巫女、角を生やした鬼の幼女が意識を無くして倒れているからだ。

次郎は深いため息をつき、改めて倒れ伏した馬鹿野郎共を見やると更に深いため息をついたのだった。

次郎は全てからになった酒樽に座り、こいつらをどうやって痛め付けるか思案するのだった。

登場人物

紅魔館の当主、レミリア・スカーレット

完全で瀟洒なメイド、十六夜咲夜

レミリアの妹

紅魔館大図書館の住人、パチュリー・ノーレッジ

紅魔館の門番、紅美鈴

人里の顔役、上白沢慧音

慧音の親友、藤原妹紅

胡散臭い魔法使い

霊夢と言う名のろくでなし巫女

喰いものやの従業員、氷精のチルノ

角を生やした鬼の幼女

夜に生きる者（後書き）

裏設定として、次郎はこの幻想郷で生きてくには充分過ぎる能力を有しています（詳しくは前話）

ですが彼は戦闘も弾幕にも関わりたくない普通の人間です。が、自衛のためには行使することを躊躇しません。

前回は咲夜を圧倒し、今回はおぜうさまを圧倒しました。

次郎の能力は「付けたり離したりを操る程度の能力」です。これは解釈次第ではいかようにも幅が広がる汎用性溢れる能力です。

咲夜のナイフを切り、レミリアには魅了の魔法の効果を切って見せた。

レミリアが本気で殺しにかかれば次郎も危なかったでしょうが、礼を重んじる次郎の気迫に場は支配され、おぜうさまは自分を見失いました。

ま、そんな感じです。

次郎は異変には関わりません。それは博麗の巫女の仕事だからです。次郎は酒場の親父として巫女からその話を聞くことはあれど、関わりはしません。能力があれど酒場の親父に過ぎないからです。

さてこの駄文ですが、興味がある方は感想を頂けると嬉しいです。
あと、自分の嫁出してとかの要望も受け付けます。

では

ナナツボシ

風邪っぴきとは心細きもの

何やら外が騒がしい。昨夜も相変わらず寝たのは朝方だ。雨戸から射し込む朝陽の加減を見ると、どうやら二時間も眠れていないようだ。

昨日は山ほど焼いたから、今日はパンを焼く事も無いし。畑は白菜を植えおわった。つまり、寝坊しても問題無いのだ。だから現在何者かがしつこく叩くノックは無視しよう。そうだ俺は何も悪くない。それでは皆様さようなら、お休みなさい……。

「起きろ次郎っ！！！」

うるさいな、俺はまだ眠いんだ。ほっといてくれ。

「起きろってば！」

しつこいな。誰だよ馬鹿野郎。俺は夜中まで働いてた労働者なんだよ。勘弁してくださいよこの野郎。そうだ、こいつも寝かせてしまえばいいのだ。所謂共犯者に仕立ててしまえばいいのだ。えいっ……。

「ちょっ、次郎、やめっ、何するっはぁう、朝から破廉恥ぅぁぁ……」

むむっ？何やら柔らかくいい匂いだな？むっ？むむっ？凄まじく柔

らかいな。これはいい抱き枕だ。むしろ顔を埋めたい、いや埋めよう……。

「ひゃうん！やっ、じろ、やめっ、だめぇぇ！助けてもこーーーーっ！！！！！」

なんだよ五月蝿いな。俺はこの素晴らしく柔らかい枕は離さないぞ。断固拒否だ。む、また誰か入ってきやがった。だが俺は意地でも起きないぞ！

「どうした慧音？って次郎何やってんだ！何て羨まし…ちがっ…慧音変われ…じゃなくて、起きろっ！」

「ギャアアアアア！」

ギャアアアアア！

「私まで燃やすな妹紅！」

殺す気か妹紅！起こすのに妖術使うな！だが、悪いがこの枕は離さないからな！絶対に！

「……次郎、よく見ろ…その枕は何処にある……」

何処って慧音……枕は……むっ？胸ぇぇ！？

「そうだ、私の胸だ。よくも好き放題揉みしだいてくれたな……。妹紅は自分の胸見ないっ」

俺が慧音の胸を揉む？

「そうだ。妹紅、いくら見てもどうにもならん」

と言うことは？

「そうだ」

ちょっとしたお茶目じゃないか。ははは

「ははははははは

で済むかぁ！！！天誅ぅぅぅっ！！！！！」

そうして俺は慧音の頭突きで、物理的に二度寝へと移行したんだ。

――東方御伽草子――

「お前ってやつは本当にどうしようもない奴だ。いくら寝呆けていたとは言えだ、曲がりなりにも乙女のむ、む、胸を揉みしだくなんて常識の欠片も無いぞ？
私のこの豊満な胸に興味を持つなとは言わない。だがな？親しき仲にも礼儀ありと言うじゃないか？ならば、私とお前の仲だとて、やはり段階を踏むべきなんだ。分かるだろう？男女の手順とはこうあるべきと言う段階の事だ。そ、その、わわ、わたっ、私を好きだ等の告白をだな、経てから閨を共にすべきなんだ。そうとなれば私も鬼ではない。むしろ吝かでも無いと言うかそのぅ……。だぁ～！！
つまり、いきなり不埒な真似はいけないと言う事だ！分かったな？次郎！！」

現在、次郎の自宅の居間では、ぼろぼろに焼け焦げた寝間着姿の次郎が巨大なたんこぶを拵えて正座していた。そしてその前に慧音が座り、既に小一時間は説教をしている。妹紅はいい加減飽きてしまったのか、勝手に茶箪笥を開けて茶菓子を食べていた。

「なぁ、慧音。俺は今、お前の胸を寝呆けて揉んだ件で怒られているんだよな？あれ、間違ってるか？」

ぐったりとした顔の次郎は、かなり面倒臭そうに言った。

「そうだっ！お前の破廉恥な所業を咎めてるんだ」

何やら偉そうに頷きながら慧音は言う。

「と言う事はだ、お前さんの話を纏めると……いきなり揉むのはいけない。だが、手順を踏めば問題ない。この場合、俺が慧音を好きと言う意思表示をしたなら問題は発生しない。そう聞こえたぞ。なら言おう、俺はお前が嫌いじゃないし、むしろ好きだ。だから好きなだけ揉ませてくれ」

次郎は真顔で言い放つ。

「ななななっ！！何を言うのだお前はっ！！すすすっ好きとか言うな！ははっ恥ずかしいじゃないかっ！！！」

瞬間湯沸器のように一瞬で赤面した慧音が慌てふためき後ずさる。

「なぁ妹紅、俺、変な事言ったかなぁ？」

「ん～？別に変じゃ無いでしょ？慧音の説教とやらのままだったぞ。と言うか次郎さん、私はどうだ？髪は白いが中々の器量よしだと思うけど」

話を振られた妹紅は、にやにやしながら次郎にしなだれかかった。

「確かに妹紅は美人だな。そういう観点で考えたら、なるほど、吝かではないな」

次郎は腕組みしながらうむうむと頷く。

「妹紅……私に喧嘩を売っているようだな」

「慧音、どさくさ紛れに抜け駆けしたのは誰だ」

何やら次郎を挟んで不穏な空気が辺りを包んだ。

「表へ出ろ！妹紅」

「後悔するなよ慧音」

不敵な笑みを浮かべた二人は、油断無く睨み合いながら外へと消えるのだった。

「……で、一体何しに来たんだよお前ら」

次郎の呟きが虚しく響くだけだった。

ずずず……、静かな居間に茶を啜る次郎がいた。寝起きの濃い緑茶は目覚めを豊かにすると彼は考えている。ただ、外に生きていた時は根っからのコーヒー党だった次郎は、幻想郷に豆自体中々流通しないのが不満と考えていた。

「いっそ八雲にお願いしてみるかねぇ……」

栓のない呟きを溢し、苦笑いをする次郎であった。

「呼んだかしら？次郎様？うふふ…」

気が付くと次郎の背中に寄りかかる八雲紫がいた。

「お前さん、驚かすんじゃないよ。ったく、今朝はろくな事がなおうふっ、八雲の、何か当ってるぞ」

「あててるの。やぁね、次郎様ったら野暮はいいっこなしですよ」

「……阿呆が」

朝っぱらからそんな艶っぽい空気を醸し出していると――がらりと居間に通じる障子が開き……。

「ぐはっ……次郎さん…私が勝ったぞ……」

さらに

「ぶほっ……口惜しや……次郎…私は…諦めな…がくっ……」

血塗れの妹紅と慧音が這うように飛び込んできた。

「次郎さん、私に、勝利のご褒美を……」

吐血しながら次郎に手を伸ばす妹紅。血の涙を流して悔しがる慧音。

そして渦中の次郎は……。

「血塗れの人はちょっと……ごめんなさい！」

「「がくっ……」」

二人は意識を失ったのだった。

「次郎様、これは一体なんなのかしら？」

余りの惨劇に呆れ顔の八雲紫が言う。

「いや、なんかしら用があったらしく、さっき叩き起こされたんだ。そして気が付いたら二人で喧嘩をおっぱじめたって訳だ」

「で、用って何かしら？」

「さぁ……」

首をかしげる次郎と八雲紫であった。

「そういや八雲の。ときにコーヒーは手にはいらんかな？最悪苗でも構わないが、とにかくコーヒーが飲みたいんだ」

「そうねぇ、人里の道具屋で極極稀に見かけるけど、幻想郷では栽培してないわ。う～ん、コーヒー位なら何とかするわ」

「すまんな。礼は何でもするさ。コーヒーの為だ」

「うふふ……じゃ、どんなお礼を貰うか考えておくわ？楽しみねぇ」

妖艶な笑みを浮かべる八雲紫に、思わず失言だったかと肩をすくめる次郎であった。

ややもして、八雲紫はとうに帰り、太陽は随分と登った。次郎は七杯目の茶を湯呑みに注ぎ、煙管に五回目の葉を詰めた。

「お前さんら、そろそろ起きないかね？」

呆れ顔の次郎が仲良く気絶している二人に呼び掛けた。

「「はっ！？」」

「やっと起きたか……」

むくりと起き上がった二人は惚けたような顔で座っている。

「ほら、渋い茶だ」

「すまない」

「ありがと次郎さん」

しきりに首をかしげながら、次郎が出した茶を啜る二人。きっと先ほどの出来事を忘れているのだろう。次郎はしてやったりである。

「で、結局何しに来たんだお前さん達は」

「む、なんだっ…！？…そうだ次郎、博麗の巫女が風邪で倒れたらしい。薬は飲んだらしいが、何せ懐が寒過ぎて餓死しそうだと言う。すまぬが次郎、何か滋養に良いものを届けてはくれんか？何分私は

里を離れられなくてな……」

慧音が済まなそうに言う。確かに半妖の人里の顔役である慧音が、長い時間里を離れて何かあれば大事である。

「あのろくでなし巫女か……まぁ、いいさ。つけも溜まってるし様子見がてら行ってくるわ」

面倒くさそうに言う次郎だが、結局行くのが彼の奥床しさなのだろう。そうして散々大騒ぎした二人は仲良く帰って行くのだった。

次郎は思案する。博麗の巫女の事だ。彼女は次郎の店で飲み食いはするが、実は一度も支払いをした事は無いのである。たまに「次郎さん、お代は入れておいたから」と言いながらそそくさと帰っていくが、後から釣り銭箱を覗くと、そこには”博麗神社”とかかれた御札が入ってる。

初めて博麗の巫女が店にやってきた時の事を思いだし、次郎は思わず吹き出した。彼女が次郎に言った言葉とは――

「ねぇおじさん。私は博麗の巫女よ。お腹が空き過ぎて倒れそうなの！これも全て誰も賽銭箱にお金を入れてくれないからよ！だからおじさん、賽銭がわりに何か食べさせて！」

と、偉そうに彼女は宣った。その余りの言い分に次郎は腹を抱えて笑い、なら賽銭をくれてやると飯や酒を振る舞った。以来彼女は味

を占めたように通ってくる。最も、時折八雲紫が彼女のつけを払っていくのだが、巫女はそれを知らない。

とにかく次郎はこの破天荒な巫女を気に入っていた。八雲紫に聞いた話であるが、彼女は時折起こる”異変”と呼ばれる幻想郷の危機を解決し、外界と幻想郷を隔てる結界を維持していると言う。

だが、彼女自身の能力のせいで、誰からも浮いた存在だという。つまり彼女は、過酷な義務を背負いながら、孤独を強いられていると言えるのだ。

彼女を慕い、好意を抱いている存在がいても、気が付くと最終的にどこにも属さない彼女がいるのだ。

次郎はそれに同情はしない。何故ならそれは彼女自身が選択した道だからだ。だが、自分が何かしてあげるのは自分の勝手だと考えている。だから次郎は荷物を詰める。背負いきれない程大量の荷物を。

博麗霊夢は高熱で朦朧とした視界のなか、この額の心地よい冷たさはなんだと考えている。さらに脇の下にも冷たい手拭いがはさんであり、昨夜のような辛さは減った気がしていた。取り敢えず、眠ろう。何も考えたくは無いから。

「お腹すいた……」

彼女はふと目が覚めて思わず呟いた。なにせ彼女は昨夜から何も口にしてないのだ。

「食欲あるか。待ってな？」

彼女は何か聞こえたような気がしたのか、視線を左右に動かしたがやがて力尽きたように目を閉じた。

「おい、おきろ」

彼女の肩が軽く揺すられる。ゆっくりと目を覚ました霊夢の視界に次郎が映った。

「なんで…いるの？次郎さん……」

まだ熱が引かないのだろう、霊夢は荒い息をしながら目の前の次郎を見つめる。

「黙れ病人。口あけろ」

「なによっ…あむっ……やだ、おいし」

「擦った林檎だ。のど越しが気持ちいいだろ？」

何だか騒ぎそうな霊夢の口に、有無を言わさず匙を突っ込む次郎。

「もすこし…たべる」

「そうか、食べろ」

静かな和室に霊夢の咀嚼音だけが響く。彼女の視線は相変わらず次郎を見ないが、表情に険はない。孤独を好む霊夢だとて、風邪で臥せていれば心細いのだろう。静かな時間だけが流れる。

「なんか、お父さんがいたらこんな感じなのかもね……」

ふと霊夢が呟いた。

「そうかも知れないな。俺は早くに両親と死別したから記憶には無いが、きっと親の温もりとはこういう時に感じるのかもな」

外の景色を物憂げに見ながら次郎は語る。霊夢の呟きは次郎の内面にある記憶を探る引き金になったようだ。

「私も両親の記憶は無いんだ。そっか、私たちは似た者同士だね、次郎さん」

霊夢は初めて次郎を真っ直ぐ見ると、少しだけ笑った。

「ねぇ次郎さん。外に帰りたいって思ってる？」

次郎は暫く思案する。

「いや、俺の居場所はここにある。屋台があって、毎日似たような奴等が騒ぎに来て、その中に俺がいる。この先どうなるかなんて想像はつかないけれどな。でも俺は約束したんだ」

次郎は微笑し、霊夢を見た。その目は彼女が初めて見る優しい目だった。

「約束？誰に？」

「今は心の中にいる妻と、産まれてくる筈だった子供にさ。俺は幻想郷に来る迄、いや、来てしばらくは生きる事が地獄だった。神さえ呪ったよ。けど、幻想郷は優しくてなぁ……いつの間にかちゃんと生きてみようと思ったんだ。ここで幸せになりたいって思ったんだ。……喋り過ぎたな。誰にも話してないんだ。内緒だぜ？」

次郎は照れたように笑った。

「へ～次郎さんにそんな歴史があったんだ。風邪ひいてなんか得した気分よ。でも、心細かったから話し相手になってくれてありがとう……」

照れ臭いのか、布団で顔を隠す霊夢だった。

「さて、少し元気になったな。うどんか卵粥どっちが食べたい？」

「うどん！」

「ようし待ってろ。俺が台所いってる間に着替えておけよ？流石に着替えは出来なかったからな」

「うん、わかった。おとーさん」

「……阿呆が」

こうして次郎は霊夢の熱が下がるまで甲斐甲斐しく世話をし、翌朝帰っていった。人は誰しも床に臥せれば心細いもの。それは博麗の巫女も例外では無かったようだ。

幻想郷のとある一日の出来事は、緩やかに優しく過ぎていったと言うお話。

登場人物

博麗の巫女、霊夢

騒がしき隣人、上白沢慧音

騒がしき隣人、藤原妹紅

妖艶な隙間妖怪、八雲紫

風邪っぴきとは心細きもの（後書き）

なんか慧音妹紅の絡みが恒例になりつつある今日この頃、なんかこの二人好きなんですよね。

どうやら二人は次郎が気になるようですが、次郎はじゃれあう二人をからかっているだけなのかな？作者も知りません。

今回は霊夢が主役でした。シニカルな巫女の弱っている感じを書いてみました。カッコいい霊夢は皆さんの作品にお任せして、僕はひたすら日常のみです。

博麗神社に向かう途中、ルーミアに出会う話を書こうかな？とか思いましたが、それもまた皆さんの作品にお任せしました。そーなのかー。

次郎にヒロインが出来るとしたら一体誰なんだろうか？いないか。キャラがオッサンだし。

時間はどうしよう。

白玉楼か永遠亭あたりの誰かを書こう。そうしよう。

酷く迷惑な客（前書き）

もこたん、脇役から一気にメインキャラ昇格か！？

酷く迷惑な客

「なんか納得いかない……」

次郎は呟いた。どうしてこうなったとも感じていた。とにかく彼は人生とはげにも不条理なものよと歯噛みした。

なぜなら……

――東方御伽草子――

次郎は現在途方に暮れていた。その原因は目の前でその可愛らしい顔をさらに素晴らしい角度に曲げ、女性の表情を最大限に活かす極意とも言える完成形を披露している目の前僅か３０センチに接近している藤原妹紅にあった。

ある種の完成形、つまり、女性の武器とも言えるその姿とは、所謂上目遣いと言う表情である。

そもそもはこうだ。ぽかぽかしたある午前中、縁側に座る次郎は少し大股を開いてリラックスしていた。自慢のキセルをくゆらせ、相談があると現れた妹紅の話を聞いていたのだ。その彼女の相談とやらの雲行きが怪しくなり、次郎が難色を示しだしたあたりで彼女は

実力行使に出たのだ。

妹紅は平安の古から生き抜いてきた手管を駆使し、次郎が一瞬目を離した隙にだ、素晴らしい速度で次郎の広げる足の間に膝まづいていた。次郎は不覚であると狼狽えた所、彼女はその白魚の如き白磁のような肌色が美しい指先を次郎の太ももに置いた。

次郎がさらに狼狽えた。次郎はこう見えて一途で一本気な性格である。亡き妻への操ではないが、男女の”そういう”やり取りとは、少々遠ざかっていた。それ故次郎は初な少年のような反応になってしまったのである。

藤原妹紅とは元来勝ち気な性格である。何故ならばそうしないと生きていけなかったからだ。彼女が産まれた平安の世は、貴族が幅を利かせる封建社会である。男尊女卑が当たり前な社会なのである。

女は政治の道具であり、政略結婚の駒として、家と家のパイプとなる。鎌倉の世になり武家が台頭してからは、その社会システムは完全に定着し、それは近代昭和初期に至まで続いた。

竹取物語の主人公であり、現在迷いの竹林に建つ館の主である蓬莱山輝夜、所謂かぐや姫は求婚してきた妹紅の父を袖にした。その結果、彼の心情がいかなるかは今となればわからぬが、とにかく彼女の父親はやがて死んだ。

妾腹ではあったが、深く父を愛していた妹紅は酷くそれを嘆いた。その結果は輝夜に憎悪を向ける事となり、輝夜が月に帰る際に帝に残した不老不死の薬を奪い、飲んだ。

それまで美しかった妹紅は、体の色素が完全に抜け、髪は白色、肌

も白色、瞳は真っ赤になってしまった。

彼女は人の身でありながら、人ならざる姿となり、人からも妖しからも忌み嫌われる存在となる。不老不死の副作用である。結果、彼女は人の目を縫うように生きざるを得ず、虚勢で身を固め、妖術を習い武装した。そして幻想郷に辿り着く迄の長い間、常に神経を尖らせて生きてきたのだ。

幻想郷に入ってから彼女は”ひょん”な事からある出会いを果たす。そう、蓬莱山輝夜との邂逅である。邂逅とは思いがけずに出会うと言う意味である。妹紅にとっては正に寝耳に水である。月に帰ったはずの輝夜が幻想郷にいた。

それまで生きるために必死だった妹紅の中に炎が灯った。憎悪の炎である。二人はすぐさま殺しあった。腕が吹っ飛び、目は抉れ、心臓を握り潰した。だが滑稽な事に結末は「振り出しに戻る」であった。

二人共不老不死である。つまり死ねぬのだ。いくら屍のような肉塊をさらそうとも、やがて時計の針を逆巻きにしたように肉体は潤いを取り戻す。

だが、悠久を生きるとは孤独と同義である。まして、ある事情で隠れ住むしかない輝夜と、人に忌み嫌われる妹紅は尚更である。

そんな二人が殺しあう際、不思議なシンパシーを感じる事になる。永遠の孤独の中、殺しあう時に感じた痛みが、単調で退屈で苦痛な時間に潤いを与えたのだ。それは発見であった。

死ねないからこそ成立する娯楽。痛みと言う現実を享受する非死亡

遊戯。二人は逆説的な友情を産み、以後、睦みあうように殺しあった。それは自分は確かに生きてると言う事実を確かめる確認作業だった。

妹紅の憎悪とは、ある意味生きる糧だっただけであり、真の意味での憎悪ではない。本音はどうでもいいのだ。永遠の中の一瞬でしかない憎悪、それは世紀を跨ぐたびに薄れていく。ただ、希薄になる毎日を引き締める為に憎んだのだ。目的が、ただの別の手段に転化したと言う訳だ。

一番最初に輝夜と殺しあった際に妹紅はそれを実感してしまったのだ。

以後は日がな輝夜と殺しあい、慧音と言う莫逆の友を得て、人里にも馴染んだ。妹紅は安らぎを手にしたのだ。言葉遣いは粗野であるが、心は軟らかくなった。

それでも妹紅は親しくない人間には辛辣であった。隠れすんできた弊害と言うか、とにかく対人関係を構築するのが苦手だ。人里ですれ違う者や、物売り相手には人当たりの良い態度であるがどこかよそよそしい。要は他人に必要以上に踏み込ませない空気を常に纏っている。

幻想郷に来るまで彼女は、日々の糧を得るために退魔師の真似事をしていたが、刹那的には感謝されても、どこか妖しと同類に見てくる人間を、妹紅は基本的に信用していない。むしろ命を狙われたりすらした。ならば始めから馴れ合うべきではないと言うのが彼女の処世術なのだ。

そんな彼女も慧音に出会い、変わった。慧音は良い意味でも悪い意

味でも愚直なまでに真面目だ。彼女はハクタクと言う妖しが混ざった半人半妖である。ただし、満月の夜以外は基本的に人間のなりをしている。

彼女自身、幼少の頃から人間に差別的な待遇を受け、ある意味では人間に絶望していた。だが、半分が人間の我が身である。その不安定な存在だからこそ、真摯に自分の存在理由を探し続けた。

彼女も幻想郷にたどり着き、何者も受け入れる世界で居場所を見つけた。半人半妖でありながら、人里で生きる場所を。幻想郷の人間は、彼女を真面目な人格者として受け入れたのだ。

気が付けば人里の顔役として人間を守り、教育する立場と言う存在理由を見いだした。半妖の自分を受け入れた――その事実だけで彼女は充分だった。以後、慧音は人間を妖しから守る事を自分の仕事とした。

そんな慧音はどこか冷めてる妹紅に説いた。孤独に生きるのはやめろと。

それは綺麗事だと切り捨てる妹紅に、慧音は懲りずに繰り返し説いた。時には涙を流し、時には実力行使も辞さずに。そしてある時慧音は言った。”半世紀もこうして語り合う我等は友人ではないか？少なくとも私はお前が居なくなれば悲しいぞ”と。

妹紅は暫く呆然とし、そして言った。”ならば後半世紀、お前と友人とやらをしてみるか。そうすれば真実かわかるだろう”と顔を赤らめたのだ。

慧音はお前は天邪鬼だと笑ったが、それを機に妹紅は少しだけ柔ら

かくなったのだ。因みに半世紀経った後に慧音が”そういえば例の答えは分かったか？”と尋ねた事がある。

その質問に対して妹紅は”例の答え？なんだそりゃ？”と慧音を呆れさせたと言う。

そんな妹紅がさらに変わることになる出会いがあった。次郎である。

ある日妹紅は慧音と飲んでいた。すると慧音は言った。最近できた不思議な屋台がある、と。彼女曰くその屋台とは、店主は人間ながら妖し相手に商売していると言う。

そんなわけあるかと妹紅は鼻で笑い、意地になった慧音が”ならば今から行こう”と始まった。

実際その屋台は存在し、店主は変り者だった。無愛想だが味は確か。妖し相手に全く動じず、異形の妹紅を見ても眉一つ動かさない。

差別しない店主の態度を嬉しく思ったが、逆に只の人間のくせにその態度はなんか癪であると妹紅は店主に絡んだ。

結果は”他の客に迷惑だクソガキ”と言い放つや、店主は妹紅に凄まじい拳骨をお見舞いした。妹紅は思った。慧音の頭突きより痛いと。

そうは言っても妹紅である。頭に来た、表に出ろと啖呵を切った。弾幕ごっこだと息巻いた。結果は表に出るどころか更に数発拳骨をもらい、そしてお前が悪いと慧音に止めの頭突きで騒動は終了した。

次郎との出会いは妹紅にとって鮮烈だった。彼にとっては人間も妖しも関係ないのだ。客か客ではないかだ。そして、客ならばとにかく美味い酒を飲んでほしい――その一念だけなのである。

妹紅は次郎に聞いた。”私を見てどうおもう？”と。

次郎は答えた。”見た目は綺麗だが、激しく迷惑な客だ。頼むから静かに飲んでくれ”と。

妹紅は綺麗だの件に大いに赤面しながら、この自分をお嬢ちゃん扱いする不思議な人間の男を気に入ったのである。

この次郎の自然体な価値観は以後も変わらず、二人は今日に至るまでほぼ毎日、彼の店に通っている。因みに昼間は家にも押し掛けるのであるが。

そしてある時、妹紅は慧音に相談した。自分はどうやら次郎を好いているらしい、どうしたらいいか？と。しかし妹紅は満足な答えを得られなかった。何故なら慧音はこう言い放ったからだ。

「その相談には乗れない。私も次郎を好いているらしいからだ。むしろお前が次郎を好きならば、我等は敵である」

堅物で有名な慧音が赤面しながら言ったのだ。これは真実であると妹紅は感じた。と同時に莫逆の友であるが、この戦いには負けられないとも感じた。

そして二人は誓い合った。抜け駆けはしないで正々堂々と戦ろうじゃないかと。ここに二人の紳士協定が結ばれたのだ。

だが、一番の敵は互いでは無かった。最大の敵は次郎だったのだ。二人が彼の自宅に出入りするようになって気が付いたのだが、彼には何やら過去に重しになるような経験があるらしい。それと、こちらの理由が一番なのだが、とにかくあの飄々とした性格が難敵なのだ。柳に風と言うか、打っても響かぬ破れ太鼓というか、とにかくだ、どれだけ二人が言葉に気持ちを滲ませようと、次郎はのらりくらりと躱すのだ。

鈍感ならまだ救いがある。だが、次郎は二人の気持ちを察しながらにやにやと笑って躱すのだ。二人からすれば子憎たらしい事この上無い。

だが最近、それにも若干の光明が見えた。同じ屋台の飲み仲間である八雲紫によると、彼は直接的な接触には弱いらしいと。具体的には胸を当てる等だ。

しかし、男女関係に非常に奥手な妹紅は悩んだ。自分には八雲や慧音のような胸もないし、冗談半分の言葉ならいざ知らず、真面目に愛を告げるなど絶対に無理だ。まともに話せやしないのは想像できるからだ。

そこで妹紅は考えた。自分の性格上、直接的なアプローチはむりだ。ならば時間をかけてやろうじゃないかと。幸い妹紅には焼き鳥の名人と言う技能がある。ならばその腕を売り込み、次郎の屋台で雇ってもらおうと。

この際抜け駆け云々はどうでもいい。だって慧音は胸があるじゃないかと妹紅は自分を正当化した。

そして場面は冒頭に戻る。

「な、何するんだ妹紅？離れろ」

「いいからお願いを聞いて。ね？次郎さん」

「くっ……上目遣いとは卑怯だぞ妹紅……」

妹紅は爪先で次郎の太ももをかりかりと掻きながら、しなを作って次郎を見上げる。

「な、なんだよ相談って、早く言えよ……」

次郎、四面楚歌

「ねぇ次郎さん、私を店で使って欲しい。焼き鳥焼いたり他も色々できるしさ。ね？」

妹紅、必殺の首傾げを披露する。

「……くっ、チルノがいるし……む」

「ね？」

妹紅、太ももに頭を乗せてさらに上目遣い。

「……わかった！雇うから！離れてくれぇ！！」

藤原妹紅、完全勝利の瞬間であった。

こうして人里の名物屋台「喰いものや」に新しい従業員、藤原妹紅が誕生した。

それを知った慧音は、抜け駆けであると地団駄を踏んで悔しがり、妹紅は優越感に浸ったのだが、世の中そう甘くない。

因果応報と言う言葉を妹紅は近いうちに知ることになる。

次郎はこっそり呟いた。

「妹紅め、絶対に仕返ししてやる。くくく……」

登場人物

押し掛け従業員、藤原妹紅

堅物で有名、上白沢慧音

かぐや姫、蓬莱山輝夜

豊満な胸の持ち主、八雲紫

憐れな子羊、次郎

酷く迷惑な客（後書き）

もこたんｉｎしたお！

だって、可愛いから仕方ないじゃない。

STAND BY ME

幻想郷には、いつも霧の深い湖がある。それは深い森に囲まれているためなのか、はたまた多湿な気候のせいかは謎であるが、とにかく年中霧に囲まれているのである。

森側の湖岸から見て正面に見えるのが、吸血鬼を主とした集団が住まう紅魔館であるが、霧の為に淡く浮かぶ様に見える為、その妖しさを増している。

そんな湖の付近には沢山の妖精達が住んでいる。その中にチルノと言う氷の妖精が居た。

最近のチルノは物憂げな視線を湖に向けながら、座ったまま一日を過ごす事が多い。妖精は基本的に食事が必要無いため、狩りをしたり等の生産的な活動はしない。

ただ精霊に準じた存在なので不思議な能力を持っていたりする。例えば空を飛んだり、何かを癒したり、とにかく色々いる訳だ。

チルノは氷の妖精であるから、冷気を操ったり氷を作り出したり等出来たりする。そのせいか暑さが苦手だったりするのだが、身体が氷で出来ている訳ではないので少々ぐったりする程度である。

そんな妖精達の生態は様々であるが、共通するのは持て余す時間を楽しむ娯楽として、他者に悪戯をしたりすると言う事だ。チルノもその例外では無いのだが、何故か最近の彼女は元気が無いのだ。

「ふう……」

今日もまたチルノは、湖畔の石に腰掛けながら、湖に向かって氷塊を投げつけため息をついていた。

「チルノちゃん、どうしたの？一人でこんなとこにいるなんて」

「そうだよ～。最近チルノちゃんが一緒に遊ばないから心配なんだよ」

大妖精とリグル、チルノが仲良しな妖精仲間なのであるが、いつも元気なチルノがしょんぼりしているのが気になっているのだ。

「うん……あたいもよく分からないんだ。けど、なんかもやもやして動けなくなっちゃうんだ」

チルノは膝を抱えて顔を伏せる。それを見て大妖精達は酷く狼狽した。普段のチルノは能天気なほど明るいのだ。こんな憔悴したチルノを見るのは初めてと言っていいだろう。

「ち、チルノちゃん、何か気になる事でもあるのかい？」

虫妖精であるリグルは、頭の触角をぴこぴこと揺らしながら聞いた。

「えと……ジロがね、パンで、おいしいって思ったの。だからあたい、嬉しいけど、ジロわかんないからもやもやするの」

大妖精達はぽかんとしている。チルノの説明は全く意味不明であり、支離滅裂だからだ。ただリグルは懲りずに繰り返し尋ねた。小一時間ばかり。そしてリグルは漸く悩みについて把握出来たのであった。

それでもまだチルノの説明は過多であり、二人は一生懸命に余計な部分を削ぎ落として理解出来たのであるが、それは余談である。

二人が理解したチルノの悩みとは――前にチルノが大妖精達と喧嘩し、落ち込んだ時、人里の人間ジロが慰めてくれた。ジロはおいしいパンをくれた上に、仲直りの魔法を教えてくれた。お礼を言いたいけど、それっきりジロを見かけない。――と言う事らしい。

「ほぇ～そんな優しい人間がいるんだね～」

リグルは感心した。

「優しいね。でも魔法ってなんなんだろう？チルノちゃん、魔法ってなあに？」

大妖精は優しい人間の存在に驚きながら、魔法が気になるのかサイドテイルの髪を揺らして興奮している。

「うん、魔法はね、ごめんなさいの魔法だよ！」

チルノは立ち上がり、誇らしげに胸を張り言う。

「「ごめんなさいの魔法？」」

二人はチルノを見上げ、不思議そうな顔をした。二人が知る魔法とは、黒白や図書館の魔女が使う魔法の事だからだ。

「えと、勇気をだしてごめんなさいと唱えたら、仲直り出来るんだよ！」

ますます偉そうに胸を張るチルノに、二人は思わず笑みが零れた。

「「それは凄い魔法だね！チルノちゃん凄いや」」

「うん！」

誰かと仲違いをしたり、何かを失敗したり、誰かを傷付けたり……そんな時は皆、素直にごめんなさいと言うのは難しい物である。意地っ張りなチルノなら尚更だ。

普段から特にチルノと仲が良い大妖精は思った。チルノを言い聞かせ、勇気を持たせたジロは凄いと。だから思う。チルノはジロにありがとうと言いたいのだと。そして、願わくば友達になりたいのだと。

「チルノちゃんはどうしたいの？」

「うん、チルノの気持ちが大事だよ～」

二人はそういって答えを促すが、チルノは益々沈んでいく。妖精は本来は漂うものである。そこに存在しているが、かといって積極的にその他の存在に関わっていく事もない。

チルノ達のような妖精の中でも自我が強い存在だとて、それは基本的には変わらない。だからチルノは生まれくる感情に戸惑い、恐怖する。

どうしていいか分からないのだ。何故ならば、今までそう感じた事が無いからだ。大妖精は悲しくなってしまった。こんなチルノはチルノじゃないと。リグルはリグルでおろおろしてるのみである。

気が付けば三人は向き合ったまま膝を抱えてどんよりとしていた。

ややもして――――

「そうだっ！ジロさんを捜してみよう！」

突然大妖精は立ち上がり叫んだ。

「え？だ、大丈夫かなぁ…嫌われたりしないかな？」

チルノは不安気だ。

「大丈夫だよチルノちゃん！私も手伝うからみんなで捜そうよ！」

リグルも笑顔で立ち上がる。

「ほら、チルノちゃん？魔法を習ったんでしょ？勇気出してみましょう！」

「そうだよチルノちゃん！勇気だぞ～」

二人はそうしてチルノの手を引き立ち上がらせた。

「うん！あたい、頑張る！ジロに魔法習ったもん！今度はありがとうの魔法だ！」

「「お～！！」」

そして妖精達は空へ飛び立って行くのだった。

――東方御伽草子――

夕暮れの通りを次郎が行く。行き交う人々は足速に過ぎ行き、幻想郷に夜が来るのはあと少し。

次郎は昼間の間に仕込みを済ます。その為、開店間際は割りと暇だった。

いつもはカフェで一服したり、足りない食材を物色しながらのんびりと過ごすのだが、今日の次郎は異様な雰囲気である。

現在彼は人里の通りをまるで忍者のように隠れ進む。キョロキョロと背後を伺いながら、通り脇に立ち並ぶ建物の影に身を潜めて屋台を目指していた。

そしてあと少しで屋台につくという場所で――――

「おい次郎、そこで何やっているんだ？」

軒先に隠れる次郎の背後から声がかかる。だが彼の行動は速かった。次郎は咄嗟に身体を反転させると、その何者かの背後に回り、背中から抱き付いた。右手は口を抑え、左手は腰に回してがっちりと締め付ける。

「ムグー！ムグー！」

「（しーっ！静かにしろ！見つかるだろうが！）」

「ムグッ？ムグムグ？」

「（そうだ胡散臭い魔法使い、とにかく黙れ）」

「ムグっ」

そう、曲者の正体は次郎曰く胡散臭い魔法使いこと霧雨魔理沙であった。次郎としては騒ぐ魔理沙を黙らす為の行動だったが、今の体勢は少女を襲い、物陰に引きずり込む怪しいオッサンだろう。事実魔理沙は羞恥に赤面してる。

「は、離せよ次郎！全く助平な男だぜ……」

開放された魔理沙はぶちぶちと不満を述べるが、次郎はそれを無視して通りを警戒している。所謂セクハラをされた魔理沙であるから、その不満は当然であるが、にしても次郎の行動は不可解だった。

「なぁ次郎、一体何をしてるんだ？やたら怪しいんだぜ……」

やれやれと言うように魔理沙はごちるが、突然次郎が振り返り魔理沙の肩を掴んだ。

「やい黒白！」

「な、なんなんだぜ…」

「お前、どこから来た！」
「じ、次郎の後ろ…かな？」
「誰かついてきてたか！」
「い、いや、知らないんだぜ……」
「……ちっ」
そして次郎は硬直した魔理沙を残し、素晴らしいスピードで走って消えた。

「り、理不尽だぜ……」
涙目の魔理沙が虚しく呟いた。

人里の外れにある屋台、喰いものやでは、まだ宵の口だが既に常連客で溢れていた。カウンターには慧音、妹紅と言ういつもの組み合わせに、珍しく八雲紫も並んでいた。
だが、あまり三人は楽しそうではない。何故なら目当ての次郎の様子がおかしいからだ。次郎はしきりに外を窺っており、話し掛けても上の空なのだ。いつもなら無愛想でもしっかり相槌をうつ。

どうもきな臭い様子の次郎に、三人はとうとう痺れを切らして問い詰める事にした。

「次郎様？」

「……」

「おい次郎？」

「……」

「次郎さんってば？」

「……」

誰が呼ぼうが上の空。全く取りつく島もない。流石にここまで無視されて怒り心頭のご婦人方は――

「「「次郎！！！」」」

三人の見事なユニゾンが次郎の鼓膜を襲った。

「な、なんだ一体……耳元で叫ぶな阿呆……」

耳を押さえながら漸く三人を見る次郎だった。

「何やら様子が変よ？どうしたの？次郎」

「ん～いやさ？ここ数日見張られてるみたいなんだよ俺は」

相変わらずキョロキョロしながら次郎は言う。

「なんだかわからんのだが、常に見張られている様な視線を感じるんだ。だからな、少し過敏になっている……済まない」

「見張られている、か。――一応あたりの気配を探ってみたけど、そうね？悪意のある気配はしないわ？」

「…そうか、感謝する」

八雲紫は隙間を開いてそう言った。扇子で口元を隠しながら。紫は妖しく微笑っていた。次郎は気が付かないが。

「次郎よ、何かどこぞで女子（おなご）の恨みでも買ったのでは無いか？」

慧音が白い目で責めるように言い、

「次郎さんは女誑しだね……」

と妹紅がくさす。

「……阿呆が。誑す相手などいるかよ。こちとら女日照りだっての」

忌々し気に次郎は吐き捨てた。

「「「（憎たらしい）」」」

女性陣も何やら思うとこがあるらしい。そして夜は更けていくのだった。

翌日の朝、次郎は何やら視線を感じて目が覚めた。時折慧音や妹紅が乱入したりもするが、いま感じている視線はそういう類いのものでは無い。どうもこちらを窺っているような視線だ。

次郎は布団から這い出て、そのまま匍匐前進のように朝日眩しい障子に擦り寄った。そして、音を立てないように気を配り、指一本分の隙間をそろりと開けた。そして覗く――

何かがいる――

次郎が目を凝らした先、庭の畑の奥にある茂みにそれらは居た。

青いのと緑色のと頭に何かを生やした小さいのが次郎の家を見ていた。それらは恐る恐る近寄ってきているようだ。柿の木に身を潜め、蜜柑の木に身を潜め、最後は縁の下に消えた。次郎は見覚えがあると思案する。

次郎が記憶を辿っていると、暫くして――

ことっ、ことっ……

縁側に何かが置かれた。次郎はそれをよく見ると、姿は見えないが縁の下から小さな白い手が伸び、縁側に氷漬けのカエルが次々と置かれていく。

三つ目のカエルが置かれた時に、伸びた手のその先に赤い大きなリボンが見えた。よく見たらその横には触角のようなものが見え隠れしている。その反対側には緑色の頭のてっぺんが薄らと見えた。

次郎はリボンを見てすっかり思い出した。いつぞやの湖で泣いてた妖精だと。確か名前はチルノ――次郎はにやりと笑うと忍び足で部屋から消えた。

「チルノちゃん、今のうちにだよ！」

「まだジロさん寝てるみたいだね。頑張れチルノちゃん！！」

縁側の下に上手く忍び込んだチルノ達だった。そして大妖精とリグルはチルノを励ました。

「う、うん、あたい頑張る……」

三人はここ数日の間、ひたすら次郎を捜して人里を彷徨っていた。実は捜索を開始したその日に次郎は見つかったのだ。だが、次郎を見付けた屋台には、恐ろしい大妖怪達が”うようよ”いたのだ。これでは生命に関わると三人は震え上がったのだ。所詮は妖精、大妖怪にかかれば一捻りである。

だから三人は次郎が屋台を閉めるまで草むらに身を潜め、以来、彼

をひたすら付け回した。

だが次郎は腐っても能力持ちだ。勘はそれなりに鋭い。次郎は何かにつけられていると感じたのか、三人が油断した際に彼女達を撒いたのだ。慌てて追い掛けた三人だが、結局見失ってしまった。

次の日から次郎と妖精の不可思議な鬼ごっこは始まり、紆余曲折ありつつも次郎の自宅を発見するに到ったのだ。因みに昨夜次郎の屋台を覗いていた時、隠れていた三人の目の前に大量の目玉が突然現れ、肝を冷やした三人は少しばかり粗相した。それほどの恐怖だったのだ。

そして今朝、三人は作戦を決行したのであった。

「よい…っしょ…重い…」

チルノは持参したお土産、霧の湖に住むカエルの氷漬けを縁側に乗せる。ジロは喜んでくれるかな？とドキドキしながら。そして持参した三匹全てを乗せると満足そうに息をついた。

「よし、終わった」

「後はありがとうと」

「友達になって下さい、だね！」

三人はニコニコとしながら肩を叩きあい、今日までの苦労を讃えあった。あちこち彷徨いへとへとになった。凶悪な目玉の妖怪に睨まれた。人の子に追い回され、石を投げられた。全ては今日の為の苦

労であった。

よし、と気合いを入れたチルノが縁側を登ろうとしたその時――――

「悪い子はいねぇがぁ！！！！！！！」

「「「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！」」」

いつの間にか後ろから忍び寄った次郎のなまはげ攻撃に――三人は悲鳴と共に目を回して倒れたのだった。

「……んんっ……ここは？どこ……」

チルノが目を覚ますとそこは見知らぬ場所だった。ガバッと起き上がったチルノは辺りを見回すと、どうやら三人は大きな布団並んで寝かされていたらしいと気が付いた。

がららっ――

チルノが呆然としていると、部屋の扉が開いて次郎が入ってきた。

「お、起きたか。びっくりさせてごめんな？ちょっとした悪戯だったんだが、お前さん達目を回して倒れちまった」

罰が悪そうな顔をして次郎はチルノに謝った。

「あれ、ジロだ、ジロだ！」

急に笑顔になったチルノが嬉しそうに立ち上った。

「久しぶりだな、チルノ？ごめんなさいの魔法、成功したかい？」

「う、うん！ちゃんと成功した！あたい、頑張って勇気だしたらみんなと仲直りできた！！」

「そっか、良かったな？チルノ？」

そういって次郎はチルノの頭を撫でるのだった。

「う、うーん……」

「はわっ…んんん…」

二人がそんなやり取りをしていたら、大妖精もリグルも目を覚ました。

「おや、起きたかお前さん達も。さっきはごめんな？悪戯が過ぎた。俺は次郎、この家の主だ。よろしくな？」

「あ、えっと、大妖精です…よろしくお願いします、ジロさん…」

「あ、あの、よろしくでしゅ…リグル・ナイトバグと言います…蟲の妖怪です……」

大妖精もリグルも、さっきの次郎の悪戯がよほど怖かったせいか若干腰が引けているようだ。だが次郎の柔らかい物腰に、少しだけ安心したらしい。チラチラと次郎を眺めている。

チルノは胡坐をかいて座っていた次郎の前に立ち、何かを言いたげにしている。ワンピースの裾を掴んでもじもじとしているが、一向に喋らない。

「が、頑張ってチルノちゃん！」

「チルノちゃん魔法！魔法！」

大妖精達はチルノを一生懸命後押ししようと励ます。

チルノはプルプルと震えていた。次郎にありがとうと言いたい。そして友達になりたい。だけど妖精なんか嫌だなんて言われたらどうしよう。その思いがチルノの心を締め付けた。

勇気、勇気、あたいは最強だから頑張れる。チルノは必死に自分へ言い聞かせる。だが、最初の言葉がでない。

「ジロ、あたい……」

「ん～？」

「あたい……あたい……」

次郎はそんなチルノを見てため息をつくと、少し微笑した。チルノが何を言いたいかは分からないが、何やら一生懸命で、とても健気

に見えたからだ。

「チルノ、この前のパン食うか？大妖精もリグルも腹減ってるだろ？」

「え、パン食べたい！でもなんで？あたい、ジロに迷惑かけた」

「ん？せっかく友達が遊びに来てくれたのに迷惑ってなんだ？」

驚くチルノ。

「あ、あたいはジロの友達なの？」

「俺はそう思ってたが、違ったのか？迷惑か？」

「ちがっ、あたい迷惑じゃない！」

次郎の言葉にきょとんとした後、ひどく狼狽えだすチルノ。友達になりに来たのに既に友達だった？チルノは混乱の極みにいる。

「あ、あの、ジロさん」

「なんだい大妖精ちゃん」

「えと、チルノちゃんといつ友達になったのですか？」

「うーん、湖でチルノと会って、悩みを聞いて、最後はまたなと別れた。他人にはさようならと言う。でも友達ならまたなと言う。たしかあの時チルノもまたねと言ったぞ？だから友達なんじゃないかな？」

大妖精もリグルもぽかんとしている。でも言われてみたらそうかもしれない、とも思った二人であった。

「ジロ、あたい達は友達？」

「ああ、友達だ」

「大ちゃんとリグルは？」

「チルノの友達なら俺も友達かな」

「ジロ、あたい、あたい……ジロの魔法でみんなと仲直りできた。だから、その……ありがとうジロ。友達も嬉しい」

チルノは赤い顔を伏せながら、搾りだすようにありがとうと言った。

「「チルノちゃん！」」

大妖精達も笑顔になった。

「そっか、仲直りできたか。偉いぞチルノ！流石俺の友達だな。」

「うん！やっぱり、あたいったら最強ね！」

チルノに笑顔が戻り、大妖精とリグルは苦労が報われたと嘆息し、チルノの笑顔を祝福するのだった。

こうして、小さな妖精達の大冒険はハッピーエンドで幕を閉じるのだった。

「さて、パン食べたいか？」

「食べたい！！」

次郎はチルノの返事に満足そうに頷き、居間に行くぞと立ち上がった。

チルノを伴い部屋を出ようとした次郎は振り返り、まだ布団に座ったままの大妖精達を不思議そうに見た。

「お前さん達は食べないのか？」

「え、えっと、私達もいいのですか？」

「いや、良いも悪いも俺たちは友達だろう？俺はみんなに声かけたんだぞ？ほら行くぞ！」

大妖精とリグルは顔を見合せた。そして――

「「はいっ！！！」」

今朝の次郎の家は、とても明るく賑やかになった。次郎は妖精の友達の為に、ひたすらパンにハムを挟み続けたらしい。

おしまい。

――その後のお話――

チルノ達はそれ以来ほぼ毎朝、朝陽とともに次郎宅に襲来するようになった。

チルノ、大妖精、リグルの他に、ミスティア、ルーミアと言う新顔も増え、次郎は流石に辟易した。

大妖精やリグルにミスティア等は次郎の畑やパン焼きを手伝ったりとむしろ歓迎したい位だったが、チルノとルーミアは大騒ぎするので次郎もへとへとになってしまう。妖精の本領発揮と言うところであろうか？

そんなこんなで次郎は涙ながらに午前は来るなと説得し、最後まで抵抗したチルノは次郎の従業員にすると言う話で丸め込んだ。

妖精おそるべし、次郎が今回学んだ事はそれに尽きるのであった。

登場人物

次郎の友達、チルノ

次郎の友達、大妖精

次郎の友達、リグル

次郎の友達、ミスティア

次郎の友達、ルーミア

隙間を覗いてニヤリ、八雲紫

常連客、上白沢慧音

常連客、藤原妹紅

初めて名前が書かれた魔法使い、霧雨魔理沙

妖精に懐かれし男、次郎

STAND BY ME（後書き）

前回に妹紅が従業員になったので、今回はチルノが従業員になるいきさつを書きました。

巷でいうバカルテット＋αな今回でしたが、うちのチルノは所謂？なおばかさんとしてはかきませんでした。

頭のスペックは多少低いが、それより一生懸命が空回りする可愛らしいちびっこなイメージです。

ああ、チルノを娘に欲しいわ。

妖精に幸あれ

次回もよろしくお願いします。

人は見かけに因らぬもの　前編（前書き）

後半まとまらず、やむを得ずに前後編に致しました。文才無くて申し訳ない。

人は見かけに因らぬもの　前編

「妹紅、下拵えは終わったか？」

煮込みの火加減をしかめ面で見ている次郎が言う。

「ああ、終わったよ次郎さん。完璧さぁ」

にやりと笑いながら妹紅が胸を張る。次郎は野菜の下拵えを終えた妹紅を一瞥し、それらを見た。

「ふむ……」

「ど、どうだ？」

一つずつそれぞれを摘んでいく次郎。目を閉じ、神妙な顔で静かに咀嚼していく。それをみる妹紅は縋るような目付きで次郎を見ていた……。

時は少しばかり戻る。妹紅が喰いものやの従業員になって三日の事だ、未だ次郎は彼女を店に立たせてはいない。話が違うぞ！とごねる妹紅を次郎はバッサリと斬って捨てた。

「お前は肉を焼かせたら天下一品だ！だがっ、野菜を切らせたらチルノに劣る！故に、まだ店に立たせるつもりはない！！」

次郎の家の厨房で、床に這いつくばるように落ち込む妹紅を、次郎は刺すような目線で言った。

（チルノに劣る…チルノに劣る…チルノに劣る…チルノに劣る……）

妹紅は絶望した。”あの”不思議妖精チルノに負けている自分に。涙が出た。あまりの不甲斐なさに。それよりチルノに劣るとあの烏天狗にばれたら幻想郷では生きてはいけない。これは由々しき事態である、と妹紅は泣いた。

ピカッカシャッ――

「！？」

その時突然まばゆい光と異音が響いた。妹紅は弾かれるように窓を見ると、そこには平和の象徴、ＰＥＡＣＥのハンドサインをしながら素敵な笑顔で飛び去る烏天狗、射命丸文の姿が見えた。

「終わった……全ての意味で私終了……」

妹紅は追い掛ける気力も湧かずに崩れ落ちた。そもそも追い掛けた所であのスピード狂に追い付けなどしないであろう。

「さぁ、茶番は終わりだ妹紅。お前は一週間で野菜の下拵えを完璧に覚えて貰う！それまではここで泊まり込みで修業だ！」

悲しみに暮れる妹紅に次郎の叱咤が飛ぶ。

「チルノはいるか？」

「なにジロ。あたいったら忙しいの」

厨房の奥からチルノがふよふよと飛んできた。その手にはキラリと光る包丁がある。

「なぁチルノ、悪いけどお前さん、妹紅に野菜の下拵えを教えてやってくれないか？チルノは最強だから楽勝だろ？」

「うん！あたいったら最強だからモコに教える！モコ、あたいがあんたの先生だよ！」

次郎に煽てられご満悦のチルノは、妹紅の前に立つと笑顔で返事した。

因みに、チルノを知る者には意外であろうが、実はチルノは優秀なのだ。たしかに不思議妖精であり、計算等は全く出来ない。だが、チルノは単純作業は凄まじかったりする。

野菜を切る。米を研ぐ。下茹でする。容器に綺麗に詰める。これらは次郎が唖然とする位に上達したのだ。チルノは退屈が嫌いで落ち着きが無い。次郎はそれを逆手に取った。

作業の工程を教え、ゲームのように次郎はチルノと競争する。チルノがやり終える寸前に次郎はわざと手を抜く。すると当然チルノは得意満面になり、次郎はチルノを褒める。

そして次は「素早いチルノは素晴らしい。だけど綺麗に出来たらも

っと最強になれるな」と次郎はハードルをあげる。子供が遊ぶときの集中力に大人は適わない。だが、長くは続かない。それは飽きるのが早いからだ。ならばと次郎は工程をいくつかに分けて、遊びの種類を増やしたのだ。

結果、約一週間でチルノは計算以外の仕事は実戦レベルまでに達した。その過程で大妖精達を集め、チルノに料理を振る舞わせた。大妖精達は凄い凄いと囃し立て――（実際それなりに美味かったりする）――チルノはどんどん自信を増したのだ。

チルノはゲーム感覚に技術を上げ、人に料理を振舞い感謝される喜びを知った。そしてそれは彼女自身の自信になり、付け焼き刃では無い財産となった。

今では仕事の楽しさを覚え、自発的に店に関わっている。

因みにチルノの給料は、本人がお金の扱いが苦手なので現金は無し。その代わりに仕事が終わったら、大妖精達へのお土産としてチルノが料理を作る。そしてその材料費を次郎が持つと言う権利と、週に二回次郎にオヤツを買ってもらえる権利が給料代わりだ。もちろん大妖精達の分もだ。

そんなわけで次郎が、妹紅の指導講師としてチルノを指名したのは別に嫌がらせな訳ではない。その実力があるからだ。

苦虫を噛み潰した表情の妹紅だが、笑顔のチルノに毒気を抜かれ、大人しく「よろしくチルノ」と頷くのだった。

それから七日間、不思議妖精と不死の妖術使いと言うシュールな師弟関係は続き、毎晩のように徹夜で二人は頑張った。

そして今朝、次郎から「今日の午後に試験をやる。合格なら今夜から店に立つのを許す。だが不合格ならお前は一生下働きだ」と通達された。

緊張に膝を震わせる妹紅に、チルノ師匠は優しく肩を叩いて言った。

「あんたは大丈夫」と。

二人は抱き合い涙を流す。今日まで沢山の苦労、そして語られないドラマがあったのだろう。感極まった二人が見せる師弟愛は美しかった。

そして時計の針は元に戻り――

「ど、どうかな？」

不安そうな妹紅。柱の陰からこっそり弟子を見守るチルノ師匠。

「……合格だ妹紅。よくやったな。チルノもお疲れ様だ。さ、妹紅よ？お前も今日から正式にうちの従業員だ！」

笑顔で次郎が祝福する。師弟は号泣しなら抱擁を交わす。

「な、ならさ？次郎さん……一緒に店に立てるな？」

「ああ、そうだな」

「ふふっやったぞ……なぁ次郎さん、他人が見たら、えと、なんだ、その、夫婦って間違えられたり…ごにょごにょ……」

「ん？」

「なっ、なんでもないよ！わはははは……はぁ」

漸く次郎と並べる嬉しさに、危険な妄想をする妹紅だったが、世の中そう甘くはない。

「喜んでるとこ悪いが妹紅よ、お前さんに店主からの命令がある」

びしっと妹紅を指差す次郎。

「へっ！？は、はい」

怪訝な表情の妹紅。にやりとあくどい笑顔の次郎。

「あ～しばらく俺は泊まり掛けで出掛ける。ついてはチルノ店長代理の指導の元、平店員藤原妹紅くん、しっかりと仕事に励みたまへ

！！チルノ店長代理、後は任せた！」

「わかった！！あたいに任せなジロ！！」

ドン！と勇ましく胸を叩くチルノに満足そうに頷いた次郎は、じゃ行って来ると一声のこし、足元に開いた隙間に消えた。にゅっと出てきた白い手が「ばいばい」と振った瞬間、隙間は消えて無くなった。

チルノも笑顔でばいばいしている。

「え？え！？えええええええええええええええええええええええっ！！！！！」

事態が飲み込めてない妹紅の叫びが煩くこだまする。

「ち、ちち、チルノ店長代理！？どういう事！！？」

「ん～？えっと、ジロはユカリとめいかい？と言うとこに旅行に行くと言っていた。昨日の昨日にジロがあたいに言った。あ、モコにこれ渡せと言ってた。はいモコ」

かさかさとチルノは懐から紙を一枚だして茫然自失の妹紅に渡した。彼女がそれを読む。

妹紅の肩がプルプルと震え、背中から炎が吹き上がった。

「あの馬鹿次郎ぉ！！謀ったなぁ！！！ちっくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

喚く妹紅の手から手紙が落ちた。そこにはこう書いてあった。

『藤原妹紅殿、あの時はよくも色仕掛けでやってくれたね？これは意趣返しだ！チルノ”店長”代理と一週間ほど頑張ってくれたまへ。ああ、僕は綺麗なお姉さんと旅行行ってくるから。土産を楽しみにな？ではあでゅ～♪　あなたの次郎より』

結論、現実は非情である。

――東方御伽草子――

「なぁ八雲の。物凄くヤバい場所に連れてこうとかしてないか？って、ひぃぃぃ……また人魂が通り抜けてったぞっ！！」

と、次郎が騒いでいるのは置いといて、現在八雲紫と次郎は空を飛んで移動していた。八雲紫の隙間を使えば一瞬で目的地につけるのであるが、彼女曰くそれでは旅行の風情がないから駄目だと言う。

だがそもそも次郎側は旅行なんて思ってはいなかった。八雲紫が何やら畏まって友達に会ってほしい、ただ遠い場所だから泊まり掛けだと言われただけだ。

だが、気が付いたら風情のある男女旅行的な雰囲気になっていただけだ。どうしてこうなったと次郎は思うが、横で満面の笑みの八雲紫を見れば、それは野暮かなと流されるのが次郎なのである。

取り敢えずは彼女と、彼女の友達とやらが住む館へと向かっているのだ。ただ、その目的地とやらが建っている場所が問題なのだ。

その場所とは冥界。

死人が住まう幻想郷の僻地である。次郎がこんな場所に住んでいる者などいるのか？と訊ねると、居るわよ幽霊がと普通に返された。むしろ何言ってんの？と言わんばかりの八雲紫の表情が、非情に勘に触った次郎である。

「これから行く場所は、白玉楼と言う場所よ。そこには大きなお屋敷があって、そこの主人が西行寺幽々子と言うの。私の……凄く古い友人なの」

そういって八雲紫は顔から表情を消した。

「白玉楼……白玉楼ねぇ……」

次郎は相槌と言うには曖昧な口調で呟く。

「”白玉楼の人となる”と言う大陸の故事成語があったな確か……。なんだったかな、そうだ、文人が死んだら天帝の使いがやってきて、白玉楼に召しいてあんたの記を書くことになったとか……よくわからんが、きっと凄い爺さんが待ち構えていそうだな」

次郎は記憶の引き出しを開けては見たものの、うろ覚えだったようできな臭い表情でそれを引っ込めた。

「お爺さんではなく、美しい少女よ？でもちょっと訳ありでね。特に何かして欲しい訳じゃないけど、ただ他愛のない話でもしてくれたらいいわ？」

くすりと笑った八雲紫は、先ほどまでの真剣な表情は消してしまった。そんなある種達観仕切ってしまったような佇まいの彼女を見つめ、次郎は充分お前さんも少女だよと思った。まぁそれはあくまで見た目だけだがね――と言ったら怒るだろうなと次郎は微妙な笑みを浮かべる。

「なあに？含み笑いなんて気味が悪いわ？」

「ん？相変わらずお前さんは綺麗だねって思ってたところさ」

「あら、うれし……でも誤魔化された気がするわ？」

「いい女ってものは、男の可愛い嘘を知ってて騙されてくれるもんだ」

「そういうものかしら？」

「そういうもんさ」

軽口を飛ばしあいながら飛行する二人に白玉楼の全景が見えてきた。次郎はふと止まり、その場に浮いたままそれを眺めた。

「どうしたの？急に止まったりして？」

隣に居たはずの次郎が動かなくなり、怪訝な表情で八雲紫は振り返る。

「ん……なに、素晴らしいなと思ってな。こんな立派な建物、俺は見たことが無いな。八雲には違和感無いのかも知れないが、普通の人間でしかない俺じゃ圧倒されてしまう。俺はこんな不思議な紫色の空は見たことないし、その真ん中に建つ白玉楼は異様に溶け込んでいる。冥界とはよく言ったものだ。確かに生を感じられない。だが、素晴らしく綺麗だ」

次郎が見ている景色は摩訶不思議である。紫色の空に人魂が飛びかい、空気は止まったかのように揺らぎは感じられない。これらを囲むように山々があり、まるで水墨画をそのまま写したようだ。そしてそこに溶け込んでいる白玉楼。

巨大な建物ではあるが、不思議と自己主張は控え目に見える。つまり、全てが計算されたかのように――冥界と言う一枚の絵のように必然としてそこに存在しているのだ。

そうして圧倒されたまま茫然と佇む次郎を、くすりと微笑んだ八雲紫は彼の手を取って着地した。

二人の目の前には冥界の入り口、白玉楼の立派な四脚門が建っている。その横に一人の少女がこちらを見てたっていた。

「失礼、こちらは白玉楼です。何かご用でしょ――あ、八雲様？珍しいですね、門からいらっしゃるなんて？」

白玉楼の門番であろう少女が八雲紫と言葉を交わす。話し振りからすると、彼女は普段は隙間で出入りしているようだ。

「ふふっ、今日は幽々子に紹介したい人を連れてきたのよ。だから彼に白玉楼の素晴らしい庭園を見せてあげたくてね？」

「それは嬉しいです！是非じっくり見てほしいです！あ、えっと……」

次郎の前に少女が立つ。艶のある銀色の髪に特徴的なサイドリボン、緑色のフレアスカート、小柄な体格と見た目は美少女と言う体である。だが彼女が異質なのは帯刀している所だ。背中に背負うようにしているのは、腰だと長刀を引き摺る事になるからだろう。

「次郎、紹介するわね？彼女の名前は魂魄妖夢。人間と幽霊の混血で半人半霊よ。彼女は白玉楼の庭師であり門番でもある。要はお庭番ね。で、妖夢？彼は次郎。能力持ちだけど人間よ。元外来人で今は人里の名物屋台の経営者よ」

八雲紫は二人を引き合わせる。

「次郎様、魂魄妖夢です。宜しくお願いします。次郎様？次郎さ、みょん！？にゃにゃにゃにゃ！！？」

次郎に自己紹介をする妖夢だったが、物憂げに彼女の周りを漂っている白いモノを眺めていた次郎が、突然白いモノを突き回し、しまいには抱き付いたのだ。

「じじじじ次郎さまぁ！やめ、やめめてくだひゃい！それは私の半身ですぅ！ひゃあ！はは破廉恥ですよぅ！！」

何やら妖しく悶える妖夢だったが、次郎は何処吹く風だ。あまつさえ頬擦りしている。

「なんでだ……ひんやりして気持ち良いぞ？」

「ちょ次郎、離したげて！それは彼女の半身だからちゃんと感覚もあるのよ？」

普段冷静な八雲紫も慌てている。

「ちっ…仕方ないな……」

「は、はふぅ……」

渋々妖夢の半身を離す次郎だが、どこか残念そうだった。息も絶え絶えな妖夢にしたらたまったもんじゃないだろう。

「あ、あの、気をつけて欲しいです次郎様……そういう行為はまだ早いです……はい…」

何やらもじもじと消え入りそうな声で何やら呟いていた。次郎としては、妖夢の半身をどこかで見覚えがあると眺めていたのだ。そして、ふよふよと動く様に何かがそそられた。

つつく

柔らかい……

つつく

痙攣する……

もう駄目だった。気が付いたら抱き付いて頬擦りしていた次郎だった。ペコペコ謝る次郎に苦笑いする妖夢だが、何とか許して貰えたようだ。

「さ、妖夢？幽々子の所まで案内してちょうだい？」

「はい、では此方へどうぞ」

門が開き、歩みを進める妖夢と八雲紫。だが次郎は動かない。何やら思案しているようだ。

「次郎様？」

「次郎？どうしたの？」

二人が声をかけるが次郎は腕組みして目を閉じている。すると突然次郎が叫んだ。

「ああ！！ア〇ヒビールのビルのオブジェだ！！いやぁ、思い出せ

なくて気持ち悪かったんだ。あーすっきりしたわ！さ、行こう行こう！」

一週間溜め込んだ宿便がでた後のように清々しい顔で歩きだす次郎。

「ア〇ヒ」

「ビール……？」

後に残された八雲紫と妖夢はぽかんと顔を見合わせるのだった。

つづく

登場人物

新しい従業員、藤原妹紅

店長代理、実は出来る女、チルノ

ＰＥＡＣＥ！！射命丸文

綺麗なお姉さん、八雲紫

八雲紫の親友、西行寺幽々子

白玉楼の門番、魂魄妖夢

名物屋台の店主、次郎

人は見かけに因らぬもの　前編（後書き）

いつもタイトル前に小話を書いて、タイトル後に本編と言う流れですが、僕のもこたん愛が大きすぎるのか、小話レベルで収まりませんでした。反省はしてますが、後悔はしてません。

チルノ……なんか魔改造されました。？ではない匠チルノとなりました。

以下一話で収まらなかった言い訳

幽々子様のキャラが定まらなかったが理由です。

フードファイターキャラにしたくなかったので、色々いじったらどんどんまとまらなくなってしまいました……。なので後編をいまこねくり回してます。

幽々子好きなんだけどね、逆に考え込んでしまった。

基本白玉楼から出ないであろう幽々子様。みょん以外の使用人幽霊は彼女にどう接しているのか？

幽々子は西行妖を眺めて、日がな静かに暮らしているのか？

生前の記憶の無い見た目は薄幸の美少女であり、幽霊となってからはほわんとしたイメージ。

この人の日常が想像つかないんですよね。

なので今、非常に悩んでいます。

可愛くかけたらいいなぁ。

最後に次郎が叫んだアサヒビールのビル発言ですが、関東に住んでない人には分からないかもなので解説します。

実在のビルでして、浅草にあるアサヒビール吾妻橋ビルと言う名前です。

金色で、まさに妖夢の半霊と言った形状のオブジェクトがビルの屋上に乗っています。

「アサヒビール　う○こ」でググると見れます。

でも実際は、炎をイメージしたオブジェクトらしく、有名フランス人デザイナーの作品らしいですよ。

僕にはう○こしか見えませんが（＾ｏ＾；

現在は品川に住んでいるので縁は無いのですが、昔は浅草に住んでいたのでうちのマンションからう○こが見えました。

仕事で疲れてふと窓を見るとそこには金色に輝くう○こ……シュール過ぎます。

以上

後編頑張ります。

人は見かけに因らぬもの　後編（前書き）

後編です。後書きにアンケート書きました。良かったらご協力お願いします。

人は見かけに因らぬもの　後編

ぱちぱちと赤い火花を散らし、七輪の中で炭が赤々と燃えている。それをじっと見ている面々の顔も赤い。

次郎は火の番として、いま赤々と燃え盛る炭が落ち着き、所謂置き火になるのを見守っている。

炭の火力とは、物を焼くには少々強過ぎる。そのために炭の周りがある程度焼け、芯のみがじわじわと燃えている状態まで待たねばならないのだ。そうしないとあっという間に食材が焦げてしまう。

後数分で大丈夫であると感じた次郎は、なんとなく白玉楼の縁側をちらりと見た。

そこにはこの館の主人である西行寺幽々子と、その盟友の八雲紫が並んで座り、次郎の姿を眺めていた。

西行寺幽々子は次郎に対面した際は洋装であった。だが今は和服に着替えている。淡い藍色の艶やかな小紋だ。染めも派手すぎず、さり気なくあしらわれた桔梗の花がいっそ涼やかで、幽々子の雰囲気に艶を与えていた。

ただ、頭にある不思議な紋の三角の布が、彼女が既にこの世の存在ではない事を主張してるかの様だ。

因みに次郎が、幽々子の三角布は死に装束であり、その由来は鬼の角を表わしているらしいと言った。さらに幻想郷には鬼がいるなら鬼が死んだらどうするんだ？と言い出した。結果は八雲紫も幽々子

も妖夢も押し黙り、何やら微妙な空気になってしまった。そんな次郎は幻想郷の常識は謎であると首をかしげた。

閑話休題

和服に着替えたのは幽々子だけではなく、八雲紫は幽々子だけずるいとごね出して、隙間から立派な打ち掛けを取り出し、あまりに派手過ぎてどこの花嫁さんだと次郎は呆れた。

そもそも何故に和服に着替えたかと言うと、次郎のせいである。

次郎の普段着は少し変わっており、白いシルクに刺繍がふんだんにあしらわれたカンフージャケットのようなものに黒い麻生地のパンツ、それに無地の紬を自分で染めたものを引っ掛けている。

それを見た幽々子は「あら、綺麗。私も着たいわ～」と自己紹介も放り出し、館の中へと消えていったのだ。唯我独尊、全くのマイペース。天真爛漫が服を着ているようだと次郎は呆れたものだ。

八雲紫はと言えば、諌めるなり苦笑いするかと次郎は思ったが、「あ、私も」と隙間に消え、残された次郎と妖夢は微妙な空気に顔を見合わせたのだった。

とにかくそうして幻想郷の重鎮二人の行動を、苦笑い出来る余裕が自分には身に付いたのだと、的を射てるのかそうでないのか分からない自信を深め、苦笑いで二人の美女を待つ次郎だった。

妖夢の「うちの主人が申し訳ありません」と言う言葉が虚しく冥界の景色に消えていった。

――東方御伽草子――

和服美人二人が見守る中、何故に次郎が炭を焚くのか？それは秋の幸を熱々のまま楽しみながら、それを肴に酒宴と洒落こもうと言う八雲紫の提案からだ。

八雲紫は最初、隙間を使って外の世界で買い出しをしようと言ったのだが、次郎が「いっそ松茸が生える山に繋いで掴み取りとか出来ないか？」との提案に、一同はぽんと手を打ち実行したのだ。

場所は丹波の赤松が生い茂る里山。山の持ち主が下草や落葉をきちんと手入れしているようで、八雲紫の隙間を開き、あちこち移動させた所、まさに入れ食い状態。小一時間で竹籠二つに山盛りという有様だ。

山の持ち主は涙にくれただろうが、ここは幻想郷である。交通事故だと思えと次郎は笑った。

妖夢など夢中になって松茸を狩り、あまりのはしゃぎように次郎は見た目通りのあどけなさだと言い、それを幽々子が更に囃し立てると彼女は拗ねてしまった。

ぷんぷんと可愛らしく怒りながら、妖夢は松茸を調理すると籠を担いで厨房に消えて行った。

少し大人気なかったと慌てた次郎は、自分も厨房を借りると幽々子

に許可を貰い、妖夢を追い掛けるのだった。

厨房に辿り着いた次郎は、白玉楼の厨房の見事さに感嘆のため息を漏らした。二十畳ほどの広さに六つの釜戸。水場も広く、作業台も大きく、何人もの料理人が同時に働けるスペースがあった。もっとも現在居るのは妖夢ただ一人であるが。

「妖夢さん、からかってごめんな？許してくれやしないか？」

頬を掻きながら気まずそうに言う次郎。

「……いえ、怒ってません！どうせ子供っぽいですから！」

どう見ても怒っている妖夢は、次郎を見もしないで手を動かしている。だが実際、彼女の容姿はせいぜい小学校の低学年くらいにしか見えないのであるが。

ふう、と溜め息一つついた次郎だったが、意地になった子供にしつこくすれば逆効果だと思い、取り敢えず料理に取り掛かった。

土瓶に薄い出汁を張り、酒と塩で味を整え松茸の浮かべる。香りを楽しむ料理である土瓶蒸しだ。

土鍋では同じく薄い出汁に薄口醤油で味をつけたもので飯を炊く。炊き上がりに”これでもか！”と言う位の松茸を薄切りにしたものを乗せ、蓋をして蒸らす。松茸ご飯だ。

後はシンプルに天ぷらにした。真鱈の白子があれば最高なのにと思いながら、次郎は出来上がった料理をお盆に載せようとしたが――妖夢がいつの間にか次郎の肩口から覗き込んでいた。

「……どうした？涎が垂れているぞ？」

「みょん！？こここれはべべべつに…むぐぐ…」

顔を真っ赤にして慌てる妖夢の口を布巾で拭き取る次郎だった。

「取り敢えず怒ってなくて良かった。さぁ運ぶから手伝ってくれ…
…みょん」

「むむっ！次郎様は意地悪です！」

口調を真似され、ぷくりと頬を膨らます妖夢に、やはり餓鬼じゃないかと心ひそかに思う次郎だった。

「……で、覗き見は楽しいのかい？お二人さん？松茸尽くしは妖夢と食べる事にしようか？」

次郎と妖夢の背後に密かに開いていた隙間が無音で閉じた。次郎の言葉に出歯亀していた妖怪の重鎮は冷や汗をかいたのだった。

しばらくして白玉楼の客間は、次郎の料理と妖夢が用意した酒で華やかになった。次郎は仕上げだと七輪で松茸を焼き、漸く卓についたのである。

「では、幽々子と次郎の顔合わせと、私たちのこれからの友情を祈り、乾杯しましょ。乾杯！」

八雲紫の掛け声に、皆は静かに杯をかかげた。ふぅ、と言う美味なる溜め息に、一同は静かになった。そしてそれぞれ料理に手をつけ、

また無言で食する一同。人は美味いものを口にすると、逆に無口になるものである。それは妖しだとて変わらないようであった。

腹がくちくなり、皆の食すペースが遅くなってやっと会話が進みはじめた。

「次郎、貴方の料理は本当に美味しいわ。ねぇ、幽々子？」

「そうねぇ～いっそ白玉楼で料理人をしてほしいわ～」

「次郎様のごはん、とっても美味しいです！」

大絶賛のお褒めの言葉に、珍しく得意満面な次郎だった。料理を作るものに”美味しい”の一言は、最高の労いである。

そうして酒宴は続いていく。夜の帳が降りてきて、淡い月光が障子を開け放たれた部屋に注ぎ込む。その為灯りをともさずとも、それなりに明るい。

騒ぎ疲れたのか、幽々子も八雲紫も静かに手酌で飲んでいる。妖夢は酔いつぶれ、畳の上で次郎の紬を被り幸せそうに眠っている。

ふと次郎が幽々子を見ると、庭の方を静かに眺めていた。その表情はどこか淋しげで、先ほどまでのふわりと愉しげな彼女の印象は消えていた。

次郎は酒を呷りながらじっと幽々子を見ていた。二人は卓を挟んで向かい合う位置に座っている。頬杖をつく幽々子は、清楚だった見た目は鳴りを潜めてどこか妖艶だ。月明かりは女の魅力を増すようだ。

「幽々子さん、どうしてそんな悲しげなんだい？」

「ん、別に悲しい訳じゃないの。ただ空虚なだけ。私には思い出せる過去が無いわ。在るのはこうして繰り返す今だけ。退屈な毎日だけなの」

くすりと微笑いながら、幽々子は次郎を真っ直ぐ見つめる。次郎の隣で静かに飲んでいた筈の八雲紫は、いつしか座ったまま眠っていた。首が辛そうだなと次郎は膝に八雲紫の頭を乗せてやる。幸せそうに呻いて、また微睡んでいる。

「思い出せる過去か……それは決して幸せとは限らない。受け容れたくは無い過去もある。だが結局、人は過去を忘れなければ生きていけないんだ。少なくとも幽々子さんには妖夢や紫がいるだろう？今過ごしている時間も、明日には過去にある。今を大事に生きる事は、同時に明日の過去を慈しむのと同じなんだ。う…ん、柄じゃあないな」

苦笑いしながら次郎は言った。自分ほど過去に縛られている人間は居ないと考えているからだ。

「今を大事にね……そう、そうかもしれないわね。紫が心を許す貴方の言葉なら信じられるわ。ねぇ次郎、横に行ってもいい？」

「……ああ」

ふわりと立ち上がり、幽々子は次郎の隣に座った。肩にしなだれかかった幽々子の軽さに少し驚き、だが次郎は何も言わずに酌をする。

「貴方、不思議な人。つい寄りかかりたくなる。ごめんなさいね」
「別に構わない。美人の頼みだからな」
「ふふっ、嬉しいわ。ねぇ次郎、またこうやって一緒に呑んでくれるかしら？」
「ああ、友達だからな。またこうして呑むのはおかしかないだろうさ」
「そうね、お友達だものね。また呑みましょう」
二人は少しだけ笑い、そしてまた静かに呑む。夜の音を聞きながら。暫くして幽々子もまた眠りに落ち、次郎の膝を枕に幸せそうな寝息をたてはじめた。次郎は悪くないなとくすりと笑い、一人静かに呑む。
「……次郎、ありがとう。幽々子と話してくれて。本当に大事な友人だから嬉しいの」
いつの間にか目を覚ましていた八雲紫が次郎を見上げていた。
「なぁに、今や幽々子さんも友人だ。友人の愚痴を聞くのは苦にならん。さ、もう少し寝とけ。相変わらず疲れた顔をしてる」
「はぁい」
そういって八雲紫は猫のように身体を丸め、改めて次郎の膝で眠った。

静かな白玉楼の夜は更けていくのだった。

さて、ここは人里にある名物屋台「喰いものや」である。今日もここは繁盛していた。

カウンターには慧音や霊夢、魔理沙に鈴仙といつもと変わらぬ常連客で賑わっている。いつもと少しだけ違うのは、カウンターの中に次郎が居ないことと、チルノが代わりに店を廻していることだ。その横で妹紅が忙しく注文を聞いている。

「なあ妹紅、次郎は今日はどうしたんだ？」

「そうよ！次郎さんを出しなさいよ。この前のお礼がしたかったのに」

慧音は勿論、霊夢まで不満気に妹紅に問いかける。だが妹紅は不機嫌を露にし、睨み付けるように言う。

「……居ないよ次郎さん。一週間は帰らないとさ。隙間妖怪に拉致されて旅行だとよ。ったく…漸く魅惑の夫婦屋台とか思ったのにさ……」

忌々しそうに妹紅は吐き捨て、かぶがぶと酒を呷った。一同は何か言いたげだったが、今の妹紅は危ないと見てみぬふりを決め込んだ。だが、チルノの目がキラリと光る。

「モコ、今のはちゃんとつけといたからね！きちんと部下を叱るあ

たいったら最強ね！」

「し、師匠……」

ふんぞり帰るチルノに頭の上がらない妹紅だった。どうやら修行から以後も師弟関係は続いていたらしい。そんな二人の関係に、鈴仙は自分と薬師の師匠との関係をだぶらせ遠い目をした。そこへ――

「次郎はいるかしら？一番仲が良い”友達”の私が会いに来たわ！」

やってきたのは紅魔館の主、レミリア・スカーレットであった。側には瀟洒なメイド、十六夜咲夜が控えている。

「ねぇ、次郎は？早く次郎を出しなさい！」

無い胸を張りながら妹紅を指差すお嬢様に、妹紅の中で何かがキレた。

その日、何故か喰いものやでは、朝方まで弾幕ごっこが繰り広げられたと言う。なんだかんだで幻想郷は今日も平和だったという。ただし破損した部品の修理代は、チルノ店長代理により妹紅のつけになっていた。

「次郎様、早く帰ってきて下さいませ……」

愛する主の子守に疲れ切った咲夜が、夜空の向こうの次郎に呟いた。

登場人物

誘拐者、八雲紫

白玉楼が主、西行寺幽々子

子供っぽい魂魄妖夢

今回はいい男、次郎

店長代理、チルノ

キレる女、藤原妹紅

出番が少ない上白沢慧音

私だってお礼くらい言うわよ！博麗霊夢

影が薄いんだぜ…霧雨魔理沙

妹紅に不思議な親近感、鈴仙・優曇華院・イナバ

次郎の一番のお友達（自称）レミリア・スカーレット

幻想郷一番の苦労人、十六夜咲夜

人は見かけに因らぬもの　後編（後書き）

今回は幽々子さんを中心にでした。

二次とかにも色々幽々子さんの話は作られてますが、この作品では敢えて描写しませんでした。

ただ、酒宴の最中に幽々子本人と紫によって語られた筈です。

まぁ、たまには弱さを見せたかった幽々子さんと、寄り掛かられる次郎ではあるが、彼もまた過去に想いは残している。

そんな二人のおとななな傷の舐めあいを書きたかった！でも書けなかった！描写不足が否めない。

ただ毎回五千字縛りで書いているので諦めました。

次回からもう少し頑張ります。

よければ感想を頂けると嬉しいです。

そしてアンケート

次に絡むのは……

？守矢神社√

？永遠亭√

?:聖蓮船√

?:地下いけコラ√

?:馬鹿野郎、妖怪山いって椛モフれや。あ、ついでに文も

?:自由枠（この嫁と絡めやコラ）

?:あたいったらサイキョーね！！！

以上、よかったら協力お願いします。

奔放自在、行楽の秋　その？（前書き）

―お知らせ―

次に絡むのは…と言うアンケート内容でしたが、結果は。

？守矢神社√が２票

？永遠亭√が２票

？聖蓮船√が４票

？地下いけコラ√が２票

？馬鹿野郎、妖怪山いって椛モフれや。あ、ついでに文も…が１票

？自由枠（この嫁と絡めやコラ）が１票

？あたいったらサイキョーね！！！が１票↑！？

と、なりました。？に入れた愛すべきおバカさんに敬意を表しつつ、アンケート、これにて〆切りとさせていただきます。

たくさんの投票ありがとうございました。

と言う事で、聖蓮船√で参ります。

原作を紅魔郷～永夜抄までしかやってない私に対する挑戦ですね、

わかります。
では本編をどうぞ

奔放自在、行楽の秋　その？

ここは人里の外れにある次郎の自宅である。周りには他の民家は無く、木々に囲まれた閑静な場所だ。

山や森は赤々と色付き、秋の深まりを、朝晩の冷え込みは冬の予感を感じさせる。今年の幻想郷は畑から取れた作物は豊作であったが、今は冬の葉物以外は土色を晒し、物悲しさを醸し出す。

庭に面した障子を全て開け放たれた次郎の家は、今、数人が惚けて茶を啜っていた。

茶の間の卓にはこの家の主人である次郎と、彼の屋台で従業員をしているチルノと藤原妹紅、そして妹紅の親友である上白沢慧音が寛いでいた。

四人は特に会話もなく、なんとなくこの静かな秋の日を楽しんでいた。ただ、ぼりぼりぽりぽりと不思議な音が、煩い程に辺りに響いている。

「……この沢庵、お茶請けにと思ったが、けしからんな……」

沈黙を破り次郎が呟く。

「確かに……とまらんぞ次郎。帰りに少し貰って帰ってもいいか？」

「ああ、少し漬けすぎたからな。持って帰れ。ついでに寺子屋の飯時に生徒に振る舞ってくれ。ああ、巫女にもお裾分けするか。チルノ、後で届けてやってくれないか？」

次郎は慧音に頷きながら、チルノに問い掛けた。

「むぐむぐ…いいよ。ジロ、大ちゃん達にもあげてもいい？」

「ああ、お菓子も一緒に持ってけ。ああ、巫女にお菓子は見せるなよ。食われるぞ？」

「わかった！あたいに任せろ！」

「頼むなチルノ。で、妹紅は何をしている？」

チルノと話していた次郎だが、その後ろでこそこそと何処かへ行こうとしていた妹紅を制止する。

「うぐっ……沢庵飽きたから野沢菜漬けを食べたいな～なんて……だめ？」

「はぁ……ちゃんと皆のも切ってこいよ？」

「やった！行ってきま～す！」

食欲の秋とはよく言ったものだ。

冬になれば食物の収穫も、山の実りもない。まして幻想郷には海もない。現代地球のように電化製品なんかある訳もない。

つまり、保存食を蓄えておかなければ冬は越せないのである。次郎はたくさんの漬物を作り、一家総出で川で捕った鱒の類を大量に燻製にした。干柿や干芋を作り、凍み芋も作るつもりだ。

こうして人は季節に合わせて生きていく。自然とは過酷なものなのだから。

「食欲の秋ねぇ……太らなきゃ良いけどな？お嬢様達よ」

一斉に目を逸らす女性陣であった。

――東方御伽草子――

きっかけは妹紅のふとした言葉から始まった。それはある晩何時ものように慧音が喰いものやに飲みに来て、妹紅と話をしていた時だ。二人は親友であるから話も弾む。

慧音は寺子屋の子供達に世間を見せるために遠足に行かせたい。だが、現実的に厳しい等とため息をついていた。

流石にそれは難しいと、次郎や妹紅は同調した。幻想郷にはマヨヒガ、紅魔館、白玉楼、永遠亭、妖怪の山のようにパワーバランスを担う要所がある。それらは人間が関わるには荷が重すぎる。次郎の様な存在は例外でしかないのだ。

だが博麗神社や守矢神社ならば、神様がいるのだ。（博麗に関しては特殊であるが）なら神社とは人間の訪れるべき場所であり、慧音としては生徒達の情操教育の一環として最適と感じたのである。

そう思った所で実現は中々難しいとボヤく慧音と言う訳だ。

そんな話の最中、妹紅はなんとなく思案気な表情で黙り込んだ。訝しく思った慧音が”どうしたのだ？”と訊ねた所――

「そうだ次郎さん、せっかくの紅葉の季節だ。息抜きにどこか行楽に行かないか？」

と、言い出した。それを聞いた次郎は、暫く考えた後にこう言った。

「そういえば開店以来、休みらしい休みは取ってないな……いっそ皆で大人の遠足にでも行くか？」

と、次郎にしては珍しく乗り気で言った。それを聞いた妹紅やチルノは興奮し、あっという間に本決まりとなったのだ。慧音は寺子屋を休めない為、悔しそうに断念したが、チルノは妖精仲間を誘うとはしゃいだ。

客として居合わせた鈴仙は、仕事がある為参加出来ないと落ち込んでいた。次郎はそんな鈴仙に”何か土産でも持ってくるよ”と言い、鈴仙はにんまりとしていた。

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜と門番の紅美鈴もその横に居て、美鈴は”仕事が休めたら行きたいのに……うぅ……”と、半ば逃避のようにボヤき、”お嬢様に頼んでみろ”と次郎に言われていたが、頼むだけ無駄ですと泣いていた。

静かに飲んでいた咲夜は、突然意味ありげな笑顔を次郎に向けたと思ったら、次の瞬間消えていた。能力を使ったのだろう。次郎はなにやら寒気を感じ、”紅魔館の人間に、出発日を教えたらダメ”だと朧気に考えたのだった。

そんなこんなではからずも”喰いものや社員旅行”の様相を呈してきたイベントが、突発的ではあるが来週末に決定したのだった。

幻想郷、とある某所

「ねぇ、咲夜？当然私は行くべきよね？」

赤より紅い血の色の如き壁に囲まれた玉座の間、そこに鎮座する夜の盟主。側に控えるは完全で瀟洒な従者。

「当然でございますお嬢様、いつもの二回りは大きい日傘も既に準備してございます……」

銀髪の従者は無表情であるが、崇める主人に十全の忠誠心を滲ませ答える。

「ふふっ、周到なお前が好きよ？」

主人は八重歯と言うには鋭すぎる犬歯を剥き出しにして、その顔に獰猛な嗤いを浮かべた。

「勿体のうございます」
従者は恍惚とした表情で膝まずく。
「……咲夜、おやつにバナナを入れたかしら？」
「もちろんでございます」
「……咲夜、イチゴの飴はどうかしら？」
「当然、真っ先に……」
「流石よ、咲夜。それじゃ…「やわらかキャラメルも当然入れてございます」
「じゃあ弁当には？」
「タコさんウインナーを……」
「ならば咲「ウサギさんリンゴも当然、入れてございます……」
「ふっふっふっ……」
「クスクスクス……」
幻想郷一の苦労人、十六夜咲夜の真骨頂がここに極まった。

「……入りづらい」

門番の呟きがどこか切ない紅魔館の一コマであった。

「さぁ、点呼をとるぞー！チルノ！」

人里の寺子屋の前に集まる人だかり、その中心で次郎が叫んだ。今日は遠足の日である。

「はい！」

ぴょんぴょん跳ねながら、全身で喜びを表すチルノ。

「妹紅！」

「……あいよ」

トレードマークの赤いモンペに手を突っ込む藤原妹紅。若干やさぐれた態度なのはご愛嬌。素直ではないのだ。但し顔は微妙ににやけている。

こうして次郎の屋台メンバーに大妖精やリグル、ミスティア等が次々と点呼に答えている。

「さて、全員揃ってる……んんん！？レミリア…スカーレットさん？」

「仕方ないから来てあげたわ！」

点呼が終わったと安心した次郎の視界に、吸血鬼のお嬢様とやたら大きい日傘を持ったメイドが目に入った。お嬢様は偉そうな言葉を吐きながら、満面の笑みでビシーッと手を挙げている。パンダのアップリケがキュートな手縫いのリュックサックと、袈裟がけにかけた真っ赤な水筒が愛らしい。

「（妹紅、チルノ、誰かレミリア誘ったか？）」

「（あたいは誘ってないよ？）」

「（次郎さんが誘ったんじゃないのか！？）」

慌てた次郎は、妹紅とチルノにひそひそ問い質すが二人はぽかんとしている。

「（い、いや、俺じゃないが……なんか本人が妙にやる気出してるし連れてこう…）」

「「（うん……）」」

と、刹那の作戦会議は終了し、調和と言う和を選択した面々であった。

「や、やぁレミリア。よく来てくれたな？咲夜は……ご苦労様？」
「次郎、親友の為に仕方なく来てあげたわ？どう、嬉しいでしょう？」
「ああ、こんな朝からお前さんに会えるとは意外だが、取り敢えずよく来てくれたな」
次郎は差し障りの無い会話を交わし、若干怯えた表情のちびっこ組に大丈夫だと言う目線を飛ばした。そして咲夜と”お互い年頃の子供を抱えて大変ですわね”的な、朝の幼稚園で親達がするような会話をこっそり話す次郎であった。
兎にも角にも、若干の混乱を見せたが、こうして秋真っ盛りの幻想郷を歩く遠足は動きだすのだった。
「よし、点呼が終わったところで今日のスケジュールを発表するぞ。お前さん達は妖しや妖精、そして吸血鬼など普段は飛んで移動するのが当たり前だ。それを敢えて歩いて幻想郷を巡り、肌で季節を感じて、それを皆で分かち合おうと言うのが今回の趣向だ。華やかに色付いた紅葉を愛でながら、怪我をしないように楽しもうじゃないか。尚、トラブルはごめんだ。道中に別の妖しと出会っても、極力衝突はしないように。後、全員分の弁当とおやつは用意した。まぁ楽しみにしててくれ。じゃあ行くか」
次郎の宣言を持って、一同は人里から歩を進め――
「なぁ次郎さん、ところで目的地はどこなの？」
まだ遠足は始まらない。妹紅のしごく当たり前な質問により。

「ああ、言ってなかったか。紅葉を楽しみながら、守矢神社を目指す。きっと山の上から見渡す景色は最高だぞ？じゃあ行くか。のんびりな」

妹紅を始め、一同は思った。守矢神社を目指すと言う事は、妖怪の山を登ると言う事だ。次郎は分かっているのか？妖怪の山に住まう天狗達は酷く排泄的な事を。縄張り意識が高く、それを侵す者に容赦をしない事を。

幻想郷の管理者は言った。全ての存在を受け入れる、と。そしてこうも言った。それは残酷であると。

酷く抽象的な表現であるが、そうとしか言いようが無いとも言える。つまりは外の世界のように理性的に他種族が共存する為の縛りが無いのだ。

とは言っても、外の世界では人種の違う人間と、自然に住まう野生動物程度しか存在しないのだから当然と言えば、当然なのであるが。

だが幻想郷は様々な神々、妖し達、人間、妖精、月の民等、そもそも相容れない存在が混沌と共存する場所なのだ。つまり、理性的に共存すると言う前提が無いのだ。

天狗は天狗の。吸血鬼は吸血鬼の。妖しは妖しの。それぞれが存在意義を主張し、そして一切妥協はしない。極端な話人里を離れた人間が、野良の妖しに食われたとしても、それは食われた人間が悪いのだ。何故なら妖しにとって人間とは、ただの食糧でしかないからだ。但し、例えば狩られた人間の仲間が、それを許さずに仇と称し

てその妖しを殺しても構わない。何故なら狩られる妖しが悪いのだから。

つまり幻想郷とは、自由を約束された楽園ではあるけれど、絶対的な不文律として、弱肉強食の理があると言う事だ。そして唯一であり普遍なルールが――幻想郷の存続こそが、何よりも優勢されると言う事なのだ。故に、弱者には地獄である。それを称し、管理者たる女性は残酷であると言うのだ。

妹紅は更に思った。こいつ、何も考えてないなと。先頭をずいずい進んでいく次郎は、早速手頃な棒を拾い杖のように突き、ルーミアを肩車し、両腕にはチルノや大妖精、リグル等に懐かれ楽しそうだ。まるで家族サービスに勤しむ休日の父親の姿だ。

事実、次郎は何も考えていなかった。が、何かあってもどうにかなると考えている。今までそう生きてきたからだ。妹紅の心配を余所に、次郎は進む。紅葉麗しい妖怪の山へ。

（ま、次郎さんに襲い掛かる天狗がいたら、燃やせばいい事だ）

妹紅は人知れずにやりと笑い、先をゆく次郎の広い背中を見つめた。あの、どことなく頼りがいのある男の背中を。

さて、この不思議な集団の奇妙な遠足は始まった。はてさて一体どうなることやら。この続きは次回のお話……

登場人物

はしゃぐ引率者、次郎

背中を望む、藤原妹紅

ちびっこ隊代表、チルノ

ちびっこ隊員、大妖精

ちびっこ隊員、リグル

ちびっこ隊員、ミスティア

ちびっこ隊員、ルーミア

バナナはおやつ、レミリア

瀟洒な苦労人、十六夜咲夜

師匠が厳しい鈴仙・優曇華院・イナバ

門番は大変、紅美鈴

先生は忙しい、上白沢慧音

奔放自在、行楽の秋　その？（後書き）

寸どめ申し訳ない

言い訳ですが、聖蓮船のメンバーを二次作品でしか知らない為に、いま情報集めに奔走しとります。なんかあの作品のキャラ設定ぽくね？みたいなのは嫌なので＾＾；

いま書いてますが、ストーリーはある程度書けてますが会話で悩んでます。

自分の嫁だと思う方、アドバイスお待ちしています↑ォィ

しかし、むしゃくしゃしておぜうのカリスマブレイクしてしまった。反省はしてるが後悔もしてる。だって間が持たなかったんだもん♪

さて、頑張って続きを週末土日くらいでＵｐします。

いつも駄文に付き合っていただき、本当にありがとうございます。

奔放自在、行楽の秋　その？

守矢神社――妖怪の山の山頂近くに建っている神社である。そこには二柱の神様と、一人の風祝がいる。

一柱は風と雨を司る神様、八坂神奈子。

もう一柱は様々な祟り神達を束ねる土着神の頂点に君臨していた神様、洩矢諏訪子。

そして人間でありながら様々な奇跡を起こし、生きたまま人々の信仰を集めて現人神となった東風谷早苗。最も、現在は八坂神奈子の巫女を務めている。

そんな存在が住まう守矢神社であるが、近年この幻想郷に神社ごとやってきたのである。――であるが、いかんせん人が恐れて近寄らない妖怪の山にあるため、当然閑散としているのであった。

「神奈子様、今日も誰も来ませんねぇ」

境内の落ち葉を掃きながら、早苗がボヤく。

「そうだねぇ」

障子を開け放った部屋で肩肘を枕に横になる八坂神奈子が、気の無い空返事を返す。

「諏訪子様、どうにかなりませんかぁ？」

不甲斐ない主にため息をついた早苗は、もう一柱である洩矢諏訪子を見た。

「んんん……それより早苗、お腹が空いたよ。何か作っておくれよ」

ぎょろりと動く不思議な目玉のついた自慢の帽子を磨きながら、洩矢諏訪子が早苗にご飯を催促する。

きっと私は巫女ではなく、この妙に人染みた神々のおさんどんなのでは無いだろうか？いや、きっとそうだ。――心でこっそりと呟いた早苗は、竹箒に寄りかかりながら空を仰ぎ見るのだった。

「誰か参拝に来ないかなぁ……」

早苗の小さな呟きは、秋真っ盛りの幻想郷の空に吸い込まれた。

快晴の空の遥か上、いわし雲が連なっている。とんびがひゅるりと輪を描いた。

――東方御伽草子――

現在次郎ら一行は、次郎を先頭に魔法の森を進んでいる。チルノを

代表にちびっこ達は次郎にまとわり付き、それを羨ましそうに見やるレミリア・スカーレット。その従者である十六夜咲夜は日傘を構え、淡々とその職務を果たしていた。

妹紅は次郎と並んで歩き、他愛ない会話を楽しみながら、こんな穏やかな日常は贅沢だなと一人意味ありげに頷いている。

とにかくそうして、やたら賑やかな集団は、それぞれがそれぞれの遠足を満喫しているようだった。

――ある異変に咲夜が気が付く迄は……。

誰かさんが　誰かさんが　誰かさんがみつけた

小さい秋　小さい秋　小さい秋みつけた

めかくし鬼さん　手のなる方へ

澄ましたお耳に　かすかに染みた

呼んでる口笛　もずの声

小さい秋　小さい秋　小さい秋みつけた

次郎が歌いはじめた日本の童謡をチルノ達が真似し、それがいつしか大合唱となっていた。妖精も妖しも、吸血鬼も人外も何やら楽しくなり、腕を振っては笑顔で行進している。

だが、一人首をかしげている咲夜。彼女は先程から異変を感じていた。何故ならば――

人里から北にある妖怪の山が、最初は正面に見えていた筈が、それがだんだん右側に見えていた。暫くすると後方に位置を変え、現在は左側に見えている。

咲夜が感じた異変――それは簡単に言えば、一行は魔法の森をぐるぐる回っていると言う事だ。つまり、道に迷っているのである。

ただ悲しい事に、咲夜以外誰もそのことに気が付いてはいないのだ。誰しもご機嫌で笑顔の行進を続けている。この企画の責任者であり引率者たる次郎は、ご満悦で一行を率いているが、どうやら彼は性質の悪い方向おんちであるようだ。

幻想郷一番の苦労人、紅魔館のメイド長である十六夜咲夜は意を決して次郎に声をかける事を決めた。例えこの空気を切り裂く事になったとしても、だ。

何せ、出発して既に半日近く経過しているのだから――――

「次郎様、お楽しみのところ申し訳ありません。ですが、守矢神社どころか魔法の森を抜ける事すら出来ておりません。あの……道に迷われたのでは？……」

咲夜の控え目な進言だったが、彼女の鈴の音のような声が思いの外響き渡ってしまった。

「つけた～♪……えっ！？」

次郎が立ち止まる。必然的に一行の行進も止まる。

「ん……そう言えばおかしいな。随分腹も減ったし、そろそろ昼時だな。むぅ……どうやら咲夜が言う通り迷ったらしいな」

次郎は神妙な顔をして腕組みしている。方向おんちを指摘しないのは咲夜の優しさであった。

「ジロ、あたい、お腹空いた！」

「チルノちゃん、そんなはっきり言わなくても…」

「ジロさん、一休みしませんか？」

「その方が良いかも知れませんね」

「そーなのかー」

ちびっこ達は次郎を責める気は無さそうだが、どうやら彼女達も疲れを自覚したようだった。

「次郎さん、あの寺で一休みさせて貰わないか？レミリアも日陰の方が楽だろうし、茶も沸かせるでしょ？」

そういって妹紅が指差した先には、古ぼけた寺が見えた。

「と言うか申し訳ない、みんな。迷ったのは俺のせいだ。妹紅の言う通りあの寺で軒先を借りて、昼飯を食おう。すまんな」

ぺこりと一同に頭を下げ、次郎は恥ずかしそうに笑った。つられて一同も笑う。こうした不測の事態も、ある意味行楽の醍醐味なのかもしれない。

そうして一行は、古びた寺へと目的地を変えるのだった。

命蓮寺――聖白蓮が建立した寺だ。名前は彼女の弟からの命名である。古びたと言うのが正しい外観であるが、それは少しばかり理由がある。

この寺は元々船であったのだ。ある異変で使われた聖輦船（せいれんせん）と言う名のその船を、守矢神社の神様である洩矢諏訪子が均し、その場所に降り立ったのだ。それがこの寺の骨格となっている。

この寺には現在、聖白蓮を始め、毘沙門天の弟子である寅丸星、そ

の目付けであるナズーリン。聖輦船の先頭の村紗水蜜、見張り番の雲居一輪と雲山、天の邪鬼な封獣　ぬえ、寺の墓地をふらふらしている多々良小傘などが住んで（棲みついて）おり、実はこの幻想郷で一番の大所帯であったりする。

そんな命蓮寺の周りを、見張り番である雲居一輪が掃き掃除をしていた。一段落した一輪はお茶でも飲もうかと思案していると、魔法の森からこちらに向かってくる怪しい集団が見えた。

先頭の人間に小さな妖精がまとわりつき、さらに妖怪や吸血鬼を従えている。そう、次郎達なのであるが、一輪には異様な集団にしか見えなかった。

「……どちら様？」

次郎達一行が命蓮寺の門にさしかかった所で、雲居一輪から声が掛かった。次郎はもやもやとした白いものを浮かべた一輪を見ながら足を止めている。

このもやもやは雲山と言う。これは一輪の能力、入道を操る程度の能力で使役している入道なのである。白いもやもやに厳しい顔が付いている雲山は、これでもれっきとした入道なのだ。

「怪しい者では無いんだ。すまんが中に入れてほしい。俺は人里で屋台をやっている次郎と言う」

取り敢えず無難な挨拶をしてみる次郎だったが

「こんな大挙して妖怪や妖精がやってきて、怪しくないなんて無理

と言うものだね？」

「……礼儀を知らない小娘が。私を妖怪と見間違うなど無知もいいところね？そこ邪魔だから避けなさい。幽霊風情が」

歩み出たレミリアが不敵な笑みを浮かべて一輪を睨む。

「レミリア……ややこしくなるから黙ってくれ…」

「次郎、こんな幽霊如き羽虫を甘やかしちゃいけ…！？ちょ、次郎！？むぐー！むぐー！」

尊大な言い回しで喧嘩を売るお嬢様を、次郎は後ろから羽交い締めにして抱き上げた。暴れてバタバタもがくレミリアの口を押さえ、物理的黙らせた次郎だった。羽をぱたぱたしながら足をばたつかせるレミリアに、吸血鬼の貫禄もあったもんじゃないなとため息をつく次郎。そしてその後ろから申し訳なさそうに、目礼で主の暴走を詫びる咲夜が虚しい。

「……随分と好戦的な娘さんだね？益々通す訳にはいかないね」

ずい、と威圧するように前に出る一輪。

「いやいや、俺達はただ道に迷っただけさ。因みにこのチルノと妹紅はうちの従業員だ。他はチルノの親友と、この可愛らしい吸血鬼は俺の親友。そこのメイドさんは主に従ってついてきたが、俺の友達でもある。で、俺は名乗った筈だが？そもそも寺に来た人間を威嚇するのがこの寺の作法なのかい？」

小脇にレミリアを抱えたままの次郎が、一輪の前に歩み出て言い放

つ。少しづつ彼の口調の温度が冷えていく様だった。

次郎と言う男は普段は温厚であるが、昔から人と人は礼を尽くしあうべきと言う考えの人間である。それは彼がこの幻想郷に来てからも変わらない。

幻想郷と言う土地は、あらゆる現実から隔離された結界で守られている。そして、そこにはいくつもの勢力がコミュニティを形成しており、各勢力が様々な個性を発揮しているのだ。

ただ他勢力との折り合いが良いグループもあれば、敵対しあうグループもある。そして、一つだけ共通している事がある。それは”基本的に新参者には酷く閉鎖的である”と言う事柄だ。それぞれが自分達の身を守る為である。

少なくともそれぞれの物理的な力関係に差がある以上、一番無難な護身とは”始めから関わりを持たない”事である。故に閉鎖的にもなるだろう。まして命蓮寺の者達は、とある事情により人間を信用していない。

一連の一輪の対応は、そういった事情があっての事なのだが、次郎には関係の無い話だ。名乗ったのだから名乗れ。それが次郎のベクトルである。

「……失礼しました。私は雲居一輪と申します。こちらは雲山と言います。私はこの寺の見張り番をしているわ。こちらの事情により、敵意のあるものは排除するようにしているんだよ？次郎さん」

「……」

相変わらず剣呑な瞳のまま、一輪は次郎を睨む。彼女の背後に居たはずの雲山も前に出て来て威圧感を漂わせた。

「ま、こちらは最初から特に敵意は持って無いよ。な？レミリア？」

「うー！うー！」

「ん？」

「うー！うー！うー！」

「なんだって？」

「次郎様、お嬢様の口、押さえたままです……」

「あ、すまん、忘れてた」

次郎に小脇に抱えられ、口を押さえられたままのレミリアは、涙目で抗議している。咲夜に言われてそれに気が付いた次郎は、彼女を漸く解放した。

「……次郎の馬鹿。後で血を吸ってやる」

恨めしげに呟くレミリアを頭を撫でる事で誤魔化した次郎は、一輪を睨み続ける。

「……ぷっ…アハハッ！！人間の癖に吸血鬼と戯れあうなんて、信じられない人間だね。どうやら私が神経質になりすぎていたようだわ。と言うか貴方なら聖様も気に入りそうね。……分かった。本堂

まで案内するよ。ついてきて」

そういって一輪は一行を先導して歩きだした。

「ジロ！あたい早くごはん食べたいよ！はやく行こう！」

「ジロ、行かないのかー？」

ちびっこ達は緊張感の欠片もなく、次郎の手を引っぱる。妹紅はさり気なく舌打ちしながら、一番後ろを歩いていく。どうやら彼女は次郎を威嚇した一輪が気に入らないようだ。

「ちっ……少しでも次郎に手を出したら燃やしてやったのに……」

妹紅の物騒な呟きは、どうやら皆に届かなかった様だ。そして苔蒸した飛び石を歩き、しばらくすると、雲居一輪が本堂の前に立ち止まり、次郎達を中へと促す。

「聖様、お客さんが来てますよ？中へ通しますね？」

「ご苦労様」

次郎達が本堂に入ると、そこには少し大人びた印象の少女が座っていた。藍色のような髪が毛先に向かってグラデーションになっている不思議な髪色をしている。

がやがやとしながら入ってくる次郎一行が座るまで、少女は静かな笑みを湛えていた。

「歓迎するわ？御客人。私がこの寺の住職をしている聖白蓮よ。人の出会いとは一期一会。満足なもてなしは出来ないけど歓迎するわ

？」

笑顔の少女、聖白蓮はどことなく貫禄を滲ませた笑顔で次郎達を迎え入れたのだった。

妖怪の山の山頂近く。守矢神社の境内。東風谷早苗は、少し傾いた太陽の光に眩しそうにしながら、相変わらず落ち葉を掃いていた。

「はふぅ……今日も誰も来ないのかなぁ」

どうやら未だ誰も来てはいないようだ。

「早苗や〜！！」

「ご飯はまだかい！？」

神社の中から聞こえてくる言葉に、整った顔の早苗の綺麗な顔が陰った。

「いま作りま〜す！！」

小走りで社務所に駆け込む早苗のこめかみに――

小さな青筋がひとつ

つづく

登場人物

無類の方向音痴、次郎

次郎に仇為す馬鹿は許さない藤原妹紅

ご飯食べる妖精、チルノ

ちびっこ隊員、大妖精

ちびっこ隊員、リグル

ちびっこ隊員、ミスティア

そーなのかー？ルーミア

形あるものいつか壊れる（ブレイク）、レミリア・スカーレット

最近妙に胃痛胸焼けが……十六夜咲夜

ぐーたらが正義、八坂神奈子

ぎょろりと動く目玉帽子の仕組みは禁則事項、洩矢諏訪子

この米噛みの青筋は、天下御免の向こう傷…ご存知閑古鳥神社退屈巫女、東風谷早苗

変な髪色言うな！聖白蓮

あんなぁ？うち、こんな服装やからって関西出身ちゃうねんで？寅丸星

鼠です。ナズーリン

取り敢えず凄んで見ました。雲居一輪＆ａｍｐ；雲山ペア

……別に紹介されたい訳じゃないし…封獣　ぬえ

アムラー（古っ）みたいにムラサーと読んで？　村紗水蜜

うらめしやー！……うらめしや？…う～らめしや～（笑）

＼うらめしや！／多々良小傘

奔放自在、行楽の秋　その？（後書き）

漸く命蓮寺に辿り着きました。次回で聖蓮船は終わりです。

とうとうおぜうに「う～」言わせてしまった。すいません。誘惑に負けました。

中々進まずにごめんなさい。

奔放自在、行楽の秋　その？（前書き）

はじめに、後半部分にＲ１５程度の性描写があります。苦手な方はスルー推奨。

奔放自在、行楽の秋　その？

――目の前にいる女、聖白蓮を俺は美しいと思った。だが、それと同じくらい不気味に感じた。

俺たちがここに来てからもう、半刻も経っただろうか？始めは茶を啜りながらお互いに牽制しあうような空気だった。

それはそうだ。向こうは何やら訳ありな集団。こっちは俺以外はそれなりに名のある妖怪だもんな。

探るような視線が交錯するなか、彼女――そう、聖白蓮と言う女は、この寺に似付かわしくない洋風な服を何故か違和感を感じさせず、ただそこに座っていた。

俺は何故か分からないが、薄く笑った表情で正座している白蓮を黙ってみていた。いや、目が離せなくなっていた。

彼女は無色透明な水のようだ。清らかではあるが、味も臭気も感じない。蒸留された純水のような無機質さと言えばいいのだろうか？無垢ではあるが、希薄なのだ。

例えば慧音は妖の血が混じっている。妹紅の話では満月の夜、その血が騒ぎ暴走する事もあるらしい。

その妹紅だって、不老不死になり、妖術を操る。時折彼女は蓬莱山輝夜と殺しあい、死に至るレベルで身体を壊すが、時間が経てば元に戻る。

レミリアは５００余年生きた吸血鬼であり、人の血を吸うし徒手空拳で岩をも砕く。

だがこいつらは、有体に言えば化け物だ。だがそれと同時に妙に人間臭い一面を持っている。

俺は慧音を人格者として尊敬しているし、妹紅は可愛い妹みたいな気がする。レミリアはまるで娘のような感覚すらある。つまり、種族を越えての――なんだろう？そう、同じ生き物としての共感や繋がりを感じるんだ。

だが、白蓮と言う女は異質だ。どこにも属していないような、まるで空虚。それでいて、瞳の奥には激情が燻っている。

諦めと渇望――彼女に宿っているのは矛盾した感情だった。

――アンバランス

一言で言えばそういう事だ。その危うさが、彼女を慕って周りを固めている仲間達を、引き付けたのかも知れない。

暫くすると、睨み合いはやがて飽和し、チルノ達ちびっこが飽きて外に消え、雲居一輪が門番に戻った。

毘沙門天の弟子だという寅丸星と言う少女は、経を詠む時間だとねずみ色の少女を引きつれて消えた。

レミリアと妹紅は眠くなったと言い、何故か二人で睨み合いながら俺の膝を枕に寝てしまった。

咲夜は久しぶりにレミリアから解放されたと従者らしからぬ台詞を

吐き、のんびり身体を動かしたいと散歩に出かけた。
村紗と言うセーラー服の少女はいつの間にか居ない。
気が付いたら俺と白蓮が静かに向かい合っていた。

「少し、昔話をしてもいいかしら？」
白蓮はその西洋人形のような整った顔に微笑浮かべ、少しはにかむように語りだした。
白蓮の自戒の念がこめられたような独白を聞くうちに、この女の無機質さの理由を、俺は徐々に理解できたんだ。

――そして、聖白蓮に興味を持つことになった。

――東方おとぎ草子――

次郎は聖白蓮の独白を、ただ黙って聞いていた。いや、彼女が歩んできた道程の長さと深さに圧倒され、たかが人間でしかない彼は、口を挟む事を憚れた、と言う事が正しいのだろう。

「私が望んだのは調和でした。それも些細な。少しばかりの理解と、いくばくかの平安。ただ、それだけだったのです」

彼女――聖白蓮には弟がいた。この寺の名前にもなっているが、名を命蓮と言う。白蓮と命蓮は仲が良く、特に白蓮は強く大切に思っていた。

命蓮は僧であり、大した法力の使い手だった。その名は海を渡る程だったと言う。その名声たるや凄まじく、平安の時の権力者により絵巻を作られたほどだ。

彼と同じく僧だった白蓮であるが、年老いて晩年が見えた頃に命蓮から法力を習った。

彼女が法力を習得した頃、命蓮は突然しんだ。最愛の肉親を亡くした喪失感は、彼女の精神と肉体を蝕んでしまった。

人間は何かしらに依存して生きている。むしろ依存しているからこそ生きられるのだ。或る者は金を集める事に依存し、或る者は金を浪費する事に依存する。或る者は地位や名声に依存し、また或る者は奉仕に依存する。

或る者は愛に依存し、そして或る者は怠惰に依存する。前向きであろうが後向きであろうが、生産性があろうが破滅的になろうがだ。何れにせよ依存とは、目的意識が高じた執着と言える。

そこに清濁の隔たりは問題では無いのである。

聖白蓮が自分の依存の正体に気が付いた時は、既にそれに囚われていた後の事だった。

最愛の弟が消えた喪失感は、彼女に生そのものに執着させたのだ。依存等と生易しい物ではない。ある意味では呪いとも言えるほど死を怖れた。

或る晩、聖白蓮は自室で写経をしていた。その日はあまり集中力が続かず、手に付かない筆を投げ出し、彼女はふと、手鏡を覗いた。中にいたのは深き皺が刻まれ、眼窩は窪み、血色の悪い肌は垂れ下がった老婆の姿であった。それはまさしく死を予感させた。

――茫然とした。

――色素が落ちた髪を掻き毟った。

――咽喉が破ける程叫んだ。

――胃液が逆流するほどに横隔膜を痙攣させ、慟哭した。

力なく横たわった畳の上で、彼女はある事を決意した。そして、聖

白蓮は人間であることを辞めたのだ。

彼女は人間の術である法力ではなく、魔力や妖力の秘術を求めた。
来る日も来る日も文献を漁り、大陸の知識でさえ追求した。

魔力、妖力とはその名の通り、魔族、妖怪と言う人外の力の源である。法僧であった彼女がそれを求める事は禁忌である。

神々が人々の信仰を集める事でその力を増すように、人間は人間であるがまま、自身を研鑽し続ける事で法力の高みに達する。
結果、彼女は若返りの秘術に達し、在りし日の潤いを取り戻した。
と同時に寿命すらも捨て去り、彼女は呪いから解放されたのだ。

ただそれは、僧侶として世界の森羅万象の真理を理解し、解脱に到った訳ではない。禁呪に頼った彼女の行為は、人間を否定し、自身の人生すらも否定したのである。

それでも彼女は人々の為に出来る事をしようと思った。人に害する妖怪を退治し、人々の信奉を受けた。だが、彼女は気が付く。魔力や妖力を維持する為に、自分も妖怪側の思考に立たねばならない必要性に。

そしてさらに気が付く。今まで虐げられてきた妖怪が居ることを。

それ以降、聖白蓮は不憫な妖怪を救い始めた。彼女が妖力を扱うようになった事で、自らの思考が自然と妖怪側の立場で考えるようになったのだ。

彼女は人々の願いに応える傍らで、妖怪も救う。それは人間にとっては裏切り行為でしか無かったのだ。

寅丸星を筆頭とした命蓮寺の面々は、大体はこの時期に集まったのだが、人間に白蓮が妖怪に組していた事が発覚すると、彼女は悪魔の烙印を押され、そして魔界に封印されてしまった。

その後聖白蓮が封印された後も、彼女の代わりに寅丸星は毘沙門天を奉る業務を続け、数百年そうしていた。

そして、ある一件により聖白蓮は仲間達によって封印から解かれたのだ。それは幻想郷には異変であったのだが、それによって彼女は世紀をいくつも跨いで、今ここにいるのだ。

「――と、言うわけです。長々と申し訳ありません。結局、愚痴になってしまいましたね、お恥ずかしい限りです。とは言うもの、今もこうして生き恥を晒しております」

全て話しきった清々しさか、聖白蓮は笑った。無機質な透明感ではない彼女と言う年輪を感じさせる笑顔でだ。

「……どうしてお前さんはそれを俺に聞かせたんだい？」

今まで聞き役に徹していた次郎だったが、そこで初めて口を開いた。

「理由は、そうね、貴方の膝で幸せそうに寝息を立てている者達の関係を見たからかしら？その二人だけじゃない。妖精や小さな妖怪たち、そして銀髪の人間、全員が貴方を信頼している。そう見えたからよ。それは私が本来求めていた調和。だから、貴方に聞いてほしかったの」

「調和、ねえ。俺には難しい事はわっかんねえな。でもま、こいつ

らの寝顔さ…可愛いだろう？そらこのちっこい方は血を飲んだりするけどな。でも無作為に誰かを殺す訳でも無いさ。なら別に吸血鬼云々なんて気にする事もないわな」

次郎は膝のレミリアの頬をつつき、妹紅の白髪を指で弄び、笑う。

「ふふっ、そうね、可愛らしいわ。でもね、貴方たちのような関係を作りたかっただけなのに、私は結局千年かかってまだ、彷徨ってる。貴方が羨ましい」

「俺はね、お前さんに偉そうな事は言えやしないよ。だけどさ、お前さんは別に間違っちゃあいないよ。ただ受け入れられる時代じゃ無かった。そういう事なんだろうさ」

そこで次郎は一息つき、そして続ける。

「そもそもさ、俺がこいつらをどうこうなんて気持ちは無いんだよ。むしろ、俺が今、ささやかながらも日々幸せだと感じたり、下らない事でゲラゲラ笑ったり出来るのはみんな、この可愛らしい人外達のおかげなのさ。お前さんさ、命蓮さんが亡くなって自分は歪んだなんて言ったけどな。――んなもんみんなそうなるっての」

次郎はそこまで一気に話し、そして急に顔を伏せて黙った。

「――侑子、そして翼」

「え？」

微かに絞り出された次郎の言葉。

ぽた、ぽた……

レミリアと妹紅の頬に小さな雫が落ちる。二人は目を覚ましたが、見上げる先にある次郎の表情に絶句し、そして、優しい笑顔を浮かべると、黙って目を閉じた。二人が初めて見た次郎の表情。――それは顔をくしゃくしゃに歪めた次郎の泣き顔だったからだ。

「侑子は死にたくなるくらい愛してた妻の名前だ。翼は……産まれてきたらつけるはずだった娘の名前だ。二人とも死んじまった。俺を置いて…死んじまったよぉ。くそっ……生き返るなら、例え神様を殺してでも……俺はね、やったよ？そんな方法があったんならさ……。ただね、それをやっちゃあおしめぇなんだ。外道なんだよ。だからさ、俺は泣き尽くすまで泣いたし、胃が裏返るまで酒に溺れたよ。手近にいた女を意味もなく抱いたし、ムカつくやつには当たり散らした。そうやってさ、逃げて逃げて、責任転嫁して、決断を遅らせてさ。怖くて怖くて仕方なかったんだよぉ。あいつら死んだって思い知らされるのがさぁ。……結局、八雲の奴に幻想郷に引き摺り込まれてさぁ。それでもさ、まだ逃げてたさ。でもなぁ、死のうと籠もった森ん中でさ、でっけぇ獣みたいなやつに喰われそうになった時、死にたくねぇ！って女みてぇな悲鳴あげてさ？鼻水か涙か分かんない液体で顔はびちょびちょだ。ションベンも漏らしたし、多分糞も垂れたわ。そうやってさ、無様晒しても生きたかった。幸い――」

――ブンッ

「あ、あなた！」

———ブブン

次郎はおもむろに手を目の前に翳し、左右に振った。すると自分と白蓮との間にある木の床が切れた。底が見えない程に深く。

そして逆回しに同じ動作をすると、何もなかったように切れ間が消えた。

「こんな能力が死ぬ寸前に湧いたんだ。その獣はさ、賽の目にバラバラんなったよ。八雲が言うには”つけたり離したりを操る程度の能力”と言うらしい。今やったように、なんでもくっつけたり離したり出来るんだ。八雲が言うはさ、これは使い方間違うと結界すら切っちまうろくでもない能力なんだとよ。でもな、俺の死に際に現れた能力だからさぁ、きっと侑子や翼が俺に生きろってくれたと思ってる。だから俺は必死にこの力を制御する方法を学んだんだ」

ぐしぐしと涙を拭いた次郎は、幾分ましになった顔で白蓮に視線を戻す。

「俺はさ、死ぬ目になって漸く気が付いたんだ。どれだけ悲しくても、死んだ人間は帰ってこない。そして、例え方法があっても、その摂理をひっくり返す事はしちゃいけないってな。俺はそのことでやっと前を向けたんだ。だから、八雲の受け売りだが、全てあるがままに受け入れるって決めたんだ。例えそれが残酷な結末だろうと

さ。お前さんは最初に言っただろ？一期一会ってさ。後はそうだな、温故知新だな。とにかくだ、色々あったが、今幸せだからいいじゃねえかって事だよ。な？二人とも。で、寝たふりすんなコラ！！！」

「「いひゃい、ひろう、いひゃいいひゃい」」

次郎は照れ隠しに狸寝入りしてた二人の頬をツネリあげた。

「ふふっ、あはははは！次郎さんは面白いわ。今が幸せならいい、か。そうですね、私は難しく考え過ぎてたのかも知れません。ふふっ、そうね、私は今幸せですわ。私の周りには、私を慕ってくれる者達がいる」

そういって白蓮は素晴らしく華やいだ笑顔を見せた。

「俺もさ、あの世にいる侑子と翼の為にさ、沢山幸せになるんだ。こいつらとバカやってさ」

「こいつ言うな！泣き虫次郎さん。へへ～ん」

ニヤリと笑う妹紅。

「次郎のくせに生意気よ。血飲ませなさい」

「こぼさないで飲めるならいいぞ？ちゃんと出来るかな？レミリアちゃん」

「うー……次郎のおバカ」

じゃれつくレミリア。

「ジロ！あたいご飯忘れてた！」
「チルノちゃん泥だらけだから入ったらダメだよぅ」
「ジロさん、ルーミアが噛み付いてくるよぉ……」
「じろーリグルがおいひいぞー」
「リグルのだし汁は～虫の味～♪ルーミアに噛まれて三途河～♪」
「いたたた…みすちーその歌は笑えないよう……」

遊ぶのに飽きたのか、ちびっこ達がなだれ込んできた。わいわいと喧しく騒ぎながら、次郎に次々とまとわりつく。

「こういう幸せを得られるなら、頑張って生きるのも悪くない。そう思わないか？」
ちびっこ達に組みつかれ、苦笑いしながらも次郎は言う。これが自分の幸せなんだと。
「そうね。悪く無いわ。でも、私の仲間達だって負けてないわ？」
気が付くと白蓮の後には、彼女の仲間達が笑顔で座っていた。
「阿呆。いつから仲間自慢になったんだよ。そこは仲良く両成敗で

いいんだよ。そういやすっかり話し込んで昼飯喰いそびれたな。白蓮よ、お近づきの印に一つ趣向を考えた。台所を借りてもいいか？」

「？？……構わないわよ？でも、一体何するの？」

「まぁ、ちょっとした料理を振る舞う。本当は守矢神社で使うはずだった食材だったんだが、この分じゃ今日は行けそうに無いからな。ま、人里で話題な屋台、喰いものやの出張料理だ。取り敢えずご覧じろってこった」

噂では聞き及んでいた喰いものやの料理、思わずごくりと唾を飲み込む命蓮寺メンバーだった。

「行くぞチルノ、妹紅」

「あいよ次郎さん」

「わかった！仕方ないからあたいも手伝ったげる」

そして喰いものやメンバーは台所に消えていった。

やがて様々な料理が長い座卓に並び、命蓮寺メンバーと次郎と愉快な仲間達が向かい合って座った。上座には白蓮と次郎が並んで座る。二人が並んでいるのを妹紅とレミリアは忌々しげに見ながらも、一同は行き渡った杯をそれぞれ手に持った。

「ん、まあ一応、白蓮に乾杯の音頭をやってもらおうか。頼むよ白蓮」

次郎の言葉に頷き、静かに立ち上がる聖白蓮。

「みんな、はからずも今日は善き日となりました。それは私達に新たな友人が生まれたからです。私の求めた複雑怪奇な調和と言う宝物は、ここにいる次郎さんが単純明快なんだと教えてくれました。願わくばこの調和が未来永劫続かんと願い――乾杯！！」

『かんぱーーい！！！』

そして、夜通し続く勢いで宴会は始まった。それぞれ気のあう者同士を見つけ、それぞれが膝を突き合わせて飲んでいる。

壁ぎわでは妹紅とナズーリンとぬえが何やら悪どい笑みを浮かべて小声で話している。

その反対側では、レミリアが村紗水蜜と雲居一輪に「レミリアちゃんお人形みたいで可愛い～♪」と二人におもちゃにされている。

ちびっこ達は寅模様のお姉さんにしきりに懐いて組みついている。流石は毘沙門天に仕える者なのか、根気よくちびっこをあしらっていた。

咲夜は何故か雲山を酔いで据わった虚ろな目で、しきりに突いている。雲山も万更では無いようだ。お互い無口であるが故の共感だろうか？

――――そして

月明かりに照らされた命蓮寺の庭。そこに面した濡れ縁に聖白蓮は一人で座り飲んでいた。

「一緒に飲んでもいいか？」

「ええ、少し寂しかったから嬉しいわ」

二人並んで座り、お互いの杯に酌をする。何となく見つめあった二人は、気恥ずかしそうにくすりと笑うと、静かに乾杯した。

次郎は一息に飲み干すと、月明かりで陰影がついた聖白蓮の横顔を見た。

「私の顔に何かついてますか？あまり見られると恥ずかしいわ」

ぷいと顔を背ける。

「ん、すまん。お前さんは綺麗なんだなと見惚れてた。いや、最初見た時もそう思ったんだが、月の下じゃさらに格別だ」

次郎の視線が白蓮の瞳を捕える。

「な、何を言うのかしら？こんなお婆さんをからかわないでちょうだい……」

湯気がでる程に赤面する白蓮。実際彼女は、男女のそういう機敏には免疫が無かった。

「何をいってんだ……」

「ひっ、ひゃうっ！？」

にやりと不敵な笑みを浮かべた次郎は、おもむろに白蓮の細い腰に手を回し、自分に引き寄せた。

「ななっななにを！？」

「ん？綺麗なものは近くで愛でたくなるだろ。俺は綺麗なお前さんとくっついていたいのさ。だめか？」

接吻しそうな距離で次郎が呟く。彼の吐息が白蓮の肌をくすぐり、彼女は思わず息をのむ。次郎の瞳に映る自分の姿は女の顔をしていると、白蓮はいい知れぬ羞恥に悶えた。

「い、いやじゃないけど……少し恥ずかしい…です」

身体を極限まで硬直させた白蓮は、迫り来るある予感に身悶えする。いくら禁欲的生活に馴れ親しんだ白蓮でも、流石にこの雰囲気が続けば何が起こるかは想像できた。彼女は思う。嫌ではないと。そして彼女は身体から力を抜き、次郎に体重を預けた。

次郎の唇が白蓮を彷徨う。彼の指が優しく彼女の目蓋を閉じ、そこを唇が小鳥のように止まり木にする。

次郎は彼女の形の良い鼻に、自分の鼻をこすりあわせる。そのたびに二人の唇が接近するが、次郎の唇はすぐに逃げていく。あまりのもどかしさに、白蓮ははしたなくも口を半開きにし、そこから覗く小さな舌が、おいでおいでと控え目に催促する。

次郎の指は抱き寄せてる彼女の背中に向かい、背骨から括れた腰ま

でを行ったり来たり、散歩する。

初めて全身を痺れさせる甘き性感の襲来に、白蓮の脳は溶けだした。

「お願い…意地悪、しないで？」

羞恥に後頭部を殴られるような感覚に苛まれながら、白蓮はとうとう口にした。

その刹那、彼女は悲鳴をあげたいくらいに強く抱きすくめられ、荒々しく唇を奪った。奪われた。

艶めかしく蠢く二人の舌は、蛇が絡み合い交尾するかのように、窒息寸前まで貪りあう。次郎は白蓮の髪を掻き毟るように強く抱きよせ、彼女もまた次郎の頭を掻き毟る。

互いに足りないものを埋めあうように、ただ感情に素直になった。

――欲しいと言う本能

二人はいつしか呼吸を忘れていた事実に気が付いた。だが離れたくはない。そして二人は離れる事は諦め、鼻から息を漏らしながら、とにかく相手を貪った。

互いの唾液が互いを潤し、求めあう二人にとってそれは甘露だった。

二人が埋めあう激情は、いつしか表面張力の限界まで盛り上がる水のようだ。そしてそれは、決壊し、零れるのだった。

貪りあう唇は、最早接吻などでは無く、粘膜をこすりあわせる愛撫

であった。二人の米噛みを痛みにした疼きが突き抜け、堪らず次郎は濡れ縁に彼女を押し倒す。後はもう、燃え尽きるまで止まらないのだ。

次郎の節くれ立った男の指が、白蓮の胸の膨らみを捕える。彼女は思わず漏れた自分の甘き嬌声に羞恥し、慌てて次郎の逞しい肩を噛む。

そして、徐々にめくりあげられ露にされる自身の裸身に内心で悲鳴を上げながらも、さらなる疼きの予感に白蓮は期待する。

つんと尖った頂に、次郎の唇が触れた時———

「……あれ？」

彼女の間抜けな言葉が響いた。目を閉じて待っていたのだが、一向になにもない。ただ、自分にのしかかる次郎の体重が重くなっただけだった。

「あれ…次郎さん？次郎さんってば？」

「しばらく起きないわよ？」

白蓮の後ろから女の声が聞こえる。

「だれ！！？」

慌てて着衣の乱れを直し、真っ赤な顔で辺りを見渡す白蓮。一気に冷静になってしまい、彼女は今までの自分の痴態に顔から火が出る思いだ。

「わたしよ。ゆかりん♪」

「なななななっ！なななななななな！！」

「そんな慌てなくてもいいわ？白蓮ちゃんか～わい～い♪」

「みみみみっ！みみみみみみみみてててっ！」

「はいはい、見てたわよ？だって、好いた男の濡れ場よ？癪だもの」

突然現れた八雲紫は、さんざん白蓮をからかうと、扇子で口元を隠してニヤニヤ笑った。

「ふぅーふぅー…よし、一体なんのよう？隙間妖怪」

「そんな殺気飛ばさないで？喧嘩しに来た訳じゃないから」

「……胡散臭い」

「ミステリアスと言いなさい」

「次郎はね、深酒すると素直過ぎるくらい素直になっちゃうの」

「なんだかよく知ってるみたいな口振りね？」

「ええ、知ってるわ？よーくね？ふふっ」

「〜〜〜っ！？」

敵意剥き出しの白蓮に、柳に風な八雲紫。

「……よく知ってるわ。私も彼に救われた口だもの。彼はね、不思議なの。私でも心が読めない。だから心地いいの。こんな私でも女の子にされちゃうのよ。この胡散臭い私がよ？」

「……それは、なんとなく分かる。次郎さんはどんな相手にも偏見を持たない」

「そう、その通りよ。現実にそんな人間なんか居ないわ？普通はね。だから貴重なの。私達みたいな存在に等身大でぶつかって来る彼はね」

「そうかもしれないわね……で、貴女はそれをわざわざ言いに来たの？」

「そうよ。正確には宣戦布告かしらね？」

「仲間に手を出したら許さないわ！」

また殺気を出し、睨み合う。だが八雲紫はひらひらと手をふり、言った。

「違うわよ。次郎を得る戦いのよ？」

「へっ？」

「へっ？じゃないわ。あのね？彼を狙うライバルは多いのよ？私が知ってるだけでも片手でたりないわ？だから、貴女も彼が欲しいなら、覚悟をしなさいと忠告に来たのよ」

「わ、私は別に…ゴニョゴニョ……」

「そのとろけた表情じゃ説得力皆無ね？」

「くっ…貴女には負けない……」

「ふふっ……」

八雲紫は余裕の表情で白蓮をからかうが、満足したのか隙間を開きながら立ち上がった。

「帰るわ？次郎が起きたらよろしく言っておいてね？……あと、さっきの次郎の行動は、酔ってたとは言え、本音だから心配しなくて良いわよ？じゃさようなら」

言うだけ言って満足したのか、静かに彼女は消えていった。何かを企むような笑みを残して……。

月が傾いている。濡れ縁に横たわり、寝息を立てる次郎を膝枕しながら、白蓮はさっきの行為を思い出す。

いつか続きをするのだろうか？

次郎の唇が触れた場所をなぞりながら彼女は笑った。そして、この不思議な出逢いを感謝しつつ、白蓮は月と次郎の寝顔に一人で乾杯するのだった。

翌朝、泥酔者で死屍累々の本堂に、次郎と白蓮の怒声が響く。妙に息の合っている二人に首をかしげながらも、黙々と掃除をはじめる一同だった。

色々あったが、こんなのも悪くは無いと、星達が驚く程の笑顔で、白蓮は笑うのだった。

登場人物

酔うと豹変　狼・次郎

頬をつねられご満悦　藤原妹紅

頬をつねられご満悦　レミリアおぜうさま

散歩してたが実は迷子になっていた　十六夜咲夜

悩み解決そして大人の階段を登りかけた　聖白蓮

実は面倒見がいい　寅丸星

妹紅と何やら悪巧み　ナズーリン

妹紅と何やら悪巧み　ぬえ

おぜうは人形　村紗水蜜

おぜうは人形　雲居一輪

咲夜とごそごそ　雲山

今回はにぎやかし担当　チルノ

チルノの世話女房　大ちゃん

取り敢えず噛んでみる　ルーミア

基本いじられ役　リグル

さりげなく歌を披露　みすちー

友情出演　八雲紫

奔放自在、行楽の秋　その？（後書き）

恋愛タグつけてたし、そろそろ動かそうかと始動しました。まだ性ヒロイン決めかねてるけど。

ほら、酔った勢いでムラムラしてみたいな事あるでしょうよ。

一応、命蓮寺シリーズはこれで終わりですが、白蓮が可愛くて、結局白蓮オンリーになってしまった。ナズやら星やらの描写はほぼ無かったもんな

と言う訳で次回は聖白蓮以外を掘り下げますわ。納得いかんぼい

あとエロいのさーせん

ついむしゃくしゃしてやった。反省も後悔もしないけどにゃー

早くマヨヒガの人たちや守矢や月姫書きたいが進まないぜ

ま、駄文ですが今後ともご贔屓に。

因みに、次郎の妻子の名前は大好きなクランプ漫画から名前借りました。

日常と非日常の境界（前書き）

若干シリアル

時系列は命蓮寺から帰ってきた翌日のお話

日常と非日常の境界

酷い頭痛で目が覚めると言う、寝起きとしては最悪の部類の目覚めに、思わず舌打ちした次郎だった。

「……？、ああ二日酔いかぁ、最悪だ……」

二日酔いが好きな人間は居ないだろう。予断ではあるが筆者の場合、酷い吐き気と戦いながら、よく分からない何かに必死で「ごめんなさい、もう飲みませんから助けてください」と懇願する。祈られた何かにしてみれば、全く迷惑この上無いだろう。当然祈りは届かずに午前中は死人となる。人生とはままならない。そういう事だ。

閑話休題

そうして次郎は、このままいても栓ないと、取り敢えず布団から上半身を起こした。何故か全裸なのはこの際気にしない事にした。

この世知辛い世の中である。泥酔したあげく脱ぐ事もあるだろう。いや、そうに決まっている。何やら胸元に赤黒い内出血がいくつもあるが、彼は気にしない事にした。言いたい事も言えないこんな世の中じゃ仕方ないのだ。ポイズン。

次郎はふと思う。ここはどこだと。格式が高そうな床の間、白木の枠の障子、水鳥の羽をふんだんに詰め込まれた布団。次郎の家はこんなに豪華ではない。

次郎が思考の海に飛び込もうとした矢先、すっと襖が開いた。

「あっ！じろうさま、起きていらっしゃいましたですか？おはようございますです！」

「ん？あ、橙か。おはよう橙。ああ、そうか、八雲の家に泊まったのか…」

襖から現れたのは八雲藍の式、化け猫の橙である。ふわりとしたブラウスに真っ赤なジャンパースカートを着ている。八雲藍と色違いの帽子を被ってるが、その脇から三角の耳が見えている。ぴょこぴょこ動いてるのは何やらご機嫌だからだろう。

「じろうさま～～！！」

「ごふっぁ！？」

邪気のない笑顔の橙が、叫びながら次郎に飛び込んできた。そうは言ってもこの橙は、八雲藍に鬼神を憑けられた式神だ。馬力と見た目が一致していない。抱き付かれたと言うよりはタックルと言う方が正しい。目を白黒させた次郎に橙がしきりに顔を擦り付けている。次郎は橙の頭を撫で、首筋を掻いてやった。彼女は目を細め気持ちよさそうに喉を鳴らす。

「ああ、和む……」

「気持ちいいですぅ…」

彼女の二本の尻尾がパタパタと左右に振られた。顔はだらしなく弛んでいる。そんな橙を見ながら次郎も弛緩しただらしない表情で背中を撫でる。ああ、やはり猫は最高だ……とご満悦な次郎であった。

だが、そんな穏やかな一時は長く続かなかった。またもや襖が急に開き、そこから――

「橙、次郎は起きた…か…？ちぇぇぇぇぇぇん！！？次郎貴様……私の橙をかどわかす気か！しかもその体勢…うらやま…いや、けしからん！！」

「…ふみゃぁ？んゅ？藍しゃま？ん～藍しゃまうるしゃいにゃあ……」

次郎の膝の上で恍惚と撫でられていた橙は、気持ち良過ぎたのかうつらうつらとしていた。そこに八雲藍の怒鳴り声だ。猫は欲望に忠実である。故に彼女の眠りを妨げた藍に不満の声をあげたのだ。

「……」

「おい、藍？どうした？」

「……もうダメだ…」

何やらぶつぶつと呟きながら藍は虚空を見つめている。まるでこの世の終わりが来たような表情であった。

「おおい藍！」

「もうお終いだ…あんなに素直で可愛かった橙が非行に走ってしまった……あまつさえ次郎と不純異性行為とは……もうお終いだあああぁぁぁ！！」

「ええい落ち着け！」
錯乱寸前の八雲藍を仕方がないので平手打ちして落ち着かせる次郎だった。
「はっ！？私は何を！？」
「何をじゃないわ！橙を撫でてたら寝ただけだがお前が何を血迷ったか大騒ぎしやがって！頭冷やせド阿呆が！！」
「ぬっすまぬ……取り乱してしまった…」
「ったく、過保護すぎて余計に距離を取られたら目も当てられんぞ？」
「なっ！？ななっ！？そうなったら私は、私は…ちぇぇぇぇぇぇん！」
「だから落ち着けっての！？取り敢えず今すぐどうこうと言う話じゃないんだから……」
「そ、そうだな。すまない次郎。どうも私は橙の事になると駄目だ、な」
「そんなもんさ。腹を痛めた訳では無くても、橙はお前さんの娘みたいなもんさ。そうだろ？」
八雲藍の肩に手を置き、少し哀しげな笑顔な次郎だった。
「そうかお前は…いや、すまん。そうだ、橙は私の娘だ。うん、娘

だ。ははは」

藍は八雲紫から次郎の事情は聞いているのだろう。思わず口から出かけた同情の言葉を、八雲藍は慌てて引っ込めたのだった。

「藍、お前は優しいな」

しんみりと呟く次郎。

「なら私と子作りするか？私なら構わんぞ？ん？」

ニヤリとしながら藍はしなをつくって次郎に寄り掛かった。だが——

「それも悪かないが……橙があと5年したら頑張るから遠慮するわ？」

——次郎の方が上手だった。

「ちぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！！！」

「藍しゃまうるしゃい」

朝から騒がしい八雲家の面々であった。そして主人である紫と言うと……

「……むにゃ…やん次郎…は～げ～し～い～♪……むにゅっ……」

――夢の中であった。

――東方おとぎ草子――

はてさて何故次郎が迷い家にある八雲家にいるのか？それは主人である八雲紫の仕業なのは明白なのだが、次郎としては何とも解せない。

「だって、あの白蓮とか言う女狐が次郎とごそごそしてたじゃない？なら正妻である私がマーキング仕返すのは当然でしょう？」

寝間着姿のまま、次郎の正面で朝食のおかずをもぐもぐと咀嚼しながら、彼女は当たり前のように言った。

「誰が正妻だ誰が……」

「紫様、私、それは知りませんでした。次郎様、紫様を宜しくお願いします」

「藍、橙にイタズラしちゃうぞ？」

「すまん次郎。悪乗りが過ぎた」

「紫様、まあきんぐとはなんですか？」

「橙、それはね？体中をまさぐりな——痛い！？」

「お前さんは少し、品格と言う意味を理解したほうがいいな。藍、素巻きにして隙間に蹴り落とせ」

「紫様、申し訳ございません。旦那様の言い付けなので仕方な——」

「橙、俺と朝風呂入って洗いっこしないか？」

「え！じろうさま嬉しいです！」

「じ、次郎、許してくれ、ちょっとしたお茶目ではないか！橙、いかんぞ！まだいかん」

「藍さま……ぷいっ」

「ちぇ！？ちぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！！」

「もう！私を無視しないでぇぇぇ！！！」

「じろうさまお風呂お風呂♪」

「ちぇぇぇぇん！！私を捨てるのか！？」

「次郎だめー！私とお風呂入るのー！！！！！」

「橙…私の橙……うおおおおん！！！」

「藍さまうるさい」

「ちぇぇぇぇん！！？橙が完全に不良！？紫様ぁ！橙が！橙がああああ！！」

「次郎♪お風呂で昨日の続き～♪」

「だめです紫様、じろうさまは私と入るのです！」

「なっ！？ちぇ橙？ちぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！！！」

「もう、帰っていいかな？」

「「「まてゐ！」」」

「げふぁ！？」

心底うんざりした様子の次郎が腰を上げたところで、八雲一家総出のタックルが炸裂した。

「で、結局なんで俺はここにいる？」

いつもは当主の紫が座っている、ひじ掛け付き座椅子に次郎が座って睨む。自分を抱くように組まれた腕の指先が、とん、とん、と一定のリズムが刻まれている。ものすごく不機嫌なんですと態度に滲み出ているようだ。

その対面に正座した八雲紫と藍が神妙な顔で次郎を見ている。橙が何故か次郎の後方に控えてる。どうやら彼女は次郎派らしい。

「だって、ねぇ？やーだ次郎恥ずかしくて言えな～い♪」

「あらあらまぁまぁ紫様ったら」

「いや、だんだん思い出してきたぞ？昨夜の営業が終わった時に、紫は俺に話があるって言った。だから妹紅達を帰した後に俺はお前と酒を……ああ、お前、酒に何か細工したろ……と言うかだ、そもそも昨日はやってない。ヤって無いぞ！いつもお前とする時は意識はあるからな。さぁ！何の目的でさらった？」

すっかりと昨夜の事を思い出した次郎は、反論など聞かぬと言う様子だ。

「……じろうさま？なにをヤるんですか？」

「ちぇ！？」

「それはね？橙、私のめしべに次郎のおし　――いたいっ！」

「やめろぃ。橙、俺と紫はプロレスごっこが好きなんだ。弾幕を使わない弾幕ごっこみたいなものだから、橙には少し早いかな？すまんな橙。橙とは違う遊び、しような？」

「わかりました！プロレスごっこ？はあきらめるです…でも、なでなでしてほしいです！」

「ああ、ああ、おいで」

「「（子供の扱いが完璧だぁ！！）」」

「（当たり前だ。俺は妖精達に懐かれてるんだぞ？）」

子供にされて困る質問上位に必ず入る質問、それは「子供はどうやって出来るの？」である。

さらに上級な質問として、「夜中にパパとママが騒いでたけどなにしてるの？」等がある。この親を苦しめる二大質問であるが、子供の質問には答えたい気持ちと、戦後の日本の教育指針による性のタブー意識による禁忌感と言う相反する事柄に酷く葛藤させられるだろう。

子供には一切の悪意が無いのだから始末に負えない。純粋な知識欲、未知なるものへの渇望。無垢な我が子のキラキラとした期待の瞳に、親は苦しめられる。

性教育の進んだ西洋ならば、「ＨＡＨＡＨＡ　それはね？パパとママが愛し合ったからキミが産まれたんだ。やり方はキミが誰かをちゃんと愛する事が出来る年になったら教えるさ！ほらボクのＳｗｅｅｔなＡｎｇｅｌ、パパにおやすみのキスをしておくれ？」「パパ大好き～♪チュッ」と、このように完璧である。

だが狼狽えた親が「コウノトリが云々」だの、あまつさえ誤魔化したり怒る等は最悪である。かといってだ、八雲紫のように「おしべやめしべ」等は悪手でしかない。何故なら「じゃおしべやめしべって何？」となるに決まっているからだ。

八雲紫の場合、悪乗りを分かってるから最悪だ。何と聞かれたら「ＴＮＴＮ♪」と嬉々として答えるだろう。ナニを言うんだと叱れば、「性教育しただけなのに、ヨヨヨ…」等と開き直る。しまいには生々しい表現を逆ギレしながらぶちまけるから追い込むのは危険だ。

次郎はチルノを始め、様々な妖精達に懐かれている。彼女達は倫理観など皆無だ。本能に忠実な言動と行動を取る。そこに邪気は無いのだ。チルノ等は次郎が風呂に入っていると、普通に飛び込んでくる。こういう類いの行動に馴れてれば、いちいち騒ぐ方が逆に子供にそれを意識させるのだと気付く。つまり、親の立場なら根気よく子供に付き合うしかないのだ。

閑話休題

「で、結局なんなんだ用件は。ここに連れてきてまでの話なんだ。ややこしい話なのか？」

次郎の問いに八雲紫は先ほどまでのふざけた表情を消した。藍も同様である。次郎は何やら嫌な予感に苛まれる。

「……そろそろ私は冬眠の時期なのよ」

「……それで？」

八雲紫の目が細くなる。

「次郎、貴方には不快な話になると思うけど最後まで話させてほしい。貴方は幻想郷に来てから、博麗神社、紅魔館、白玉楼、命蓮寺、そしてこの迷い家。この幻想郷の勢力と全てでは無くともある程度は関わっているわ。それは貴方が望もうと望んでいなくともよ？」

「まあ、そうだな」

「続けるわ？他には永遠亭や妖怪の山の天狗達や守矢神社、それに空の上と地面の下にも勢力はあるの。貴方がいずれ、それらと関わるのは必然。理由は色々あるけどね？一番大きいのは貴方のその偏見の無さよ。貴方、外の世界に居たときからそうだったかしら？」

「いや、どうだろう。意識してはいなかったが……そうだな、改めて考えたら変だな……」

八雲紫の指摘は最もな話であろう。幻想郷に住まう人間以外の住人は見た目は美しい少女であっても、人間には及ばない力を持つ妖である。人間とはそもそも価値観が違うのだ。

人間の1日が、妖にすれば瞬き1つなのだ。何せ寿命が違う。数千年生きる妖に、人間と同様に日々を真剣に生きる動機は生まれないのだ。寿命が短いからこそ後悔が無いように生きる。その差は大きいのだ。

見た目こそ似ていても、中身が全くの別物なのだ。淡水魚と海水魚が相容れないのと一緒だ。比べる基準にならないのだ。

だから次郎は困惑した。では次郎以外の人間はどうか？博麗霊夢や霧雨魔理沙のような特殊な存在は別にして、基本的に人間は妖に畏怖を抱く。妖は人間を襲うもの。そういった潜在的恐怖を抱くものだ。

それこそが妖達の存在理由なのだが、逆に次郎のような価値観を持つ人間が多数派ならば、幻想郷が外の世界と一緒になる。つまりは人間でありながら次郎のような思想は、幻想郷では危険な思想とも言えるのだ。

妖を恐れない人間が増えれば、やがて妖を滅ぼす。つまりはそういう事である。

「そうか、俺は幻想郷を管理しているお前さんには、あまりよろしくない存在……そういう事か」

「そうかもしれない。でも私は貴方を好ましく思っている。それは真実。でもね？1人の人間の存在が幻想郷を壊すなら、私は、妖怪

八雲紫は、貴方を殺さなければならない。悲しいけれど、私が秩序を壊す訳にはいかないの。例え、貴方を慕う者達を敵に回しても、ね？」

絞りだすような八雲紫の言葉は、藍に唇を噛ませ、橙を俯かせた。だが、次郎は表情を変えない。そして八雲紫に言った。

「そうか、仕方ないな。なぁ紫、でも少しだけ待ってほしいんだ。妹紅とチルノに畑と屋台を引き継ぎたいんだよ。あそこは俺の居場所だ。少ないがあそこで飲むのを楽しみにしてる妖達（やつら）もいる。それに、霊夢がタダ飯喰えなくて困るだろ。なぁ紫、頼むよ」

そういって彼は笑った。爽やかに、清々しく笑ったのだ。彼を見る八雲の一族は何か不思議なモノを見ているように、驚愕に目を見開いた。

幻想郷には幻想郷のルールがある。それは幻想郷の存続は何物にも優先される、と言う事柄である。全ての事は幻想郷が存在していてこその営みなのだ。

「また貴方は…ほんとにもぅ……どうして貴方はそうやって平然としているのかしら？私のほうが馬鹿みたいに狼狽えて……本当に貴方、憎い。憎たらしいわ……」

「……俺はさ、とっくに死んでた人間だよ。死のうと思って山に入った人間だ。それが何の因果か妙な能力が生まれてしまった。そこからの俺の人生はオマケみたいなもんさ。お前さんや妹紅達に知り合って、新しい人生を生きた。そりゃあ死ぬのは嫌だよ俺だって。だけどさ、俺は幻想郷（ここ）が好きになったんだ。なら、ここの役に立てるなら、俺は受け入れるよ？例えそれが残酷な事だとしてもな。ま

ぁ誰かさんの受け売りだがな？あっはっは……」

次郎はそう言い、快活に笑った。ためらいの無い笑顔であった。

「なに笑ってるのよっ！！人がこんなに苦しんでるのにっ！！貴方を殺したい訳ないじゃないっ！！馬鹿っ！次郎の馬鹿っ！馬鹿次郎！間抜け！阿呆！！うわあああん……」

堪え切れずに次郎に縋り泣く八雲紫に、緊張感なく頬を掻く次郎だった。

「紫様……泣くのも宜しいですが、話がおかしな方向に行ってますよ？次郎、すまんな？紫様はお前が相手だとどうも調子が狂うのだ。胡散臭さが売りの紫様がこの体たらくだ。今日の話の真意はまだ先にあるのだ。すまんが紫様が落ち着いたら改めて聞いてやってくれ」

藍が済まなそうに次郎に語る。柔らかい笑顔で。

「……っく、ぐすっ…藍……貴方が私をどう思っているかよ～く分かったわ」

「紫様！？私は紫様を思ったまでで！紫様？紫さま～～～っ！！！」

藍の下に隙間が開き、そして彼女は悲鳴と共にどこかへ消えた。憐れであるが自業自得である。さらにややこしくなるので、次郎はみなかった事にした。

「ごめんなさい、泣いてしまったわ。もう大丈夫よ。実は貴方の真意を試したかったの。幻想郷の住人になり得ているかを、ね？」

「どういう事だ？」

八雲紫は涙で崩れた顔を懐紙で拭い、居住まいを正すと次郎を見た。

「貴方の能力、”つけたり離したりを操る程度の能力”だけど、前に話したわよね？博麗の結界すら容易く破る危険な能力だとね？」

「ああ、制御を学ぶ際に色々やってみたが、離したり――つまり切り離すことが出来ないものは無かった。同様に融合させる対象は空間すら融合できた」

次郎が死を望んで妖怪の山の樹海に入った時、覚悟を決めたはずの彼が妖に襲われた。その獣じみて理性の欠片もない妖が、次郎の生命を刈り取る瞬間、彼の中に能力が生まれた。

実際は八雲紫の隙間に落ちた時に、空から落下した次郎が気絶した状態で空中に浮くと言う能力発現はあったが、例え無意識であっても、自覚出来る状態で発現させたのは森の一件が最初である。

かつて幻想郷に入った人間はかなりいる。ただ、基本的に八雲紫が攫う事は無い。と言うのは、幻想郷とは忘れ去られようとする存在の終着駅だからだ。要は孤独であったり必要とされていなかったり、はたまた自分自身で生命を見限ったり――そういう存在が虚ろに生きていれば、気が付いたら幻想郷に引き込まれるのだ。神隠しと呼ばれる現象のほとんどがこれに当たる。故に、敢えて八雲紫が攫う必要は無いのだ。

次郎のケースは不幸な事故でしかない。

そして、幻想郷に来る人間に、次郎のように能力が生まれる事は皆

無だ。何かしら過去の世代に、幻想じみた存在の血が入った等の根拠が無い限り、人間に能力は生まれない。

次郎が能力を発現した理由が、大昔まで遡った血筋によるものか、または完全なる突然変異のようなものなのかまでは八雲紫でも分からない。そういった事から、次郎はかなり稀有な存在なのかもしれない。

どういった理由かはわからなくとも、現実に次郎は能力を発現した。そしてその瞬間に爆発的な”妖気”が辺りを震わせ、日々の幻想郷管理を担っている八雲藍がその異常な妖気をキャッチした。藍は寝ていた紫を叩き起こし、次郎の元へ飛んできたのだ。

事情を聞いた八雲紫は、妖の血で塗れた次郎をしこたま殴り、当時は次郎に多大な罪悪感を抱いていた彼女は泣いて死ぬなと縋りついたのだ。

もっとも、生きたいと強烈に願い、そしてその想いに呼応するが如く発現した能力だ。当然次郎は既に死にたいとは感じてはおらず、ある意味殴られ損だと思ったものだ。

そして八雲紫は、その能力の危うさにいち早く気が付き、彼に力を制御をしなければここでは生きていけないと説いたのだ。

彼女の内心には既に「出来なければ殺すしか無い」と言う思いはあった。あったのだが、八雲紫の女の部分がそれを拒否した。

だからこそ制御して貰わねば困る。彼に死んでほしくないからだ。これは公私混同かも知れない。管理者として失格かも知れない。だけど、と彼女は自嘲する。

――仕方ないじゃない、女だもの……と。

以降、数ヶ月に渡った迷い家での次郎の修業は熾烈を極めた。威力が大き過ぎるのだ。例えば藍が弾幕で次郎を攻撃する。すると次郎は妖を屠ったように、弾幕に対して切り裂くように腕を振る。すると弾幕だけではなく、あたりの空間をも切り裂いてしまうのだ。

八雲紫の隙間とは違い、ズタズタに開かれた空中にある格子状の溝はどこの次元とも知らぬ、ただ暗い闇があるだけなのだ。

八雲紫も藍も唖然とした。切り裂いた範囲に彼女達がいたとしたら、彼女達の身体はパーツ単位で泣き別れなのだから。

慌てた次郎はすぐさま空間を融合させた。溝は始めから無かったように、ただ風が吹くだけだった。

この能力が怖いのは、次郎自身は戦闘の素人であるのに、経験を積んだ妖達が近寄る事無く倒せる所だ。さらに言えば、樹海で次郎を襲った妖のケースのように、次郎自身が生命の危機を感じる程の恐怖を覚えた時だ。彼の無意識下での防衛本能が、戦意を持って近寄った妖の殺気に反応し、たちまち妖はバラバラになるだろう。

次郎が身を守るという意志の元なら正当防衛かもしれない。だが、外の世界では非常識であろうが、幻想郷では常識になる事がある。そう、弾幕ごっこである。

これは博麗の巫女が提唱したスペルカードを利用した、幻想郷独特のルールを持った決闘方法である。

これは細かいルールが定められてはいるが、大まかに言えば、互いが戦闘の意志を明確にし、カードの枚数を提示し、発動には宣言をもって認められる。スペルカードには、絶対に避けられない攻撃は不可と言う縛りがあり、その上で相手が被弾するかカードを先に使い尽くしたら勝敗がつく。この勝敗は絶対であり、意義は認められない。

何故このような事が定められたのかは簡単だ。無作為に競い戦えば、力関係が上位のものが必然的に勝つ。だが勝つと言う意味には、相手の生命を奪うと言う事が含まれる。

つまりは何かあるたびに殺しあいをしていたら、一部の強者以外は消えてしまうだろう。そうなれば幻想郷自体が危うくなる。だからルールで縛るのだ。

逆に言えば、ルール内であれば何でも許される。と言う事は、力は弱いが知性がある妖は、相手が避けづらいスペルカードを作り、規定数被弾させれば勝利できるのだ。故にごっこなのである。

幻想郷には数々の異変が起きた。異変とは幻想郷の存在を揺るがす行為を指す。影響力の強い勢力が、個人的な理由で何らかの異変を起こすのだが、討伐には圧倒的な力を持つ博麗の巫女があたる。

全てを受け入れる幻想郷だからこそ、例え異変であれ首謀者を殺していたら、人間と妖のバランスは崩れる。そういった意味で弾幕ごっこは理にかなっているのである。

次郎が危ういのは、弾幕ごっこが異変解決だけに留まらず、好戦的な妖達のフラストレーションの解消として日常的に行われている点

だ。

妖にとっては遊びでも、非力な人間には死に繋がる。そして、中には相手の意志に関わらず問答無用で弾幕ごっこを仕掛ける戦闘狂の存在だ。

風見幽香や鬼達がこれに当たる。彼女達は戦う事そのものを楽しむ。強者を見かければ条件反射のように仕掛ける。次郎は非力な人間だが、能力は八雲紫すら霞む程の出鱈目さだ。

それが知れたら彼女達は自重しないだろう。腹を空かせた獅子の前に生肉を転がすようなものだ。

つまりは次郎が能力を制御出来ねば、幾人かの上位妖怪が消える可能性があるのである。

そして八雲紫と藍の指導の元、熾烈を極めた修業は数ヶ月に渡り、結果、次郎は完全に制御する事を成功したのだ。八雲紫が思った以上の効果を発現させて。

さて、時は現在に戻る。八雲家で対峙する八雲紫と次郎。彼女の話は確信へと進む。

「ねぇ次郎？貴方、いつ散髪した？いつ髭を剃った？教えてくれるかしら？」

「何の話だ？いま関係な……！？？」

「どうしたのかしら？」

「……ああ」

八雲紫の場違いとも言える問いかけに、下らない質問するなと言い掛けた次郎が黙り込んだ。何やら深刻な表情で。

「覚えている範囲では無い……かしら？」

「ああ……そうだ。いや、正確には修業以降、無い……な……」

「それが今日の話の真意よ次郎。貴方の能力は、貴方に適切な形で馴染んだわ？馴染んだからこそ生まれた恩恵、いえ、貴方にとっては弊害かしら？とにかく、貴方の能力が馴染んだ結果、貴方の寿命を、老いる事を…切ったわ。能力が寿命自体を生命の弱体、つまり危機と判断したようね」

ため息を付き、重苦しい口調で彼女は語る。次郎は口を開かない。

「貴方は能力を制御出来た。その結果、貴方は不老になった。でも肉体はそのままだから、多分不死ではないと思う。だけど、やはり生命が瀕死を迎える状況になれば、貴方の能力は貴方を守るでしょう。つまり実質的に貴方は死なない。さあ、貴方はこの現実をどう受け止めるのかしら？これは貴方に恋する女としてではなく、この幻想郷の管理者、八雲紫として確認しなければならないの」

ふう、と一息ついて更に彼女は言葉を紬ぐ。

「そして付け加えるなら、貴方が能力発現と共に出したのは、人間の神秘である霊力ではなく妖力よ。つまり、貴方の肉体は人間の物

だけど、貴方という存在は、限りなく妖怪に近い存在と言えるわ？だからちゃんと答えて欲しいの。重い現実だからこそ、尚更」

八雲紫はじっと次郎の瞳を見つめる。話す事は全て話した。さぁ後は貴方の答えよ？彼女の目はそう語っている。

１０分、２０分、沈黙が続く。八雲紫は急かす事はしない。ただ待つ。待つだけの理由になる重い現実なのだ。そして———次郎はふと伏せていた顔を上げた。

「俺は……何もしないよ。弾幕ごっこも何かの役割を担ったりもしない。寿命が無いなら、いつまでもあの屋台のオヤジでいるさ。俺が妖怪になっちまったのは、まぁ、仕方ないんだろうさ。だから、俺は俺の意志で貫くよ。何処の勢力にも汲みしない、中立な妖怪としてな。そんな訳のわからん妖怪がいても構わんだろう？だってここは幻想郷なんだからな」

そういって次郎は、二度と髭が生えない顎をつるりと撫でた。

「……誓える？」

「ああ、誓うよ」

「なら、証を立ててもらってもいいかしら？」

「ああ、いいよ」

次郎は事も無げに言う。

「……貴方に、式をうたせて欲しい。これは藍に施した術とは違っ

て、貴方の妖気を半分ほど私に譲渡し、且つ私の意志で貴方の行動を縛る事が出来ると言うものよ。とは言っても縛る事は基本的にしないし、貴方は今まで通り自由なままよ。ただ、万が一貴方が暴走した時の保険。もちろん貴方の強大な妖力を貰う恩恵が私にはある。だからそこは軽減してもいい。さて、どうかしら？」

八雲紫は探るような目で言う。

「構わない。式がなんだかわからんが、自由に動けるなら異存は無いな」

次郎は即答する。その事実に八雲紫は驚くが、次郎としては特に思うところは無い。ただ、妖力を欲する理由が無いだけだ。何より、恩がある八雲紫に恩返し出来るなら、それで重畳。その思いのみである。

「その軽減とやらもいらん。そのままやってくれ。痛くするなよ？」

次郎はおどけて言う。

「なら遠慮なくやらせてもらうわ。次郎、貴方は八雲紫と病めるときも健やかなる時も――――」

「やいコラ……いくらなんでも俺にも分かる。それは絶対に違うだろ」

「やだ次郎、ちょっとしたお茶目じゃない♪……ちっ。なら改めて――」

こうして次郎は八雲紫の式となった。妖としての能力はかなり抑え

られたが、次郎には些細な事だった。

「ところで次郎？貴方の家名はなんて言うのかしら？そういえば聞いたことが無いわ？」

「言ってないからな」

クックッと喉で笑いながら次郎は人の悪い表情を八雲紫に向ける。

「教えて欲しいわ？貴方の事、もっと知りたいもの」

「まぁ主様の願いだ。教えてやらんでもない」

「もったいつけて、意地悪しないで！」

「仕方ないな。俺の家名は……」

「家名は！？」

「いや、分からんのだ。俺が幻想郷へ来て、まずここは何処だと状況確認をした時だ、何故か苗字だけは思い出せないんだなぁ。まぁ困らんからな、別に。だから分からんとしか言えんのだよ」

「そう、なら八雲を名乗ればいいわ？」

「えぇ……」

「なによ、失礼しちゃうわ？でも、そうね？貴方はただの次郎がし

っくりくるかもね？」

「ああ、ただの次郎。それで充分だ。さて、帰るわ。仕込みの時間だ」

そういって次郎は腰をあげ、幻想へと歩いていく。

「次郎？」

玄関に向かう次郎の背中に八雲紫の言葉が届く。

「なんだい？」

「幻想郷はすべてを受け入れるのよ。それはそれは残酷なことです

わ？ふふっ…次郎、ようこそ幻想郷へ」

次郎は八雲紫の笑顔に見惚れた。何故ならその笑顔はとても美しかったからだ。

登場人物

ただの次郎

幻想郷の管理者　八雲紫

色々と台無し　八雲藍

猫だもん　橙

日常と非日常の境界（後書き）

次郎が次郎たる理由、そんな話でした。

こんな長く続ける話になるとは考えていなかったので、話の骨組みをしっかりさせる意味で、次郎の能力の背景を書きました。

つか、ゆかりん好きなんだわ僕。

彼女は正ヒロインではないけど、次郎とは付かず離れずに大人な距離感の精神的な恋人？そんなイメージですね。

タグ通り、能力ツエーではありますが、次郎は次郎の意志で異変等には関わらない傍観者になりました。

次郎を不老にしたことは賛否あるでしょうが、悠久を生きる屋台のオヤジとご理解頂けたら嬉しいです。

次回からほのぼのに戻ります。

人生とは、ままならないものである。

次郎の朝は、彼の仕事を考えると早起きの部類に入るだろう。と言うのも幻想郷の人里は、日本で言う江戸時代に相当するからだ。

ただ、外の世界から流れ着く場違いな道具と、人間の盟友を謳う河童達の道具等が一部例外と言えるかもしれない。だが、基本的には近代文明の恩恵は受けてはいない生活が当たり前なのだ。

それは次郎も例外ではなく、自宅は元々豪農が建てた建物な為、人里では稗田家に次ぐ程度の広さがある。しかし朝方から元気な妖精達や、雨戸の隙間から差し込む陽射しは彼の眠りを浅くする。

「おきろジロッ！朝だよ！！」

「ひぃぃぃぃ！おいチルノ……お前さん体温低いから心臓に悪いといつも言ってるだろうに……」

「やっぱりあたいってば最強ね！ジロそんなんじゃ戦いに勝てないよ！」

「戦わないから俺は……最強はチルノに任せる！だからもう少し俺は寝……カードを出すなカードを…起きる起きます……」

と、毎朝こんな感じで次郎は強制的に早起きとなる。そして、もう一人の同居人である藤原妹紅は――

「んふん……暖かい……とても……少し何かが食い込んでるケド……」

「妹紅、あなたは食べられる妹紅？」

「……！？痛い！！首に歯がめり込んでるから！やだヌメヌメする！？声が反響する！？はっ！？てめえルーミア喰うな！顔丸ごと入ってるし！」

やはりこんな調子で叩き起こされる。

「……おはよ次郎。さわやかな朝だね。唇が紫だよ」

「ああ、おはよう妹紅、お前さん顔が粘液だらけだぞ……」

「「はぁ……」」

そんな爽やかな幻想郷の1日は始まるのだった。

――東方おとぎ草子――

「じゃ行って来る。仕込みは頼むよ」

「うん、いってらっしゃい。あなた、ん～」

目をつぶり、タコのような口をした妹紅が接吻を催促する。げんなりしながらも次郎は妹紅の頭をぽんぽんと撫でて誤魔化す。

「……色々問い質したいが、俺は大人だから華麗に流す。じゃあな妹紅」

「ぶう……次郎のイケズ」

何やら新婚夫婦におけるハートフルな出かけの儀式を演出したい藤原妹紅と、どこか諦めた表情の次郎の温度差は別して、風呂敷包みを抱えた次郎がどこかへと行くようだ。

人里の南端にある次郎の自宅から、彼は人里の中心へと向かっていく。のんびりと歩く次郎は、すれ違う住人たちとにこやかに一言、

二言交わしていく。

最近は里の者にとって、彼の印象も随分と良いものになった。それは彼が焼くパンや腸詰めの類いを里の食料品屋に卸しているからだ。娯楽の少ない里では、美食が娯楽になる。食事に華を添える事は、気持ちも華やぎ、家族の会話も進むというものだ。

故に次郎のパンは評判となり、彼自身も”妖怪のパン屋さん”の二つ名を戴いていると言う訳だ。

次郎が里の者と疎遠だった理由は、彼の交友関係がほぼ妖な為だ。彼が付き合う者は、理知的で人当たりがいい妖達ばかりであるが、人間の多くはやはり妖を怖れている。事実、年に数度は里の人間が妖に喰われている。故に、妖への印象はいつまでも恐怖と憎悪は消えないのだ。

そんな背景を知りつつも、次郎は見てくれだけで相手を分別しない。里の人間にはそれがどこか小憎たらしいのだ。里の人間も頭では理解している。全ての妖が人間を主食としていない事を。ただ、そうではあっても心は認めたくないのだ。同胞が未だ食べられていると言う事実がある限り。

それでもどうやら次郎は人間に害する者ではないと言う事は、次郎が人里に住んで数年、漸く浸透してきたと言う事だ。最も、次郎のパンや腸詰めだけでそうなった訳ではない。

それには彼を慕う上白沢慧音が、事あるごとに「次郎は害のある人間ではない。その証拠に、私も博麗の巫女も彼を慕っているのだから」と地道に言い続けた結果もあるのだ。

次郎は慧音には感謝してもしきれないと、尊敬の念を抱いている。だが皮肉な事に、慧音と妹紅は彼を伴侶にしたいと狙っており、そういった意味での打算――つまり次郎に対し、友好ポイントを稼ぎたい慧音の思惑もあるのだが、慧音の行動が彼に尊敬する素敵な女性と言う印象をぐんぐんあげる結果になった。

尊敬する女性――一般論ではあるが、それはある意味畏れ多いと言う感情に直結する。つまり彼女の涙ぐましい努力が、彼女の思惑とは全く別の方向へと行ってしまったのだ。彼女の秀麗な容姿、人格者たる生真面目な性格がさらに恋愛対象としてハードルが高く思わせ、慧音にとっては傍迷惑な現実がそこにあったと言う訳だ。筆者は「諦めんなよ！もっと熱くなれよ！」と慧音に声援を送らざるを得ない。結果はどうあれ。

そんな次郎が歩いていると、後ろから彼を呼ぶ声があった。

「次郎さーん！はぁはぁ」

「お、鈴仙か。おはようっと……」

「てゐだよ。因幡てゐ。よろしく次郎さん」

次郎を呼び止めたのは永遠亭の薬師見習い、鈴仙・優曇華院・イナバと、迷いの竹林の兎、因幡てゐであった。

「ああよろしく、因幡さん」

「てゐでいいよ？次郎さん。うちのうどんげがご執心らしいからサ？他人のような気がしないからね？」

そういってニヤリと笑ったてゐだった。小学生くらいの幼い容姿に垂れた兎の耳、その愛らしい見た目に反してどこか老獪な雰囲気を持ってゐであった。事実彼女はこの幻想郷の妖の中でもかなり長命な部類に属する。

「ちょちょちょちょっと～！！ななな何言ってるのてゐ！！ご執心ってご執心って…へへ変な事言わないでよっ！！」

「本当に馬鹿だねあんた。そんなに狼狽えたら本当だと自爆しているようなもんじゃないかククク…」

「そんなことないもん！そんなことないもん！」

「次郎さん、可愛いだろう？うどんげは」

「ああ、そうだな。鈴仙らしい」

「気が合うね、次郎さん」

「そうだな。退屈よりは楽しい方がいいな。そう思わないか？鈴仙」

「しょんなぁ～…そ、それよりじ次郎さんはどど何処行くんですか？」

「誤魔化したな」

「誤魔化したね」

「「クックックッ……」」

「あうぅ…意地悪しないでくださいぃ……」

妙な連携を発揮する次郎とてゐにたじたじな鈴仙だった。う詐欺と称される悪戯好きな因幡てゐと気が合う辺り、次郎も大概と言う事であろう。

「すまんすまん。俺は稗田のお嬢さんに届け物さ。毎週届けてるお得意様さ。鈴仙は薬売りかい？」

「そうです。師匠の薬は評判なんですよ～」

「うどんげが惚れ薬とかお願いしてたもんね」

「わー！わー！」

「必死だな」

「必死だね」

「もう、次郎さんなんか知りません！」

「ははは、すまんすまん。帰りに店寄りな。お詫びに何かご馳走するからさ。てゐもお近付きの印に何かご馳走するぞ」

「むぅ、そこまで言うなら許してあげます」

「と、言いつつ顔がにやけるうどんげであった」

「てゐ～～！！」

そんな賑やかな道中を経て、次郎は人里で一番の名家である稗田家

の前に立っている。

稗田家とは少しばかり特殊な家系である。その祖は稗田阿礼まで遡る。稗田阿礼とは、「古事記」の編纂者である。その阿礼には「一度見たものを忘れない程度の能力」があり、編纂に大いに活かされたと言う。

この能力は、稗田家に１００年毎に現れるという。そしてその能力が発現した者を「阿礼乙女」と呼び、阿礼から受け継いだ仕事を引き継ぐのだ。

そして当代が９代目阿礼乙女、稗田家当主稗田阿求と言う事になる。

歴代阿礼乙女達は「幻想郷縁起」を編纂する。それは幻想郷に住まう人間が安全に暮らすためであるが、幻想郷で起きた様々な事柄を記録した歴史書と言う側面もある。

阿礼乙女が生涯を捧げて取り組む仕事は尊いと言える。ただ、阿礼乙女は例外なく短命である。その為、とある儀式を持って次の代へと転生する。そういう理由から、歴代阿礼乙女達は実は同一人物と言える。

但し、その肉体で経験した記憶は残念ながら引き継がれない。悲しい定めではあるが、そういう物なのである。

阿求は機嫌が良かった。小食な彼女が朝食でご飯をおかわりし、仕事である幻想郷縁起の記事がさらさらと筆が進むのだ。と言うのも今日は彼女が楽しみにしている水曜日なのだから。

稗田家には水曜日になると、人里一番の変り者と言われる「妖怪のパン屋さん」がやってくるのだ。

阿礼乙女である彼女であるが、年若い少女でもあるのだ。だからこそ人に甘えたい願望がある。だが転生者である為に両親は居ない。そんな彼女は名家稗田家当主と言う立場から、気さくに接してくれる人間は中々多くはないのだ。

そんな阿求を変り者と言われる男は、まるで姪っ子を構うように扱うのだ。人肌が恋しい少女にとって、それは何よりも勝る触れ合いであった。そういう訳で阿求は、朝から今か今かと彼を待っているのだった。

「阿求様、ご客人が参られました。あの物売りの殿方ですが、如何なさいますか？」

そわそわとしながら仕事をしていた阿求に、漸く待ち望んだ報せが届いた。そんな阿求の様子に、思わず笑いそうになる稗田家の女房（下働きの使用人の事）であった。

「そうですね、居間に通して頂けますか？あと、お茶は玉露をだすように。私は少し用を足してから参ります」

そう女房に告げると、阿求はいそいそと自室へ消えた。女房は知っている。彼女は余所行きの着物に着替え、その幼い唇に紅を引きに行ったことを。

その稗田家の居間では、次郎が所在なげに畏まって座っていた。何故なら毎度毎度訪問する度に、何やら高そうな茶菓子に玉露を勧められ、女房達は意味ありげな視線を次郎に向けるからだ。

「俺はパンダか」と思わないでもない次郎だったが、帰ろうとすれば女房達がすっとんで来ては必死に止められるのだ。

「次郎様、お待たせしてすいませんでした。少し仕事が立て込んでまして」

すまし顔の阿求がやってきた。女房達は「仕事…ねぇ？」等と口には出さないが表情はそう言っている。そんな女房達を視線で黙らせつつ、阿求は次郎の前に座った。

「やぁ阿求、相変わらず可愛いな。今日は焼き菓子をいくつか持ってきたよ」

「か、可愛いだなんて、ここ子供扱いしないで下さい次郎様。次郎様はもう少し女心を学ぶべきと阿求は思います！」

顔を真っ赤にして抗議するが、顔は何故かにやけていると言う器用な阿求に、それが子供なのでは？と思う次郎であった。そしてそれを言わない自分は、意外と女心とやらを理解してるだろうとも思ったりする次郎である。

「それより次郎様、阿求は散歩に行きとうございます。供をして頂けますか？」

言葉は丁寧なれど、顔を盛大に赤面させ涙目で訴える阿求の姿に、次郎は「これは随分可愛らしい脅迫だなあ」と苦笑いするのだった。とは言え、この幼い少女のお願いを断ると言う選択肢は次郎に元々無いのだった。

次郎は別に少女趣味と呼ばれる性癖は持ち合わせていない。ただ、本当は産まれていただろう我が娘への想いをダブらせてしまうのだ。その行為は自分の淋しさを少女達からの好意で紛らわしている様で、次郎の心はちくりと傷むのだが、己はそれほど高尚な人間じゃねぇよと内心で苦笑するのだった。人間はそれほど器用には出来ていない。つまりはそういう事なのだ。

「ああ、いいよ。茶屋にでも行ってぜんざいでも食べようか？」

「阿求はカフェに行きとうございます。駄目ですか？」

「いや、いいよ。じゃ、陽射しが弱いうちに出かけようか」

「はい！」

そういって二人は里の繁華街へ向かうのだった。先いく次郎の手を握り、ぴょんぴょんと跳ねるように歩く阿求。そんな二人の後ろ姿

はまるで親子の様だと、すれ違う人々は微笑ましく思うのだった。

ところで何故幻想郷にカフェがあるのか？それは近年幻想入りした人間が開業したものと思われるが、里の景観としては不思議な色合いを醸し出していた。

カフェとは元々ｃａｆｅ又はｃａｆｆｅを指し、つまりはコーヒーの事を言うのだが、近年はコーヒーや軽食を出す気軽な喫茶店に意味合いをかえている。

カフェの本場であるパリでは、頻繁にコーヒーを喫む習慣があり、だからこそコーヒー一杯に代金を払うのは厳しい。その為、代金が安いカウンターやテラスで手早くコーヒーを喫む習慣が定着した。

それからはカウンターのみや、所謂オープンカフェのようなスタイルがカフェの定番となったのである。

ここ幻想郷のカフェもオープンカフェのスタイルのようだ。軽食のサンドイッチのパンは、実は次郎のパンだったりする。ただ残念な事に、幻想郷にコーヒーは出回っていない。よってメインの飲み物は紅茶になるらしい。

コーヒーがないカフェが、カフェを名乗っていいのか！――次郎はそれを口にするほど野暮ではなかった。ただ、八雲紫に依頼してあるコーヒー豆の入手を強く急かすべき、改めてそう次郎に決意させるには充分な事柄ではあった。

閑話休題

仲睦まじい親子の如く、カフェにやってきた2人は、日陰になっている席にすわるとメニューを見た。

「俺は紅茶と、うーん、紅茶だけでいいや。阿求はどうする？」

「そうですねぇ、阿求も紅茶だけでいいです」

「そっか、甘いのはいらんのか？好きだろう？阿求」

「いいのです！阿求は次郎様とお話したいだけなのですから。あっ…えと、深い意味は無いのですから、勘違いなさっては困るのです……はい」

そんな微笑ましい二人に、穏やかな時間は流れていく。阿求のとめどないお喋りに次郎は静かにあいずちをうち、そんな次郎に阿求は「また子供扱いしてますね」と拗ねるのだった。

やがて話す話題も無くなり、阿求は静かに冷めてしまった紅茶を喫み、次郎はぷかりと煙草の煙を吐いた。かといって気まずい訳ではない。ただ、ゆるりと時間だけが流れていくだけであった。

「楽しいな……」

ふと、どこか淋しげな呟きを阿求は漏らした。次郎は少し眉をひそめたが、敢えて何も言わなかった。それは、こうして毎週繰り返される逢瀬の終盤に、必ず彼女が漏らす呟きだったからだ。

そして、それが意味する訳も次郎は理解している。

阿礼乙女は皆短命である。多少の幅はあれど、皆三十路を迎える事無く死に至る。これは最早呪いとも言える定めであるが、そこは受け容れようが受け容れざろうが逃れようは無いのだ。

死期が近くなれば閻魔に次の代の器を用意してもらい、死と共に魂はそれに移るのだ。それが彼女の背負う業であり使命である。

転生すれば新たな阿礼乙女として稗田家当主となるのだが、同一人物でありながら記憶は引き継がれない。つまりは魂は同一であっても、実質は別人と言える。

こうして次郎との愛しい時間も、転生してしまえば覚えては居ないのだ。阿求は「幻想郷縁起」とは別に、自分の個人的な日記を欠かさずに付けている。この宝物のような時間があったことを次の阿礼乙女に伝える為に。ただ、それが堪らなく悲しいのだ。

そんな事情を阿求本人や慧音から聞いている次郎は、自分に出来る事が一つだけあると知っている。それは次郎の能力を使う事だ。そうすれば少なくとも阿求は、一般人と変わらぬ寿命を享受出来るだろう。

だが、それは軽々しく口には出来ないと次郎は思う。閻魔とやらと

の盟約もあるだろう。それ以上に阿求本人の気持ちもあるだろう。それでも次郎は敢えて思う。あまりに悲しすぎるじゃないかと。

「……どうしました？つまらないですか？次郎様」

既に火の消えた煙管を咥えたままの次郎を、不思議そうに見上げる阿求。

「阿求、あのな……いや、なんでもない。そうだ飯でも食いに行かないか？」

「はいっ！」

満面の笑みで答える阿求の屈託の無い笑顔に、まだ焦らなくてもいいじゃないかと思う次郎なのであった。

――夕刻、喰いものや。既に開店の準備を終えたチルノと妹紅であった。

「おお、ご苦労さん二人とも。これは土産の団子だ。」

「ジロおかえり！」

「おかえり次郎。……？次郎その人は？って阿求じゃないか」

「あ、えと、お邪魔します妹紅さん、チルノさん？」

店にやってきた次郎の陰から、阿求が恥ずかしそうに現れた。

「阿求にご馳走するんだ。チルノ、甘酒だしてやれ。妹紅は最高の焼き鳥を頼む。俺は喰いものや名物鳥の唐揚げを作るかな」

妙におどけている珍しい次郎に、何かを察する妹紅だった。

「ああ、分かったよ次郎さん。とびっきりの鳥を焼くよ。阿求、こっちに座りな！」

妹紅は一番風があたらない奥の席に阿求を通し、チルノはニコニコしながらこの甘酒は自分が作ったと自慢気に説明する。

そんな二人を横目に見ながら、俺の喰いものやは凄い店だろう？と誰とも無く自慢する次郎であった。

今日も喰いものやは賑やかに客を迎える。

登場人物

少女趣味では断じてない　屋台のオヤジ　次郎

ナイスアシスト　藤原妹紅

我が道を行く也　チルノ

自爆ただ自爆　鈴仙・優曇華院・イナバ

うさ～ぎう詐欺　因幡てゐ

打算誤算　上白沢慧音

阿礼乙女　稗田阿求

人生とは、ままならないものである。（後書き）

阿求さんのお話でした。

まあ能力を使うのは簡単ですが、それをしてしまうには「仲のいい阿求が短命なのは悲しい」と言うだけでは理由が軽いだろうと言う次郎の葛藤を書きました。

いずれ、どうにかなるかも知れませんが、今は思い出を積み重ねる事を選択した次郎でした。

永遠の中の一瞬　その？（前書き）

タイトルで中身がばれますか、そうですか

永遠の中の一瞬　その？

人里から真っ直ぐ南へ行けば、鬱蒼とした竹林がある。里の者はしばしばここに竹の子を採りに行く。この竹林は不思議なもので、一年中竹の子が生えるのだ。だが里の者は決して竹林の奥に足を踏み入れない。

何故ならこの竹林の別名は「迷いの竹林」と、言われているからだ。これは何も「迷う程に深き竹林」と言う意味ではなく、文字どおり迷わされるのだ。まるで竹林が意思を持っているかのようにだ。

必ず迷う。故に迷いの竹林と言う訳だ。だから里の者はもっぱら、外観が見えている場所をうろうろするに留まる。万が一迷えば、数日は確実に出てこれない。これは運が良いほうであり、下手をすればひからびた死体になる事もあるのだ。

そして、里の者は知らない。何故竹林は人を惑わすのか？そしてその最奥地に何があるのかを。

――東方おとぎ草子――

次郎はある日の早朝、自分で編んだ竹籠を背負い、迷いの竹林へと向かっていた。喰いものやで通しに出している竹の子の煮物の材料

を掘りに行くのだ。

竹の子は完全に地面に出てしまったらもう、灰汁が強くなり、糠で水煮にするなどの処理が必要になる。だが、先が地面を軽く持ち上げる程度の竹の子は、そのまま生で食せるほどの美味さなのだ。

しかし成長が速い孟宗竹は、昼になればもう大きくなってしまう。故に次郎は、まだ妹紅が夢の中の間に床を抜け出し、こうして朝霧に煙る草原を歩いているのだった。

次郎が竹林に着いたが、当然人影ひとつ見えない。彼は塩梅のよさげな場所を見つけると、背負っていた竹籠を置いて辺りを見回した。一面竹に囲まれているが、所々地面が盛り上がっている。

「おお、たくさんあるな」

次郎は満足そうに頷くと、まずは一服だと煙管を咥え、そして竹籠を椅子にして座った。

次郎は目を細めて煙草の煙を愉しむ。風が竹林を吹き抜けていく度に、竹の葉がさわさわと心地好い音を立てる。

そんな労働の前の一時を楽しんでいた次郎であったが、突然予期せぬ客がやってきた。

「おはよ、次郎さん。この前は世話になったね」

「ん、たしかてゐだったな。おはよう、てゐ」

小柄な体躯にくせっ毛の短い黒髪、そこに特徴的な兎の耳が乗っか

っている。そう、この竹林を縄張りにしている妖怪兎の因幡てゐであった。

「朝から精がでるねぇ竹の子かい？」

ニコニコしながら因幡てゐが次郎の横に座った。

「ああ、朝採りじゃないとその日のメニューに出せないからな」

「そうなんだ。私は竹の子なんて食べないからな。人間は偉いね、手間暇掛けるのを惜しまない」

「そう言えば、どこぞの妖怪兎は穴堀りに手間暇掛けるのを惜しまないって鈴仙がいってたな？」

にやりと笑いながら次郎は因幡てゐを軽く睨む。

「や、やだね次郎さん。そんな兎いるわけないじゃないか？」

「ま、別にいいけどな。だけどてゐ、尻尾が激しく動いてるぞ？」

「し、しまったー！せっかく会心の出来な落とし穴に招待しようとしたのに……」

因幡てゐは不覚である、と崩れ落ちて悔しがった。

「ははは、なら良い事教えてやろう。お前さんの尻尾だがな？お前さんワンピース着てるから見える訳が無いじゃないか。まだまだ修業が足りんな」

「くぅ…この私がまさか担がれるとはね……次郎さん、私はあんたに弟子入りするよ……」

因幡てゐは次郎の前に膝を付き、手を胸の前に手を重ねた。古代中国の武人の礼である。

「お前さん、何故そんなに悪戯に生命をかける！」

「お師、あの純真無垢、天然を絵に書いたようなれーせんが、驚愕に右往左往する姿、どう思いますか？」

「……和むな」

「でしょう？」

「ああ、あれが頬を染めて狼狽える姿…癒しだな」

「さすがお師、お目が高い……」

因幡てゐはにやりと次郎を見やり、頷いた。次郎もまた、頷く。そして次郎は立ち上がった。

「いいだろう。相手を騙す最高にして基本技、完璧なポーカーフェイスをお前さんに教えてやろう。たかが表情かと侮るなかれ。ブラフが効いてこその悪戯なのだ。俺の修業は厳しいぞ？お前に出来るか？」

「望むところです。お師、全てはれーせんをハメる為……」

こうして不思議な師弟がここに誕生した。二人の含み笑いが竹林にこだまする中、某所で薬草の整理をしていた鈴仙・優曇華院・イナバ嬢は激しい悪寒に襲われたという。

□■□■□■□■□■□■□

微笑ましいやり取りをしながらも、次郎はてゐに手伝われながら（下らない話をしながら）竹籠いっぱいの竹の子を収穫した。

「しかし、こんな見事な竹林に住んでるくせに、竹の子の美味い喰い方知らないとはなぁ…」

次郎は独り言のように話す。

「そんなに美味いのかい？こんなものが」

「……なら食ってみるか？すぐできるぞ？」

「本当かい？動いて小腹が空いたから、すぐできるなら食べてみたいねぇ」

「よし、なら作ってみるか」

そういいながら次郎は、さっきまで収穫していた物よりは大きめの竹の子を、２つ３つ掘り出した。

「喉も渇いたし、屋敷に行ってやらないかい？」

「別に構わないが、迷惑じゃあないのか？」

「姫は退屈しているだろうし、師匠は美味いものに目が無いんだ。だいたい私だけ食べたられーせんが後でうるさいからね？だから次郎さんが良ければ向こうでやろうよ」

「わかった。なら行ってみっか」

そうして因幡てゐを先導に、二人は竹林の奥にある永遠亭に向かうのだった。

「……甘いな、てゐ」

次郎は不自然な草の塊を飛び越えた。

「ちっ…流石はお師さん…やるじゃないか」

どうやら草の塊の下には落とし穴があるらしい。懲りない因幡てゐに次郎がにやりと得意気な表情で見やるのだった。

□■□■□■□■□■□■□

永遠亭、それは幻想郷の迷いの竹林の奥にある屋敷の名前である。人が近寄らないような僻地に建つ館としては、あまりに豪華な建物である。

不思議なのは造りがここ近年に建てられたようなデザインではなく、かなり古い時代の建物であろう外観であることだ。だのにまるで昨日今日に建てられたような真新しさがある。

それはこの館の主人、蓬莱山輝夜の能力がある為であった。彼女の能力「永遠と須臾を操る程度の能力」の効果故、この館の流れる時間が圧倒的に遅いのである。

永遠とはそのまま時間の概念が永遠、つまり時計の秒針が１つ進むのが永遠にかかると言う事である。そして、須臾とは数の単位である。１の１０００兆分の１にあたる。つまり、一瞬と言う表現より遥かに短い時間と言う意味だ。

輝夜が操るは時間だ。彼女と似た能力である十六夜咲夜は時間を止める。それと決定的に違うのは、輝夜は永遠と須臾の幅で時間を自由に操ると言う事なのだ。つまり、対象の周りは確実に時間が動いてはいる。だがそれが永遠であれば人は知覚出来ないし、須臾であってもまた短すぎて知覚するは叶わない。

彼女の館には永遠の時の流れがあるのだ。ただ、それが見るものにとっては時が止まってるようにしか見えない為、いつまでも建てられた当時のままの姿を保っているだけであった。

この永遠亭の主人である蓬莱山輝夜は、物憂げな表情でいつまでも代わり映えしない庭の景色を眺めていた。

「輝夜、ぼうっとしてどうしたの？」

そんな輝夜を見て、彼女の家族のような存在である八意永琳が声をかける。

八意永琳は古くいにしえの時代から輝夜の側に寄り添っていた。その長き時間、彼女は輝夜の親となり姉となり、友人であり、また半身のような――ある意味で家族や恋人よりも近き存在なのである。

そんな二人の間には特に言葉を必要としない。

何故なら、二人に時間の概念がそもそも無いのだから。二人が寄り添ってから相当な時間を共有して今に至る。そしてこれから先、二人は永遠と寄り添う。なれば会話などせずとも、互いの事は理解しきっている。

だが敢えて二人は会話などをしてみる。永遠の刻の流れを彷徨う二

人には、会話すら娯楽となるのである。
ある意味で永遠とは牢獄のような物である。この世に生きるものにとって絶対的な支配者である刻と言う理（ことわり）、それから外れた二人は、逆の意味で世の中から隔離されていると言える。

形あるものはいつかは壊れる。生きているものはいつか朽ち果て消えてなくなる。魂と言う物は輪廻し、また新たに生を受けるが、二人にはそれがない。

その終わりが無い圧倒的な停滞の中、二人は微睡み、そして藻掻く。永遠と言う牢獄の中では一時の変化すら瞬き１つの出来事でしかないのだ。

だが、二人はそれを受け容れている。何故なら自分達は永遠に許されない罪人であるのだから。そう考える二人にとって退屈と停滞と言うものは、自分達に課せられた鎖であり罰だと理解するのだった。

「あら永琳、ぼうっとなんかしてないわ？ただ考えていただけよ。さて、今日は何をしようかとね。明るくなってから今まで考えていたわ」

「あら、それで結局考えはまとまったの？」

「ええ、もちろん。だからこうしていたのよ。考えると言う事を今日はしましょうとね」

そういって輝夜は愉快そうに笑った。彼女の長い黒髪がその度に揺れ、豊かな光沢が輝きを増す。

「なるほどね？それは面白い考えね。ただね、輝夜？昨日もあなた、そうしていたわ？」

八意永琳はそういって輝夜を軽く睨む。最も目は微笑ってはいるのだが。

「永琳、それは違うわ？だって一昨日もこうしてたもの」

二人はそうして笑いあった。これは日々の娯楽であり、言葉遊びのような物である。

「そう言えば永琳、最近妹紅が来ないわね？少し退屈だわ？」

「ああ、そう言えばうどんげが言ってたわ？彼女、最近は人里に暮らして商売なんかしてるらしいわ？」

「商売、ねえ……」

「ええ、何やら不思議な人間の男にご執心らしく、彼の自宅に転がり込んだらしわよ？」

永琳がそう言うと、輝夜は思案気な表情で眉をひそめた。

「恋、ねえ。ねえ永琳、あの堅物な娘が惚れる男って興味がわかない？いったいどんな男なのかしら？」

「そうね？それは多分、あんな感じの男じゃないかしら？」

そう言って永琳が指を差した先に、何やら楽しそうに笑い合い竹藪から現れる次郎と因幡てゐの姿であった。

□■□■□■□■□■□■□

「さあ着いたよ次郎さん」

因幡てゐに連れられて、次郎は初めて永遠亭へと足を踏み入れた。竹林にぽっかりと開いた閑静な空間。そこに見える現代では重要文化財に指定されてもおかしくないような見事な館。

次郎はほぅ、と感嘆すると、腕組みしながらこの水墨画のような景観を楽しんだ。だが、ちょいちょいと因幡てゐに袖を引かれ、次郎は漸く我に返った。

「ああ、すまんすまん。見事な建物だからつい、な？見入ってしまったよ」

「まったくもう、こんな古くさい建物より、側にいる美少女に見惚れるべきと思うよ？」

因幡てゐは無視された意趣返しとばかりに、ニヤリとしながら次郎にしなだれかかる。もっとも、身長がやたらと高い次郎に、小学生と思わんばかりに小柄な因幡てゐであるから、父親の太ももにしがみつく娘にしか見えないのであるが。

「あら、てゐ？古くさいなんてご挨拶ね？と言う事はこの館より長生きな私も古くさいと言われてるのかしら？」

ふと側にいつの間にか八意永琳が立っており、笑顔であるが目は笑ってはいないと言う器用な表情で二人を見ていた。

次郎は永琳に軽く会釈をし、因幡てゐは何やらガタガタと震えだした。

「げぇ、師匠！？わわ私は古くさい等とは言ってませんよ？そ、その、あの、そう！古さに奥床しさがあり、それこそが魅力であると言ったんですよ！？いとをかしですよ！をかし……」

「へぇ、そう……で、こちらの方は？」

「は、はい、人里に住む次郎さんです。美味しい竹の子をご馳走してくれると言うのでお連れしたのですよ？」

「あら、それはご苦労様てゐ。あ、そうそう、てゐに用事があっ――」

「あー！いけない！畑の見回りの時間だ！行かなきゃ！じ、次郎さん、ごめんね？私ゃ用事を思い出してね？じゃそゆことで、師匠、次郎さん、サヨナラーー！！！！」

だらだらと滝のような汗を流した因幡てゐは、慌てふためき何やら言い訳しながら走り去った。まさに脱兎のように。きっと彼女は八意永琳の笑顔に危険を察知したのであろう。

後に残された二人は、気まずく笑い合うのであった。

「初めまして、私、八意永琳と申します。うちのうどんげがよくお世話になってるそうで。前に頂いた土産は大変おいしゅうございました」

「ご丁寧にどうも、痛み入ります。俺は次郎と言います。知っての通り、しがない屋台のオヤジです。今日はてゐに竹の子等振る舞うと言う趣向だったのですが……行ってしまいましたね？はははは……」

二人は丁寧に挨拶を交わした。

「貴方の事はうどんげから色々聞いているわ？なので是非お会いしたいと思っていたのよ。どうやら普通の人間……よりは私たち寄りな方とお見受けしました。是非、中でお茶でも振る舞わせて頂けますかしら？」

永琳は抜け目の無い表情で言った。そして、一目で自身の身体が妖怪化したのを見抜かれ、次郎の瞳に警戒の色が浮かんだ。

「そんなに警戒しないで？この幻想郷では普通なんてものはない。でしょう？」

くすくすと含み笑いを漏らしながら、八意永琳は恐ろしく妖艶な流し目を次郎に飛ばすと踵を返し永遠亭へと向かった。

次郎は暫く呆然とし、細かく頭を振ると、永琳の後について歩きだした。まったく八雲紫と言い八意永琳と言い、本当にここは恐ろしい場所だ、と思う次郎であった。

□■□■□■□■□■□■□

次郎がその少女、蓬莱山輝夜を初めて見た感想は、ただただ美しいであった。

八意永琳に促されるままに着いてきた次郎が、通された部屋の襖を開けると彼女はそこにいた。

格式の高さは間違いないが、それ以外はいたって普通な和室。そこの濡れ縁に足を畳むように横座りした輝夜が、ただじっと、庭を眺めていた。

地味で飾り気の無い部屋が、余計に輝夜の美しさを際立てていた。次郎はただ見つめ続けている自分の間抜けさには気が付かず、たかが１０秒程の沈黙が、有り得ない程長く感じていた。

「そんなに見つめられたら、恥ずかしいわ？」

輝夜から発せられた言葉で我に返る次郎に、輝夜はくすくすと笑いながら、そこにどうぞと座布団を指差した。

「ああ、すまない。失礼だったね。君をつい見てしまった」

「気にしないわ？慣れてるもの。いつだって私は殿方に見られてきたわ。そんなの今さらよ今さら」

輝夜は手をひらひらと揺らし、気にするなと笑う。

「あなた、イナバが言っていた次郎ね？私は輝夜、蓬莱山輝夜よ。うちのイナバ達を手懐けたようだし、退屈はしなさそうね？」

輝夜の言葉に次郎の眉が片方だけ吊り上がる。言葉は発してはいないが。

「……手懐けたかはしらんが、鈴仙はいいお得意様だよ」

「そう、あの娘、臆病だから優しくしてあげてね？」

ニヤリと人が悪い笑みを浮かべる輝夜。それを見て次郎は内心ため息をついた。どうしてこうも寿命が長い奴等は人をからかいたがるのか？と。

「失礼します」

次郎の聞き覚えのある声と共に、襖が音もなく開いた。そして、普段とは違い、畏まった態度でお茶を持ってきた鈴仙が入ってきた。彼女は次郎にぺこりと会釈すると、お茶とお茶請けを3人分置き、「ごゆっくり」と控え目に言うとそのまま出ていった。流石に主人の前ではそれなりの態度を取るらしい。

輝夜の横の空席にお茶が置かれているのは、そのうち八意永琳がそこに来るのだろう。

静かな沈黙の中、2人はただ黙って茶を喫み、添えられた茶請けの落雁を口にする。

「幻想郷にも和三盆があるんだな。上手い」

次郎が言う和三盆とは、サトウキビから精製される高級砂糖である。滑らかでえぐみの無い和三盆は、繊細な味を要求される和菓子には最適な砂糖なのである。

次郎が唸ったのは、この落雁の味もさることながら、この幻想郷に和三盆があるという事実にであった。

「ふふっ、美味しいでしょう？これはね、永琳が作っているのよ？」

輝夜は自分の事を誉められたかのようにはにかむ。

そうしてまた、緩やかな沈黙が流れていく。

「ねぇ次郎、貴方は私を見てどう思った？私ね、初めて会った殿方には必ず聞いてるの？それとも自意識過剰な娘と軽蔑するかしら？」

「いや別に軽蔑はしない。お前さんは綺麗だよ。つい見惚れる程にはな。ただ、そうだな、ただ美しいだけだな」

次郎の言葉に固まる輝夜。今まで彼女を見た人間の男は、例外なく彼女の虜になった。そんな男の反応を見るのも、彼女にはある意味娯楽なのである。

「あ、あら？面白いこと言うわね？それは何かの冗談のつもりかしら？」

輝夜の目に剣呑な影がさす。

「冗談のつもりは無いよ。お前さんは確かに綺麗だよ。だが、それは人間のたった一部分を示すだけの物だよ。人間の魅力ってやつは、説明するのが難しいが、強いて言うなら内面が滲み出るものだ。お前さんは綺麗だ、だがそれだけだ。お前さんから見えてくるのは空虚、そして無関心。他人にも自分にも興味を持てない人間が、どうして内面から魅力が生まれるんだ？」

「……」

「俺はお前さんが聞くから答えた。綺麗だと。だが綺麗なのは野に咲く花だって一緒さ。お前さんは生きていると言うだけで、それは惰性に思える。何か理由があっての事だろうが、それだけ綺麗なお前さんなんだ。勿体ないな」

次郎は思う。この女は人形であると。中身が空洞の泥人形だと。自分の空虚を埋めるために、飼い馴らせない退屈を他者を見ることで埋めているのだと。

事実、次郎がここへ来たときに彼女は次郎を値踏みするように観察していた。他者を観察するとは、他者を下に見ているような物だ。そしてそれは、彼女自身の悲しさを増長させるだけなのだ。少なくとも次郎は、輝夜を見て痛々しく思うのだ。

「永琳、もういいわ。入ってきて」

それまで次郎と睨み合っていた輝夜だったが、襖に向かって八意永琳の名を呼ぶと、襖が静かに開き、永琳が中に入ってきた。

「輝夜、だから言ったでしょう？次郎さんをからかうのは無理だって。この人はあの隙間妖怪が気に入っているのだから」

八意永琳はそう言いながら輝夜の横に座った。

「あまり、趣味の良い遊びとは言えないな。だいたいこの幻想郷には礼儀を知らないやつが多い」

特に気負う訳でもなく、やれやれと言うように呆れ顔で次郎はため息をついた。

「……空虚ね。上手い事言われたわね？永琳。ねぇ次郎、あなたまだ時間は大丈夫かしら？」

「ん？まぁ暗くならなければ、な」

今までのどこか作り物のような笑みを消し、輝夜は問い掛けた。空虚を面へ吐き出しながら。

「なら１つ、昔話をしましょう。貴方には退屈な話かもしれないけどね？」

「……輝夜」

咎めるような永琳の言葉に輝夜は手を挙げて制した。

「聞こうか」

「ええ、長くなるわよ？ねぇ次郎？――――

――――貴方は月に人が住んで居るのを知っているかしら？」

そうして、輝夜の長い長い昔話は幕を開けるのだった。

登場人物

竹の子掘ります　次郎

お師さん、私に知恵を　因幡てゐ

てゐより出番が少ないなんて……　鈴仙・うどん（ｒｙ

私なんか寝てただけよ　藤原妹紅

ザ・師匠　八意永琳

空虚　蓬莱山輝夜

永遠の中の一瞬　その？（後書き）

月の話書いてたら長くなってしまい、プロローグだけで切りました。

前半にてゐで遊びすぎただけですがね……

次回が肝なので、珍しく真剣に書きました。お楽しみにです。

永遠の中の一瞬　その？（前書き）

前書きに変えて――

この「永遠の中の一瞬」シリーズは、プロットの最後のある結末と現在次郎が語り合っているその時間に繋がるためだけにかかれてます。

東方の公式設定や、考察スレの見解とは矛盾した捏造設定が多々あります。

ただ二次とは言え、原作に精確に準拠させては幅が無くなり、面白くないと考え、思うまま書きました。

なので公式と違うんですけど（笑）的な突っ込みは、作者自身が自覚しての事なのでお許しください。

では本編どうぞ。

永遠の中の一瞬　その？

「月には地上とは違う世界があるの。それに纏わる馬鹿な女の話をしましょう」

そう口火を切った蓬莱山輝夜。彼女の瞳に映るもの、それは憎悪の炎であった。次郎はただ黙って頷いた。頭に浮かんだ選択肢はただ一つ、頷くのみ。輝夜の静かに抑えられた声には、次郎にそうさせる何かがあった。

□■□■□■□■□■□■□

月、地球の衛星の名前である。地球の６分の１の重力しか無い大気も無い星である。そこに都市がある。しかし地球からは見えない場所にそこは存在していた。

更には強大な技術力と、地球よりも何十世代も進んだ科学力により作られた認識阻害結界で地球からは観測出来はしないのだ。

かつてＵ．Ｓ．Ａ．のアポロ計画により、地球の人類は初めて月に足を踏み入れた。そしてその後のスペースシャトル計画と幾度となく人類は月を訪れた。

だが、月に降り立つ人類には、月の住人により「月とはこういう場

所だ」と言う強烈な刷り込みを行われているのを知りはしない。
そんな月の地球から見て丁度裏側に当たる場所、そこに月の都はあった。都といっても古風な造りではなく、全てが計算された造形であり、それは太陽の光を余すとこなく集光し、効率よくエネルギーに変換されるシステムに連動している。よって外観は全てクリスタルのように見えるのだ。

しかし大気の無い月で、何故生物が存在出来るのか？それは半透明な地球上には存在しない素材の膜で、全体がドーム状に覆われているからだ。

そのドームを1区画とし、月の都には３０区画が連結されて都市を形成している。そして、ドームの中には月の住人に最適な大気を発生する装置により、快適な気温と湿度が保たれ、地球以上に快適な空間となっている。

これらの圧倒的な科学技術を実現した人物が八意永琳と言う月人である。月の頭脳と言われた賢人が、ただ一人これらの技術の礎となった。と言うより、現代月の都のほぼ七割が月人がまだ地上にいた時代に、八意永琳が開発したものだ。

それを叩き台に蓄積された理論が、月の技術者が世代を重ね、現代月の都を支える事になったのである。

「――では、時計の針を古代まで戻しましょう。もう、後戻りは出来ないわ？さぁ、始めましょう。長く壮大で偉大な、そして愚か者達のお話を。ただ、とても残酷な話よ？貴方は耐えられるかしら？ふふふ、ふふふ……」

――東方おとぎ草子――

八意家、それはある国の名門貴族の家名である。その家系は代々優秀な人材を輩出していた。その為八意家の当主は、代々この国の政治に何らかの形で関わってきた。

そして近年、この家の祖先にはこの国の文化の礎を築いた偉人がおり、そしてそのＤＮＡに刻まれた何かの作用なのか、当代随一と呼ばれる才女、八意永琳が産まれた。

確かに八意家は優秀な家系ではあるが、永琳はある意味突然変異と言える。それは彼女が３才の時、当時はある研究所の所長を務め、ある国家プロジェクトを推進していた彼女の父親が、久しぶりに自宅に帰った時の話である。

まず研究職と言うものは終わりが無い作業と言える。当然それに携わる人間は、関わっている作業に没頭し、自分が設定した目的に達

するまで止めたりはしない。

すると自動的に食事は疎かになり、風呂には入らず、寝るのはその辺のソファーで間に合わせる。極端な話身体の電池が切れたら強制的にブラックアウト、つまり力尽きて寝てしまうのである。

そんな研究者の悪癖を先頭きって体現する永琳の父親が、プロジェクトの監査役に休暇を強制された。プロジェクトをハンドリングし、多くの成果を国にもたらした永琳の父親が、体調を壊して使い物にならなくなればプロジェクト自体が止まると懸念した政府の政治判断だった。

いくらそれなりに権力がある永琳の父親とて、さらに上の天の声には逆らえない。そういう訳で彼は久しぶりに自宅に戻ってきた。

ところがリラックス出来る自宅に帰った途端、彼は一気に気がゆるみ、そのままソファーに倒れこんで夢の中へと旅に出た。重要書類をテーブルに投げ出したまま――――

□■□■□■□■□■□■□

「これは一体なんでしょう？むむむ、これは実に興味深いですね！」

この発言は３歳児の物である。そう、八意家の一粒種の永琳である。

彼女は周りから神童と呼ばれていた。１才の誕生日を迎えた頃には

完璧に言葉を話し、２才の誕生日には大人が読む小説を普通に読んでいた。

両親にも使用人にも全く手の掛からないいい子と言う評判であるが、いくらなんでも異常である。彼女の近しい人間以外は永琳を気味悪がったものだ。

彼女が２才の時、父親がウサギのぬいぐるみを片手に、「永琳パパと遊びましょ？」とスキンシップを計った。それに対して彼女のセリフはこうだった。

「ごめんなさいお父様、永琳はご本が読みたいの。せっかく誘って頂いたのにすみません。お父様も多忙な方です。せっかくのお休みですから、身体を休める事をお薦めしますわ。先日読んだご本によると、成人男性のほぼ七割がストレス性の欝病を患っているそうです。私、お父様の顔色を見ましたところ、かなりの不摂生がたたっているように見えました。私、お父様が心配です。そんなお父様にはこのサプリメントをお渡しします。これはビタミン含有量が従来のタブレットと比べて云々云々云々……と言う訳です。あれ？お父様？泣いていらっしゃいますの？」

いつの間にかさめざめと泣く永琳の父親がそこにいた。仕事柄なかなか会えない愛しい娘にやっと会えた。その喜びを胸に彼は永琳を愛でようと、似合わないのを承知でぬいぐるみ片手にやってきたのだ。

だがこれはなんだ？妻よりも理屈っぽく、さらに逃れられない覇気、まるで自分の母親に説教をされているようだ。そんな遣り切れない思いに彼は泣いた。

「パ、パパは少し疲れたからお風呂に入るよ……。そ、そうだ永琳、パパと一緒に入るかい？」

これは名案である！と満面の笑みで言い放った父親に永琳が言った言葉は――

「ごめんなさいお父様、男女七歳にして席を同じうせずと言う言葉があります。これは男女の性に違いがあり、安易にその性を晒してはいけないと戒めた言葉なのです。なので永琳は、お風呂には一人で入るのです。だからごめんなさい、お父様」

「……」

「お父様？」

「はっ！？すまんすまん永琳、パ、パパは行くね？」

そうして彼は逃げるように風呂に飛び込んだ。永琳よ、せめて恥じらいながら言っておくれ。真顔で正論は私の心が痛いよ……永琳の父親は湯船で号泣した。2才にして親離れされた悲しさを、推し量る事は作者にも出来ない。

そんな幼児ながら精神は成熟しきった永琳は、いつの間にか父親の書斎にあった専門書はとっくに読破し、あまつさえその理論の脆弱性を指摘し、論破した独自の論文すら書いていたのだ。

それを知らない父親は、彼女の目の届く位置に重要書類を置いた。目を輝かせた永琳は、新しい玩具を得た少女の笑みを浮かべて書類

を読み耽った。尋常ではない速度の速読で。

ふと目を覚ました父親は、目の前にある光景に絶句した。何故なら彼の横たわるソファーの前のローテーブルには、綺麗に項目毎に整理された彼の重要書類があり、それを前にして彼の愛しい娘は、ノートＰＣを凄まじい速度で何かをタイピングしていたのだ。

「え、永琳？な、何をしているのかな？」

「あ、お父様！おはようございます！永琳はお父様が寝ていらしたので、一人で遊んでいました！」

あどけない表情で笑いながら、永琳はいった。父親は取り敢えず書類の事は置いておき、彼女が何やら作業をしているＰＣを覗いてみた。父親らしい余裕のある笑顔で。だが次の瞬間、彼の笑顔は凍り付いた。

「え、え、永琳！？こ、これは何をしてるんだい？」

「お父様の部下の書いた書類ですが、穴ばかりでした。ですので永琳が手直ししていたのです。実験データを閲覧しましたが、永琳のアプローチなら７５％の作業効率上昇を見込めました！お父様、部下さんにこれを見せてあげてくださいね？全く、お父様をお助けする部下さんがこの体たらく、永琳はお父様が心配です！」

「あ、ああ、助かったよ永琳……パパは本当に疲れたからベッドに行くね？はは、は…おやすみ永琳」

「おやすみなさい！お父様！」

病人のような表情でふらふらとベッドに倒れこみ、死人のように眠り込んだ永琳の父親だった。何故なら、彼女が批判した書類の署名筆頭者の名前は八意永源である。そう、彼の名前だったのだ。

その一件はかなりの大事になってしまった。その永琳が書いた論文は完璧であり、現在八意永源達が進めていた研究を一気に解決し、さらに数世代先の効果が見込めたのだ。

それを永源本人が本人名義で提出することは憚れた。と言うのも論文にかかれた理論を駆使出来るのは、永琳本人だけだからだ。その論文を永源が見るに矛盾は無い。だが、そこに書いてある理論を柔軟に応用する事は彼には出来ない。まして、彼の部下にも無理なのだ。それは彼の研究所で一番の研究者が永源だからだ。その彼に理解出来ないものが部下にどうして出来よう。

結果、八意永源は娘が書いたと上に報告せざるを得なかった。そしてそれは彼女と彼女の家族、そしてある少女の人生を変える事になる。

それを知るよしもない永琳本人は、今後父親と一緒に研究所で研究に携われると言われ、彼女には珍しくぴょんぴょんと跳ねながら喜びを表していた。それを永源は複雑な表情で見守っていた。拳をきつく握り、血を滲ませながら。

八意永源の研究所が進めている研究――その名前はテラフォーミングと言う。惑星を人為的に変化させ、生物が住める環境を造り出す事を指す。そして、計画の名前は――

『月移住計画０号』通称、ルナプロジェクトと言われた案件である。

□■□■□■□■□■□■□

ここに或る国がある。その国の名前は――現在存在する言語では到底発音できない名前であった。この国は地球の遥か東方、所謂極東と呼ばれる地域にあった。

不思議な事に地球の歴史で言う所の氷河期を迎える前の時代にこの国はあった。まだ地球上に人類らしき人類がいない時代、それなのにこの国は存在していた。

この時代の地球上にある光景と言えば、原野、荒野、密林、そしてまだ汚されていない海、それしか存在していない。

そして生物と言えば、所謂恐竜と現代で呼ばれる種類の生物や、まだ進化の過程にある不成熟な生物が主だった。

ただ、この国が生まれて約１０００年、この広大な国の周りには、妖(あやかし)と呼ばれる不可思議な存在が住み着きだした。何故かは分からない。ただこの国が成長していくと共に生まれたとしか言えない。

この国は地球歴史の古代であるのにも関わらず、その様相は現代都市を遥かに凌駕する外観をしており、現代でいうＳＦと言うフィクションの世界のようである。

もっともこの国が建国されて８００年は、それほど高度な都市ではなかった。それでもこの時代にしてはあり得ない程の発展ではあったのだが。ただ或る時１人の天才が現れ以降、都市の発展は若竹のように一足飛びどころでは無い発展を遂げたのだ。

この地球には場違いな国の支配者階級、その頂点に君臨しているのは※※※家の一族である。やはりその発音は困難であるが、その家名は『太陽と月を司る』と言う意味になる。それはこの国を建国したこの一族の始祖が、昼と夜を操り、沢山の奇跡をもたらした事に由来する。

そして、始祖の一族は必ず何かしら奇跡をもたらす能力が発現し、そのことからその家の当主は代々王を襲名し、国の安寧を護るために尽力するのだ。

王は多忙だ。国の舵取り、様々な上申の決済、身体がいくつあっても足りないほどだ。その王には愛すべき娘がいた。黒髪が輝く程に光沢があり、その容姿は少女ながら大人が溜息をつくほど美しかった。

その姫が現在、王が一番頭を悩ませている案件であった。というのは最近王妃が他界した。長命なこの国の一族であるが、ある恐ろしい病気にかかると簡単に死ぬ。

その病気は原因がわかっておらず、ただ『穢れ』が身体を突然蝕むのだ。そうするとあっという間に全身の内臓がその役割を放棄し、そして身体はその機能を停止するのだ。

この国の研究部門が必死に研究し、分かっていることは、この地球上にいる事で穢れに汚染される事だ。だが、穢れが何から発生し、どういう経緯から発病に到るのかは分からないのだ。

その病気はなんの前触れもなく発症し、そしてなんの手の施しようも無いうちに死亡する。故に穢れにやられたと言うしか無いのだ。

そこで王は国の最優先な方針として『ルナプロジェクト』を立ち上げた。国民を全て月に移住をしてしまおうと言う大計画である。その為に王は支援の出し惜しみはしないと宣言し、国民は諸手を挙げて歓迎した。

それまでは月に探索ロケットを上げ、細々と進められていたプロジェクトだったが、ある天才の登場で一気に実用段階までに加速した。そして現在は定期的にロケットを飛ばし、月面のテラフォーミング作業は最終段階に入った。

その天才がやるべき事は全て終え、実行プロジェクトチームにその全てを委譲された。後はテラフォーミング作業が終わり、『月の羽衣』と呼ばれる宇宙船の建造が終われば、プロジェクトは完成するのだ。

王は、国民は涙を流して歓喜し、そしてその完成を指折り待っていた。そんな矢先に王妃は亡くなった。皮肉にも穢れに犯されてだ。多忙で邸宅に帰れない王に代わり、姫を沢山の愛情を持って可愛がっていた王妃が死んだ。姫は1ヶ月の間慟哭し続けた。それ以降は誰とも口を聞かないという。

彼女の心に空いた穴は、容易には塞がらない。そんな姫の様子に心を痛めた王ではあるが、国家元首として王城をあけるわけにはいかない。このルナプロジェクトが最終段階を迎えた今日だからこそ尚更に。

姫のただ1人の父親としては直ぐに飛んでいきたい。だが、王にのしかかる国民と言う重責からは逃れられないのだ。王は心で泣きながら、執務机の電話を取った。

「私だ。すまないが永源を呼んでくれないか？」

□■□■□■□■□■□■□

私は泣いている。ただ泣くことしかできない。母様はもう私を抱いてはくれないからだ。

母様がいなければ私は1人。父様はこの国の太陽。だから我が儘は言えない。乳母も執事も皆、私を元気付けようと必死だ。

だけど私はそのうそ臭い笑顔は見たくない。だって貴方たちは仕事だから笑っているのでしょう？

ならば私は姫と言う仮面で笑えば満足かしら？

いや、嫌よ。

貴方たちを満足させる為に私は笑わない。

母様との最後のお別れの時、穢れているからと言って触れさせてもくれなかった。

母様……

母様……

母様に逢いたいです。

ただ何も言わず、ただ抱き締めて欲しいだけなのです

だったら私は穢れてもいい……
穢れなんか怖くはない。
ああ、気が狂いそう。
そんなうそ臭い笑顔で私を見ないで。
穢れてるのは貴方たちでしょう？
何も話したくない。
声を出せば母様を呼びたくなるだけだもの。
貴方たちは母様ではないでしょう？
私の孤独は分からないでしょう？
分かるというならどうにかしてよ。
この気だるい気分を。
この肌を刺すような、叫びだしたくなる気分を。
私が狂っているの？
私が狂っているの？
ねえ、答えなさいよ。
貴方たちがへつらう王族に狂っていると言いなさいよ？

あはは

あはは、馬鹿みたい。

ああ、どこかに消えてしまいたいわ。

「姫様、お客様が参られました。王様からのお達しなのでお通し致しますね」

うるさい。

何が姫様よ。

人形と変わらないじゃない。

こっち見るな、穢れるわ。

あはは、あはは

□■□■□■□■□■□■□

豪華な応接が備えられた王の邸宅のリビング。その革張りのソファに少女は膝を抱えて座っていた。

ただ虚空を見つめ、一言も発しない。少女の容姿に見合わないどこか枯れた雰囲気を醸し出していた。故に痛々しい。

そんな少女を見つめる優しい光を湛えた一対の目。

その持ち主たる銀髪の美少女は静かに口を開いた。

「ねぇ貴女、名前はなんて言うのかしら？」

王族の姫に名前を聞いた。基本的に王族は敬称で呼ばれる。故に真名を知らぬ者の方が多数だ。

普段は姫としか呼ばれない自分に名前を聞いた。ただそれだけの事に姫は驚き、そして言葉を発した。王妃が亡くなって実に半年、姫が久しぶりに発した言葉は――――

「なんで！？」だった。

それがこの2人の初めての邂逅であり、以後長く続いていく2人の物語のプロローグとなった。

登場人物

月の頭脳　八意永琳

天才の父　八意永源

――――　蓬莱山輝夜

或る国の王

或る国の王妃

或る国の姫？

或る国の奇跡をもたらした始祖

永遠の中の一瞬　その？（後書き）

次郎が出てないし（笑）

なんか2話で終わるかな？思いましたが、あと2話くらいかかりそうですな。

時代設定とかはなんとなく古代なら恐竜だろ！って感じであの設定にしました。

このシリーズはシリアル路線まっしぐらですいませんです。

なんか輝…げふんげふん…姫様がいきなり壊れてますが、気にしないでいただきたい。

まぁ、ゴニョゴニョとなりますのでご心配なく。

感想頂けたら嬉しいです。

永遠の中の一瞬　その？（前書き）

なんか色々捏造設定すいません。

永遠の中の一瞬　その？

八意永源が王からの連絡を受け、彼の執務室に赴いた時は深夜であった。午後１０時に部屋へ来てほしい――それを永源が聞いたとき、何やらきな臭い物を感じた。

それはそうであろう、王とは唯一の人である。個人であって個人ではない。国の象徴であり固有財産なのだ。スキャンダルは御法度、暗殺等の謀略の懸念は常に付きまとい、気の休まる暇などない。

ならばどんな些細な危険も排除しなければならない。だが、永源が王の秘書に連れられて彼の執務室の扉を開いた時、彼は１人の護衛もおらず、秘書すら追いやった。永源は不審に思う。これから自分はどんな面倒を押し付けられるのかと。

「すまないな永源、こんな時間に呼び出して」

そう言って王は革張りのカウチに身体を横たえた。これは王が見せる態度ではない。永源は理解した。王が求めているのは王立科学技術研究所所長、八意永源ではない。幼い時に一緒に野山を駆け巡った竹馬の友の永源なのだと。

「……※※※ちゃんのことかい？」

だから永源は敢えて砕けた口調で聞いた。

「そうなんだ永源。※※※が半年口を訊かない。信頼できる使用人を送ったが取りつく島が無い」

王は疲れ切った顔で言った。その顔に覇気は感じられない。

「そうか、※※※ちゃんは※※※を溺愛していたからなぁ。可哀相に……。※※※だってまだ若かった。逝くには早過ぎるよ。※※※ちゃんに※※※の死を受け容れろとは言えないな」

「ああ、そうだな……。俺だって未だに※※※の夢をみる。だからこそ今はプロジェクトを優先させなければならん。だが、※※※を捨ててはおけんのだ。これでも父親だからな……」

王は王妃と姫、3人が笑っているポートレートを手に取り眺めた。王とて人の子、伴侶の死を簡単には割り切れない。だが、王として振る舞わなければならない現実が彼を消耗させる。

「で、私に何をさせたいんだい？まぁ想像はつくけどな」

「ああ、悪いがお前の娘を※※※の教育係につけてくれんか？彼女なら申し分ない。2人とも年近いから、何かいい方向に転がると期待してるんだ」

そういって永源を見る王の目は、縋るような力無き物であった。永源はふと微笑むと頷いた。

「永琳は今、プロジェクトの方は御役御免だから地上に戻っている。明日にでも邸宅に行かせるよ。ただ、私でもある意味御せない娘だ。だからやり方は永琳の好きにさせるけど構わないかい？」

「ははは、永源には過ぎた娘であるか？いや、すまん。永琳嬢の好きにさせて構わん。彼女はお前どころか俺以上にに優れてるよ」

「ご冗談を？」

「冗談じゃない。俺が唯一劣等感を感じる相手がお前の娘だ」

「はぁ……」

「はぁ……」

2人の大人の溜息がユニゾンした。それぞれ永琳に何かしらやり込められた事があるらしい。

「とにかく頼む、な？」

「分かった。任せてくれ」

こうして肩書きを外した2人の父親達の会談は終わった。

――東方おとぎ草子――

ここは王の邸宅。早朝の湯殿では2人の美しい少女が沐浴していた。1人はこの国の姫、もう一人は賢者と言われる才媛、八意永琳であった。

２人は出会ってからかれこれ５年、まるで姉妹のような関係になっていた。

母である王妃の死に塞ぎ込み、何者も拒絶していた姫を、父親であるこの国の王が見兼ねて、竹馬の友でありこの国の重鎮である八意永源に助けを求めた。

そして姫の教育係という名目で送られたのが永源の娘の永琳である。賢者と呼ばれ、この国の発展に少女ながら貢献し、そして薬師としても優秀な永琳。彼女ならば心に傷がある姫を救えるのではないか？そういう思いで王と永源は彼女を姫につけた。

結果から言えば大成功だった。姫は明るくなり、活発になったのだ。だが王達は知らない。永琳の恐ろしさを。永琳は姫と初めて出会った時、彼女は姫に名を問うた。

姫に名を問うという無礼に、口を閉ざしていた姫は驚き、思わず「えっ！？」と声をあげた。だが姫は素直に答えなかった。何か癪だったからだ。

すると永琳は姫の前に座り、１つわざとらしい咳払いをするとニヤリと笑った。そして、医学的見地、人類学的見地、形而上学的見地からそれぞれの見解と考察を述べはじめ、如何に姫の行動は幼稚でくだらないかを立証しはじめたのだ。

姫は悲鳴をあげながら逃げ惑い、自室やクローゼット、トイレや屋根裏まで逃げに逃げた。だが、どこに逃げても永琳はやってきた。因みに追い掛け回している間も途切れずに講義は続くのだ。

そして、姫がちゃんと喋る迄私はこれをやめないわと言い放ち、ならやってみなさい！と更に逃げた姫だったが、それは本当に3日3晩続いたのだ。

3日目の早朝、疲れて這いつくばる姫に永琳は言った。長かった為、要約すると「貴女はまだ少女に過ぎない。だから格好つけなくでもいい。貴女が遣り切れない想いを吐き出す場所が無いのなら、私がその場所になってやる。そして私はそれが出来る。何故なら私は差別しないからだ。貴女が姫だろうが容赦はしない。だって貴女は私の友達になるのだから。友達は友達に遠慮などしない。だから私は貴女に考慮など一切しない。だから※※※、ぐだぐだ言ってないでこっち来なさい。おねーさんがだっこしてあげるから」と。

そんな永琳を茫然と見つめていた姫は、やがて盛大に涙を流しながら、今まで溜め込んだ罵詈雑言、苦悩、弱音、母への未だ消えぬ慕情、全てを永琳の胸に縋り吐き出した。

まるで母の胸に顔を埋めるように。そうして2人は親友になった。永琳自身、天才だの賢者だのと一目置かれ、胸襟を開いた付き合いが出来る相手は居なかった。孤独な姫と孤独な賢者は、こうして奇妙なシンパシーに惹かれ、2人は親友となったのだった。

そして場面は湯殿へ戻り――――

「永琳……貴女ずるいわ。酷い裏切りよ。これは不敬罪に値するわ？」

姫は眉をひそめて永琳を睨む。但し彼女の顔は美しく、凄む表情すら愛らしく見えてしまうので、彼女の思惑は叶わない。

「な、なにが不敬罪よ。貴女ね、自分の発育不全を私に転化しないで欲しいわ？良かったじゃない、走る時に苦労しないわ？」

穴が開くほど自分の胸を睨む姫に、永琳はその豊満過ぎる胸を隠し、非難の声をあげた。

「なっ！？今のは完全に不敬罪！ふけーざい！なにさ脂肪の塊の癖に！」

今度は姫が無い胸を隠す。

「ふっ、無いよりはある方がいいのよ？無いよりは、ね？」

「ち、ちっきしょう！返す言葉が見付からない！」

乙女としての格で敗北した姫が、がっくりと崩れ落ちた。そもそも姫の胸は永琳が出会った時とあまり変化は無いのだ。

「あらあら姫様、言葉が卑しくてよ？」

「うっさい永琳。ってあれ？あれあれ？」

「な、なによ？」

急に姫が悪企みをする猫の表情で視線を下げていく。そして舐めるように永琳のある部分を見た。

「これは何かしら？あらあら永琳さん？ここはこんなに肉付きが良かったかしら？あらあら、試しに私のくびれたここと比べてみましょう。あらあらまぁまぁ……」

姫が永琳の腰をつまむ。

「くっ、胸で勝ってるからいいのよ！ちくしょう」

「あらあら、永琳様ったら言葉が卑しくてよ？」

「……なによ？」

「……なにさ！」

「「表に出なさい！」」

そうして2人は湯殿から凄まじい速さで飛び出し、邸宅中で鬼ごっこを敢行するのだった。裸で。

因みにこの儀式は毎日の日課だ。2人は飽きもせずにこれを続け、最後は――

「姫様！永琳様！！もういい加減になさいませ！だいたい貴女達は恥じらいというものがクドクドクドクド……」

官邸の執事（２１歳独身、最近彼氏に振られた。趣味は男装）に説教されて終わるのだ。

仲良きことは美しき哉

つまりは姫は救われたという事であった。

□■□■□■□■□■□■□

巨大な広場を見下ろす台の上に１人の男が立っている。精悍なマスクに眼光は鋭く、その鋼のような体躯は、まるで猫科の獣のようだ。威厳というオーラを身にまとい、見るものを畏怖させる覇気を彼は発している。彼はこの国の王だ。建国以来、始祖に次ぐ人格者、または国民の父と称される紛れもない王であった。

彼の横には寄り添うように美しい姫がいる。その後方には王弟が宰相として控える。

王が見下ろす広場には、溢れんばかりの人がすし詰めになっており、見渡せば広場に入れなかった人の波が見える。これから行われる歴史的な出来事を見逃すまいと詰め掛けていた。

「王、そろそろ始めましょう。見てください、あの表情を。王の言葉を今か今かと待っております。クックックッ……」

「宰相よ、控えよ。……では始めよう」

宰相の言葉に顔を顰めながら、王は心配そうに見上げる姫の頭を一撫でし、演説台へと歩み出た。

大地を揺らすような喚声と熱気に広場は包まれた。そんな民衆を王は満足そうに見渡すと、すっと手を掲げた。そして静寂――

「聞け！我が国民よ！この国が建国されて１０００年の時が経った。偉大な先人達が血を流し、屍をさらして造りあげたのが今、そなた達が踏みしめているこの国だ！平和と繁栄を旗印に余とそなた達の先祖達は必死に尽力し続けた！だがっ！ここ２００年、その平和が脅かされた！何故だっ！！！」

王の鬼気迫る問い掛けに、広場はさら揺れた。口々に穢れ！穢れ！と叫んでいる。

「そうだ。我が妃も今日この日を迎える事無く逝った。そなた達の

家族もまた同様だ。だが、我々は立ち止まる事はしない！何故か！それは我らの代わりに屍を晒してくれた偉大な先人への冒涜だからだ！我が妃、いや敢えて我が妻と呼ぼう！嘆き悲しむは簡単だ。だが、余は我が妻の死を無駄にしない！そなた達の愛しい誰かの死を無駄にしない！そしてッ！！今日この日を迎える事が出来た！」

王は広場の、さらにその向こうに入り切らない民衆を見据えた。

「今日この日、念願であったルナプロジェクトの完成を宣言する！そして、これより一年の期間をもって、我々の方舟、月の羽衣に乗って月へと移住する。我が国民よ！今より穢れの恐怖は去った！さらば地上よ！そして我々は旅立つ！新たな可能性へと！！」

王の宣言が広場に響いたその瞬間、会場が揺れた。いや、国が揺れた。入りきれない民衆の為に用意された大型ヴィジョンが国中に設置されていたのだ。嵐のような狂熱と狂乱が駆け巡り、地面を揺らせて乱舞する。それほど穢れの恐怖は国民を蝕んでいたのだ。

満足そうに騒ぎを見つめる王と、民衆の圧力にたじろぎながらも父王を誇らし気に感じた姫は、ただただ寄り添っていた。願わくばこの日の喜びが、未来永劫続く事を願いながら。

その後ろで冷めた目で騒ぎを見ている宰相には気付かずに。

そしてこの地上から、時代にそぐわぬこの王国は姿を消した。王国全てを焼き尽くし、地表ごとえぐりとる兵器によって跡形もなく痕跡を処分して。

後年この極東に人の営みが生まれ、国が造られた。そこに住まう人間は、荒野に開いた巨大なクレーターを見つける事になる。

その国の学者達は多いに悩んだ末にこう結論付けた。

「古代に巨大な隕石が落ちた。その結果、地上に氷河期が訪れ、生物は１度死滅した」と。

そして、学者達はその周辺から時折見付かる、全く理解出来ない道具に首をかしげた。それをオーパーツ（場違いな工芸品）と呼び、科学が発展した現代に未だ謎を残す品に、多いに探求心を掻きたられたと言う。

□■□■□■□■□■□■□

地上から約３８４，４０３?、地球に寄り添うように回り続ける白き荒野が広がる衛星。それは月、ＭＯＯＮまたはＬｕｎａと呼ばれている。

地球のある国では、月には兎が住むと言う伝承がある。

ある時猿、狐、兎の３匹が歩いていた。すると今にも力尽きて死にそうな老人に出会った。３匹は老人を助けたいと思い、猿は森の木の実を、狐は川の魚をそれぞれ集め、老人に食糧として与えた。

だが兎だけはどんなに頑張ろうと何も採れなかった。兎は非力な自分を嘆き、それでも兎は老人を助けたいと願った。兎は猿と狐に頼み火を焚いてもらった。そして自らを食糧として捧げるべく、兎は焚き火に飛び込んだ。

実はその老人は帝釈天と言う神様で、兎の自らを省みない慈悲行を称え、それを後世へ伝えるために兎を月に昇らせたそうな。

月にある模様はその伝承により、月の兎と呼ばれており、十五夜に月を見上げる者達の浪漫を掻き立てている。

□■□■□■□■□■□■□

「ねぇ、永琳。また増えてるよ？」

呆れ顔の姫。

「そうね？この繁殖力は目を見張るものがあるわね？実に興味深いわ」

ふむふむと頷く永琳。彼女は飛びぬけすぎた天才的頭脳により、月の頭脳と呼ばれている。余談ではあるが、彼女のＩＱを調べようと

した学者が出してきたテキストを一瞥し、これは効果が曖昧で、テストとしては不充分であると全てを書き換え、学者を多いに困らせたと言う微笑ましいエピソードがある。

「だけど永琳が調子に乗って改造なんかするからこうなったんじゃない」

「それに関しては反省せざるを得ないわね。だけど後悔はしていないわ。私は科学者、未知なる物への探求者ですもの！！」

永琳はおもむろに立ち上がり、胸を反り高笑いした。

「マッドサイエンストめ……」

疲れたように姫はこうべを垂れた。

「やだ※※※、褒めないでよ？照れるわ？」

「褒めてないし！ってあーー！！また逃げた！」

2人の目の前には、溢れんばかりのウサギが餅をついていた。このウサギは玉兎と呼ばれており、姫が戯れに地上から連れてきたペットの兎を、永琳が姫の留守の間に何やらやらかしたのである。

結果その兎は何時の間にやら増え続け、始末の悪いことに中途半端に知能が高いのだ。だが性格はだらしなく、噂話が大好きですぐ嘘を吐く。怠け者でもあり、何かの作業をさせるとすぐ逃げる。まったくもって使えないのだ。

最初は王城の地下で姫がこっそり飼っていたのだが、永琳の実験で

大量に増え、そしてある時この玉兎達が、王城の中に大量に逃げ出した。

その結果、全て父王の知るところとなり、姫と永琳は王から大目玉を食らったのだった。そして王はこの件の罰として、２人に玉兎達の教育と管理を命じ、姫は５０年間のお小遣い無しを宣言したのだった。自業自得ではあるが、姫からすると永琳のせいであるから納得は出来なかった。

「永琳のせいよ！どうするのよ！」

「あらあら、貴方が兎なんか連れてきたからでしょう？」

科学者たる永琳からすると、小動物＝実験動物と言う公式が出来上がるようで、全く悪びれない態度を貫く。そこに山があるから登るのだ！！と言う山男の論理である。

取りつく島がない永琳に腸を煮えくりかえす姫だったが、永琳の耳に念仏であると早々に口論は諦めた。

それより問題なのは玉兎達の管理や教育である。お年頃な姫にはお小遣い無しは死活問題である。こう見えて姫はお洒落にご執心だったりする。

「だったら良い考えがあるわ？玉兎達を労働力とし、何かを生産させたらいいのよ。共同作業で団体行動を仕込めば一石二鳥よ」

自信満々で語る永琳に一抹の不安を感じながらも、頼る相手は彼女しか居ない姫は、結局永琳のプランに乗るのであった。

王立月餅工場――泣きながら父王を強請って下りた予算で作った姫の工場である。尚、月餅といっても所謂銘菓の月餅とは別物だ。

玉兎達が臼と杵でぺったんぺったんとやり、永琳が不思議な薬を混ぜるのだ。出来上がった餅は、赤、緑、青と毒々しい原色の餅になる。それを見た姫は「気持ち悪い…光の三原色！？」と辟易した。だが皮肉にも月の頭脳の名は伊達じゃないらしく、八意印の月餅は、一躍月の都の名物となった。

因みに青は疲労回復、緑は精神安定、そして赤は強力な媚薬である。もちろん売り上げの一位は赤餅である。二位の緑をダブルスコアでぶっちぎりでだ。

姫は結局のところ、永琳の人体実験の片棒を担がされたのでは？と疑いながらも、手にしたお小遣いどころでは無い財産ににんまりさたのだった。

「あーー！！永琳また逃げたっ！！！」

姫の気苦労は絶えない。

結論、伝承でも何でもなく、月にウサギはいる。

但し人為的であるが。

□■□■□■□■□■□■□

月の都、王城と言う名の巨大なビルディングのペントハウス。ここに王の執務室兼居室はある。

地上から移住した王国は、今やこの月面が故郷となった。この王国に住まう民は、正式に月人と名乗るようになった。

王は月面を見下ろす窓際に立ち、移住してから数百年を回想した。民に笑顔が戻り、生活は豊かになった。だが代わりに人々は怠惰になった。月には天敵はおらず、競争する対象もいない。これではただ、生きているだけではないか。

地上では得られぬ圧倒的技術力、そしてそれを背景とした根拠のない自信。

豊かな生活は変化は起らない。ただ特権意識だけが増長していく。そして安寧がもたらす退屈な時間に嫌気がさした者達が、いずれ戯れに地上を焼き尽くす等と言いだしかねない。

実際、王立軍の内部にきな臭い動きがあると報告が上がっている。

どうして人々は満足と言うものを知らぬのだろう？王はそう呟き、眼下に煌めく夜景を眺めた。そして――

「ごふっ、ごふっ……」

王は激しく咳き込み、口を抑えた手に血が飛び散った。

「……まさか、な？」

登場人物

気苦労が絶えません　姫様

水を得た魚　八意永琳

王の威厳　王様

超クール　宰相

王とは幼なじみ　八意永源

ぺったんぺったん餅ぺったん　玉兎

永遠の中の一瞬　その？（後書き）

短編と思い、それぞれのエピソードを書いてますが、今回のシリーズは風呂敷拡げすぎて収拾付いてないなぁ。

そもそも妖怪と対立とかねーのかよとかセルフ突っ込みしながら書きましたが、もう今更書き直す気が起きません。

まぁ、穢れとやらから逃げる為に月に行ったでいいぢゃん。

まぁ…いや、言わない…。

とにかく輝夜と永琳のルナティックでドラマチックでロマンチックな話を書きたいだけなので、お許しください。

当初の予定はもはや狂いまくり、@2話くらいかかりそうです。

グダグダで御免なさい

綿月さんたち入れなくてもいいよ、ね？

永遠の中の一瞬　その？

姫は叫びだしたい欲求に駆られた。何故なら今、彼女の前にいる豚のような男が、舌舐めずりしながら彼女を追い込んでいるからだ。

姫は悲鳴を上げる前に、彼の口から臭う生ゴミのような唾液が乾燥した臭気に、先ほど食べた夕食をぶちまけそうな予感に顔を顰める。

だが姫は、いっそぶちまけてしまえばこの品位の欠片も無い生物から逃れられるだろうか？とも感じている。ヒクつく横隔膜があとどれくらい暴れたら彼女の希望は叶うのだろうか？

だが彼女の願いは叶うことなく状況はただ悪化していくばかりだった。

王の居室があるペントハウスの一階層下のフロア。ここには彼女の居住区しかない。使用人は彼女に迫りつつある男が下がらせた。それを出来る権限をこの男は持っている。

この男の名前は※※※※ー※※※と言う。宰相である王弟の息子の名前だ。公式的に姫の婚約者となっており、来月の吉日に二人は婚姻の儀を交わす事になっていた。

「なんでこんなことになっているのだろう……」

彼のぬらりと湿った唇が、今まさに姫の桜色の唇を奪わんとする刹那、彼女が今更に呟いた心の声がそれだった。

きっかけは――王が倒れたと言う報せだった。

彼は執務室で1人で仕事をしていた。だが夜も更け、いつもなら何度もある資料の催促が一切無かった事に秘書が不審に思い、彼の執務室に様子を見に行ったのだ。秘書の目に飛び込んできた光景は、うつ伏せに倒れた王の周りに、夥しい量の吐血の跡だった。

王は穢れに臥せたのだ。

彼のスタッフが医療班に連絡し、すぐさまこの王国で最高のメディカルスタッフによるチームが治療に当たった。

だが、王が意識を戻す事は無かった。

医師では無いが、月の頭脳であり最高の薬師である八意永琳がオペに立ち会いを申し出たが、宰相が緊急を要するにオペであり、執刀医が永琳に萎縮しては困ると拒否された。

国王が不在の際は宰相が自動的にその代理を務める。これは法の上で正当な事なのだ。故にその時点での最高権力者は宰相であり、いかに月の頭脳であろうと彼の決定を覆す力は無かったのだ。

その時以来永琳は、月餅工場の地下にある彼女の秘密のラボに引きこもり、妹のように可愛がっていた姫が悲しみに暮れていても出て来なくなった。

「いい加減、観念しろよ？俺は次期国王だぞ？」

※※※は外卑た笑みを浮かべて姫に馬乗りになった。だが、姫は彼を見上げながら、一切の表情を消して気丈な態度を消さない。

「馬鹿な事は言わないで？貴男に乗られるほど私は安くないわ！お父様だってまだ死ぬと決まった訳じゃない！」

「ククッ…アハハハッ！！お前の愛しい父親は間もなく死ぬさ！お前の母親と同じ穢れでなぁ？もう諦めろよ。お前の父親は死に、俺はお前と結婚してそれでおしまいだぁ。お前を守る肉親はもういない。この国の国王代理の俺の親父の思惑のままさ！ヒャハハハ！！」

「黙れッ！！黙れ黙れ黙れ黙れッ！！！！下品な口を聞くなッ！！」

涙を流し、唾を飛び散らせながら姫は叫ぶ。狂ったように身体をばたつかせながら暴れるが、彼は姫の手首を抑えつけて逃走を許さない。だが、突然姫は動きを止めて静かになった。

「なんだよ、観念したのか？だったら黙って股開けよ。清楚なお姫様の××××をご開帳しな」

男の下品な言葉にも反応しない。彼女は観念したのだろうか？いや、そうではなかった。ここにきて彼女の脳裏にはある疑念が湧いていたのだ。

「ねぇ、私を抱きたいなら抱かせてあげるわ？私もこの国の姫よ？国王不在は国が傾く。だから貴方との婚姻も仕方ないわ。でも無理矢理はいやなの。だから服くらい自分で脱がせて。ね？」

姫はしおらしく、若干の恥じらいと媚び、そして妖艶さを滲ませて男に懇願した。男は一瞬面食らったように固まるが、征服欲が満たされたのか身体をどけた。

しゅるしゅると衣擦れの音がする。姫が彼に背を向けて、一枚、また一枚と衣服を脱ぎ捨てていく。そんな姫の後ろ姿を眺め、これから訪れるであろう男女のそれへの予感に、男はごくりと唾を飲み込んだ。

そもそも力付くで手籠めにかかる男である以上、彼には自身も誇りもない臆病者なのだ。そんな彼には姫の行動に意図があるとは考えはしなかった。
そして、細やかなレースをあしらわれた光沢のある白いシルクの姫のブラジャーとショーツが露になった時、姫はしなを作って男を振り返った。

「ねえ？月に移住して数百年、一度も無かった穢れの病が、どうして都合よく父様に発症したのかしら？だいたい国王が倒れて得をするのって貴方達親子だけじゃない。ねえ、どうおもうかしら、次期国王様？」

首だけ振り返った姫の表情は、まるで悪魔のような獰猛な笑顔だった。

「ぐ、偶然だろ？」

その動揺が答えとしては充分だった。少なくとも姫にとっては。

「そういえば永琳が言ってたわ？貴方の父親が潰してしまった王立病理研究所で、永琳が取り組んでいた研究よ？穢れは地上にいた妖怪達が一定量の紫外線を受けた時に発する妖気から出る物質なんだって。私は今まで父様の事で動揺してたから気付かなかったけど、よく考えたらおかしいじゃない」

そういって姫は視線で男を追い詰める。姫にはある計算があった。彼の父親は冷徹無比であるが、息子である彼には冷静さの欠片も無い。ならばこちらが強く出て、且つ何かを知っているように出れば必ず男はボロを出すと。

「な、な何がおかしい？」

「月に妖怪はいない」

姫の視線が彼の泳ぐ瞳を捕えて離さない。

「お、お前が飼ってる玉兎がいるじゃないか！！」

「あれは永琳がとっくに検査済みよ。あれは妖怪化したんじゃないの。月の環境に対応した進化を、永琳が強制的に何百年分をも促進させた結果よ。妖気は一切確認されてないわ。あら、おかしいわね？妖怪はいない。だけど穢れが発生。しかも国民の誰かじゃなくて、ここ一世紀月面に降りなかった父様だけが発症？あらあら、不思議ね？そうは思わないかしら？」

「……証拠は無い」

「ぷっ、あはははは！語るに落ちたわね？疑念はあくまでも疑念でしかない。認めなければ、狼狽えなければ、それは灰色ではあっても黒にはなり得ない。本当に馬鹿な男……。でもありがとう？証拠は無いにしても、貴方達が灰色なのは確信したわ。なら、私が父様を救うだけよ」

「へっ馬鹿が。今から犯されて薬漬けにされるお前に何…が……で

……き……」

「本当に馬鹿な男。王の血筋には奇跡を起こす能力があるのを忘れたの？貴方はそうやって、永遠の刻の流れと踊るがいいわ？ではさようなら、馬鹿な男」

永遠の刻の流れに支配された部屋の中で、ただ一人彼女だけが須臾と言う孤独の女王となった。

彼女はそうして、悠々と衣服を身に付けると部屋を出た。

「……助けて永琳、私には貴方しかいないの」

姫は踊らされていた父親と自分の情けなさに、涙を流しながら駆け出した。頼もしい姉の元へ。

四半刻のち、姫の居室のベッドルームに悲鳴が響いた。何故なら姫が去りぎわに彼の股間を蹴ったからだ。

手加減なしに。

数十発ほど。

――東方おとぎ草子――

八意永琳は苦悩と理不尽と無常さを噛み締めていた。地下のラボにある分析器の前にある椅子に座ったままだ。

「私は慢っていた。ただそういう事ね……」

彼女の自嘲を孕んだ呟きは、ラボの白い天井に吸い込まれて消えた。

「ふざけんじゃないわよっ！！」

突然叫んだ永琳は、弾かれたように立ち上がり、書類の束を辺りに

叩きつけた。はらはらと空中を舞う白い紙吹雪。そして彼女は床に這いつくばった。

「ごめんなさいっ！ごめんなさい※※※っ！！」

普段冷静な彼女が、何かに取り憑かれたように床を何度も叩く。彼女の切れ長の目からは濁流のように涙が落ちる。姫の名前を呼びながら。

やがて冷静を取り戻した永琳は、よろよろと身体を起こし、自分が撒いた書類を集める。そしてデスクによしかかって膝を抱えると、永琳は目を閉じて回想を始めるのだった。

□■□■□■□■□■□■□

王が倒れた――その報告を聞いたとき、八意永琳は自分の研究室にいた。彼女は普段、薬師としての顔が本職と言えるからだ。

姫と一緒に運営している月餅工場にも彼女のラボはあるが、基本的に昼間はこの研究所にいる。王立薬学研究所、ここはそう呼ばれている。安価な栄養剤から、病院で使われるような薬剤や麻酔薬、そして禁断薬に至るまでの薬が日々研究されている。

とは言っても、もっぱら永琳自身が単独で開発し、助手達が臨床や市販化が可能になるように解析及び分析作業をすると言うスタイルだ。

そういう意味に於いては永琳のワンマン運営と言えるのだが、この研究所の成果がこの国の健康を一手に支えていると言っても過言ではない。その為、国家予算の内訳の中に、この研究所の予算がしめる割合は中々の物だ。

そんな研究所のデスクで、日々の業務に追われていた永琳だったが、突然彼女の助手が転がるように部屋に飛び込んできて、叫ぶようにこういった。

「八意所長ッ！！王が、王が穢れで倒れましたッ！！！！」

貴方は何を馬鹿な事を言っているのかしら？そういって永琳は茫然と立ち尽くしていた。

彼女の部下は普段の永琳らしくないリアクションを見て、彼女が王の状況に愕然としたと理解した。

八意永琳と言えば、この国ではトップクラスのＶＩＰである。そして、姫殿下と家族のような間柄である――それが世間の認識だ。故に王や姫殿下の事を思っての事と部下達が理解するのは無理もない。

だがそれは間違いだった。そういう側面もあるは有ったが、それよりも「先手を打たれた！」と言う衝撃に身体が硬直したのだ。

□■□■□■□■□■□■□

八意永琳はここ数百年の間、疑念の中で生きてきた。ただ、それを可愛い※※※に悟られる事は一切せずにだ。何故ならその疑念が正しかった場合、扱い方１つで国が揺れるからだ。

彼女の疑念――それは「地上の穢れの蔓延は、実は故意になされた人災なのではないか？」であった。

この国が建国されて今年で１５００年。そしてその内約１１００年は地上に存在していた訳だが、永琳が自身の信用出来るコネクションに頼み手に入れた資料によると、ある事実と言うか、不自然なデータの偏りに気付いたのだ。

それは、ルナプロジェクトが立ち上がる近くになって――具体的にはプロジェクトが立ち上がる１００年前くらいからであった。

それ以前も確かに穢れによる死者はいた。だが半世紀に１０人程度だ。しかし、それ以降、半世紀で３０００人に増えた。実に３０００倍である。プロジェクトの始動が確定した日までカウントすると、

正確には７２８１人だ。その内に王妃も含まれている。

よく考えればプロジェクトを持ち出してきたのは誰だったか？――

宰相である。

月への移住を強固に反対していた王妃が都合よく死んだ。彼女に直参出来る立場におり、プライベートにも介入出来た人間は――

宰相である。

そもそも急に穢れによる死者が増えはじめた時期に、王弟が宰相に就任したはずだ。

永琳は個人的にも穢れの研究はしていた。科学者としても優秀な彼女には、望んで越えてみたい研究対象であったからだ。

彼女はいち早く妖気と穢れの関係に気が付いた。だから彼女は、王国の領地周辺の妖怪の棲息分布を衛星を使ってデータ化した。

そして年間の日照時間と紫外線量を割り出し、妖気との因果関係を洗い続けたのだ。そして見えてきたのは、飛行形態をとる妖怪のみに穢れを発生する可能性が在る事を突き止めた。

だが飛行形態をとる妖怪の絶対量から算出した、穢れによる被害は、多く見積もっても半世紀で１００人と言う見積りになった。

そして実際は半世紀で１０人前後だった。王国の人口比率からすれば僅か１％以下だ。例え想定の上限まで死者がいたとしても、老衰で死ぬ割合の方が圧倒的に多い。さらには事故等の不慮の死の割合の方がさらに大きな数値になる。

と言う事は穢れによる死とは、せいぜい難病で手の施しようがなく死ぬ割合と同様だ。つまりは移住するほど騒ぐ話にはならないと言う事になる。

まして穢れが発症しても、他者に伝染した事例は一切無いのだ。

この不可思議なジグソーパズルに、宰相と言うピースをはめると――永琳にはパズルが完成するように思えたのだ。

皮肉な事に彼女がこの結論に達したのは、彼女がルナプロジェクトのリーダーとして陣頭指揮を執っていた時期だった。

永琳はプロジェクトにウエイトを置いてはいたが、裏では国の中の不透明な予算が組まれている組織にメスを入れるべく、彼女の人脈に打診を始めた。

そして暫くして彼女はプロジェクトリーダーを勇退と言う建前で解任されたのだ。当時はプロジェクトも計画段階は終わり、実際に稼働していた為、永琳は上の判断は多忙過ぎた彼女を考慮してと言う風に好意的に理解していた。

だがルナプロジェクトは国家プロジェクトの中で最優先事項である。この場合、管理職の人事の決定権限があるのは二人しかいない。そう、王と宰相だけだ。

これだけの材料があれば、宰相が一番黒に近いと言う事になる。証拠はないのだが。だが宰相を疑うよりも、宰相が白であると証明するほうが難しい――永琳はそう考えていたのだ。

そんな矢先、彼女の父親である永源から、「姫殿下の教育係兼、精神のメンテナンス係を頼みたい」と言う打診があった。

そのオファーは永琳にとって渡りに船であった。王城の最深部には永琳とて出入り出来ない。何故なら宰相が管轄する王国諜報部があるからだ。そしてそこには、永琳が面識のない研究員らしき人間が出入りしているのを人伝で聞いていた。

ならば彼女が姫殿下と懇意になれば、その暗部を探れるかもしれない――そういった打算が彼女に生まれたのだ。

永琳は薬師として、そして人々の生活や文化を向上させるのを命題とする科学者として、人の生命を利己的な利益の為に弄ぶ事など絶対に許容出来ないのだ。

「科学者は何よりも倫理観を要求されるのだ。何故なら倫理観を無くした研究欲は、必ず誰かを不幸にするからだ」

これは永琳の父が、彼女が研究者に足を踏み入れる際に言われた言葉だ。以降、彼女はこの言葉を自分の物差しとして自分を戒めてきたのだ。

だからこそ、穢れの真実は自分が解明する。例え人為的なもので、それが自分を破滅させても――この決意と共に彼女は覚悟を決めたのだった。

そうして彼女は真実を手にするためにオファーを受けた。

だが、そこで永琳に誤算が生まれてしまった。姫殿下相手に強烈なシンパシーを覚えたのだ。

姫と言う立場にいる孤独。常に誰かの目に晒され、常に姫と言う役割を演じさせられ、心を許せる相手も居らず、ただ虚無感に耐えながら日々を重ねる。

永琳は生まれつき天才的な頭脳を有していた。最初は渇いたスポンジが水を吸うように、目にした情報が全て脳に蓄積されていく奇跡に彼女は歓喜した。次は知識が一切のロス無く知性に変換されていく事に身震いする程の快感を覚えた。

そしてそれを誰かの為に披露すれば、誰しもが永琳を褒め称えた。それが素晴らしく誇らしかった。

だがいつしか自分は、上辺だけで褒めそやされ、実はただ、良いように利用されてるのでは？と疑いだした。彼女の天才的な頭脳は、人の打算や笑顔の裏にある魂胆まで見抜いてしまったのだ。

結局、対等に話せる人間は皆無だった。唯一父親だけだった。永琳は何も同じ知識レベルでの会話が欲しかった訳じゃない。ただ馬鹿言ったり、冗談を交わしたり、時にはただ愛し合ったり。ただそれだけが欲しかったのだ。

永琳には畏怖や過度の尊敬は足枷でしかなく、天才と言われる自分の脳を呪った。

そんな孤独を知り尽くしている2人が出逢い、その上、かけがえのない存在に昇華してしまった。そして2人は実の姉妹以上に姉妹らしい、魂での結び付きすら感じる関係になった。否、なってしまったのだ。

永琳は2つの意味で苦悩した。彼女の母親が人為的な穢れの犠牲者ならば、彼女の為にも真実を暴きたい――そういう思いだ。

だが逆に黒幕が宰相ならば、彼女を傷付けるのではないか？さらに、自分たちが親しいならば、そこを突かれたら弱点になる。具体的には姫自身の生命を盾に取られると言う懸念だ。だが永琳は歩みを止めない事を選択したのだった。

それからの永琳は、表では姫の親友、裏では宰相の残したであろう痕跡を探ると言う綱渡りを続けた。

そして、あるツテから耳寄りな情報を手に入れた。穢れに関わる研究資料が見付かった。だが、非公開ファイルとして諜報部が管理していると。

その諜報部の内部に、金で転ぶ人間がいる。そして今夜取引に応じると言う。場所は商業地区にある高級ホテルの一室だという。

永琳はツテから部屋番号と入室のキーワードが書かれたメモを受け取り、夜の闇の中に消えた。懐に致死量の毒薬が装填された空気銃を隠して。

永琳は他人に嫌気をさしてはいたが、ある意味では人を信じていたいと思っていた。それ故に甘く見ていたのだ。だが、人の意識の深層には、黒く濁った悪意があると言う事実を。

□■□■□■□■□■□■□

コンコンと乾いたノックの音が無人の廊下に響き渡る。ここはあるホテルのエグゼクティブエリアである。一般客が足を踏み入れる事が出来ない場所だ。

通常のエレベーターから比べ、一際大きなエレベーターには専属のボーイが常駐している。永琳がボーイに行き先と部屋の予約者の名前を告げると、ボーイは内線で確認し、エレベーターのコンソールに鍵を差し込んだ。

一瞬の振動の後、滑るように金属の箱は動き出した。デジタルの表示は最上階を示している。そして、ドアが開いた。

降りた先のエレベーターホールは、アンティークのランプで淡く照らされた上品なエントランスであった。

沈み込むようなカーペットは、足音が立たないように考慮されたも

のなのだろう。永琳はたった４室しかないフロアの目的の部屋の前に立った。

ノックの音の後の静寂は随分長いものに感じた永琳であったが、実際は数秒でしかなかった。彼女は長く追っていた謎が漸く真実に近付いたと感じ、珍しく緊張していたのだ。

「……どちら様ですか？」

重厚な造りの扉は、恐らく防弾仕様なのだろう。中からくぐもった男の声が聞こえた。

「……ご注文の優曇華の花をお届けに参りました」

因みに優曇華とは三千年に一度花をつけるという想像上の花の名前である。

沈黙――中から返事はない。ただ鍵が開いただけだった。永琳はコートの上から内ポケットに忍ばせた空気銃を一撫でし、覚悟を決める深いため息をつくと、部屋のなかに滑り込んだ。その表情に迷いは、無い。

□■□■□■□■□■□■□

広い前室を抜けて、リビングへと向かう。そこに通じる木目の扉を開けると、そこには一面をガラスで囲まれた部屋であった。

コの字型になった角部屋であるこのエグゼクティブスゥイートは、ガラス張りな為に夜景のなかに浮かんでいるようだった。

空には宇宙が広がり、星が瞬いている。地平線を境にその下には、人口の光による帯のような輝きの層。

一瞬その光景に見惚れた永琳だったが、次の瞬間悲鳴を漏らしそうになり、思わず口を手で押さえた。

そこに居たのは彼女が追い掛けていた人物である宰相と、永琳が愛する父親であった。

「……お父様、どうして…」

永琳はそういうしか術が無く、ただ立ち尽くすしかできなかった。不敵な笑みを浮かべた宰相を力なく睨みながら。

「なに、私が呼んだのさ。彼には新しい職場を斡旋したものでね？喜びたまえ、彼は私の元で諜報部の課長を務めてもらう。彼は優秀だから心強いよ」

「貴方、何を言っ――」

「あぁそうそう。君の母親は身体の調子が悪かったね？だから私が

指示しといたよ？”特別”病棟で丁重に治療するようにとね？」

永琳の言葉を遮り宰相は唄うように言った。自分に酔う歌劇の主役ように。永源は力なくうなだれている。

「貴方は何がしたいの？私の両親を人質に？自分でやましい事があると認めているのと同じじゃないかしら？」

永琳は理解している。無駄な足掻きだと。ここに父親が呼ばれている時点で悟っていた。追い込まれているのは自分の方だったと。だが言わずにいられなかった。例えそれが虚勢だったとしても、だ。

「お前が何を嗅ぎ回っていようが関係ない。私は宰相であり、お前はただの有名人に過ぎないのだから。だが私はキャンキャン吠える犬が嫌いなんだ。だからお前に首輪をつけたと言う訳さ？敢えて私は何も言わない。だが聡明なお前の事だ、私が脅しなのか本気かくらい分かるだろう？そういう事だ。ではそろそろ失礼するよ？これでも私は忙しいんだ。ああ、今日はこの部屋に泊まるといい。もうあるか分からない親子水入らずと言うやつなのだから。ではな？」

気持ちよさそうにそう言い放つと、宰相は含み笑いしながら帰っていった。

後に残るは嫌な静寂だけだった。打ち拉がれ微動だにしない父親。見たくなかった弱い父親。遣り切れない煮え切らない思いに、永琳はキャビネットからやたら高そうなブランデーを出すと、クリスタルのグラスになみなみと注ぎ一気に呷った。

普段酒を口にしない永琳は、嚥下したアルコールが胃を焼く感覚にむせた。荒い息を吐きながら、敗北した遣る瀬なさを飼い馴らす事

が出来ないと悟った。

そして未だうなだれ、一言も口を利かない父親に向かって「ごめんなさい」と蚊の鳴くような声で呟き、彼に一瞥もせずに部屋をでるのだった。

□■□■□■□■□■□■□

「永琳いるっ！？」

息咳駆けてきたのだろう姫が、勢いよく永琳の研究室の扉を開けて入ってきた。

「どうしたの？姫様。こんな時間に何のようですか？私はまだ仕事が残っていますので……」

「え？何を言ってるの永琳？」

張り付いたような仮面の如き笑顔で答える永琳。そんな彼女を姫は不審そうに見つめる。姫は思った。何かが変であると。几帳面な永琳であるのに、この部屋の荒れようはおかしかった。

そもそも彼女の他人のような、拒絶したような話し方が解せなかった。

「そ…そんな喋り方やめてよ永琳……？」

「……」

「貴方に聞いてほしかった事があったんだけど……いいや…今度にするよ。だけど、これだけは頼みたいの。いや、貴方が私を拒絶するなら、私は貴方に命令する……」

辛そうな表情の姫が、絞りだすように言う。

「……何でしょう姫殿下」

「八意永琳、貴女に命じます。貴方が昔試作した不死薬…まだサンプルがあったわね？あれに私の能力を加え、今すぐ完成させなさい」

不死薬――薬師として、あらゆる薬を作る程度の能力者としてかつて永琳が挑んだ不老不死の薬。穢れの対策として、選択肢の１つと言う意味で取り組んだ薬。結果は不老不死に近い効果ではあるが、酷い副作用が無くせず断念したのだ。

その後の研究により永琳が出した結論は、「姫の永遠と須臾を操る程度の能力を仕上げで加えた場合、副作用は消える」であった。

そしていくつかのサンプルを作り、姫が仕上げをしようとした矢先に、議会で制定された新しい法律――薬事法には、「倫理的に問題があると思われる寿命を変化させる医療行為は著しく月人の尊厳を損なう為にこれを認めない。これに違反する者には死一等、またはそれに準じた極刑を命じる」と言う項目があった。

永琳が今になって思ったのは、不老不死薬があれば王の死を回避できる為であると言う事だった。その薬が完成しつつあるのを諜報部に気付かれたのだろう。だから穴を封じる為に宰相が動いたのだ。

だが、全ては今更であると心中で自嘲するしか出来ない永琳であった。

「……恐れながら言わせて下さい姫殿下？それは犯罪です――」

「いいから作って！お願いだからっ！」

堪え切れず涙を流した姫に、ある種の覚悟を感じた永琳は、結局それを完成させた。後に蓬莱の薬と呼ばれるその薬を。

完成した蓬莱の薬を、姫は一切の躊躇も無く飲み干した。そして――

「ありがとう永琳。そしてさようなら。貴方の事、大好きだったわ？」

姫は決別の言葉を口にして消えた。

後に残された永琳は、一体どこでボタンをかけ違えたのだろうか？と思巡したが、やがて考える事を止めた。すべてに疲れてしまったからだ。

深夜、灯りが消えた永琳の研究室、この部屋の主である八意永琳はデスクに1人座っていた。目の前には青く光る透明の薬瓶があり、彼女ば黙って見つめている。

そして、永琳は一気にそれを飲み込んだ。

「姫、いや※※※……貴方だけに罪は背負わせないわ？ふふっ……」

彼女達の行く先はいったいどこなのだろうか？そう思案する永琳だったが、やはり今更だと思考をとめた。

このくだらない茶葉劇の結末は確実に近付いている。それが喜劇か悲劇かは誰にも分からぬ事ではあるが……。

登場人物

ｎｏｗ　ｌｏｒｄｉｎｇ……

ｎｏｗ　ｌｏｒｄｉｎｇ……

ｎｏｗ　ｌｏｒｄｉｎｇ……

now loading……

……Error!!

永遠の中の一瞬　その？（後書き）

難産でした。

多分次回で完結かな。

次回をお楽しみやに。

後、モチベーションの維持に感想くれたら作者のやる気が維持されます。

永遠の中の一瞬　その？（前書き）

これでおしまい

永遠の中の一瞬　その？

この日、月の都では国を挙げての葬儀がしめやかに営まれていた。静かに、穏やかな雰囲気であるのは、国民の父と言われ、故人となってしまった彼の人望であるが故であろう。

月の都の全ての区画には、セレモニーを流す巨大なヴィジョンが設置され、その周りでは国民達が黙祷を捧げていた。

亡くなった国王を偲ぶ中、涙を流して棺に縋る王弟の姿は国民の涙を誘った。

「……茶番ね」

どこかの研究所でこの光景を冷ややかな視線で傍観していた女性は、このセレモニーが宰相と呼ばれて人間の書いた戯曲であるのを理解している。

だからぽつりと吐き棄てたのだ。マエストロ気取りの宰相に、そしてそのタクトに踊らされた自分に。

そして彼女はもう興味は無いとばかりにモニターを消すと仕事に戻った。

「国民の皆さん、あなた方の父であり、敬愛する私の兄であった国王は死んだ。――誰よりも国民を愛し、そして穢れの脅威からあなた方を身を挺して守った王は死んだ。皮肉にも消えたはずだった穢

れで。思えば我々が地上に居た時、王は誰よりも先に穢れの危険性を懸念した。――そして王は言われた。必ず穢れは無くす。そのためにはどんな努力も惜しまない、と。そして王はその言葉通り、ルナプロジェクトを完成させ、今こうしてあなた方が豊かに暮らしている。――医師の診断によれば、王は長い間穢れに蝕まれていたらしい。彼は一切それを私たちに見せてくれはしなかった！――それが王の優しさだからだ。我々はこの先、王が愛したこの国を守らなければならない。それにはあなた方の協力が不可欠だ。――――だが、今はいい。今夜はあなた方が愛した国王の冥福を、ただただ祈ってほしい――」

王の棺の前で民衆へと演説をする宰相。その優しげな語り口は涙を誘い、それを受けた民衆達は悲しみに暮れながら家路へと向かった。国民の父たる王の冥福を祈るために。

ただ、セレモニーの冒頭に報告された”※※※姫は悲しみに臥せて寝込んでしまった”と言う事柄に、誰も疑問を持たなかった。あれだけ優しかった父王が亡くなったのだ、それも当然である、と言う物が人々の抱いた印象である。

ただ民衆達は思いもかけない事柄で姫の近況を知る事になる。考えうる最悪のシチュエーションで、だ。

壇上である男が、冷徹な嘲笑を浮かべた。

ただそれまで彼を映していたＶＴＲｃａｍｅｒａは既に録画を終えていた。

――東方おとぎ草子――

永遠の中の一瞬

～最終話～

八意永琳は窓もない地下プラントで、自らの職務である薬の精製を行っていた。
彼女には「あらゆる薬を作る事が出来る」と言う特殊能力がある。
普通薬を作るためには、過去から蓄積された方法論と、判明している化学物質や薬草の効能――それらを組み合わせるパズルであると言える。

そして出来上がった物質を実験動物等に繰り返し投与し、その効果と副作用を検証していく。だがその多くは副作用のリスクのみが高くなり、臨床実験までには至らない。

そういった物からリスクを削っていき、結果は当初求めていた効果から随分と軽いものに落ち着いてしまう。それでも成功するだけマシであり、実際はほとんどが実用化までは至らないのである。

まして難病に効果がある薬となれば、言わば無から有を生み出す行為に等しく、そういった新薬に関わる研究者が行う実験は、まさに

砂山から一本の針を見付けだす位に無謀だと言えるだろう。

だが八意永琳の能力は、それら先人の苦労を嘲笑うかのような反則的な能力である。

彼女が薬を生み出す過程とは、上で述べた作業と真反対のアプローチである。例えるならば、頭の中に薬に関わる索引があり、彼女は欲しい効果の薬を検索し、そしてそれを逆引きすれば、精製過程が分かるのだ。つまり問題の答えを見ながら試験をしている様なものである。故に反則的であると断言できる訳だ。

一般の薬学分野の研究者からしたら、八意永琳とは尊敬、羨望、嫉妬、憎悪と様々な反応を示すが、国家全体から見れば彼女は英雄であるのである。

ただ問題は、凡人が彼女の能力を持った所で役には立たないと言う点だ。

いくら彼女の能力が凄くても、頭の中にある素の知識がすかすかでは、能力はただの宝の持ち腐れになるのだ。つまり、能力に見合う知識とセットになって初めて反則的な効果を発揮出来る。

改めて言おう。八意永琳は天才である。故に能力で様々な奇跡を起こせるのだ。

そして、彼女が天才だからこそ、この後に起こる出来事を引き寄せてしまったと言える。

神から与えられた奇跡とは、必ず幸せをもたらすとは限らない。む

しろ、それに翻弄される事が普通なのかもしれない。それが所詮、人の身の丈と言えるからだろうか？

いや、実は神とは暇潰しの為に人を弄んでいるだけかもしれない。神からの祝福と言う名の呪いに翻弄され、内側から地獄の業火に焼かれてのたうち回る人を見て嘲笑う。

何故そう言えるか

それは

これから八意永琳が地獄の業火に焼かれ、神を呪い、生き地獄に堕ちるからだ。

人は脆い。彼女のような天才とて、人である以上それは変わらない。

人生とはままならないものである。それが真理なのだ。

□■□■□■□■□■□■□

八意永琳が姫と逢わなくなってどれくらい経つのだろうか？今や寿命と言う概念から外れてしまった彼女からすると、それは長くもあるが一瞬にも感じる。つまりよく分からないと言うのが正直な話だ。

実際は王が倒れてからの話であるから、今日に至るまでの期間は約1年である。

そんな事を考えながら、八意永琳はいま目の前にいる姫を見ていた。

色々あって疎遠になっていた2人だったが、今日になって突然姫が八意永琳のラボに現われたのだ。

「久しぶりね？永琳」

「ええ、お久しぶりです姫殿下」

やはり拒絶がそこにあり、ぎこちない空気が狭いラボに充満する。

だが――

「へえ～、やっぱり永琳の部屋は色々あるわね？ふむふむ、ほお～、なるほどなるほど……」

姫は特に気にした風もなく、見ようによっては無邪気にはしゃぐように見えた。だが、そうでは無かった。

姫はポケットの何かの機械を作動させ、部屋をぐるぐると回っていたのだ。そして振動反応を示した箇所に立ち、また別の装置を作動

させた。

ピシッ――何かが引き裂かれたような音が、部屋の数ヶ所で聞こえた。永琳は思わず瞳を丸くし、無言で驚いていた。そう、その音がした場所には盗聴機と監視カメラがあったのだ。

八意永琳は現在、宰相によって両親を人質にとられ、自身も軟禁状態にあるのだ。一応彼女は外出も出来るが、彼女は常に監視され、部屋も盗聴されている。

八意永琳が驚いたのは姫がその監視装置を無効化した事実ではなく、彼女の動きが洗練されていた事なのだ。つまり、彼女は今まで潜伏していた期間に、何らかの訓練をしていたと考えられるのだ。それも姫様が嗜むにはやたらと物騒な部類のだ。

「永琳、これで暫くは話せるわ。ただ、正規の監視カメラはそのままだから、音声はよくても映像はね？だから、ごめん永琳」

バチッ――笑った姫が永琳の首筋を撫でた瞬間、小さな炸裂音と共に彼女は腰から砕けて床に尻をついた。

「あ、あぅ、あ…ひ、め……」

何が起こったか永琳には分からなかった。ただ自分が何かされたとだけ認識したが、何故か口の周りの筋肉が麻痺して喋る事は叶わない。半開きの永琳の口からは涎が垂れ、うめき声のようなか弱い抗議の声がするのみだ。

「貴方とはゆっくり話したかった。でもダメ、時間が無いの。だから私が一方的に話すから聞いて。まず貴方の事情や状況は把握しているわ。だからそのことで私に罪悪感を持つ事は無いし、持たないで？」

姫は薄く笑った。永琳の目から涙がこぼれ落ちる。

「ま、気にするなって言っても優しい貴方には無理よね。まぁ、私に気持ちのわだかまりは無いってだけ知ってて欲しかったの」

永琳は動かない身体で必死に何度も頷く。涙はさらに勢いを増す。

「で、ここからが本題。多分、もう貴方とは一生逢うことは出来ないわ。だからお別れを言いにきたの。永琳、さようなら……貴方は私がこの世界に生まれて、一番好きだった人よ。孤独だった私に光をくれた人……だから、私がいなくなっても貴方は必ず幸せになってね。私はお婆さんになることもない化け物だけど、貴方は必ず幸せになって欲しい。今まで本当にありがとう。永琳、貴方が生まれ変わったら、また友達になろうね？」

永琳は叫びたかった。姫は何かを決意している。でもそれは絶対に止めなければいけない。永琳の頭の中の警報がアラートを告げている。だが――

初めて彼女と親友になった時に見たような、無邪気な笑顔を浮かべた姫が、永琳にゆっくり近付いて来た。そして甘き――接吻。

触れ合った唇がゆっくり離れたその瞬間、永琳は再度、あの炸裂音を聞いた。だが確認は出来なかった。何故なら彼女はそのまま気を失ったからだ。

永琳が気が付いた時には、全てが終わった後だったのだ。

□■□■□■□■□■□■□

月の都の摩天楼を見下ろすハイソサイティのみが住まうタワーマンション。その最上階はワンフロア全てが1人の所有者の物であった。彼の名前は※※※――亡き王と同じ家名を持つ男である。

彼はこの国の宰相として、善人の仮面を被ってきた。国民は彼を”王を影から支える苦労人”と言う風に考えている。だが、実は彼はそうではなかった。

偉大過ぎる王の陰で、その決して越えられない高き壁を見続けた結果、彼はコンプレックスと劣等感の塊となったのだ。

実際は被害妄想だったとしても、彼は常に自分が王と比べられていると感じていた。それは小さな染み程度の物だったが、やがてそれは彼そのものを蝕み、気が付けばそれはある衝動を膨らますエネルギーとなっていた。そのエネルギーのベクトルは、マイナス方向であったのだが――

きっかけは些細な物だった。

当時彼はまだ宰相の地位にはなく、いくつかの研究所の管理を任されている官僚であった。その1つの研究所が、ひょんな事から穢れと妖気の関連性に気が付いたのだ。

そしてそれは妖気が穢れへと変化する絡繰りをある程度掴む事となった。

それが彼の衝動を、実行に移すきっかけになった。

彼は直ぐ様それを秘匿とし、関わった研究者を時間差で左遷した。その後研究者達は、何らかの事故によって死ぬ事となった。その研究チームは数人でしか無かったから、事故で死んだとしても、それが意図のある死と考える者は皆無であった。

王が彼のもとを訊ね、「一緒に国を盛り上げて欲しい。宰相として私を支えてはくれまいか？」そう言われた時に、彼は笑顔でそれを受けた。

心にへどろのような憎悪を隠しながら。

王の懐の深さは彼に味方した。何より肉親であった事が王の甘さを引き出したのかもしれない。とにかく彼は、手にした権力を効率よく使い、彼の裏の地下帝国は順調にその根を延ばしていったのだ。

軍、諜報部と言う情報を司る部門を掌握した彼に敵は居なかった。そうした力を背景に、個人の力も蓄えた彼は、私設のチームを作り上げた。

そのチームが行ったのは、穢れの生物兵器への転用であった。ただ

解毒薬はどうやっても出来なかった。それでも培養が成功し、大量生産は可能になった。

そこで宰相は定期的にそれを国中にばらまき、穢れ＝自分たちの脅威と言う構図を意図的に作り上げていった。

国は荒れた。穢れと言う目に見えない恐怖に蝕まれ、国民の心は荒んでいった。そこに王が立ち上げたルナプロジェクトが現われた。人々は唯一の希望に縋った。いや、大いなる福音であると讃えた。

そのプロジェクト自体が宰相の描いた絵図とは知らずに。王は王で、よく進言してくれたと熱い抱擁で宰相を誉め讃えた。抱擁の際、王の見えない位置で、彼の顔は歪みに歪んだ醜悪な笑顔を浮かべていたが、王はそれを知らない。

（道化が……せいぜい今だけは喜びに浸るがいい。）

そう心で吐き棄てた宰相であった。そして彼の絵図通り、ルナプロジェクトは順調に進み、最後の月の羽衣が地上を離れた時、穢れを焼き尽くすと言う大義名分の元、妖怪達の住みかごと「メギドの炎」と名付けられた爆弾で、彼の残した証拠もろとも地上は浄化された。

そして今、彼は邪魔であった王も消し、姫はどこかに消え、一番の障害だった月の頭脳を無効化する事に成功したのだ。

息子を婿として王位を牛耳る作戦は頓挫したが、それは彼にとって重要ではない。今なら自分が王位を継いだとて反対する者は居ないのだから。

「くっ……くふっ……ふふっふあっはっはっはっは！！！チェッ～クメイト！！この国は俺の者だ！！」

摩天楼を見下ろす窓際で、額をガラスに押し付けるように立つ宰相は、後は仕上げを残すのみになった我が帝国を眺め、高らかに哄笑した。後はカーテンコールを待つばかり。その思いが今まで隠し続けた彼の本質をむき出しにした。

「随分ご機嫌なようね、オ・ジ・サ・マ？」

品性の欠片もなく嗤う彼の背後から、冷めた声が響く。思いがけず自分の恥部を見られたからか、彼は弾かれたように振り返った。

「※※※ぁ……貴様今までどこにいた。それより貴様、ここに何しに来た！答えろ※※※！！」

彼は獰猛な表情を晒しながら、突然現われた姫を恫喝するように怒鳴った。腕時計を不自然触りながら。

「あら怖い怖い。私は久しぶりに自分の数少ない肉親の顔を見に来ただけよ。あ、それとちょっとした届け物ね？つまらない物ですが、どうぞ？」

惚けた表情で話す姫に苛立ちが増した彼だが、冷静さを欠いたら負けだと気持ちを抑えた。曲がりなりにもここまで暗躍してきたプライドもあった。そんな自分が小娘如きに狼狽えるなどあってはならない。彼はそう思った。しかし、そう自分に言い聞かせる行為が、既に冷静さを欠いた証拠なのだと彼は気付かなかった。

ごとり――

それは姫の手から放物線を描いて彼の足元に落ちた化粧箱が発した音だ。その化粧箱は一辺が３０?くらいの立方体をしていたが、やたら重量感があった。

「なんだ……これは?」

宰相は警戒し、手は触れない。

「そんな警戒しなくてもいいわ?まぁ所詮あなたは臆病者。ふふっ、心配しなくてもそれはただのナマモノよ。ただの、ね?」

彼が知らない姫の表情は、彼を訳もなく震えさせた。どこか自分よりも長く生きた者が持つ、達観とした彼女は非常に不気味だった。

彼は思う。足元のコレは開けてはならない、絶対に。だがその気持ちと裏腹に、身体は勝手にソレに手を伸ばす。がくがくと痙攣する

右手を左手で抑えつけながら、彼の手はソレの蓋を開けた。――開けてしまった。

「……なんだこれは」

「……何なんだコレは…」

「なんだなんだなんだなななななななんだここれこれここれこれはああああああ阿悥阿あぁアアア！！！グボェァッ！ゲホッゲボッガアアァッきき貴様貴様キサマアアアアア！！！グボェアグハッ……ぐぅえっ……貴様キサマ……何て事しやがったぁあアアアアア！」

彼は錯乱しながら吐瀉物を撒き散らし、箱から取り出したソレを胸に抱き締めながら、吐けるだけの呪咀の罵倒を叫んだ。

ソレとは、愚鈍ではあったが目に入れても痛くない程に彼が愛した息子の頭部であった。怨めしそうに剥かれた目玉と、恐怖に叫んだだろう形のまま硬直した口、だが紛れもなく彼の息子の変わり果てた姿であった。

自分で撒き散らした吐瀉物と涙、そして弛緩した股から漏れた小便の海で泳ぐ無様な男、その成れの果てを見下ろす姫の表情は無だった。

何の感慨も湧かない。誰かを殺しても父や母は帰ってはこない。だからこれはただの作業にしか過ぎないのだ。宰相に罪を背負わせ、尚も生と言う生き地獄に嵌める為の作業だ。

その作業が完了した今、彼女になんの感慨が湧こうか？そんなものはある訳が無いのだった。だが、姫はけじめをつけたかったのだ。両親の人生に意味を持たせるために。

この小心で自尊心だけが高い馬鹿な男に、ただその尊厳を汚された。そんな結末をもう亡くなってしまった両親の歴史に記される事は許せない。例えそれが自分しか知らない事柄だったとしても、だ。

「……貴様、許さんぞ……ブチ殺して息子と同じ、いや、それでは生ぬるい、四肢を全てバラバラに引き裂いて犬の餌にしてやるわ……死ねぇぇ！！」

パンパン――

パンパンパンパン――

正気を取り戻した彼が一番始めにした事は、いつも彼が身に付けていた6発の弾丸が装填された小型ピストルを、忌々しい小娘に向かって全弾撃ち尽くす事であった。

いくら護身用の殺傷力の低い小型ピストルだとて、この死近距離で食らえば無事には済まないだろう。普通は――

彼は弾かれたように仰け反る姫が、床に倒れて血の海を作る様を確りと見ようと、その濁りきったその眼を見開いた――が、

「ど、どういう事だ貴様ッ！！」

頭と右目、首に二発そして、心臓に二発、間違いなく弾丸はその場所に撃ち込まれていた。だがどうだ、姫は笑っている。自分が流した血で化粧をしたまま、けらけらと笑っていた。

「き、貴様ッまさか不老不死の薬を飲んだかッッッ！！！あれは副作用が酷かった筈だッ！！！」

「ふふっ、そうよ？飲んだわ？副作用にのたうち回ったけどね？だけど貴方、忘れたの？私が刻そのものを操る能力が在る事を。この能力があって初めて薬は完成するのよ？ふふっふふふふ……滑稽だったわ？貴方の息子の姿は。この私に縋りついて命乞いをしてたの。だから私は言ってあげたわ？貴方方親子がばらまいた穢れで死んだ人達は貴方のように死にたくなかったんじゃない？とね。最も、その人達は命乞いの間すら無かったと言うのに……」

宰相の目を鋭く射ぬきながら、姫は言葉を紡いでいく。無表情な姿

とは裏腹に、涙をはらはらと流しながらだ。

「だから私が裁く事にしたの。法の下では疑わしきは罰せずよ。だから――」

姫は歌うように、踊るように語りながら宰相に近づいた。奇しくもそれは彼女の親友、八意永琳を彼が追い詰めた時の状況に酷似していた。そして、注射器を彼の首に押し当て、何かを注入した。

「貴様ァ、な、何をしたッッ！！」

「最後の判決よ。宰相※※※、貴方はこのままこの国の王になるがいい。だけど、貴方のその忌まわしい遺伝子を後世に伝える事は許さない。私を含めて、もう※※※家の血筋は消えればいいの。だから貴方には、遺伝子情報が他者と交わる事が出来なくなる薬を打ったわ。永琳を痛め付けて奪った薬だから効果は間違いないわ？後は貴方が束の間の生を満喫する間、世界との関わりを拒絶された恐怖に震えて生きなさい。まぁ軟弱者の貴方には自殺する勇気すらないでしょうから、ね？ああ、疲れた。だけどこれでおしまい。カーテンコールよ？」

そういって姫は笑った。なんの邪気もない、憑きものが全て取れたような清々しい笑顔。お父様、お母様、全て終わったわ！それが彼女の今の気持ちであった。

宰相はただただ彼女を見つめる事しか出来なかった。あの取るに足

らなかった小娘が、今、自分の全てを奪っていったのだ。彼女がした事は、ある意味死すら生ぬるいだろう。

子を為す、自分の血を後に繋ぐ――その行為を繰り返し、人は世界と繋がっているのだ。いかに偉大な者だとて、何れは忘れられる。落書きされた教科書の偉人の写真と一緒だ。一時の話題にあがったら終わりだ。そういう意味で、後世に血を繋ぐ行為は重たいのだ。

だが彼はもうそれが出来ない。クローンすら出来ないのだ。つまり、孤独。圧倒的なまでの孤独。後の生は惰性でしかないのである。

だからこそ逆説的ではあるが、この凄まじいまでの執念を突き通したこの小娘に、彼は不思議な畏敬の念を抱き、見つめた。

姫はただ立ち尽くすだけだった。もうすべき事は無い。だから宰相が腕時計の警報ボタンを押し、いまこの部屋に突入せんと殺到する者立ちの足音を静かに聞いていた。

この数日後、王の死のショックで正気を失った姫が、錯乱したまま婚約者である宰相の息子を殺害したと発表された。

さらに姫の居室から、穢れが生物兵器に転用された証拠となる書類が多数発見され、地上での穢れは、父親に不満を持っていた彼女の

テロ行為だったと発表された。但し、不老不死の薬については一切伏せられていた。

その発表から数日後、王立最高裁判所にて行われた、余りにも迅速すぎる欠席裁判により、姫の公開処刑が決定した。

国民に誰より愛された偉大な王。その愛らしき姫は、一夜にして憎悪の対象となった。

□■□■□■□■□■□■□

月の都の中央区画、その中心に位置する王城前広場。そこには強化ガラスで四方を囲まれた場所が作られており、その中心にある巨大な装置の上には1人の少女がいた。

その場所を囲むように夥しい人数の民衆が、その時が来るのを固唾を飲んで見守っている。

『殺せッ！』

誰かがあげた怨嗟の声に、また誰かがそれに合わせる。

『殺せッ！！』

家族を、恋人を、愛しい誰かを奪われた。その元凶がそこにいる。

『殺せッ！！！』

この国の姫だった少女は、今や極悪非道のテロ首謀者である。

『殺せッ！！！！』

だから民衆は憎んだ。だからその屍が曝される事を望んだ。愛しい誰かが戻っては来なくても。

「大罪人、※※※ー※※※ッ！何か言い残したい事はあるかッ！！！」

死刑執行官が現れ、姫に発言の機会を与える言葉を発した。

だが彼女はそれを拒否し、四肢を十字に拘束されたまま、微笑った。そして、恨みの籠もった血走った目で見ている民衆に向かい、声は出さずに呟いた。

（お父様が愛したこの国を、貴方がたは愛し続けて下さい）

後にこの映像はこの国のマスコミにより分析された。そして読唇術により判明したこのセリフは物議を醸し出した。罪人の言葉としては不可解だからだ。姫はそんな真似出来ない、そう信じるものは少ないが、存在はしていたと言う事だ。

やがて執行官が定位置に付き、死刑執行の時を告げるサイレンがならされた。

民衆から言葉は消え、ただ静寂が辺りを支配した。執行官が立ち上がり、装置を作動させようとしたその時――――

「止めてえぇッ！！！誰か止めてぇぇぇ！！！いやっいやあああっ

！死なないで※※※ぁ！！！！私を置いていかないでぇぇ！！やぁっ、いやっ、逝かないで※※※ァァァ！！！！……」

民衆の間に塗れていた八意永琳が弾かれたように強化ガラスに飛び付いた。

制止しようとする警備員を弾き飛ばし、永琳は叫ぶ。叫ぶしか方がなかった。

民衆は月の頭脳の錯乱する姿を、不思議なものを見るように静観している。

「どうして貴方がこんな目に！！！貴方が死ぬなんて嫌ぁ……私を1人にしないでっ！！私が間違ってた！！貴方を拒絶しなければよかった！！我が身かわいさに口を閉ざさなきゃよかった！！謝るから、なんでもするから置いていかないで！！……くっ、離しなさいッ汚らわしいッ離せ離せぇうわああアアアッ！！」

尚も叫ぶ永琳を、複数の屈強な警備員が取りつき、彼女の首に鎮静剤を打ち込んだ。

崩れ落ちる永琳が、失いかける意識の中で見えたのは、愛しい妹、※※※が永琳を見ながら口をパクパク動かしている姿だった。

（また、来世で逢いましょう。ばいばい、永琳）

「いゃぁ……何て言ったの……聞こえな…い…よ…」

そして姫は業火に包まれた。

肉が焼け、美しかった黒髪が蒸発しようと、一切の悲鳴をあげず、その身が燃え尽きるまで、彼女は微笑を消さなかった。

そして、民衆はある種の奇跡を目撃した――――

彼女の身体が朽ち果て、燃え尽きた瞬間、彼女の身体が存在していた場所から7色の粒子が立ち上ぼり、やがてそれは辺りを優しく包んだ。

暖かい不思議な感覚に戸惑う民衆であったが、それはいつしか煌びやかな鳥に姿を変え、真上に見えるかつての故郷、青き地球に向かって飛び去った。

人々はただ、それを見ているだけだった。

□■□■□■□■□■□■□

翁は日課である竹細工の為の材料を採りに竹林に入った。彼の細工した物は素晴らしい造形であるとされ、彼が作る作品を収集する事が貴族のステイタスとなっている。

だが彼は安易に大量生産はせず、身の丈にあった手を抜かない作品を作り続けた。それがひょんな事から帝の目に留まり、「これは実に素晴らしい」とお墨付きを与えた為、さらなる名声を得る結果となった。

だが翁は頑固一徹、それまで以上に自分の足並みを確りと守った。

「……はて？」

翁は竹を割る作業を止めた。それは何処からか赤子の泣く声が聞こえたからだ。こんな竹林に赤子などいる訳が無いのだが、耳を凝ら

せばやはり聞こえるのだ。

「ややや っ、これは珍妙な。もののけの類いであろうか？」

そう呟きながらも、やはり翁は泣き声を探して竹林の奥に入るのだった。

ややもして――――

「こ、これはなんじゃ！？」

翁の目の前には立派な竹がそびえていた。ただしその竹は普通の竹では無かった。地面からみっつ目の太い節の部分が、金色に輝いていたのだ。

どうやらその中から泣き声が聞こえるようだ。翁は恐る恐る竹を切った。中に傷が付かないように慎重に。

すると――

「おぎゃあああああ！」

中から現われたのは珠のように可愛らしい女の子の赤子であった。翁と妻の間に子は居ない。だからこそ翁は、「これは憐れな老人に、仏様が授けてくれたに違いない」そう考え、翁は赤子を大事そうに妻が待つ屋敷に帰るのだった。

そして、夫婦に大層可愛がられた女の子は、翁によって”蓬莱山輝夜”と名付けられ、それはそれは大事に育てられた。

蓬莱山とは、大陸の海上にある仙人が住む山の名前であり、神秘的な出会いであった翁が、その神聖さにあやかって付けた。輝夜は赤子をつれ帰った日が、それはそれは見事な満月だった為、まるで闇夜に輝く美しい姫になれと言う願いを込めて付けたのだ。

輝夜は実際に都で一番美しいと評判になる程に美しく育った。そして自分を拾ってくれた両親を大層愛したのだ。

絵に書いたような幸せな家庭がそこにあった。

輝夜は夜になると毎晩夜空を見上げ、月を眺めた。まるで月が愛しい恋人のように。

「身体が冷えるよ、輝夜」

「はい、お父様。もう少しだけ眺めたら中に入りますわ」

「そうかい。輝夜？」

「はい」

「何か辛い事があるなら、必ず言うんだよ。私達はお前を実の子だと思っているのだから」

「……はいっ」

俯く輝夜の頭を優しく撫でると、翁は中に入って行くのだった。

今宵も月は綺麗であった。

□■□■□■□■□■□■□

月の都では姫の処刑の後、国の体制が随分と変化した。と言うのも次期国王と噂されていた宰相が、処刑の一件の後に突然表明したの

だった。

それにより月は大統領制がしかれ、国民主権を念頭におかれた成文憲法が制定された法治国家へと変貌を遂げた。

直接選挙で選ばれた大統領と代議士が、議会で国の行く末を決めると言うシステムで運営されているのだ。

姫の一件から、一点集中した権力が暴走した時の恐ろしさを身を持って体験した国民達は、二度とその悲劇を繰り返さないために、警察力と軍事力を推進する保守政党を推し、現在月は軍国主義に傾きつつあった。かつて姫が管理していた兎達は、今や月の軍隊の中核を為すソルジャーとなった。

宰相だった男は月のドラスティックな改革を行った後に表舞台から姿を消し、その後の彼を知るものは居なかった。

そんな月の都に衝撃的なニュースが駆け巡った。それは処刑された筈の大罪人が、地上に転生し、のうのうと生きていると言うニュースだった。

国民は過剰反応を起こし、捕えて幽閉するべきだと世論はそう主張した。

そして地上への捕獲部隊が編成されるのだった。

□■□■□■□■□■□■□

「お父様、お疲れ様……後は先に逝ったお母様と仲良くね……さようなら」

八意永琳は両親の骨が収められた墓に呟き、そして踵を返して歩きだした。

迎えの車に向かう短い間、彼女の脳裏には様々な出来事が頭に浮かんで、そして消えていった。

両親が病気で亡くなった。彼らは永琳の薬を拒否し、自然に身を任せることを選択した。

彼女の父、八意永源が今際のきわに彼女にこういった。

「お前の足枷はもう無くなった。後はお前の好きに生きなさい。苦労をかけたな、永琳。この不甲斐ない父の最後の願いは、お前に必

ず幸せになってほしいと言う事だ。我が愛しい娘よ、さらばだ。私は……私達は、幸せだった……」

八意永源は全て知っていたのだ。姫の事、穢れの事、不老不死の薬を飲んだ事、それら全てを知っていたからこそ、自分たちを足枷と表現したのだ。

もう自分は間違えたりはしない。だから———

八意永琳は捕獲部隊へと志願をした。行き先を誤った道を元に戻すために。

そして、2人の別れてしまった道は、また1つとなり交わったのだった。

□■□■□■□■□■□■□

「――これで全部おしまい！あの後色々あって今はこうして幻想郷にいるけど、永琳といたらまぁ、何とか生きていけるしね？はいっ！馬鹿で愚かな女の話はおしまい！」

輝夜の長い長い話は終わった。次郎は1度も口を挟まず、あいずちすら頷くだけに留めた。

輝夜の横に座る永琳は、滑稽な話でしょ？と笑った。

「さて、感想は？呆れたでしょう？ははっ……」

何となく自虐的な笑いを浮かべる輝夜をじっと見つめていた次郎だったが、やがて静かに立ち上がり、輝夜の横に立って彼女を見下ろした。

「な、なによ！？」

「ん、いや…なんだ」

「ん？へっ！？ななっ」

きな臭い顔をしていた次郎だったが、やがて滑るように輝夜の後ろに座り、そして抱き締めた。

「な、な、何でしょう次郎サン……」

「ん、いやぁ、可哀想な話かもしれんのだろうが、まあ全て終わった話だわな」

「そそそうよ！今さら同情されても困るくらい昔の話だしねっ！」

「そうだよなあ。うん、そう思う。だから同情はせんよ俺は。爺さんがくれた名前もお前にぴったりだしな。綺麗なお前にしっくりくる名前だ」

そう言いながら次郎はさらに輝夜を強く抱き締める。

「〜〜〜〜っ！！永琳見てないで助けてよぅ！」

「やあよ。貴方が嫌なら抵抗したらいいじゃない？貴方彼より強いでしょ？」

ニヤニヤと笑う永琳に輝夜は味方はいないと悟った。

「ちょっ次郎、同情じゃないならなんで抱きついてんのよッ！！」

「ん、いやあ、なんだ、あれだよアレ」

「何よアレって！ドレよッ！！」

「だからアレだよ。惚れちまったって事だよ」

「惚れッなっ！なあっ！？なになにいってるの！？だとしても抱き付くなぁ！」

「やだよ。嫌なら逃げろよ。俺はこうしていたいんだよ」

「わっ私の意志はどうするのよ！」

「知らん。俺は惚れたから抱きたいだけだ。なんだお前、嫌なのか？」

「えっ！？えっと…」

「どうしても嫌だってんなら考えなくもないよ」

次郎は輝夜の頬に自分の頬を寄せながら優しく言う。次郎の低い声が輝夜の鼓膜を揺らすため、彼女の身体は固まってしまう。

「……嫌じゃないけど、貴方私より先に死ぬから寂しくなるし…」

「俺はどうやら寿命が無いらしい」

「私、我儘だしやさぐれてるよ……」

「やさぐれてるのは俺もかわらん」

「私と一緒にいたら、もれなく永琳っていう小姑がついてくるよ……」

「ま、病気で困らなくてすむな。それに……いや、なんでもない…」

「ちょっ今永琳の胸見てたよね？絶対見てたよね？」

「……見てない」

「くそぅ……あと、妹紅に怒られるよ？あの子私が嫌いだし」

「ま、燃やされるかもしれんが、死にはしないだろう」

「うう……」

「次はなんだ？」

「うううう……」

「そうか、もうないのか。そうかそうか」

「では後は若い2人に任せますわ？おほほほ……」

「気を遣わせて済まないな、永琳。なに、布団くらいひけるから大丈夫だ」

「えっ！？布団！？永琳どこ行くの！ちょっあぅっ！助けてえーりん！」

そして永琳によって襖は閉められた。中から何やら聞こえるが、それは2人にしか知らない事だ。

□■□■□■□■□■□■□

月明かりが照らす輝夜の居室、布団に裸でうつ伏せに寝る輝夜がいた。彼女は昔と変わらぬ肢体を、次郎の着流し一枚で隠したまま、情事の余韻を噛み締めていた。

濡れ縁に面した障子は開け放たれ、そこには月明かりを浴びる次郎が、やはり裸のまま煙管をふかしていた。

「ねぇ、実際どう思った？私達の話……」

ふと身体を起こした輝夜が、次郎の広い背中に問い掛ける。

「俺は分からないよ。言葉にするには長過ぎる物語だからな。軽々しくしたり顔で物は言えない。だけどな……」

次郎はカンッと煙管の火を飛ばし、そしてぷっと吹いた。

「だけど、そいつがあったからお前はここにいるわけだ。俺にとってその点は嬉しいな。後はだ、過去に何かあっても、ぐたぐだ言ってねえでさ、これから幸せになりゃいいんじゃねえか？って事だよ」

そういって次郎は顔だけ輝夜に振り返り、そして笑った。輝夜はなんだか考える事が馬鹿馬鹿しくなった。この男にかかったら、そんなもん程度の話なのか。そう思うとなんだか笑いたくなってきた。

「ふふっ、じーろう！」

輝夜は裸のまま彼の背中に抱きついた。

「なんだよ？」

「一緒に長生きしよーね？あと永琳も」

「ははっ、そうだな。いっぱい長生きして、美味いもの山ほど食っ

て、最高の酒を飲む。後はそうだな、お前達が傍にいたらそれでいいや」

「うんっ！！」

人にはそれぞれ過去はある。ただそれが不幸でも幸福でも、人は明日に向かって歩くしか無いのだ。そう、ならば明日を楽しめばいい。

次郎は背中にかかる輝夜の軽過ぎる重さに、この位の重さなら抱えて生きるのも悪くない。そう思った月夜のお話であった。

おしまい

永遠の中の一瞬　その？（後書き）

言いたいこと言われるであろう事、いっぱいあると思います。

まず、物語終盤は公式とやらを無視しました。

プロットを念頭にあとは筆のすすむまま自由に書きました。

輝夜と次郎をくっつけたのは、元々決めてました。

正直言えば、テンション的には輝夜の処刑までで使い果たし、エピローグ部分は手抜きに近いですごめんなさい。

手前味噌ながら、輝夜と永琳の話しを書きながら、処刑の辺りで泣きながら書いてました。馬鹿すぎて笑えますが、あそこで出し切った感があります。

まあ賛否両論あるでしょうが、月の使者がくる件から妹紅のエピソードなどは切りました。

皆さんたくさん書かれた話だし、あとは勝手に補完してくださいと言う感じですね。

この話の輝夜と永琳も、再開を果たした後は惰性で生きてますから。妹紅との話すら、二人からすれば取るに足らない話しな訳です。そういう意味を考え、続きは書きませんでした。

気に入ってくれたらいいのですが、まあお任せします。

処刑以降の部分は描写が足らないので、そのうち加筆します。

ではだらだらと長引いた駄文にお付き合いいただき、ありがとうございました。

感謝しています。

次回からは何事もなかったようにほのぼの路線に戻ります。

?ツボシ

コミュニケーション（前書き）

ほのぼの〜

コミュニケーション

コミュニケーションと言うものは、心を閉ざしていては中々ままならない。

誰かに愛を告げようとして戸惑う。それは怖いからだ。拒絶される恐怖。関係が変化してしまう恐怖。そして、恥を曝す事への恐怖。

そうやってまごまごしていれば、臆病な自分の目の前で愛しいあの人が別の誰かと愛を育み、そして自分は途方に暮れる。

あの人と友達になりたい人も、つまらない喧嘩をしてしまった両親にごめんなさいを言いたい人も、タイミングを逃せばやはり、途方に暮れる事になる。

そうやって後悔すると決まって人は、こう言うのだ。

「ああ、あの時こう言えば良かったなぁ」と。

――東方おとぎ草子――

次郎は従業員である妹紅とチルノと仕込み作業をしていた。それは大体チルノが畑に野菜を採りに行く事で、自然と妹紅も次郎も動き出す。

特に決めごとは無いのだが、いつの間にかそういう空気になったのだ。チルノも妹紅も”喰いものや”を愛し、自分が店を支えてると言う自覚が芽生えたのだろう。そんな調和が次郎は堪らなく嬉しく思うのだ。

「ジロッ！はくさい採れたよ！」

満面の笑みでチルノは自分の身体の半分程もある、見事に育った白菜を抱えている。泥だらけで得意気に笑うチルノに、次郎も妹紅も笑った。

「泥で真っ黒だなあ。でも偉いぞ！ははは、さあ、風呂浴びてチルノの白菜を浅漬けにしよう」

「わあい、お風呂！」

「やった！次郎とお風呂！」

「妹紅、お前は駄目だ」

そこはきっちり釘を刺す紳士な次郎であった。

「なんでさ！チルノだけずるいぞ！」

「阿呆が。チルノは女の子、お前は女。だからダメ」

やれやれと言わんばかりに次郎は言う。妹紅はニヤリと笑った。

「まさか次郎、私の身体に反応しちゃうとか？ん？ん？」

妹紅は身体を次郎にすり寄せた。どうやら色仕掛けを企んだようだ。

「ああ、そりゃあもう盛大に反応するぞ？そらもう大騒ぎさ。ん？妹紅よ？お前さん髪が白いと言う事は……ん～？」

「うっぎゃ～！次郎ッ！！下を見るな下を！！変態め！！」

「ジロヘンターイ！」

「「「あはははは」」」

なんだかんだで家族のような3人なのであった。

□■□■□■□■□■□■□

「しかしなんだ、妹紅もすっかり違和感無くなったな？うん、兄を支える健気な妹のようだ」

カウンターの一番奥、所謂いつもの席に座っていた慧音が、黙々と鳥を焼いていた妹紅に言った。注文を取り、焼き物なら妹紅が焼く。煮付けや手の込んだ物は次郎が担当する。飲み物はチルノが準備する。だが、妹紅は次郎の作業を先読みし、皿を出したり付け合わせを用意する。その甲斐甲斐しい姿を慧音は兄を支える妹と言ったのだろう。

慧音は大体は開店とおなじくらいに店に来て、食事を突きながらちびちびと飲るのが日課だ。彼女に言わせると、次郎のせいですっかり自炊をしなくなったらしく、そうやって毎日ボヤきながらも、何

だかんだと言いながら、妹紅と次郎の顔を見に来るのだ。

「ばか慧音！何が妹だ。私はほら、言うなればその、な？次郎？言ってやれよ！」

妹紅は何やら赤面しながら次郎に話を振った。

「……だろ？だから赤い斑点のが美味いんだって」

「それは知らなかったんだぜ！あれは昔、実験に使ったら爆発したんだぜ……」

「そらお前……それ以外に入れたものがダメだったんじゃないか？だいたい俺が調理したのは炒め物だぞ？そんな危ないなら俺が死んでるさ」

「くそっ、次郎みたいなキノコ初心者に教えられるとは……不覚だぜ……」

次郎は魔理沙とキノコ談義に忙しいようだ。魔理沙が店に来ると、次郎はこうしてキノコ話に花を咲かせる。”幻想郷のキノコには浪漫がある”これは次郎が酔うと必ず言う言葉だ。

「……まあ、なんだ。一杯奢るよ妹紅」

「……キノコに負けるとか切な過ぎるよ」

こうして代わり映えも無く、緩やかに夜は更けていく。他愛もないやり取りと美味い肴。すっかり妖達の社交場となった喰いものやであった。

「じゃまた来るわね」

「またです次郎さん」

「ああ、お休み、幽々子に妖夢。寒いから風邪引くなよ」

最後の客が引いた所で喰いものやは閉店を迎える。一応丑三つ時と言う閉店時間はあるのだが、最近は最後の客と言う曖昧な閉店時間に変わっていた。

それはせっかくわざわざ遠くから来る客に、つまらない思いはさせられないと、誰ともなく言い出したのだった。

実際彼女達が妖怪であるから気軽にこれるが、人が歩いたなら簡単に来れる距離では無いのだ。

だからこそ次郎達は、客が自然と帰るまでは営業を止めないとしたのだった。その結果、喰いものやは何時来てもやってるんだと客の方も何となくそう思い、先ほどの西行寺幽々子の様に月が傾く頃にやってきて、大量に焼き鳥を食して行ったりする訳だ。

因みに幽々子は「寝ていたらね～夢の中でご飯を食べてなかったわ～って思い出したのよ～」と、やってきて理由を言ったのだが、庭師の妖夢が言うには、「確かに夕食のご飯がいつもより一杯少なかった気がします。でも夜中に起こさなくたって……」と辟易していた。

ともかく喰いものやは閉店し、3人はいそいそと片付けをし、遅い賄いを食べるのだ。

「あ、次郎、ホントに明日休んでいいのか？」

「おお、構わないぞ。チルノと2人で何とかなるさ。な？チルノ」

「……ふぅん……だい…じょぶ……」

チルノは賄いのがんもどきを煮た奴を口に入れたまま、こっくりこっくりと舟を漕いでいた。

「疲れて寝ちまったな。ま、明日はゆっくりしてくるといいさ。慧音に宜しく頼む。さ、後は俺がやっとくから、悪いがチルノを連れ

かえって寝かせてやってくれ」

「わかった。ありがとう次郎さん。おやすみ」

「ああ、おやすみ妹紅」

明日、慧音とどこかへ出掛けるらしい妹紅は、少しウキウキとしているようだ。そんな彼女を眺めつつ、従業員への福利厚生は大事なのだと一人頷く次郎であった。

次郎の家へと帰っていく妹紅の背中には、既に夢の中にいるチルノが背負われている。彼女達の姿が闇に紛れてすっかり見えなくなるまで次郎は見つめていた。

やがて踵を反した次郎が、屋台に戻って片付けを続けようとしたのだが――

「まったく、お父さんみたいね？」

「なんだ紫か。もう看板だぞ？」

そこには勝手に手酌で始めていた八雲紫がいた。やはり”いつもの席”に彼女は座っている。

次郎がいつも煮炊きをしている場所の目の前の席。そこが彼女のお

気に入りなのだ。

「いいじゃない？私はもうすぐ冬眠するんだし。それにね？私という女がありながら、あんな小娘になびいたロクデナシをいびりに来たのよ？」

ニヤリと妖しく笑う八雲紫に、次郎もニヤリと返しながら、ぐいっと鼻と鼻が触れ合う程に顔を寄せ――

「何言ってやがる。面倒なのが嫌いな癖に」

紫が纏う柑橘類の練り香水の仄かな香りが、次郎の鼻腔をくすぐる。

「あら、いい男はコレクションしたくなるのよ？んっちゅっ……はぁ…ごちそうさま？」

触れるだけの軽い接吻で八雲紫は不意打ちし、一瞬恍惚とし、そしてまた妖しい笑みに戻った。

「綺麗なお姉さんの余裕ってやつよ？ゆっくり好きなだけ遊びなさい？ボクちゃん」

「……阿呆が。いつもの濁り酒でいいでしょうか？”お母様”」

「よくってよオチビちゃん？でも次にお母様と呼んだら……屋台ごと隙間にご招待するわよ？」

「……」

「……」

「ぷっ……あはっ…」

「くくっ……」

睨み合っていた2人は、やがて声を合わせて笑いだす。これがいつもの先付け代わりなのだ。言葉遊びと小さな駆け引き。

八雲紫と言う、ある意味では苦労人である大妖怪は理解されない。それは幻想郷を維持しなければいけない責任を持つ彼女故なのだ。だが、そんな彼女も女である。

時には弱るし、愚痴りたくもなるだろう。だが、立場がそれに制限をかけてしまうのだ。

そんな彼女にも少ないが理解者がいる。それが西行寺幽々子であり、

次郎だ。

だが不思議なもので、同性には話せるが、異性には話せない。逆に異性には話せるが、同性には離せない。そういう事があるのだ。

同性だからこそ共感出来る事柄が多々ある。だが、同性ならば譲れない部分も同時にある。自尊心と言う領域の話だ。だから真の意味で全て明け透けに話すなんて普通は出来ない。

だが、同性に明け透けに出来ない部分は、異性には素直に出せたり出来るのだ。男は女に素を見せて子供になり、女は男に甘えて弱さを見せる。

そういう物なのだ。

八雲紫は孤独を好む。長く生きれば自然とそうなるのだ。八意永琳や因幡てゐ、西行寺幽々子や聖白蓮等も同様に、どこか達観した物の見方をするのも長寿であるが故だ。

そんな中、八雲紫は生い立ちも含めて特に顕著に孤独を好む。彼女の生い立ちはいずれ語られるであろうから今は置いとくとして、孤独を好むからこそ、たまには心に沈殿したものを吐き出したくなるのは当然だろう。

八雲紫が次郎に求めるものは、粘着した男女のそれではないのだ。自分を理解してくれていると言う確かな事実なのだ。それがあれば彼女は仮面を被り続けられるのだ。例え胡散臭い隙間妖怪と揶揄されようと。

「さて、帰るわ？」

暫く他愛ない話をしながら飲んでいた八雲紫は、そういうと立ち上がり代金を置いた。随分と多過ぎる金額だった。

そうして八雲紫は次郎の着流しの両襟を引いて唇を奪い、そして胡散臭い笑みを浮かべて隙間に消えていった。

次郎はカウンターの金を見つめ、ふっと笑った。

「お前こそ充分お母さんしてるじゃねぇか……」

過分過ぎる代金、それは溜りに溜まった博麗霊夢の代金代わりなのであった。次郎は紅がついた唇を拭うと、明日は永遠亭に行こうかなと考えてみた。

「唇ひとつ、うーん…俺はまだボクちゃんなのかね？」

どうやら次郎は欲情したようだ。

□■□■□■□■□■□■□

「よし、忘れ物はないなっと」

口に出して確認している自分に気が付き、少し苦笑いをしてしまう次郎。と言うのは、何となくだが年寄り臭いと思った次郎なのだ。そういえば爺さんもそうだったなと、少し昔を回想し、ああ、昔を懐かしむのも年寄りの癖だとさらに苦笑いを深める次郎であった。

次郎は自身の能力の弊害で、寿命が無くなってしまった。どういう訳か、髭なども伸びないし、容姿も変わらない。彼が幻想郷にきて数年、流石に見た目が変化しても良いのだが、一向に変わらない。

また髭剃りや散髪は面倒だからそこは助かるな？――と言うのは次郎の言であるが、いまいち確信が持てないから具合が悪いのだ。

一度、あらゆる境界を操る能力を持つ八雲紫に調べてもらったが、ある程度は把握出来きた。だが上限や幅を調べるために深層心理の境界に触れようとした瞬間、八雲紫の意識が飛んだ。どうやら次郎の能力が八雲紫の接触を脅威と判断し、彼女の意識を”切った”よ

うだ。

そうなれば八雲紫もお手上げだ。結局次郎は面倒臭くなり、紫の式になる事で考えを放棄した。彼女の式ならば、一応彼女が次郎を制御制限が出来るからだ。

つまりは面倒を八雲紫に丸投げしたのだった。ただ、八雲紫程の能力を持ってしても、抵抗する間もなく意識を持っていかれた。だから彼女は言った。

「式になったとて安心しないでね。まぁ次郎が異変を起こしたりはしないだろうけど、異変を起こせるクラスの妖怪に襲われたら貴方の能力はどうなるかは分からないわ。私が貴方にかけた式と言う制限は、あくまでも貴方の妖気に縛りをかけただけだもの。能力自体に制限はかけられないのよ？――」

そんな訳で、何とも中途半端な次郎の能力であるが、彼自身は戦闘など興味はない。弾幕ごっこに付き合う気もさらさらない。

彼はただ平穏に、ただ偏見を持たない傍観者として、この幻想郷の四季を楽しみ、その恵みを少しだけ分けてもらえれば満足なのだ。後は不思議で愉快な妖達がいたらそれでいい。

そう考えてみた辺りで彼は、やっぱり頭ん中だけはジジイになってやがると自嘲するのだった。

□■□■□■□■□■□■□

さて帰るか、と次郎は寝酒の肴に作った余った唐揚げに甘酢を絡めた物を折に摘め、人々は寝静まり、静まり返った人里を、月明かりを浴びながら家路を歩き始めた。

幻想郷には街灯のような気の利いたものはない。故に丑三つ時ともなれば暗いのだが、夜空の淡い光まで奪ってしまう生活の明かりや、眠らぬ不夜城も無い。すると星明かりと月明かりで影が出来る程に明るかったりする。

そんな青白い光の道を、次郎の雪駄の音だけが響く。彼は昔流行った歌謡曲を歌いながら、のんびりと歩いていた。

どうして歌謡曲は男と女がすぐ別れるストーリーか、艶やかな不倫の歌ばかりなのだろうと思いつつも、次郎の口から出て来るのは、やはり男に捨てられた女が泣いて縋る歌だった。

「――だからお願い捨てないで～♪っとくらあ……で、お前さんは俺になんかようか？」

ふと脚を止め振り返った次郎は、暗がりの民間の軒下を見つめて言った。深夜な上に陰になる場所であるから、暗闇がそこにあるだけなのだが……。

「だから何の用だと聞いてるんだが……？」

「……」

次郎が何度か呼び掛けていると、暗がりから1人の少女が次郎をチラチラと顔色を伺うように出てきた。

「ねえ、お兄さん。なんで私が見えるの？」

「……？。おかしな事言うな？お前さんはそこにいるじゃないか？」

その黒いフェルトのハットを被った黄色い服の少女は、忙しなく丸い首飾りを弄りながら言う。次郎に見つかった事が非常に意外だった様で、ひどく慌てていた。

「いや、うん、そっか。分かるんだ私が……。そっかそっか～！」

「……？」

少女は何やら嬉しそうに何度も頷き笑った。まったく置いてけぼりな次郎はぽかんとするばかりだ。

「まぁいいが、何してるんだ？こんな時間に？家族が心配するんじゃないか？」

「ん～、まぁ心配してる…のかな？でも大丈夫。ま、これでも妖怪だからね」

「ふうん？俺を食いにきたのか？なら逃げるぞ俺は」

と、次郎は惚けた顔で逃げる格好をしてみせる。実際はそれほど危険な気はしていない。そもそも食べる気ならば、話し掛ける前に食い付いているだろう。

「食べないよ！でもソレが気になっちゃってさ？ソレが」

「ああ、コレか。お前さん、腹減ってるのか？」

「いや、うん、お腹空いてるかも……」

少女は照れくさそうに石ころを蹴ったりしている。

「そっか。ならこれやるから持ってかえって食べな？」

「いいの！？」

「ああ、でもな……」

「な、なに？」

「俺はそこの東門を出たとこで屋台をやっているんだ。だから、今度必ず食べに来てくれるなこれをやろうじゃないか」

そういって次郎は笑った。少女も釣られて笑った。

「うん！必ず来るよ！」

「ならあげよう。気を付けて帰るんだぞ？」

「わかった！じゃまたね！」

「ああ、またな」

そうして少女は次郎から折詰めを受け取ると、手を振って走り去っ

た。

「つまみ、無くなっちまったな……ま、いっか。今日は飲まずに寝るかね？」

何となく暖かい気持ちになった次郎は、また鼻歌を再開して家路に着くのだった。

□■□■□■□■□■□■□

少女は夜道を走る。胸にまだ少しだけ暖かい折詰めを抱えて。

「何だか不思議な人間だったな～。私を普通に見つけるなんてな。お姉ちゃんに話したげよ。ふふふ～」

そうして少女は、結界を抜けて地下に潜る。幾人かいた天狗にも門番にも見付からず――いや、気にも留められずに。

「そういえば名前を聞くのを忘れたな。ま、いっか。屋台に来いって言ってたし。また会えたらいいな。ふふふ～」

そういって少女は帰っていった。

彼女の名前は古明地こいしと言う。心を閉ざした覚(さとり)の少女であった。

登場人物

気分はお父さん　次郎

気分はお母さん　八雲紫

明日は妹紅とお出かけ　上白沢慧音

明日は慧音とお出かけ　藤原妹紅

喰いものやはあたいが支えているんだ！　チルノ

次郎のキノコの師匠は私なんだぜ？　霧雨魔理沙

紫がツケを？払ってくれるのを断る馬鹿はいないわよ？　博麗霊夢

面白い人間見つけた！　古明地こいし

コミュニケーション（後書き）

そろそろ地霊殿か、八雲紫の過去でも書こうかなと思います。天子とかは好きでも嫌いでもないので、ネタに困ったら書くかな？くらいなノリですわ。

キャラ立った人材が多いので、書きやすいのは地霊殿ですが、八雲紫とマエリベリーハーン又はエリーとの近似性は創作意欲を掻き立てます。公式で明言されてないので尚更そそります。

まあ、八雲紫の話になれば、この前書いた月シリーズなみに長くなりそうだ。

ああ、どっち書こうかな（、ω、）

良かったらご意見ご感想を下さいませ。

ココロに花を（前書き）

毎度の捏造話です。申し訳ない。

ココロに花を

次郎は視界を埋め尽くすほどの向日葵を見つめていた。真っ青な幻想郷の秋の空、その中で力強く咲く向日葵の黄色。それらを受け止めるキャンバスは大地を覆う緑色の草たち。

秋にまだ向日葵が咲き続けていると言うシュールな光景には理由があった。つまり本当なら既に枯れていたのだ。だが、とある理由でこの花達は咲いている。

「すまんな、幽香。お前さんの信条を曲げさせちまったみたいで」

次郎は向日葵に視線を向けたまま呟いた。

「別に気紛れよ。貴方に気を使った訳じゃないわ。ただ、墓に添えるのが彼岸花である必要はない。そういう事よ」

次郎の傍らに立っていた風見幽香は素っ気なく答える。

「そういうお前さんの奥床しさが俺は好きだ。お前さん、いい女だよ」

「……う、うるさい。終わったらうちに寄りなさい。紅茶くらい入れるから」

「ありがとう。俺はもうしばらくここに居るよ」

「ええ、好きなだけ居るといいわ。この場所は貴方に提供したの

だから。じゃあ戻るわ？」

そういって風見幽香は踵を返し、帰っていった。次郎は無言のままそこに膝まづいた。

ここは幻想郷の南東の外れ。太陽の畑と呼ばれ、ここの一帯は大妖怪、風見幽香が所有している。

フラワーマスターと言う異名を持つ彼女が、丹精込めて育てた花達が咲き乱れる丘は、まさに幻想的な風景を披露している。

もっとも、この素晴らしき光景を見る事が出来る者はあまりいない。と言うのは、花に害になる存在は風見幽香が容赦無く生命を奪うし、人間は基本的には近寄らせはしない。そして妖達に花を愛でる趣味を持つ存在はあまり居ない。

そういった事情によって、この太陽の畑の存在自体あまり公では無いのだ。次郎はその中で数少ない常連と言える。

そんな次郎は先日、漸く八雲紫に頼んでいた物が手に届いた。そしてそれを納める場所として、この太陽の畑を選んだのだ。

ふらりと喰いものやに現れた風見幽香に彼がその事を頼むと、彼女は快く引き受けたと言う訳だ。

「選んでくれて光栄だわ。一番花が見える場所を空けといてあげる」

どこか寂しそうに頼んできた次郎に、彼女は太陽のような笑顔でそう答えたのだった。

次郎が今、縋りついている球体をした石にはこう刻まれていた。

『侑子と翼、ここに眠る』と。

そう、これは墓だった。八雲紫に頼んであったのは2人の遺骨である。

そして今日、妻だった女――侑子の命日に、風見幽香が「花を操る程度の能力」を使って咲かせた向日葵に囲まれ、次郎は墓に骨を納めたのだった。

「これで漸く吹っ切れたよ。侑子、翼、俺はここで生きているよ。ちゃんと幸せだよ。実は今、好きな女がいるんだ。信じられるか？あのかぐや姫なんだぜ？それより聞いてくれよ！霊夢っていうおかしな巫女がさあ……――――」

次郎はそうして、時間を忘れて天国に届けとばかりに話続けた。

少し肌寒いが、爽やかな風が季節外れの向日葵を揺らす。そんな穏やかな昼下がりの出来事であった。

――東方おとぎ草子――

むかしむかし、あるところに、1人の可愛らしい女の子がいました。彼女はいつ産まれ、自分が一体何なのかは知りません。

ただ彼女はそこにいて、日々何かをしながら生きていました。

彼女が生きるためにしていた仕事は、都へ歩いていき、そして自分が育てた花を売る事でした。都の人達は最初、まだ少女でしか無かった彼女が1人で花を売る姿を不審に思いました。

何故なら彼女の傍にはお父さんもお母さんの姿を見かけた事が無いからです。

「花はいりませんか？綺麗な花です。大好きなあの人に、味気ないお部屋に、お花を贈りませんか？お花を飾りませんか？」

くる日もくる日も彼女は花を売りに来ました。ですが一向に売れません。

「お腹、空いたなあ……」

日が暮れそうな都大路の片隅で、彼女は小さく呟いた。真っ白な手にほう、と息を吹き掛け、今日も売れなかったなと彼女は片付けを始めました。

そんな時でした、彼女の近くに金の蒔絵が麗しい牛車が停まりました。ですが彼女は気が付きもせず、ただ悲しそうに花を纏めています。

「ごめんなさい、お花さん。明日は売れたらいいなあ」

「ねえ君、それは売り物なのかい？」

片付けをしていた彼女の背後から、鈴の音のような声が聞こえます。そこには身なりの上等な、とても利発そうな少年がいました。

「へっ？あ、はい、そうです…けど？」

驚く彼女を余所にその少年はしゃがみこみ、彼女の育てた花を眺めています。

「やあ、とても綺麗な花だね。都じゃこんな素敵な花は見たこと

が無いや！ねえ、これは私が買っても構わないかな？」

「あ、はい、大丈夫です。その、花を褒めてくれてありがとうございます！」

彼女は花が売れた事よりも、花を褒められた事の方が嬉しかったようです。身なりの上等な少年は、後ろに控えていた使用人に耳打ちすると、使用人は彼女にお金を渡しました。

「え？こんなに……」

びっくりするくらいのお金を渡された彼女は、思わず茫然としてしまいました。その間に少年は花を抱えて牛車に乗り込んでしまいました。

「あ、待って……」

そう言い縋る彼女に、牛車からひょこりと顔を出した少年は笑顔で言いました。

「また買いに来るから、必ずいてよね！じゃあまた！」

そうして少年は奔り去りました。彼女は「必ず来ます」と小さく呟き、そして笑顔で帰っていきました。

それから花売りの彼女に変化が訪れました。それは彼女が売る花が飛ぶように売れたのです。持ってきた花が、太陽が真上に来る前に全て売れてしまうのです。

彼女は戸惑いながらも、自分が丹精込めて育てた花達が売れるのを嬉しく思いました。ですが、彼女の表情がすぐれません。

何故なら彼女はあの少年を待っていたからです。彼女はあの少年の為に売り物の花とは別に、少年の為の花束をいつも持って来ていたのです。

少年に花束を渡し「貴方のお陰で売れました、ありがとうございます」と一言伝えたかったのです。

彼女は今日も少年には会えず、とぼとぼと都近くにある彼女の家がある山へと帰っていきました。

山へ帰る彼女の後ろを、小柄な男がつけていきます。それを彼女は気付かなかったようですが、一体何なのでしょう？それは今は分からない事です。そしてそれとは関係無いように、都の夜は更けていくのでした。

翌朝彼女は家の近くにある花畑に向かいました。そこには色とりどりの花が咲き乱れています。

「おはよう！みんな。今日も少しだけ切らせて貰うね？ごめんなさい」

彼女はそうして花畑に入ると、その日に売る分だけ刈りました。花を心から愛する彼女は、少し辛そうです。彼女にとって花達は、家族であり友達なのです。

彼女は生れ付き花を上手く咲かせる才能があったのです。彼女がこの辺りで産まれてから、ずっと彼女はここで花を育てていたのです。

「あの人に会いたいなあ。何か嫌われることしちゃったかしら……」

彼女は花に語り掛けます。風に揺れる花達は、彼女に「大丈夫！」と励ましてくれているようです。だから彼女は今日も都へ向かいます。あの少年に会えるのを期待しながら。

相変わらず彼女の花は売れ続けました。彼女は時折どうしてかしら？と考えますが、どうしても理由はわかりません。だからこそ彼女は少年に会いたいと願いますが、それは叶わず半年が経ちました。

冬枯れの花畑、彼女は立っていました。この季節に咲く花はあまりありません。ですがこの日小さな花が咲きました。彼女が昔植え

た梅の木に、淡く小さな、それでいて力強い花をつけたのです。

彼女は心から歓びました。これを少年に見せたら笑ってくれるかしら？そう彼女は想像し、思わずにこりとしたのです。

「ああ、あの少年に会いたいな。だけど私はあの子の名前も知らない。でも、どうしても会いたいの」

彼女は梅の花に話し掛けます。

「それは叶うことは無いだろう」

突然彼女に誰かが話し掛けました。彼女はびくりと身体を震わせます。何故なら今まで誰も、彼女の畑に来た事が無いからです。

「ど、どうして！？私はあの子にありがとうと言いたいのに！」

彼女は叫びます。何故ならばここに人が来たことよりも、あの子に会えないと言われた事の方が悲しかったからです。

「それはお前が妖怪だからだ」

「え？……どうして知ってるの？」

そうです。彼女は妖怪だったのです。花を愛する花妖怪だったのです。今まで都では気付かれませんでした。みんな彼女を人間だと思っていたからです。

「私は帝に仕える陰陽師だ。そして陰陽師の仕事は妖怪を倒す事だ。だから私はお前の様子をずっと窺ってきたのだよ」

「おんみょうじ……私は殺されるの？私、何も悪いことしてないのに……」

彼女ははらはらと涙を流します。ですが、陰陽師が恐かったからではありません。少年に会えない事が悲しいからです。

「……嫌よ。私、死にたくないわ。だって、あの子にありがとうって伝えてないもの！たくさん花が売れたのにありがとうって言ってないもの！！」

彼女は泣きます。声をしゃくり上げて泣きます。ただ一言、ありがとうと言いたい。そして、自分の花で笑って欲しい。ただそれだけなのです。

「ならありがとうと伝えるがいい」

陰陽師はそういいました。彼女はいったい何を言われたのか分かりませんでした。

「え？会うことは出来ないって今……それに貴方はおんみょうじだから、私は死ぬんじゃないの？」

「私は確かに陰陽師だが、私は一言もお前を殺すとは言ってないよ。お前はどういう訳か花を育てて居るだけの妖怪だ。だからお前が悪さをしないうちは殺さない」

何という事でしょう？この陰陽師は彼女を殺さないと言います。彼女はあまりの衝撃に、目を白黒させています。確かに陰陽師は一度も彼女を殺すとは言ってませんね。

「少年、いやあの方に会えない理由は、あの方は今、病気で日に日に弱っておられるからだ。あの方は皇子なのだよ。だから今は誰にも会えないのだ。快復の祈祷をする私以外にはな」

「え？皇子……それより病気！？やだよ、そんな…嫌よ……」

陰陽師の言葉に彼女は取り乱します。あの方が病気だったなんて！そういう気持ちで胸が張り裂けそうになったのです。

「落ち着くのだ妖怪。あの方は床に臥せっておいでだが、いつもお前に会いたがっていたのだ。お前の花が売れたのは、あの方が仲秋観月の宴でな、お前の花を飾り、そして見事な詩を詠んだのだ。それでお前の花が評判になったのだよ。あの方は何度もお前に会いに行かれようとなさった。だが病に臥せたせいで、それは叶わなかったのだ。あの方はお前と約束したのにといつも嘆かれたよ」

「皇子さま……」

彼女の涙はまるでそこに泉を拵えてしまうようでした。皇子ではあっても、やっと名前が分かったのです。だから尚更、ありがとうと言いたいと言う気持ちが強くなったのです。

「あの方の病はもう治らぬのだ。出来ればお前に直接励まして貰いたい。が、妖怪であるお前を宮中には連れて行けぬのだ。それはお前にも分かるな？」

「はい……」

「だからな、お前にはあの方に手紙を書いてほしいのだ。ならばお前も礼を言えるだろう？手紙は私が責任持って届けよう。あの方の返事は、必ず私がお前に届けよう。どうだ？」

陰陽師の言葉はどこまでも優しかった。だから彼女は手紙を書くことにした。今までのたくさんの感謝を込めて。

そうして、彼女がしたためた手紙を持って、陰陽師は都へ帰っていきました。彼女の名前はせいめいと言う名前で、必ずまた来るから悪さはするなよと言いました。

それから三ヶ月経っても、何の音沙汰もありませんでした。でも彼女はどうにか皇子さまを元気付けたいと思い、あちこちへ旅に出ました。それは綺麗な花の種を探していたからです。

そして彼女は漸く目当ての花を見付けました。わざわざ太宰府と言う遠くまで出掛けていき、大陸渡りの珍しい花の種を手に入れたのです。

彼女は花畑に帰ってくると、まだ早春であったのですが、この時ばかりは自分の能力をたくさん使って咲かせました。

そうしてやっと花が満開になった時の事です。せいめいがやってきました。彼女はこの花を渡せると歓び、そして旅の間に見聞きした珍しい景色や出来事をしたためた長い手紙を渡せると歓喜しました。

ですが、せいめいの様子がおかしいのです。彼女を見つめたまま、一言も話しません。

「せいめいさま、いったいどうしたの？」

「あの方は……お隠れあそばされた……すまないな……」

「お隠れ？あそび？かくれんぼでもしてるの？」

「そうではない。あの方は亡くなられた。そういう事なのだ。これはあの方からの手紙だ。読んで欲しい……」

彼女はせいめいから引ったくるように手紙を奪い、食い入るように手紙を読みました。

『妖怪さんへ。　私はどうやらもう、いかぬようだ。どうにかそなたに会いたいと、必死に頑張ってみたよ。だがいかぬものはいかぬらしいな。

そなたの花は本当に美しかった。そしてそなたも、な。

そなたは妖怪さんらしいが、私にはただの美姫でしか無かったよ。

私が床に臥していても、いつもそなたの事を思い、我を忘れずにいれた。

あの日、そなたは去り際に笑っていたな。まるで太陽のようだったよ。

それに比べて床に臥せていた私は月のようだな。

太陽と月は決して距離は縮まらない。だが、互いに光を与えあうのだ。

私のつまらない暮らしを、そなたと言う太陽は光をくれた。

ありがとう、名も知らない妖怪さん。

そなたの美しい翡翠のような髪は、まるで夏の草原を吹き抜ける風を見たようだったよ。

そなたへの叶わぬ想いを抱き、私は消えるだろう。

そなたに出会えてよかった。

最後に一つ、私から贈り物をさせて欲しい。大陸渡りのあんぶれらと言うものだ。傘のような物らしいが、大陸では貴婦人が陽光を避ける為に用いるらしい。それを晴明に持たせよう。

花柄はそなたに似合う。是非受け取ってくれ。

太陽に焦がれた月より』

「うわあ……ああっ……うわあああっ！いやあっ！ああああああっ！私は太陽なんかじゃないっ！孤独な私を笑わせてくれた貴方が太陽よっ！！いやあああああっ！……」

彼女は泣きました。ただの赤子のように。それしか出来なかったのです。

せいめいはただ彼女をただ抱き締めて撫でてやるしか出来ませんでした。かける言葉を持っていなかったからです。そして、やがて――

「これがあの方に遣わされたあんぶれらだ。出来れば大事にして欲しい」

彼女は受け取り、大事そうに抱き締めました。まるで皇子がそこにいるかのように。

彼女が落ち着くと、せいめいは帰ることにしました。ですが、去り際にせいめいは彼女に尋ねます。

「あの黄色く華やかな花の名前はなんと言う？それと、お前の名前を聞いていなかったな？」

「あの花は太陽の花。私の名前は幽香よ。ただの幽香。でもこれからは風見幽香と名乗るわ」

「なるほど、太陽の花か。まさにと言う印象だな。それと何故ただの幽香が風見と名乗る？」

風見幽香は皇子の手紙を握りました、そして笑顔でこう言いました。

「ふふっ、ないしょ」

そして二人は二度と会うことはありませんでした。

その後、風見幽香は長い長い旅に出ました。その終わりが無いと思われた旅は、やがて終わりを迎えます。ですがそれには百年では足りなかったそうです。

□■□■□■□■□■□■□

太陽の畑の傍らにあるこじんまりとした家。そこのリビングで、風見幽香は翡翠色の髪を物憂げに弄っていた。

「なんだ、お前さんがぼおっとするなんて珍しいな？」

「あ、あら？来てたの？私だって物思いに耽る事くらいあるわよ。貴方より長生きなんだから、思い出す事はいくらでもあるねよ？」

いつの間にか来ていた次郎の言葉に狼狽えた風見幽香だったが、すぐいつもの皮肉っぽい口調に戻すのだった。

「へえ？それは興味が沸くな？大妖怪の隠された過去ってか？」

「鴉天狗みたいな事言わないでよ。それに話す気はないわ？ふふっ、美人に秘密は付き物なのよ？」

そうやって風見幽香はのらりくらりと躱し、次郎の為に紅茶を入れた。

そして二人は差し向かって静かに紅茶を飲む。彼女が入れた紅茶の香気は素晴らしかった。

「……なによ？」

じっと風見幽香を見つめていた次郎に、彼女は怪訝そうに聞いた。

「ん？いや、な？お前さんの風見と言う苗字がな」

「な、なに？」

「いや、お前さんのその髪色にぴったりだなと思ってな」

「えっ！？……」

風見幽香は雷でも受けたように固まった。そのあまりの変わりようにに次郎は慌てた。

「ど、どうした？俺、変な事いったか？？」

「……」

「おい！幽香！？」

慌てた次郎は彼女の肩を揺すった。

「あ、ああ、ごめんなさい。なんでもないの。少し昔を思い出しただけ。もう大丈夫よ？あ、えっと、次郎！」

「お、おう？」

「今日は夕飯食べていきなさい。拒否はなしよ。そうね、貴方の奥さんの話を聞かせなさい。私は……少し昔話を聞かせるから」

静かに次郎は頷き、そして二人はまた紅茶を飲むのだった。

風見幽香は傍らの日傘を優しく撫でた。

登場人物

墓を漸く建てれたよ　次郎

次郎の死んだ妻　侑子

次郎の死んだ子　翼

次郎の親友　八雲紫

”妖怪さん”　風見幽香

陰陽師　せいめい

太陽に焦がれた月　皇子

ココロに花を（後書き）

ゆうかりんの話でした。まあ設定は勢いです。

長生きしてんだろな？くらいで書きました。

時代設定は敢えて書きません。

せいめいも苗字があの苗字とはかぎりません。

ただ、うちのゆうかりんは余りドＳでは無いようです。

まあ、ＩＦは……アレですが。

取り敢えず本編にゆうかりんを出したかった。そういう事です。

悩める者達

悩むという事は若者の特権だと言う意見がある。年寄りというものは、長年培った経験と言う計りが、何か困難が生じた時に、ある程度それがどの位の重さか分かるのだ。

それ故慌てず怯えず、悩む前に心構えが出来てしまう。逆に経験故に動く前に諦めてしまう。経験として労力を注ぐ事が無駄だと判るからだ。それを達観と言うのだが、悩むという事をしないと言う裏返しでもある。

若者は困難にぶつかると、悩み苦しむ。そして悩みの深遠の中、血ヘドを吐くような苦しみの末に何かを勝ち取る。そして壁を乗り越えた喜びを噛み締めるのだ。或いは山の頂上へ至り、歓喜した先にさらに高い山を見付け、更に挑もうと想いを新たにする。

若さ故の過ちも乗り越えればそれは、大切な糧になる。そういう無駄が無いのが若者なのだ。そのバイタリティに年寄りは羨望するのだ。達観とは無駄な動きを排除する事だ。美徳としてではなく、そこに至ってしまえばそうならざるを得ないのだ。

それでも若者は熟練者に羨望する。それでも年寄りは若さに羨望する。所詮無い物ねだりなのかもしれないが。

では何百年も生きた妖が、未だ悩み続けているならば、それは若者？いや年寄り？

幻想郷に常識は通用しない。つまりはそういう事なのである。

――東方おとぎ草子――

「ん？お前、また来たのか？」

「だって、おじさんがまた来いよって言ったじゃないか」

「……帰れ」

「えええェッ！？酷いよおじさん！！」

前に次郎が出会った不思議な少女が彼の店に顔を出したのだ。ニコニコと嬉しそうな彼女に対して、何故か物凄く不機嫌な次郎であった。

今は丑三つ時、そろそろ看板か、と思っていた次郎が、今日最後であろう客の相手をしていた時に少女がやってきたのだった。

「次郎、大人気ない態度をとならないの。ごめんね？えっと……？」

「こいしだよ」

「そう、こいしね？えっとこいし、次郎はおじさんって言われたのが気に入らなかったみたいよ？ぷふっ…だからお兄さんと言ってみたら？くくっ……」

「黙れ輝夜。馴々しく次郎なんて呼ぶな。燃やすぞ……」

「あら、悋気かしら妹紅？私と次郎はホラ、恋人だから仕方ないのよ？ごめんなさいね？貴方の大好きな”お兄さん”をうばっちゃって？ふふっ。それに私は客よ？お・きゃ・く」

「くっ…店が終わったら覚えとけ…泣かせてやるからな」

「やん怖い♪次郎助けて？」

「おまっ離れろ！次郎にくっつくな！破廉恥だぞッ！？」

にやりとしながら次郎に抱き付く輝夜に、怒り心頭の妹紅。それを見ながらあわあわと慌てるこいしが憐れであった。

「あら？あらあら？私と次郎はもっと破廉…モガモガッ……」

「輝夜もやめてくれ。妹紅も挑発するな。こいし、だったか？すまんな、驚かせて」

一触即発ならまだしも、このままでは要らぬ暴露が始まりそうな雰囲気に、次郎は大いに慌てた。何よりこいしと言う少女が目の前の光景に口をぽかんと開けていた。

「だ、大丈夫。少し驚いただけだよ。あ、後、ごめんなさい、お、お兄さん……」

「いや、もうおじさんでも何でも好きに呼んでくれ……。こいつらのせいで疲れた。ま、ちゃんと自己紹介してなかったな？俺は次郎。この”喰いものや”をやっている。よろしくな？こいし」

「私はこいし。古明地こいし。よろしく、次郎お兄さん」

お兄さんと言われご満悦な次郎は、後ろでぎゃあぎゃあと五月蠅い連中を放置し、こいしと言葉を交わす。

「そういえばお前さん、この前も夜中に会ったが、家は大丈夫なのか？」

「あ、うん。心配はされるけどね。居心地が良かったり悪かったり……ま、色々あるんだよ」

次郎の問いに、一瞬遠い目をしたこいしだった。

「そうか。まあ人間生きてりゃ色々あるさ。なら妖怪だって色々あるわな。で、こいしよ？お前さん、腹は減ってるか？」

「う、うん。少し？」

「そっか、なら食ってきな。適当に作るから、その辺に座って待ってろ」

「うんっ！」

そうして次郎はこいしに笑いかけると、何やら調理に入った。こ

いしはそんな次郎をにこにこと見ながら、何が出来るかとわくわくしながら見守っている。

「……ちょっと、聞いてくださいよ、輝夜の奥様？」

「あら？どうしたのかしら、妹紅の奥様？」

「いえね？次郎さんたら幼い少女が好みらしいですよ？」

「まあ！それは厭らしい！少女の敵ですわね！そういえば毎日氷妖精とお風呂に入ってるらしいわね？危ないわ……」

「やーねー？」

「ねー？」

何やら井戸端会議をする奥様達の会話のように、輝夜と妹紅はひそひそと話しだした。とは言え、明らかに次郎へ聞こえる様に言ってるのであるが。

「お前さんら……さっきは喧嘩してたんじゃないのか？と言うか、俺は少女に興味は無いからな？いい加減にしないと出禁にするぞ？妹紅、お前さんもだからな？」

「昨日の敵は今日の友！同じ志を持てばそれを同志と言うんだ！次郎さん！」

「そうよ次郎！敵の敵は味方よ！幼女に走ったら許さないんだか……はっ！？まさか、てゐと妙に仲良いのはそういう訳！？」

次郎は呆れて物が言えない。

「……てゐはそこらの妖怪よりよっぽど年喰ってるだろうが……。俺はな、少女が好きなんじゃない。素直な奴が好きなだけだ……。もういい、疲れた。ほらこいし、天茶だ。熱いうちに食いな。このお姉さん達は無視していいから」

そう言って次郎は、こいしに湯気が立ち上る丼を出す。熱々の飯に揚げたてのかき揚げ、それに刻んだ青ネギとゴマをたっぷり載せたものに、やはり熱々の出汁を掛け回した物だ。

「うわあ、美味しそう！いただきます！」

「ああ、食べてくれ」

次郎ははふはふと熱がりながらも、美味そうに天茶を啜るこいしを満足そうに眺める。それを羨ましそうに見ている妹紅と輝夜にも同じ物を出し、やっと静かになった喰いものやであった。

やがて食べ終えたこいしは、疲れたのかカウンターに寝てしまった。

「こいし寝ちゃったね、次郎さん。こんな時間に来るなんて、どうしたんだろうね？」

「何だか不思議な子。そこに居るんだけど、居ないような……変な感じがするの」

笑顔を浮かべながら眠るこいしを見ながら、妹紅と輝夜は彼女の

印象を口にする。次郎は酒を飲みつつ、何やら思案気にこいしを見ていた。

「……取り敢えずもう遅い。妹紅は悪いがこいしを背負ってくれ。俺はチルノを背負うから。輝夜も今日は遅くなったし泊まっていけよ。さあ帰るぞ」

そうして手早く片付けをし、次郎達は帰っていった。

「…おねえちゃん……」

妹紅の背中で眠るこいしの寝言は、少し悲しげな調子であった。

□■□■□■□■□■□■□

鳥の鳴き声で目が覚めたこいしは、きょろきょろと辺りを伺った。と言うのも彼女が本来住まう地底には、早朝に爽やかな歌声を聴かせてくれる鳥などはいないからだ。

彼女はぼうっとしながら布団に上半身を起こし、障子から差し込む朝陽を眩しそうに眺めた。

「……ここ、どこかなあ？」

そう呟いてみても、答えるものは居なかった。だがこいしはにんまりと笑顔を浮かべた。何やら暖かみのあるこの家が、何故かとても贅沢に感じたのだ。

無意識ではあるが、地底と言うものはどこか精神を圧迫していたのかもしれない。事実いまこいしが感じているのはいい知れない開放感だったからだ。

こいしは取り敢えず難しい事を考えるのは止めて、縁側に出て朝陽を浴びてみようと考えるのであった。

「な、なにっ！？」

色々と思索に耽っていたこいしの前に、いつの間にか青い何かが彼女を見ていた。

「起きたね！ジロが朝ごはんだから来いって言ってるから呼びにきた！あたいについてきな！」

チルノであった。こいしはこくりと頷くと、縁側から庭を一瞥し、そしてチルノに付いていくのだった。

「お、起きたかこいし。おはよう」

居間のちゃぶ台には既に次郎と輝夜に妹紅、そして朝食をたかりにきた慧音が待っていた。

ちゃぶ台の上には湯気のたち昇る温かなご飯と味噌汁、出汁巻きに漬物、なんの変哲も無いが美味そうな朝飯が並んでいた。

チルノが座った場所の横には、１つ席が空いている。

「どうした？座らないのか？」

「慧音も客だろうに。おおいこいし、朝飯だぞ？」

慧音のまるで住人の様な言葉を妹紅がたしなめる。そして遠慮してる方がおかしいと言う口調でこいしを手招きした。

「どうしたこいし？お前さんの苦手なもんでもあったか？まあ取り敢えず座れよ。な？」

「あ、うん。嫌いなものは無いよっ！」

何だか茫然としたまま、こいしは次郎に促されるままに座った。

「わ、私きのうどうしたのかな？覚えてなくて」

「ん？昨日はお前さん寝てしまったからな。家も知らんし、取り敢えずつれて帰ったんだ。あ、あれだ、身体には触れて無いからな？妹紅が背負ったんだぞ。うんうん……」

何やら昨日の幼女好き疑惑を掛けられたからか、次郎は慌てたよ

うに付け加えた。

「ふーん、無理してない？次郎」

「阿呆、そんな目で見るな輝夜……。永琳に”苦くて失神する程度の薬”を作ってもらってお前さんの料理に混ぜてやろうか？」

「そ、それは困る。やめて次郎！！！」

「ふふふ、永琳は俺とお前さんのどっちの味方するかな！」

「も、妹紅も慧音も助けなさいよ！」

「いや、私はお前がその薬を飲むところが見たい」

「私も～～！！」

気が付くとこいしそっちのけで騒ぎだした一同。その真ん中にさらされたこいしは――――

「ぷっ、ふふっ、あはははっ！おかし～！」

笑い転げた。こんなに騒がしく賑やかな、明るい朝食等初めてだったからだ。何よりこいしが解せないのは、皆が彼女を普通に”意識”している事だった。

覚（さとり）であるこいしはかつてその能力の源である三番目の瞳を閉じた。覚とは人の心が読めてしまう妖なのだ。読めてしまう事によって他者には怖れられ、そして嫌われた。

それ故こいしは瞳を閉じたのだった。だがその代わりに生まれた能力が”無意識を操る程度”の能力であった。その結果、嫌われはしなくなった。だが能力の弊害か、人にあまり気にされず動物達に好かれ無くなった。

そこにいるようで居ない。それがこいしの能力だった。それは無意識で彼女が動くからだ。無意識でいることは他者からは無関心でいられる事。こいしは嫌われる事は無くなったが、特に好かれもしなくなった。

なんだか目を閉じて良かったのか悪かったのか分からなくなった、と言うのがこいしの本音である。

そんなこいしを、姉のさとりは臆病で逃げていると言った。こいしはそれもよく分からなかった。

「そんなに笑うなよこいし。取り敢えず朝飯を食べようじゃないか」

「そ、それよりさ？どうして次郎達は私を意識出来るのかな？普通の人は私を気付きもしないんだよ……」

こいしは突然真顔で次郎に問い掛けた。なんだか今すぐ聞かなきゃいけない気がしたからだ。だが――

「いや、分からんけどなあ。だいたいお前さんはそこにいるだろうが。ん？何か変か？俺」

次郎はぽかんとしながら言う。こいしの言う意味が分からなかったからだ。

「次郎は変だな」

「次郎さんは変だ」

「次郎は変だよ」

「ジロは変じゃないよ！あたいに優しいもん！」

「お前ら……チルノはいい子だ。お菓子買ってやろう」

「やった！ほらジロは優しいじゃないか！」

またもや変な方向に話が行きそうな雲行きだ。

「ま、冗談はさておき、だ。私が思うに次郎の能力のせいでは無いか？多分であるが、な。だってだな、私が前に次郎の歴史を食って上手い事やろうとしたが、実に残念であるが出来なかったんだぞ？……はっ！？しまった！」

「「慧音さん、少しお話しましょうか」」

慧音の自爆に、妹紅と輝夜は黒いオーラをもやもやと噴き出しながら慧音を引き摺ってどこかへ消えた。

「ま、まあ理由はよく分からないが、俺はお前さんが分かるし、だからお前さんはここに来たのだろう？ならそれでいいだろうさ。俺が嫌ならここには連れてはこないしな。まあ、うちはいつもこん

なだから騒がしいけどな。ははっ」

そう言いながらも次郎は、全然迷惑そうではない表情でいった。

「うん、そうだね。なんだ私が分かるんだ。そっかぁ、嬉しいな」

そういってこいしは笑った。そして少し冷えてしまった朝食を頬張った。

「うまいか？」

「うまいっ！」

「そっか、それは良かった。おかわりもあるからな。それと、後で家まで送っていくからな。どこかは知らんがな。まあ俺は夜まで時間あるしな。俺が家族に言い訳してやる」

そういって次郎は笑った。

「あ、ありがとう！うん、次郎お兄さんに家族を紹介したかったんだ。お姉ちゃんがいるの」

「そっか、この前の唐揚げは何て言ってた？」

「美味しいってさ！初めて食べたって」

「なら何か作って行くかな？じゃお前さんはゆっくり食ってろ」

「うん、わかった！あと、おかわり欲しい、かも？」

「ああ、好きなだけ食べろ。チルノ、おかわり入れてやってくれ」

「もぐもぐ……ん？分かった！」

そうして次郎は厨房へ消えた。何を作るか思案しながら。そんな次郎の後ろ姿をこいしは見ながら、何てここは居心地が良いのだろう？と感じていた。

そして早く姉に次郎を会わせてみたいと思った。お姉ちゃんは何て言うかな？こいしはそう考え、１人でふふふと笑った。

チルノが不思議そうにこいしを見た。

登場人物

俺に無意識は通じねぇ　次郎

まさかのレギュラー！？　蓬莱山輝夜

私は妹じゃない　藤原妹紅

朝飯たかる　上白沢慧音

お姉ちゃん　古明地さとり

次郎って凄いね　古明地こいし

悩める者達（後書き）

やっと方向性が決りました。次話から次郎が地霊殿を目指します。

こいしの能力は正直よくわからないです。地霊殿本編、ダブルスポイラー等のセリフをにらめっこしましたが、まあその辺はスペカ辺りから色々捏造する事にしました。毎度すいません。

こいしの能力は基本的に割りと無意識に発動しっぱなしなイメージにしました。それ故無視ではないが、居ないように思われがちな、そんなこいしです。

年内に地霊殿は終わらせたいが、何せ忙しいです。ご迷惑おかけします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4962x/

東方おとぎ草子

2011年12月5日23時51分発行